

特集 **建築家の椅子111脚**

111 Chairs Designed by Architects

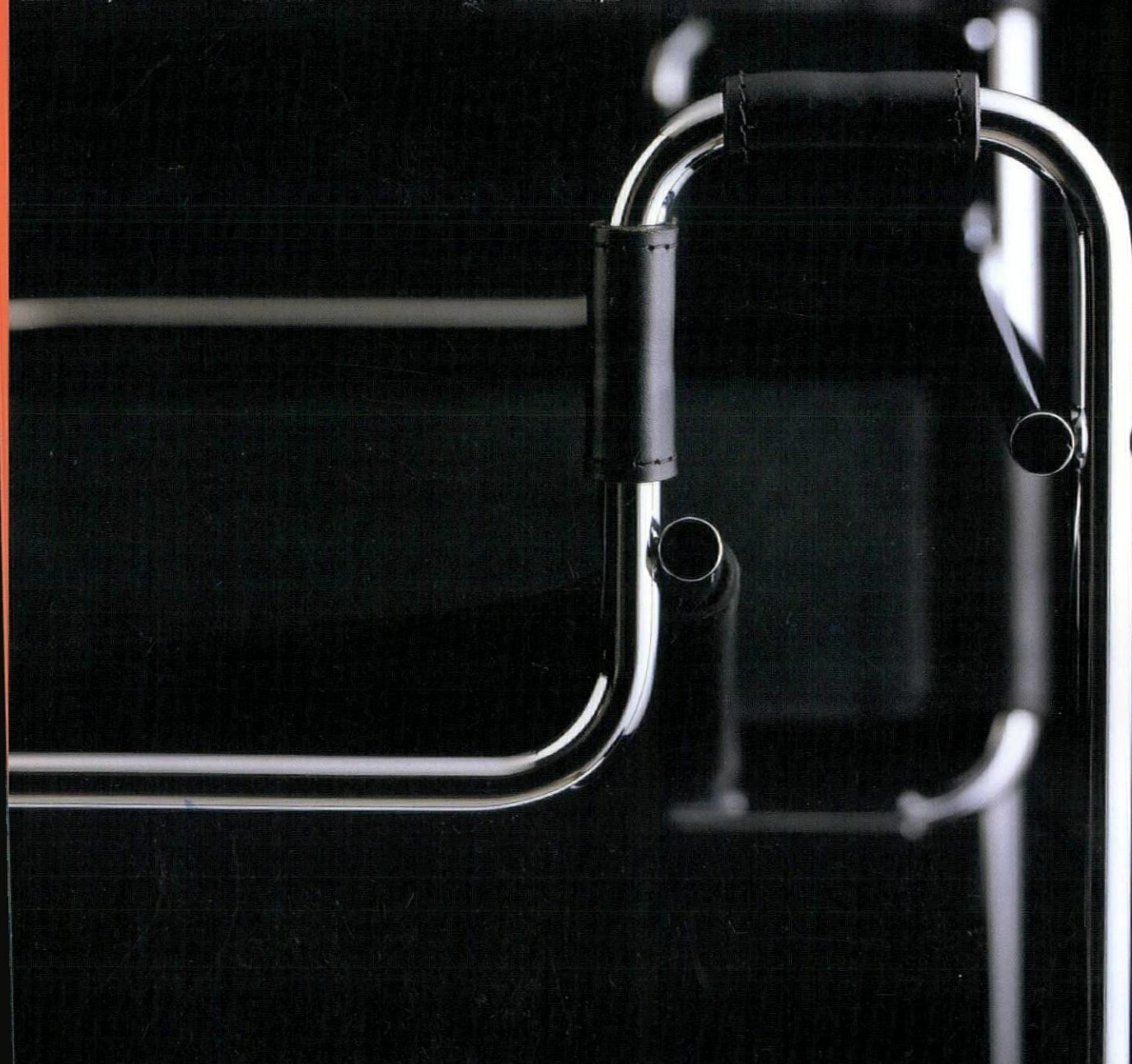
Adolf Loos
C. Rennie Mackintosh
Antonio Gaudi
Henry van de Velde
Josef Hoffmann
Carlo Bugatti
Kaare Jensen Klint
Otto Wagner
Eliel Saarinen
Walter Gropius
Frank Lloyd Wright
Gerrit Thomas Rietveld
El Lissitzky
Erik Gunnar Asplund
Marcel Lajos Breuer
Mart Stam
Pierre Chareau
Eileen Gray

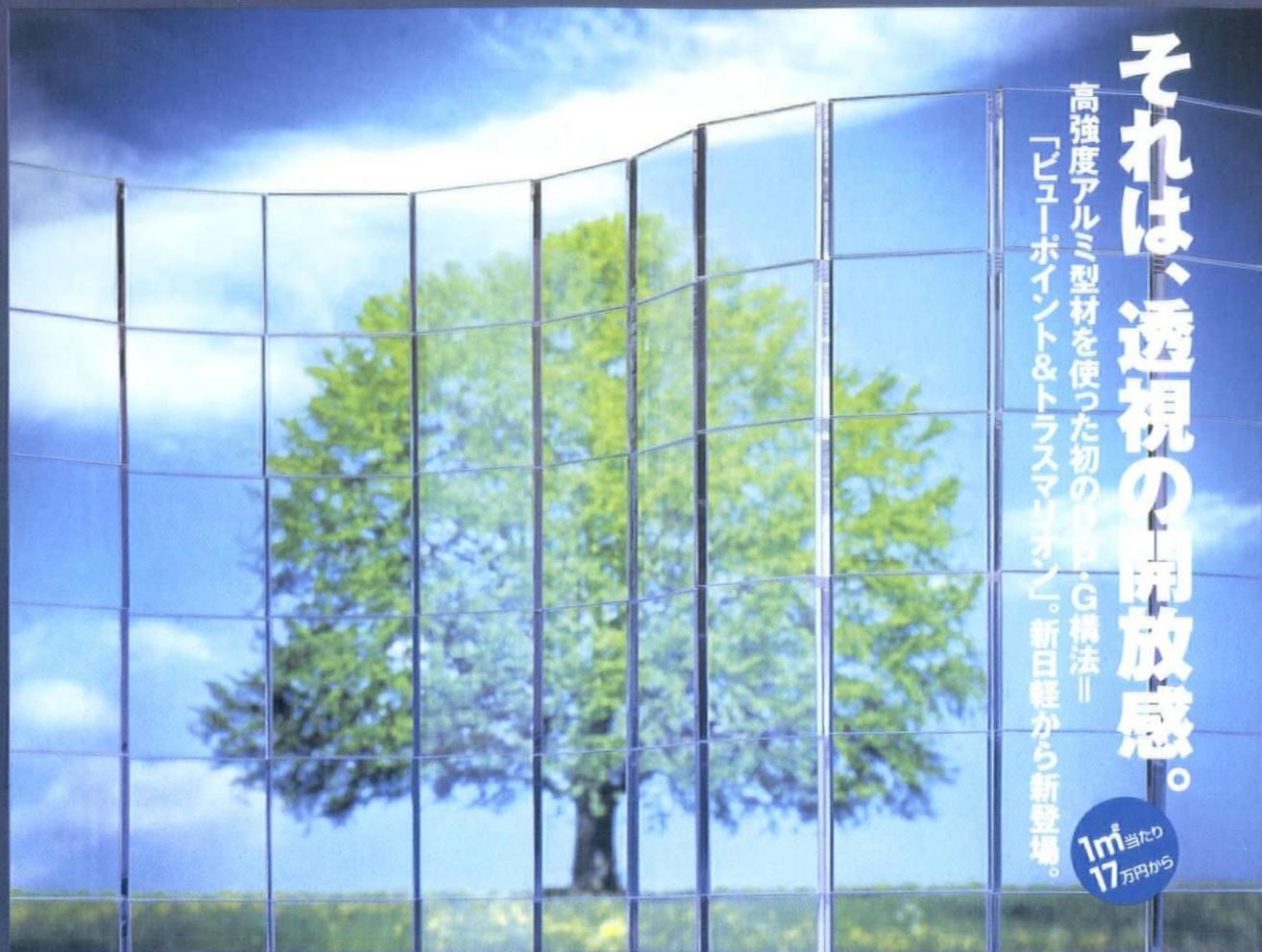
L. Mies van der Rohe
Le Corbusier+Pierre Janneret
+Charlotte Perriand
Robert Mallet-Stevens
Alvar Aalto
Kay Fisker
Rene Herbst
Jean Prouve
Michel Dufet
Giuseppe Terragni
Bruno Taut
Richard J. Neutra
Eero Saarinen
Charles Eames
Marco Zanuso
Finn Juhl
Max Bill
Gio Ponti

Arne Jacobsen
A. Laymand, N. Laymond
Franco Albini
George Nelson
Vilhelm Wohlert
Florence Knoll
Ilmari Tapiovaara
Achille & P. G. Castiglioni
Angelo Mangiarotti
Gae Aulenti
Warren Platner
Vico Magistretti
P. Gatti+C. Paolini+F. Teodoro
Afra+Tobia Scarpa
Jorn Utzon
Joe C. Colombo
Carlo Scarpa

Mario Bellini
Aldo Rossi
Cini Boeri
Antonio Citterio
Giandomenico Belotti
Paolo Deganello
Richard Meier
Stefan Wewerka
Mario Botta
Ettore Sottsass
Michele de Lucchi
Antti Nurmesniemi
Alessandro Mendini
Charles Pfister
De.Pas+D'urbino+Lomazzi
Robert Venturi
Michael Graves
Enzo Mari

Massimo Vignelli
Oscar Tusquets
Philippe Starck
Frank O. Gehry
Andree Putman
Luca Scacchetti





それは、透視の開放感。

高強度アルミ型材を使った初のD・P・G構法Ⅱ
「ビューポイント&トラスマリオン」。新日軽から新登場。

1㎡当たり
17万円から

建物の外の景観と内部のデザイン。この内と外からの透視効果を生かして、開放感あふれる大空間を構成する、D・P・G構法。新日軽は、いままですテンレス製しかなかった支持金物に、業界初の高強度アルミ型材を使ったD・P・G構法「ビューポイント&トラスマリオン」を開発しました。

■直線R壁面も可能。

「ビューポイント」は、支持金物と2m×2mのガラスがユニットになったカーテンウォール。そして「トラスマリオン」は、10mの高さに対応するバックマリオン。支持金物に、±7°まで角度をつけられる多面体対応コネクションをご利用いただければ、より造形美に富んだ立体感のある直線R壁面の構成も可能です。外壁全体を1枚の巨大なスクリーンのように表現でき、かつてない透視性の高い大空間を実現します。

■1㎡当たり17万円からの新価格。

さらに、「ビューポイント&トラスマリオン」は、1㎡当たり17万円からという、コストプランニングに貢献する価格を実現しました。設計者の表現力に応える新日軽の「ビューポイント&トラスマリオン」。もう、あなたの自由な発想を妥協させることはありません。

■ビューポイント基本性能（基本モジュール）W：2,000mm×H：2,000mm（基本性能）耐風圧性能：上風圧力±300kgf/㎡（基本モジュールにおける強度）／水密性能：最大+150kgf/㎡（42/㎡・min）／耐震性能：層間変位角1/100（ガラス仕様）強化ガラスの飛散防止フィルム貼り仕様を基準とします。

■トラスマリオン設計仕様（最大製品寸法）H<10mとします。（表面仕上げの最大寸法）アルマイト陽極酸化皮膜：H<7.8m／塗装：焼き付け：H<9m 強制乾燥：H<10m



スタンダードタイプ

Rタイプ

新開発

初の高強度アルミ型材のD・P・G構法
ビューポイント&トラスマリオン

VIEWPOINT & TRUSSMULLION

●特許出願中 ●意匠登録出願中

新日軽

新日軽株式会社 本社／東京都江東区木場2-7-23 〒135 ビル建材事業本部 ☎03(3820)2211

人にやさしいテクノロジーは、いま……。

新生活提案型の感性豊かな商品づくりは、数多くの最先端技術が支えています。

そのひとつがアクアエレクトロニクス技術。

便器の洗練されたフォルムも、高機能を満載しながら小型化した新技術がバックボーン、
これによって美しさと機能の調和が実現しました。

着々と進む新技術開発により、心のくつろぎや快適性をひろげる商品が続々と誕生しています。



National/Panasonic

AV&C CONCEPTS

AUDIO
音響システム

VISUAL
映像システム

COMMUNICATION
通信システム

COMPUTER
コンピューターシステム

FOOD
食品流通システム

LIGHT
照明システム

AIR & AQUA
空調・水管理システム

PASSAGE
搬送システム

SOFTWARE & SYSTEM
ソフトウェア・システム

ここにはあります人と自然と技術の調和が

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。

松下電器産業株式会社

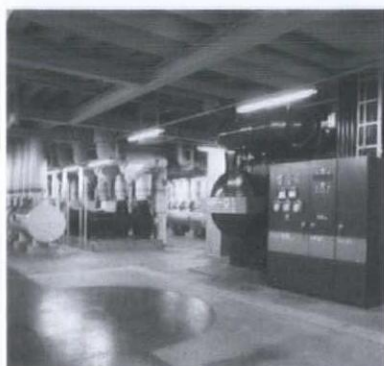
建設システム営業本部	☎03-5500-7504
北海道支店	☎011-207-7722
東北支店	☎022-711-3551
新潟支店	☎025-246-1031
関東支店	☎0286-37-2241
神奈川支店	☎045-651-5051
建設システム営業本部中部支店	☎052-951-6010
長野支店	☎0262-26-3990
北陸支店	☎0762-23-1121
静岡支店	☎054-247-5155
建設システム営業本部関西支店	☎06-949-2111
中国支店	☎082-247-5272
四国支店	☎0878-26-1711
九州支店	☎092-431-1100
沖縄支店	☎098-869-2926

KANDENKO



快適な環境をお届けするのも ——関電工の技術です。

個別のビル・工場・住宅の空調から地域冷暖房まで



生活の場、生産の場、ビジネスの場、憩いの場…
…。人々の営みの場で、いま求められているのが、
省エネルギー、省資源を追求した快適環境です。
その施設の構築とメンテナンスで関電工の技術が
活躍しています。割安な夜間電力や都市廃熱・河
川水等を利用した「蓄熱式ヒートポンプシステム」、
発電の際に発生するエネルギーを有効利用する
「コージェネレーションシステム」、複数の建物のエ
ネルギーを集中的に取り扱う「地域冷暖房システ
ム」などの技術で、関電工はお客様に経済的で快
適な環境の場をお届けしています。

関電工

お問い合わせは/環境設備部

本社：〒108 東京都港区芝浦4丁目8番33号

☎：NTT 03(5476)2111 TNet (4431)2111

時代が求める快適空間へ。

より経済的に、最適なリニューアルを実現する 確かな診断技術。

綿密な調査・診断により、リニューアルが必要な部位を的確に把握。リニューアル効果確認のためのプログラム、高効率な施工法の採用などにより、最少限の費用で、また短期間でご要望通りのリニューアルを実現します。



配筋非破壊システム

静かに、クリーンに、リニューアルをすすめる カームジェット工法。

高速水噴流により、床や壁のコンクリートのみを破碎。破碎したコンクリートやジェットの排水を完全回収するカームジェットシステムは、無振動、低騒音で粉塵も発生しません。静かで、クリーンなカームジェット工法なら業務を続けながらのリニューアルも可能です。



超高压水を噴射するカームジェットのノズル

快適度を高める

アメニティの総合診断。

室内の温湿度分布、気流、粉塵、CO₂濃度、振動、照度など。快適性にかかわるさまざまな要素を系統的に診断。さらに問診からそれぞれの設備機器の性能診断にいたるまで、きめ細かに収集、解析、症状ごとに総合的に診断します。そしてトータルコンサルテーションを通し、設備機器や照明のオペレーションを実施、より快適な環境を実現します。

未来も快適に——リニューアル後の

事業収支評価システム。

リニューアル後の事業をさらに活性化、発展させるためには、綿密かつ複合的な視点をもつプログラミングが必要です。カジマでは、土地の所有形態から事業手法、建物規模、用途、資金調達など、さまざまな角度から検討でき、またビルオーナーとテナントといった異なった立場からも検討できる事業収支評価システムを採用。リニューアル後の事業の採算も予測したうえで、最適なプログラムで実行します。

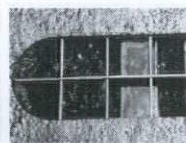
リニューアルならトータルな技術力と

豊富な実績をもつカジマにお任せください。

私たちは、単なる改修・補修ではなく建物そのものの活性化を図り、新たなビジネスチャンスを生み出す付加価値の高い空間づくりをご提案いたします。リニューアルなら多様なニーズに高度な技術と豊富な実績・ノウハウでお応えするカジマに、ぜひ一度ご相談ください。



床コンクリート破碎状況(カバー内)



鉄筋・配管が残された破碎後の床



多彩なニーズに応えるカジマのリニューアル技術。

R

E

N

E



W

A

L

鹿島

KAJIMA CORPORATION

本社: 千107 東京都港区元赤坂1-2-7
お問い合わせは
技術営業部 03(3404)2011

四季会宴

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY



軽井沢
ホテル 鹿島/森
ホテルオークラシェ

ご予約お問い合わせ:
ホテル 鹿島/森 予約係
☎ 03(3478)6220
現地 ☎ 0267(42)3535(代)
FAX: 0267(42)5335



Classical Elegance in Tokyo

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。
ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、あなたの新しい物語がはじまります。

モダンを楽しみ、ヨーロッパを憩う

東京都現代美術館宿泊プラン

アンティ・ウォーホル展開催中(6月23日まで)

■期間 ■1997年3月31日まで

※ただし12月28日～1月4日を除く ※美術館の休館日は、毎週月曜日(祝日の場合は翌日)となっております。

ホテルから東京都現代美術館へ、徒歩10分。現代美術をゆったりと楽しみホテルで優雅に憩う、そんな心の贅沢を十分に満喫できるプランです。

お一人様料金

1室1名様利用(シングル)	¥16,500
1室2名様利用(ツイン)	¥13,000
1室3名様利用(トリプル)	¥11,500

※1泊朝食付・美術館入場券(常設展)・お土産・サービス料込み、税別。

HOTEL
East
21
TOKYO

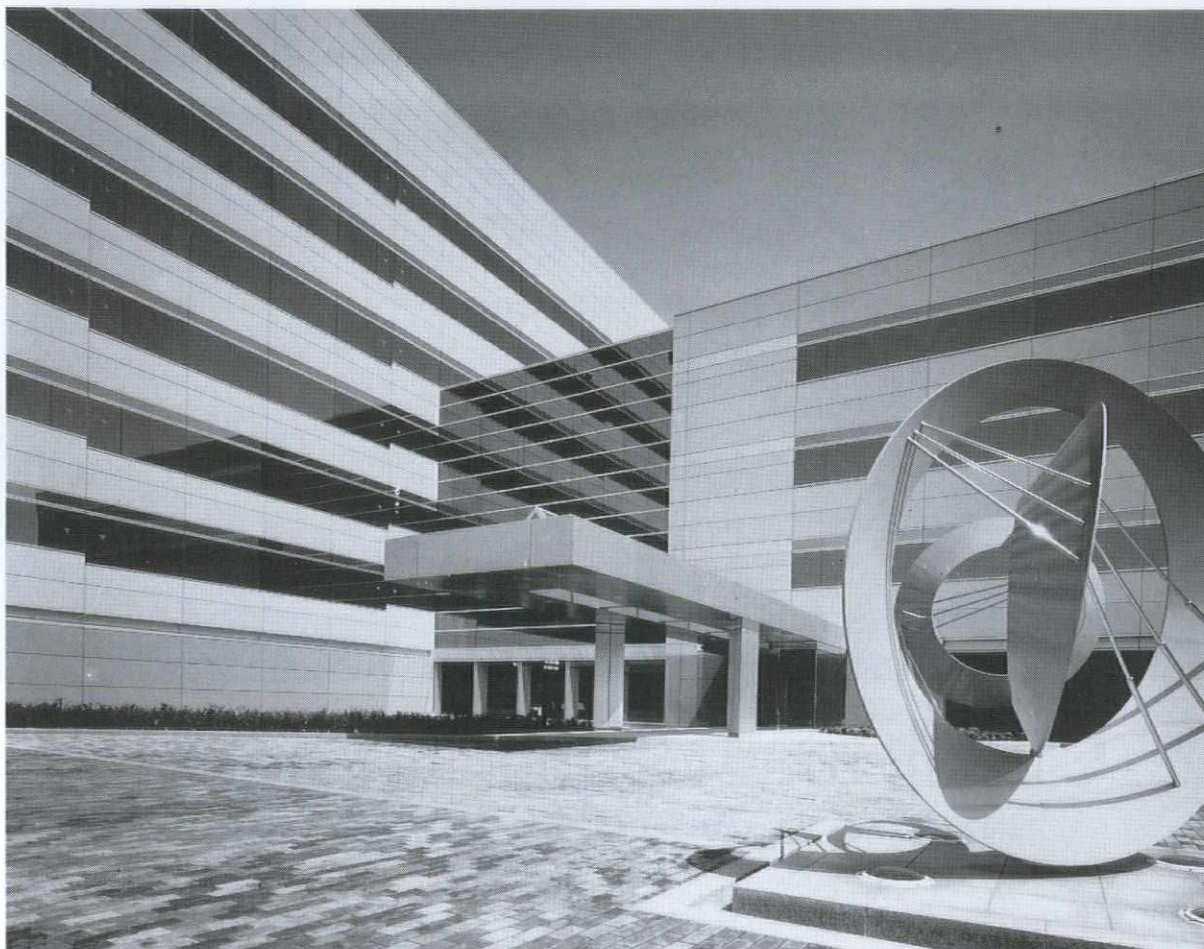
株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135 東京都江東区東陽6-3-3 TEL 03(5683)5683(代) FAX 03(5683)5775
地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

大興物産の海外建材シリーズ

No.4 ガラス



埼玉・バイオニア鶴ヶ島総合研究所

大興物産では、米国・ガーディアン社の製品をはじめガラスの国際調達を推進しています。

この製品のお問い合わせは、大興物産株式会社・海外建材事業本部へどうぞ
〒107 東京都港区元赤坂1-3-4 TEL.03-3423-2511 FAX.03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ

大興物産株式会社

本店 〒107 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)5474-6076
東京支店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)3423-1915
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
大阪支店 ☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719
北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
シンガポール
オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714

マルチメディアのNEC

NEC

楽にファクス、
楽しくデシワ。

スピークスで、
らくらくしよう。



らくらく仕様①
—— ハンドスキャナ ——

本やノートから読み取り、すぐに
ファクス。64階調で写真もキレイ。



らくらく仕様②
—— オートカッター ——

記録紙を自動でカット。1枚1枚
キレイにそろえてくれるので便利。



らくらく仕様③
—— コードレス ——

子機は最大3台まで増設が可能。
親機と子機で内線通話も楽しい。

機能充実、らくらく仕様。

●回線自動設定 ●自動給紙10枚 ●おやすみモード ●FAXサービス
ボタン ●FAXかんたん受信 ●メモリ代行受信 ●デジタル留守録



コードレス留守電タイプ

speax 標準価格82,000円(税別) (取付調整費別) 色:ブルー・イッシュグレイ
留守電タイプもあります。speax 標準価格56,000円(税別) (取付調整費別) 色:ブルー・イッシュグレイ

らくらく仕様

NECのファクス・デシワ

スピークス
好評発売中



安全上の注意/正しく安全にお使いいただくため、ご使用前には必ず「取扱説明書」をよくお読みください。

●商品に関するお問い合わせは、パーソナルコミュニケーションインフォメーションセンター ☎0120-200940

●本広告に関するカタログの請求は、ハガキに郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号、勤務先をご明記のうえ、〒108-01 東京都港区芝5-7-1 NEC 10-28560 スピークス22「SD」係までお送りください。

日本アス仕様

カスタムEE

ベストロン

NS防水

それぞれの味を生かし
防水仕様をすべて濃縮!!

メルタン21

NPシート

カナート



総合防水メーカー

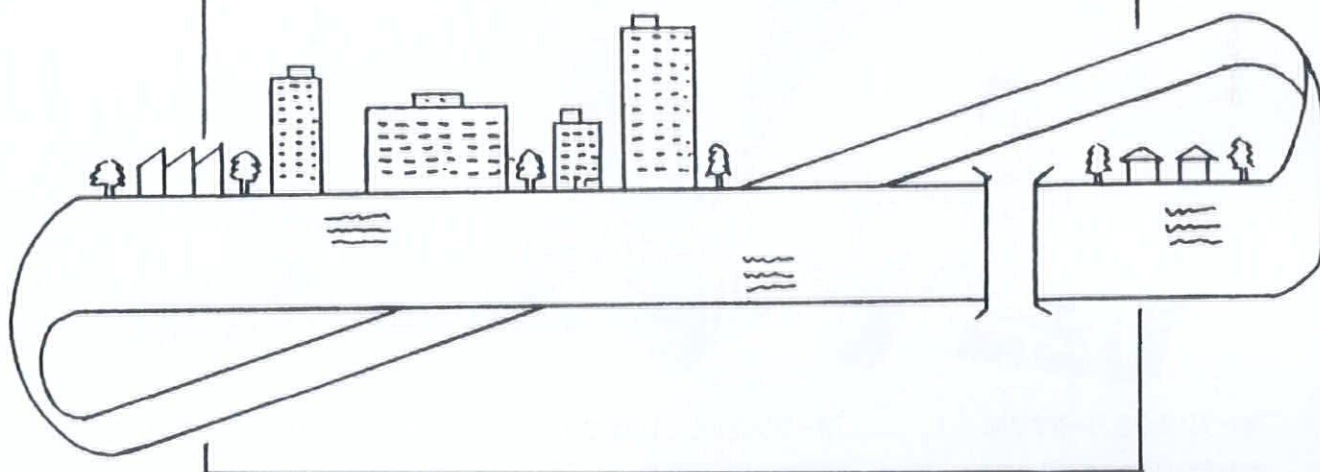
日新工業株式会社

営業本部 103/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎03(5644)7211(代表)

東京	☎03(5644)7221 (代表)	福岡	☎092(451)1095 (代表)
千葉	☎043(245)0201 (代表)	札幌	☎011(281)6328 (代表)
横浜	☎045(316)7885 (代表)	仙台	☎022(263)0315 (代表)
大阪	☎048(642)5811 (代表)	広島	☎082(294)6006 (代表)
名古屋	☎06 (533)3191 (代表)	高松	☎0878(34)0336 (代表)
	☎052(933)4761 (代表)	金沢	☎0762(22)3321 (代表)

水環境を

クリエイトする

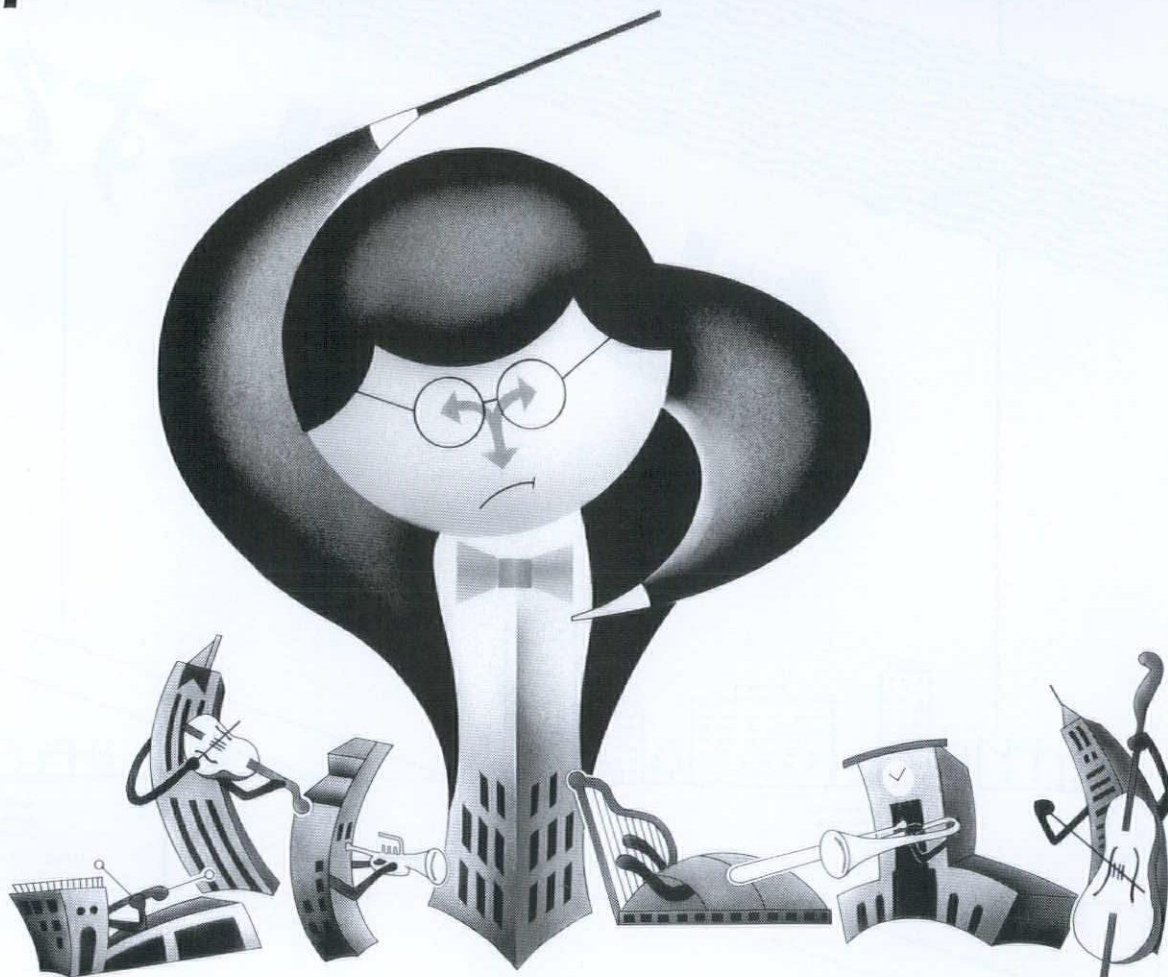


株式会社
西原
衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18
TEL.(03) 3452-7441 大代

支店/札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋

ビルオートメーション
オープンにしたらBAに創造力が生れた。



「オープン」だから、リーズナブル。

高性能で低価格な量産品機器をベースに、きんでん独自のエンジニアリング・ノウハウを生かし機能的で信頼性の高い「A&Aシステム」が実現。お客様にご満足いただける価格でご提供できます。

「オープン」だから、フレキシブル。

制御プログラムをリモートステーションに実装する分散処理システムの採用で、さまざまな建物や施設の運用目的にあわせた対応が可能。将来の拡張にも柔軟に対処することができます。

「オープン」だから、ユーザーオリエンテッド。

お客様のご要望をじゅうぶんに反映させ、細部にいたるまで、投資コストを生かす最適なシステムを構築。導入後の変更や保守はお客様ご自身で行うこともできます。

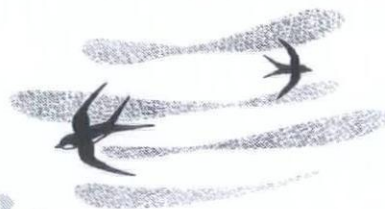
総合設備エンジニアリング

株式会社 **きんでん**

本店 大阪市北区本庄東2丁目3番41号 〒531
東京本社 東京都品川区東五反田5丁目25番12号 〒141

空気の歳時記

ツバメが渡ってきたか確かめたくて
入り江に近い河原を歩く。
頬に当たる風は冷たいが、
水面の眩さはもう紛れもなく春だ。



春

目をこらすと
何の稚魚だろうか
スイスイと元氣である。
何万年も繰り返されてきた
自然の鼓動を体の奥に
感じる瞬間。
ビューイ、ビューイ。
澄みわたった空気に、
待望の囁りを聞いた。

林道を逸れて、森へ深く入る。
額に汗をにじませながら、
一歩一歩標高を稼ぐ。

セミの合唱に負けじと

梢で声を

張り上げているのは

クロツグミだろうか。

樹齢は数百年に

及ぶだろう、

ブナの巨木を見上げると、



夏

突然、時間の感覚が薄れていく。
鬱蒼とした空気のなかで
息もつまるような濃緑の季節。

尾根を越えてくる風の冷たさで
季節の深まりを知る。

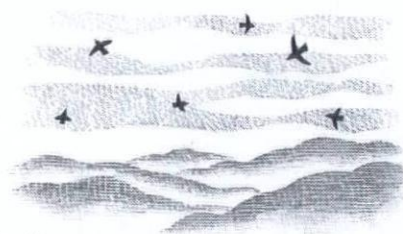
山の秋は短い。

頂から麓へ向かって

早くも赤や黄に色づきはじめた

林の中を歩くと、

よく南へ旅する渡り鳥に出会う。



秋

例えば、エゾビタキ。
ヒラリヒラリと木の葉のように
舞いながら
フライ&キャッチを繰り返す
この鳥が姿を消す頃、
あたりは冬の長い眠りに入るのだ。

休日。ちやうと早起きして

近くの山に足を運んでみた。

枯れ落ちた木の葉を

踏むたびに

ガサッガサッという音が

林全体に響き渡る。

見上げると

餌を探しているのだろうか、

シジュウカラの仲間の群れが

盛んに鳴き交わしながら

枝から枝へ飛び回っている。



冬

凍てついた空気のなかで
精一杯生きている小さな命。

日本の四季の空気を、ずっと考えてきています。

◆新菱冷熱

SHINRYO CORPORATION

本社：〒160 東京都新宿区四谷2-4 ☎03-3357-2151 代 支社：札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・富山・大阪・広島・福岡

OSAKI



集中管理 だけじゃ物足らない。

かゆいところに手が届く、ビル管理システム OSMAC-mini 中央監視装置オスマック・ミニ

いまやビルは集中管理の時代。照明や空調も定時にON、OFF。無駄な手間も経費もかけず、ビルを一括して制御できるようになりました。しかしビルの機能は様々。テナントや企業、そこで働く人の事情も多様化しています。OSAKIは、ビル設備の制御を画一的にではなく、ビルの利用者一人ひとりのニーズに対応できるものであるべきだと考えています。中央監視装置OSMAC-miniは従来の設備機器のスケジュール運転に加え、各テナントからのコントロールで、スケジュール時間外の運転を可能にし、各テナントごとに料金算出のためのデータを集計できるシステム。ビルをもっと生き生きと活動させるための、隅々にまで神経が行き届いた管理を実現します。



特 長

- 基本スケジュール運転の他に各テナントから時間外操作が可能。
- 時間外運転時間は各テナント単位に積算され、1ヶ月毎に料金管理データとして印字。
- 登録された機器の運転時間を積算し、表示・記録。
- 全発停点数に対してスケジュールを任意に設定、年間の休日指定も可能。
- 発停点数最大48点、負荷監視点数最大96点と豊富な管理点数。
- 故障および警報信号を外部に取出せるので、無人管理が可能。
- 設定操作は画面との対話設定メニュー方式で、使い易いシステム。
- 盤内のケーブルレス化により小形・軽量・低価格。

主な仕様

●定格電圧/100V±10% ●定格周波数/50Hz、60Hz共用 ●管理点数/運転監視入力…48点(増設タイプ96点)、故障・警報監視入力…48点(増設タイプ96点)、テナント操作入力…20点、発停制御出力…48点、警報移報出力(電力)…4点、警報移報出力(一般)…8点 ●表示/5×7ドット モノグリーン蛍光表示管 40字×4行、運転時間表示、時間外運転時間表示、カレンダー表示、当日プログラム表示、システムテーブル内容表示 ●設定操作部/シートフラットキー、蛍光表示管との対話方式 ●記録/停電補償/240時間 ●外形寸法/壁掛形48点タイプ…600(W)×1100(H)×230(D)mm、壁掛形96点タイプ…600(W)×1350(H)×230(D)mm、自立形…600(W)×2000(H)×400(D)mm

大崎電気工業株式会社

本社/〒141 東京都品川区東五反田2-2-7
システム機器営業部第2課 ☎03(3443)7176

大阪支店 ☎06(373)2556
札幌営業所 ☎011(251)6622 仙台営業所 ☎022(223)3747 千葉営業所 ☎043(221)5714
横浜営業所 ☎045(664)5561 広島営業所 ☎082(243)1611 沖縄営業所 ☎098(832)7406

未来をみつめる目

生活環境の改善から
ハイテク時代に対応した新技術の開発まで
大成温調は最適な空間づくりを追求しております。

●空気調和・給排水衛生設備



人の呼吸にもっと優しく

大成温調株式会社

〒140 東京都品川区大井1丁目47番1号 TEL.03-3774-1111 (大代)

支店・営業所 青森・八戸・盛岡・秋田・山形・仙台・郡山・いわき・水戸・宇都宮・前橋・大宮・千葉・川崎・横浜・
甲府・新潟・長岡・金沢・静岡・名古屋・京都・大阪・神戸・広島・高松・福岡・長崎・鹿児島・那覇

技術研究所 〒134 東京都江戸川区東葛西2-3-4

TEL.03-3877-3770

横浜技術センター 〒226 神奈川県横浜市緑区川向町806

TEL.045-471-1801



いろんな技術を結んで、トータルに考える。
トーエネック エンジニアリング

先端技術で、システムする。
TOENEC

株式会社 トーエネック

本店/名古屋市中区栄1-20-31 〒460 ☎(052)221-1111

東京本部/東京都豊島区東横1-3-11 〒170 ☎(03)5395-7111

大阪本部/大阪市淀川区新北野3-8-2 〒532 ☎(06)305-2181

さまざまな先端技術が調和して、「快適」という名のハーモニーを奏でる。トーエネックのエンジニアリングは、まさにそんなイメージです。電気設備をはじめ、情報通信・冷暖房・空調・防災設備など…。システム設計から施工・保守まで、高度で総合的な技術力を活かし、全国主要都市を拠点に幅広いネットワークでみなさまにお応えしています。オフィスビルやマンション、ホテル、工場、さらにはコミュニティ施設。あらゆるスペースを、心地よい技術のハーモニーで包み込みたい。インテリジェント&ヒューマン。私たちは、トーエネックです。

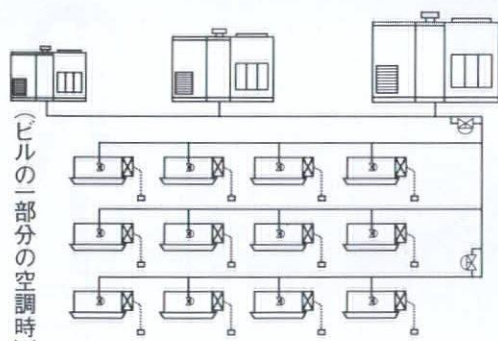
最先端のハーモニー。

あつ
もつたない。



ひと部屋だけの空調に
全てのアロエースが
稼働するのは

必要な台数しか稼働しません。



矢崎のスーパーアロエース、アロエース・タフはともに高効率COP1.02。この高効率をい
かんなく発揮するのが異容量アロエースの組み合わせによる集中設置です。デジタルコン
トロールパネル【DCP】のご利用により部分空調時には小さな「アロエース」が運転。建物
全体を空調すれば自動的に全ての「アロエース」が運転、経済性の優れた空調が実現。

20%負荷運転でもCOP1.02を維持。



デジタルコントロール
パネル



スーパーアロエース



アロエース・タフ

矢崎総業株式会社

本社：〒108 東京都港区三田1-4-28 三田国際ビル17F TEL.03-3455-8812
空調機器営業事業部：〒435 静岡県浜松市子安町1370 TEL.0534-61-5112

札幌支社	TEL.011-852-2914	名古屋支社	TEL.052-833-8415	中国支社	TEL.0829-23-2115
仙台支社	TEL.022-284-9115	大阪支社	TEL.06-458-4825	四国支社	TEL.0878-33-3336
東京支社	TEL.03-3298-3140	北陸支社	TEL.0764-41-6516	九州支社	TEL.092-411-4835



バックナンバー

鹿島出版会

東京都港区赤坂6-5-13
電話 03-5561-2111(代)
振替 00160-2-180683

年間定期購読料
25,000円 (特別定価号+送料込み)

SDバックナンバー常備店
[東京]
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店(神田)
03-3233-3314
書泉ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3463-9511
[大阪]
旭屋書店本店

柳々堂 06-443-0167
[札幌]
旭屋書店 011-241-3007
[横浜]
有隣堂本店 045-261-1231
[京都]
大福堂書店 075-231-3036
[大学生協内書店]
東北工業大学 東京工業大学
法政大学工学部 早稲田大学
理工学部 関東学院大学

9406 アートがつくるワークプレイス 2500円
「働く人々のための空間とアート」に注目し、海外の事例を紹介。
文：南條史生、D. F. ハンセン。アーティストアンドレア・プラム。
他。企業等：IBM、ブリティッシュ・カウンシル、他

9407 ビーター・ウォーカーの世界 2200円
アメリカ・ランドスケープ・アーキテクトとしての彼の初期から現在
にいたるまでの主要作品を紹介。東京海上東日本研修センター、
IBMクレアレイク、パーネット・パーク、ロングエーカー公園、他

9408 マッシミリアーノ・フクサス 1950円
フランスを中心に展開する近作を紹介。ロアンのヨーロッパ建築研
究所、他。文：D. マンドレリ、堀池秀人、他。[異界の僧院——モ
ルドバのルーマニア正教会堂] 写真：平剛、文：山崎博史

9409 思考と建築・都市：アメリカ東海岸の新たな動向 1950円
B. シャーテル&キブニス、マイケル・ソーキン、他。文：松尾雄、
他。[「手法」から「縁起」へ／吉川油脂寄宿舎] TAO
ARCHITECTS／野田俊太郎、写真：堀内広治

9410 トロハの造した構造と空間 3000円
鉄筋コンクリートを表現の素材として追求したエドアルド・トロハ
の遺作を紹介。[芸術都市への蘇生／イタリア・ジベリーナの試み]
地震で全壊した同市の復興プロジェクト

9411 シティ・ターミナルの空港建築 3500円
世界22の空港を挙げ、ターミナル・ビルに技術的、デザイン的可能性
を探る。シャルル・ド・ゴール、スキポール、ヒースロー、ソウル・
メトロポリタン、関西国際空港、他。文：ディヤン・スジック、他

9412 SDレビュー1994 1950円
第13回SDレビュー誌上発表。荒木正彦、J. ビザル+P. ルーゲ、吉松
秀樹、石黒由紀+田坂繁、遠藤秀平、城戸崎和佐、中村勇大、他。
[国際競争プロジェクト／オシヴィエンチム複見院]

9501 山本理顕 3000円
作品：緑園都市、岩出山町立統合中学校、御泉老人デイケアセン
ター、保田窪第一団地、他。写真：北嶋俊治、大野繁。論文：山本
理顕、宇野求、T. ヘネガン。巻頭：横田実+植田実+山本理顕

9502 南イタリアのバロック建築 1950円
地中海の島シチリアとプーリア地方サレント半島のレッツェを中心
に、南部イタリアのバロック建築を紹介。掲載都市：パレルモ、シク
リ、他。写真：小野一郎。文：竹山博英、長谷川正允、岡田哲史

9503 集合住宅の現風景 1950円
近年、集合住宅を多く手掛けてきた建築家たちの代表作・近作を紹
介する。文・作品：荒木正彦、遠藤剛生、大野秀敏、富永謙、松永安
光、元倉眞琴。座談会：植田実+室伏次郎+松原洋

9504 テクノスケープ 3000円
テクノロジーが作り上げた造形や景観を通して、建築・都市デザイ
ンへの新たな視点を提示する。文：宇野求、岡河貢、永瀬唯、A. ロ
ジェ、他。座談会：中村良夫+三谷徹+宇野求。東京湾岸マップ

9505 メガ・アーキテクチャ 1950円
巨大建築を多く手掛けたポール・アンドルーの新作紹介。シャル
ル・ド・ゴール空港、TGV-REX駅、他。対談：安藤忠雄+P. アンド
ルー。[神戸外国人居留地の形成とその展開] 文+構成：坂本誠比古



9506 デジタル・アーキテクチャの可能性
インタビュー：原広司、伊東豊雄、
N.M. ディナーリ、他。CAD研究室
将来の可能性：笹田研究室、岡
角・佐倉研究室、他。[自然と共存
する家具] 写真：淺川敏
1950円



9507 柳澤孝彦／美術館の空間とディテール
作品：東京都現代美術館、富岡市
立美術館、郡山市立美術館、
他。文：鈴木博之、内藤廣、青木淳、
大野秀敏。座談会：宇佐美圭司+
柏木博+柳澤孝彦。写真：村井修
2700円



9508 まちのパブリックスペース
人々の日常生活と密着した公共施
設である文庫・公衆トイレ・駐車場・
橋・公園などを、アトリエ作家の
近作からみる。作品21点。文：中
川理、仙田満。オンライン座談
会：青木淳+中川理+花田佳明
1950円



9509 丹下健三
最新作シンガポールの超高层ビル
[UCBプラザ]、新宿の新たなスカ
イラインを構成する[新宿パーク
タワー]を中心に、東南アジア、
ヨーロッパ、国内のプロジェクト
を通して丹下健三の現在を紹介。
3800円



9510 環境に呼応する建築：シーザー・ペリの最新作
近年、海外での活躍が目される
ペリの最新作を紹介。[ランドマ
ーク・グラフィティ——「タワー
アート」の通天閣：ヴァナキュラー
な電脳都市展」より]
1950円



9511 長谷川逸子：1985-95
過去10年に渡る主要作品を網羅
し、長谷川逸子の現在を紹介。
作品：山梨県フルーツミュージア
ム、新潟市民文化会館他、全30
作品。論文：ピーター・ワック、他。
対談：多木浩二×長谷川逸子
3000円



9512 SDレビュー1995
第14回SDレビュー誌上発表。由田
徹+岡本美樹、李鍾男、トム・ヘ
ネガン+アーキテクチャ・ファ
クトリー [Villa Romana: ローマの
ヴィラと庭園] [水戸岡鋭治のト
ランスポーテーション・デザイン]
1950円



9601 都市づくりを仕掛ける建築家たちの実践
地方自治体主体のまちづくりプロ
ジェクトを紹介。事例：くまもと
アートポリス、クリエイティブ
TOWN岡山、長崎アーバン・ネ
ッサンス、白石メディア・ポリス
2800円



9602 建築のメモリア：イタリアの合理主義の流れ
イタリア建築の基調として流れて
いる合理主義の現在を考察。6人
の建築家の作品を紹介する。アン
トニオ・モネステローリ、フラ
ンコ・ステラ、他。
1950円



9603 アジア同時代シリーズ2 ベトナム建築大博覧
ベトナムの都市と建築：ハノイ、
フエ、ホイアン、チャンバ遺跡、
ホーチミン。ベトナムの工業団地、
ベトナム現代建築事情、他。文＝
重枝豊、中沢信一郎、村松伸、他
2500円



9604 大地と光の変様 オーストラリア建築1788-
1788年入植以来のオーストラリア
建築の変遷を追う。[ネクストジ
ェネレーション in New York: スミ
ス+ミラー+ホーキンソンとジョ
エル・サンダース]
1950円



9605 多様性と調和の建築 ゲルガン・マルクの最新作
コンペの秀作で知られる大規模設
計事務所の'90年代の新作を紹介。
[海と建築——鈴木了二の最新作]
物質試行：佐木島プロジェクト、
佐木島の住宅
1950円

SDレビュー1996作品募集

第15回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

SD Review 1996

The 14th Exhibition of Winning Architectural Models+Drawings

[主催]

鹿島出版会

[審査員]

香山壽夫（建築家）

渡辺邦夫（構造家）

内藤 廣（建築家）

妹島和世（建築家）

●詳細はp.74をご覧ください

特集 建築家の椅子111脚

編集長：相川幸二
編集スタッフ：
寺田真理子 高木伸哉
山田良 大野由美
船場リズ
アドバイザー：伊藤公文発行人：河相全次郎
編集人：長谷川愛子発行所：鹿島出版会
〒107 東京都港区
赤坂6丁目5番13号
電話：
(03) 5561-2551 営業
(03) 5561-2555 編集
FAX：
(03) 5561-2561 営業
(03) 5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番印刷・製本：
凸版印刷株式会社
〒174 東京都板橋区
志村1丁目11番1号
電話：
(03) 3968-5111 案内取次店：トーハン・日販・
大阪屋・大洋社・
葉田出版販売・誠光堂・
鈴木書店・西村書店・中央社特別定価：3000円
[本体2913円]年間直接購読料：25,000円
特別定価号+送料込み表紙：ワシリー・チェア/
マルセル・ラヨス・プロイヤー
表紙写真：有川幸雄
表紙デザイン：小泉均

6	対談＝時代をまとった愛しき椅子たち		光藤俊夫+宮脇 檀
12	象徴としての椅子		光藤俊夫
14	アドルフ・ロース	58	ジュゼッペ・テラーニ
15	チャールズ・レニ・マッキントッシュ	65	ブルーノ・タウト
18	アントニオ・ガウディ	66	リチャード・ノイトラ
19	アンリ・ヴァン・デ・ヴェルデ	67	エーロ・サーリネン
20	ヨゼフ・ホフマン	70	チャールズ・イームズ
22	カルロ・ブガッティ	72	マルコ・ザヌーゾ
23	コー・アイェンセン・クリント	74	フィン・ユール
24	オットー・ワグナー	75	マックス・ビル
25	エリエル・サーリネン	76	ジオ・ボンティ
26	ワルター・グロピウス	78	アルネ・ヤコブセン
28	フランク・ロイド・ライト	80	アントニン・レイモンド+ノエミ・レイモンド
32	ヘーリット・トーマス・リートフェルト	81	フランコ・アルビーニ
35	エル・リシツキー	83	ジョージ・ネルソン
36	エリック・グンナール・アスプルンド	85	ヴィルヘルム・ヴォーレート
38	マルセル・ラヨス・プロイヤー	86	フローレンス・ノール
41	マルト・スタム	87	イルマリ・タピオヴァアラ
42	ビエール・シャロウ	88	アキッレ & P. G. カスティリオーニ
43	アイリーン・グレイ	89	アキッレ・カスティリオーニ
44	ミース・ファン・デル・ローエ	90	アンジェロ・マンジャロッチ
47	ル・コルビュジエ+P. ジャンヌレ+C. ペリアン	93	ガエ・アウレンティ
50	ロベール・マレ・ステヴァン	95	ワーレン・プラットナー
52	アルヴァ・アアルト	96	ヴィコ・マジストレッティ
54	カイ・フィスカ	97	P. ガッティ+C. バオリニ+F. テオドロ
55	ルネ・エルブスト	98	アフラ+トビア・スカルバ
56	ジャン・ブルーヴェ	101	ヨーン・ウツツン
57	ミッシェル・デュフェ	102	ジョエ・コロンボ
61	椅子の現象学		山口昌男
62	椅子ではない椅子		羽原肅郎
63	「部屋」と「馬」		林 昌二
64	シェーカーの椅子		藤門 弘
113	懐かしい椅子・気に入っている椅子		池田武邦
114	いま、ジョージ・ナカシマのこと		村井 修
115	落ちつかない椅子いろいろ		山口勝弘
116	フィン・ユール氏の想い出		織田憲嗣
143	近代椅子デザインを通して		島崎 信
145	主要椅子年表1841-1994		
152	SDレビュー1996募集要項		
154	連載：apple tomology トムの時空形象学 9	MONOLITH	戸村 浩
156	照明探偵団：連続実践講座レポート 4	芸術としての光 天使の舞う都市	葛西玲子/LPA
158	ニュース：「神秘の地」東洋から「今そこにある」アジアへ ASA-JIAデザインワークショップ——Bankok in Two Weeks		松原弘典
160	ニュース：第4回「KAJIMA彫刻コンクール」入賞作品決定		
163	ニュース：アーティストがつくった交番 ゆめおおかアートプロジェクト		谷 新
164	ニュース：1996年デンマーク・デザインセンターID賞決定		
166	書評		
169	新刊紹介		
170	お知らせ		
173	海外建築情報リミックス：インダストリアル・デザイン その2 「自動車」		

Special Feature:

111 Chairs Designed by Architects

Chief Editor: Koji Aikawa
Associate Editors:
Mariko Terada
Shinya Takagi
Ryo Yamada
Yumi Ohno
Rie Iizuka
Adviser: Kobun Ito

Publisher: Zenjiro Kawai
Executive Director:
Aiko Hasegawa

Published by
Kajima Institute Publishing
Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107,
Japan
TEL:
03.5561.2551 (Management)
03.5561.2555 (Editing)
FAX:
03.5561.2561 (Management)
03.5561.2565 (Editing)
TELEX:
02422467 KAJIMA J

Printed in Japan

This Copy: ¥3,000
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page 186

Cover: Wassily Chair/
Marcel Lajos Breuer

Photo:
Yukio Arikawa
Cover Design:
Hitoshi Koizumi/NID

6	Dialogue: Endearing Chairs Clad for Their Times	Toshio Mitsufuji + Mayumi Miyawaki
12	Chairs as Symbols	Toshio Mitsufuji
14	Adolf Loos	58 Giuseppe Terragni
15	Charles Rennie Mackintosh	65 Bruno Taut
18	Antonio Gaudi	66 Richard J. Neutra
19	Henry van de Velde	67 Eero Saarinen
20	Josef Hoffmann	70 Charles Eames
22	Carlo Bugatti	72 Marco Zanuso
23	Kaare Jensen Klint	74 Finn Juhl
24	Otto Wagner	75 Max Bill
25	Eliel Saarinen	76 Gio Ponti
26	Walter Gropius	78 Arne Jacobsen
28	Frank Lloyd Wright	80 Antonin Laymand, Noemi Laymond
32	Gerrit Thomas Rietveld	81 Franco Albini
35	El Lissitzky	83 George Nelson
36	Erik Gunnar Asplund	84 Vilhelm Wohlert
38	Marcel Lajos Breuer	85 Florence Knoll
41	Mart Stam	86 Ilmari Tapiovaara
42	Pierre Chareau	88 Achille & P. G. Castiglioni
43	Eileen Gray	89 Achille Castiglioni
44	Ludwig Mies van Der Rohe	90 Angelo Mangiarotti
47	Le Corbusier + P. Janneret + C. Perriand	93 Gae Aulenti
50	Robert Mallet-Stevens	95 Warren Platner
52	Alvar Aalto	96 Vico Magistretti
54	Kay Fisker	97 P. Gatti + C. Paolini + F. Teodoro
55	Rene Herbst	98 Afra + Tobia Scarpa
56	Jean Prouve	101 Jorn Utzon
57	Michel Dufet	102 Joe C. Colombo
61	A Phenomenology of Chairs	Masao Yamaguchi
62	Chairs that are not Chairs	Shukuro Habara
63	Of "Rooms" and "Horses"	Shoji Hayashi
64	Shaker Chairs	Hiroshi Fujikado
113	Chairs with Nostalgia; Favorite Chairs	Takekuni Ikeda
114	George Nakashima Today	Osamu Murai
115	The kinds of Chairs you can't settle down in	Katsuhiko Yamaguchi
116	Remembering Finn Juhl	Noritsugu Oda
143	Over view of Modern Chair Design	Makoto Shimazaki
145	A Chronology of Chair 1841-1994	
152	Guidelines for Entrants: SD Review 1996	
154	Series: MONOLITH apple tomology 9	Hiroshi Tomura
156	Symposia on Illumination: Light as Art City Where Angels Dance	Reiko Kasai/ LPA
158	News: To Asia: from Mysterious Orient to Contemporary Neighbor ASA-JIA Design Work Shop "Bangkok in Two Weeks"	Hironori Matsubara
160	News: Prize-Winning Works, Fourth Kajima Sculpture Concours	
163	News: Police Box Designed by an Artist Yumeooka Art Project	Arata Tani
164	News: The ID Prize 1996/The Danish Design Centre	
166	Book Review	
169	Book Information	
170	Announcements	
173	Eminent Works Abroad: Industrial Design 2 Car	

特集

建築家の椅子111脚

休息する時、仕事をする時、食事をする時、団らんの時、…
つまるところ、我々の生活に欠くことのできない椅子たち。
椅子はまた、こうした「座る」という目的で機能する一面を
当然持ちながらも、もう一方で「象徴」としてのメタファー
をも合わせ持つ。

本特集では、海外の77人の建築家による111脚の椅子を一挙に
紹介する。

しかし、決してこれらすべてが「機能性」を重視したベスト
セレクションという視点での選択ではない。

むしろ、材料（質）、構造、ジョイントなどの細部から、さら
にそのフォルムまで、一脚の椅子に込められた、その時代の
技術とデザイン、建築家たちの思考を読み取ろうという視線
を持ちたい。

そこには、建築家たちが試みた、時代の技術とデザインとの
格闘を見ることができるのだから。

たかが椅子、されど椅子。

椅子をめぐる宇宙は広大なのだ。

（編集部）

Special Feature

111 Chairs Designed by Architects

時代をまとった愛しき椅子たち

光藤俊夫×宮脇 檀

編集 今回は海外の建築家たちのデザインによる椅子の特集です。そこで椅子のコレクターとしても知られるお二人に、椅子の魅力など、椅子にまつわるお話が伺えればと思います。まずは、なぜ椅子を集められるようになったのかといったことからお話しいただければと思いますが。

コレクターとしての出発点

宮脇 光藤さんはどのくらい持っていますか？

光藤 100に近いかもしれない。

宮脇 うちと同じくらいですか。

光藤 何で椅子が好きになったのか。椅子というのは座するための道具だというけれど、ただそれだけじゃない魅力というか、非機能的な要素も持っているんですね。ありきたりに言うとオブジェクティブな、そういうニュアンスで空間の中にあしらわれるひとつの代物ということで。それと手軽でしょう。

宮脇 そうですね。手軽に買える。僕が一番最初買ったのは、「アーツ」(→p.78)。30年前ですが、たしか1万8,000円。あのころでも1万8,000円ならぎりぎり買えたのね。

光藤 僕が最初買ったのは7万円ぐらいした。

宮脇 何を買ったんですか。

光藤 ボール・ケアホルムの「PK22」。あれがなんとなく欲しくなっただけ。

宮脇 あのころの輸入状況は劣悪で、あの程度しかなかったですね。まだアメリカ物もあり入ってなかったし。

光藤 なつかしいものであるとか、あるいは昔から知っていたというのでは、トーンネットの曲げ木椅子なんかありました。しかし、この椅子、座ってみたいなあ、あるいは日常使ってみたいと思った、そういう椅子の始まりというのは、やっぱり近代に入ってから椅子を知り始めてからですね。

宮脇 そうですね。僕も徹底して「デザイナーの名前がはっきりしている20世紀の椅子」というふうに決めてあります。それはなぜかというと、その椅子を所有して、使い始めると、そのデザイナーと親しくなるんですね。僕はずっと十何年間、建物を実測してきたんです。西澤文隆さんが「実測をする」と設計した人の

気持ち分かる。だから実測する」と言っていました。椅子も、買って、座って、所有すると、「ああ、こんなことでデザインしたんだ！」というのがピンピン尻を通じて分かってくるという、それがうれしくてね。

光藤 僕が椅子の絵をちょこちょこ描いてきたのも、やっぱり今の実測と似ていますね。

宮脇 描くと分かる。やっぱり。

光藤 それを絵にしてみると、なんだこんな椅子だったのかというのもあるわけ。特別にディテールがどうこうという真面目な調査じゃなくても、描くと分かってくる。

宮脇 この間も学生にマルセル・ブロイヤーの椅子を実測させたら、彼らは2年生だからどうやって実測していいかわからないわけ。「たぶん彼が使った数値があるはずだからそれを探ろうじゃないか。パイプの直径を計ろう」と言ったら、「先生、パイプの直径はどうやって計るんですか」(笑)。ノギスがないからパイプをはさんで計らせたら25mm。「これはインチだから全部この倍数に違いない、アールを調べてみよう」。パイプの芯で計るとちゃんと全部インチで出てくる。そうすると、ブロイヤーはこのときインチでものを考えていたということがバツと分かりますね。ブロイヤーはインチで設計していましたと本で読むのと比べれば、絶対計ったほうが分かる。

同じように、お描きになっていると、ここで板厚が変わっているというのが分かるでしょう。アアルトの「パイオミ41」(→p.52)はベニヤの厚さが微妙に変わるじゃありませんか。ここまでやっているのか、アアルトってすごいなと思う。あるいはアアルトの椅子の寸法が23.6mmとか34.8mmとか、インチの倍数なんて何もない。そうすると、この人は理知的にモノを創る人じゃなかったとか。

光藤 感覚的な線が椅子には自由に使われているということですね。

宮脇 そうですね。アアルトはモジュールを外して自由に描いたんですよ。だからああいう不思議な寸法でできている。

光藤 人間工学的に云々という、そういう筋道を通してできているものは、今世紀に入ってからできている椅子にはあまりなかったという感じがする。ディテールを調べてみると。しかし感覚的なそういう線が、今日言うとか



PK22/ボール・ケアホルム、1957

ろの人間工学的なものにおのずと合致しているところがある、また見事だというふうにも言えなくはないですね。

宮脇 この間、リートフェルトの椅子を学生が作ったんですよ。彼は全部で406本作っているんですが、その1割を作ろうというので、めばしいものを5分の1で作った。そうしたら「レッド・アンド・ブルー」(→p.32)は、最初は全部モジュール100mmでやるんですが、あるとき100を3で割ってみたりするわけ。最終製品になると32mmなんていうのがあった。作ってみたらちょっと太い、1mm減らすかなと、最後にふっと感覚的なことをやっている。あのリートフェルトですら。あれはおもしろいと思いましたね。

光藤 材料の強度とか、あるいはその材質がどうであるかというのじゃなくて、非常に感覚的な形ででき上がっている線でしょう。

宮脇 そうですね。椅子を集めてみるとそのデザイナーの気持ちが分かるということと、もうひとつは、そのデザイナーの思想史とか周辺の技術史も全部読めるのね。例えばブロイヤーの「ワシリーチェア」(→p.38)、あれは当時ブロイヤーが自転車のハンドルにヒントを得て作ったというんですが、理論的には確かにアールはきれいに曲がって、連続して、三次元にパイプは曲がるはずだけれども、あれは当時のドイツの技術では美しくは曲がらない。だから全部あれはアールごとに切って、直線の部材とアールの部材とを溶接してつないで、溶接のところを全部サンダーをかけて削って、それでメッキにかけて、一見ああいうふうに曲げたように作っている。本当に一本のパイプを機械にかけてギュッと曲げられるようになったのは、1950年以降のアメリカの技術で初めて可能になったんですね。だからブロイヤーの観念的な機械生産主義というのは、結局20年後に初めて実現するわけで、それだけ思考が先行していた。その辺の技術史まで分かってくるからおもしろい。

なおかつブロイヤーの特許の期限が切れて、さらに自由生産になって、香港や韓国辺りでコピーを作るようになると、今度は急にパイプの精度が落ちてきて、ガタガタになってくるからゴムのリングをつけないと地面にビタッと水平に置けないとか。



光藤 俊夫 (みつふじ・としお)
1930年 大阪生まれ
1950年 大阪工業大学専門学院
建築学科卒業
1953年 京都美術大学 (現芸大)
美術学部西洋画科卒業
1953~1985年 竹中工務店設計部
1985年 竹中工務店依頼退職/
光藤建築研究室開設
現在 光藤建築研究室主宰、昭
和女子大学教授

例えばジオ・ポンティの「スーパーレジェーラ」(→p.76)も、今作っているものと昔のものは寸法が違うんですね。僕は古いものと新しいのと両方持っていますが、今のものは脚が2mmぐらい太い。つまり、あれはヒッコリーかなんかだと思うんですが、あれだけの弾性の木がなくなってしまったのか。

光藤 ヤナギみたいな木ですね。弾力性がある木。

宮脇 そうそう。それから、あの座のメッシュを編める職人がイタリアにいらなくなって、ついに東南アジアに行って作るようになったらメッシュがすごく汚くなった。あれは手工業の一種の傑作だったと思うんですが、手工業の傑作というのはもう本場のイタリアでもできなくなったんだなあ、イタリアの手工業職人もついに終わったのか、というのがまた、椅子を見ていると分かるわけ。

光藤 工業化とか量産化されたために、もとの良さがなくなってしまったという椅子はたくさんあるじゃないですか。やっぱり手づくりのよさというものをどこまで大事にしてやっていくか、心がこもっていないと椅子というのは成立しないですね。

宮脇 デザイナーの思想だけじゃなくて、その国の持っている技術史的なものとか、バウハウスだったらもちろん美術史的なものとか、それも全部読める。椅子というのは一脚見れば、1時間や2時間は飽きないですね。

光藤 そうですね。

椅子の構造革命と材料革命

宮脇 僕は今、3年に1回の旭川の国際家具コンペの審査委員長をやっているんですね。世界中から作品が集まってくる。今年は1,260点ぐらい集まったわけ。しかし、結局いつも1位2位3位はデンマーク、ノルウェー、フィンランド、ドイツ。

光藤 なるほど。

宮脇 やっぱりトップはすごい技術ですよ。ここまでベニヤがきれいに曲げられたかとか、こんなに薄いベニヤでできたのかとか。これは木の家具という制限がありまして、日本はやっぱり木を使わせると工芸的になるんです

ね。技術の部分でシビアに追わないで、最後は木目とか触感とかで逃げるものだから、負けてしまう。あれはおもしろいですね。ドイツの連中というのは、技術を駆使しながら最後はちゃんと作品にしていこうという、あくまでもいつも技術を横にくっつけてやっていくみたいところがある。

光藤 例えばさっき「ワシリーチェア」の話が出ましたが、あれは自転車の構造からヒントを得たということがあるにしても、世界で最初のパイプ椅子だという意味では、材料の革命があったというふうに言えますね。そうすると今度はミースあるいはマルト・スタムが「カンティレバーチェア」(→p.41)を作る。あれもパイプの椅子だけれども、あれは構造の革命ですね。なにも四本脚じゃなくてもいいじゃないかということころで。

宮脇 エーロ・サーリネンの椅子も革命でしたね。

光藤 そう。FRPというかプラスチックを使って、しかも一本脚でという、構造の革命と材料革命を一緒にやっている。「ワシリーチェア」と「カンティレバーチェア」を合体させて、そしてサーリネンの「チューリップチェア」(→p.68)へと。

そういうものを見てみると、あの材料革命とか構造革命に勝るといって、それを追い抜いていったようなものがその後あまり出ていないような気がする。

宮脇 そうですね。基本的に椅子というのは、座と背と脚しかないですから。その三つの組み合わせを延々とやってきた中で、たぶん座と背と脚を一体化するということころで、突然1900年代の初めにみんながどよめき立って一斉にやった。そこで最初にパイプを見つけて、もう終わったなと思ったら、座をイームズがベニアで始めたり、ベルトイアが金網を使ったり、そこに突然サーリネンが「チューリップチェア」を出してきたでしょう。あれは本当に構造と材料の革命だし、造形的にもすごかった。

光藤 そうそう。サーリネンは、椅子の足元を整理したいということ一本脚にしたと言っていますね。そういうふうに考えると、ミースのものにしても、ベルトイアなんかまさにそうだけれども、足元が邪魔なだけで使いに



宮脇 博 (みやわき・まさみ)
1936年 名古屋生まれ
1959年 東京芸術大学建築科卒業
1961年 東京大学大学院修士課程修了
1964年 宮脇博建築研究室開設
1991年 日本大学生産工学部建築工学科研究所教授
現在 宮脇博建築研究室主宰、日本大学生産工学部建築工学科研究所教授

くいということは往々にしてある。

宮脇 四本脚が三本脚になったときも、かなり難しかったですね。アルネ・ヤコブセンの椅子「アンツ」(→p.78)はすぐひっくりかえって、結局日本では「アンツ」は輸入しなかったんですが、北欧にはまだ三本脚がありますね。

光藤 クレームがきたという話ですね。しかし、あの椅子はやっぱり三本脚でないとね。

宮脇 三本脚の方がいいですね。ころばないように、座の後ろを小さくして、尻圧が座にかからないようにして、ひっくりかえらないように苦心惨憺している。

光藤 あんなものを踏み台がわりに使うから、ひっくりかえるんだよ(笑)。

宮脇 日本人は椅子の上であぐらかいたりしますからね。そうするとあれはひっくりかえる。

光藤 椅子の上にもものを置くという、物置き台的に使うという習慣が日本人にはあるから。

宮脇 僕は昔、石津謙介さんがVANの社員に「椅子に鞆を置くな。椅子の上に置いていいのは女のハンドバッグだけだ。日本人の旅行客は空港ですぐ椅子の上に鞆を置いて、人がひとり座れなくなる。鞆は全部床に置け」と言っているのを聞いたことがあります。なるほど、いいことだと思って、僕は今でも若い人に「鞆は椅子の下に置け」と言っています。

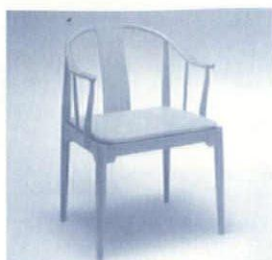
光藤 正論ですよ。

宮脇 外国で見ていると本当にそうですね。空港で椅子に鞆を置いている人がいない。

座る椅子、眺める椅子

宮脇 僕が椅子のコレクターだと言うと、ほとんどの人が「どの椅子が一番座りいいですか」というバカな質問をする(笑)。「バカモン、座りいいとは何だ。どの女が一番いい女ですかと聞かれて、一人に決められるか。原節子もよければ、クラウディア・カルディナーレもいいではないか」(笑)。要するに、椅子=座るもの=座りやすいものって非常に短絡的に話をするけれど、そんなものじゃないですね、椅子というのは。

光藤 女性の例が古いと思うけど、まあそう



チャイニーズチェア／ハンス・ウェグナー、1944



ウィッシュボーンチェア／ハンス・ウェグナー、1950



NO.14／ミカエル・トーネット、1876

そう(笑)。

宮脇 見たり、話したり、触れたり、いろんな楽しみ方があるわけで、例えば女性でも朝会ってみたい女性と夜会ってみたい女性とあるでしょう。椅子だって、朝刊を読むときに座る椅子と夕刊を読むときの椅子は違いますからね。酒を飲むときの椅子もあるし、座るだけでもいろいろある。それ以外に、見て楽しむものとか、デッソウのパウハウスの若い連中が目をキラキラ輝かせた時代が椅子の背後に見えてきたりしたら、これは大変なことですね。それを座りやすい椅子というだけで判断されたら困っちゃいます。

光藤 でも正直に言えば、名品と呼ばれる椅子の80パーセントは座りにくいですよ(笑)。どれが座りいいかというのは、そのときのコンディションにもよるでしょう。同じ椅子でも、きょうは良かったと思って、その次はこんなはずではなかったということがあるので、どれが座りいいというふうにはなかなか言えない。

宮脇 僕はよく冗談に僕のコレクションをハーレムにたとえるんですね。やっぱり千人斬りというのは男にとって最大の願望だけれども、それはできない。それをみんなが何かに置き換えている。それがコレクションだ。だから僕は、「あの椅子はみんな私のハーレムの女である。今日は何の女にしようかな」と言ってきれいな椅子を選んで、その椅子に愛を囁いている。座ってやる」と言っています(笑)。

光藤 それもゴマメの歯ざりだね(笑)。だけどコレクションというのはハーレムだというのは、僕はいい比喩だと思う。

宮脇 だって、コレクターというのはほとんど男ですからね。

書斎の僕の前には「パルセロナチェア」(→p45)を置いてあるわけ。女性のお客さんが来たならば座らせようとしているのね。

光藤 脚の格好のいい人でないとはあれはぐあいが悪いよ(笑)。

宮脇 あれに座って似合う女性がいたら、会いたいですね。

光藤 うんうん。それと自分で座らないで、こちらから眺めている方がいいという椅子もある。あるいは誰かがかけてくれているという椅子もね。

素材のかたい、やわらかいはともかく、椅子というのは座る人にこう座りなさいと強制しているところがあるでしょう。どんな椅子でも。今から勉強する、今から食事をするというふうに、それにふさわしいような椅子を用意すると、その椅子に合わせて座るところがあるじゃないですか。

宮脇 ミースの「ブルーノチェア」(→p46)を僕の仕事場に使っているけれども、あれに座るには端然としないと、邪な心で座ったら怒られますね。だから原稿を書くときとか図面をかくときは絶対「ブルーノ」。

光藤 なるほど。あれも言うなれば、かたい椅子だ。「チェスカ」(→p40)もそう。

宮脇 ただ、椅子にはさっきの座るだけじゃないという話があって、事務所の30周年記念にOBが集まって僕に「チャイニーズチェア」を買ってくれたわけ。これはハンス・ウェグナーが80歳の誕生日に記念して80本作ったもののひとつなんですけど、実に美しいですね。それには僕は座らない。ただじっと見ている。見てだけでしみじみしちゃうんですね。あれに座ったら失礼な感じがして。

光藤 あれはウェグナーのかなり初期のものでしょ。

宮脇 そうです。話によると、事あるごとに彼はあの椅子を作るんですって。ただし材料を全部替えて。メープルで作ってみたり、いろんなもので作っているらしい。

光藤 マッキントッシュの「ヒルハウスI」(→p16)だって、ヒルハウスの寝室に置いてあるでしょ。

宮脇 あれも長く座ったらだめですね。

光藤 あそこで靴を脱ぐとか靴下を履くとか、ちょっとした動作で座る椅子という、非常にシンボリックなものでしょう。あれがいいからといって、例えばこういう会議室の周りとか、あるいは食卓の周りに置いたら変なことになりますよ。おそらくマッキントッシュも、あれが量産されてそんなふうに使われるとは思っていなかったと思うんです。

ウェグナーの椅子は、マッキントッシュの「ヒルハウスI」のようにシンボリックなものという意味はないですね。

宮脇 ないですね。日常的に使えますね。ウェグナーの「ウィッシュボーンチェア」も、

あれは日常的な椅子ですが、どこから見ても美しい。

光藤 今あちこち流行らせてちょっと嫌味になっているけれども、やっぱり立派なものですよ。

宮脇 あれは健康美人というか、健康でなおかつ美人というのはなかなかないですよ。

光藤 例のトーネットの「No.14」も、100何年も前にできたあの椅子がいまだに量産されている。同じような経緯を「ウィッシュボーンチェア」は今後持つだろうという気がする。まさにそういう椅子だと思いますね。

宮脇 そうですね。

建築と椅子

光藤 いずれにしても昔は、昔というか近代に入ってからということになるのかもしれないけれども、向こうの建築家はみな椅子をその都度やっている。例えばマッキントッシュの「ヒルハウスI」でも、「ヒルハウス」のために作っているわけでしょう。ガウディもそうですね。1930年前後にできている椅子というのは、ディテールがしっかりしているし、立派ですね。

宮脇 椅子に建物の名前がついているでしょう。例えば「パルセロナチェア」、「チューゲンハットチェア」もそうでしょう。

しかし、この建築空間には絶対にこの椅子がマッチするということがあるかと言えば、この間、ロサンゼルスとサンフランシスコのライトの建築を見て歩いたんですが、必ずしもこの家にこの椅子という感じはないし、ヒルハウスのは本当にヒルハウスにピタッと合っているかと言うと、あの筆箭の間に1本ボンとある辺りは合っていると思うけれど、別にうちに置いても合うんだから……。椅子というのはいい女みたいなもので、どこで見てもいい女というのは合う。

光藤 建築家が自分で設計した、ことに住宅の場合、そこに合うようなものというのは、いろいろな思い入れがあってピタリと合わせて作っている。そういう意味から言うと、ガウディなんかそういう感じが濃厚ですね。

いい椅子というのは、非常に古い建物の中

にもモダンないものはパチッと合うということがあるでしょう。

宮脇 ありますね。

光藤 モダンなインテリアにも、古いものでもいいものがピタッと合うということがあるので、建築家の作ったものは必ずその建築とフィットしているということではなくて、その建築のためにデザインしたものであるにもかかわらず、ほかへ持っていってもちゃんとそれが合ってくれるということがある。

宮脇 そこが家具のおもしろいところで、建築というのは土地にくっつくでしょう。だからその土地から離れたら死んでしまう建築って、いっぱいあるじゃありませんか。例えば「グラスハウス」にしたって「ファンズワース邸」にしたって、あの風土でないところへ、例えばスイスの山の中に持っていったら合うかという、ちょっと疑問の部分があるしね。

光藤 帝国ホテルが犬山に建っているようなものだ。

宮脇 ところが家具だけはいくのね。家具というのは、土地についているんじゃないくて、単独でオブジェとしての完結した美しさを持っているものだから。だから土地から切り離しても、どこへ持っていってもいいところがある。

光藤 ムーバブルだね、椅子は。

宮脇 僕の書斎は全部バウハウスでやろうと思ったわけ。それで今、ミースとプロイヤーとコルビュジエなんだけれども、全部バウハウスではできなかったんですね。仕事する椅子はどうしてもイームズが一本入ってきたり、会議用テーブルはジョー・ポンティが入ってきたり……。コルビュジエの「LC7」(→p49)を買ったけれども、あまり座りよくなくて、バウハウスでそろえるために無理やり置いているという感じ。だけど同時代に同じ学校で競い合った人たちの、1920代から30年代の椅子だから、どう置いてもバシッと合うのね。

光藤 なるほどね。

宮脇 それはもうすごいものですね。ある雰囲気さがきちと出ている。色はほとんど黒と茶だけでしょ。

光藤 時代はちょっと違うけれども、北欧のデザインなんていうのも、あれもどうやって合うね。

宮脇 あの白い清潔感なんていうのは、デンマークでもフィンランドでも同じですね。木の使い方も。

光藤 ところで「建築家の椅子」ということですが、宮脇さんは椅子のデザインをしたことがあるの？

宮脇 若い頃ふたつしました。ひとつは、ディレクターズチェアが欲しかったのね。ジョー・ポンティの真似をして、あれをどこまで細くできるかといって細かい図面をかいた。工場からでき上がったのを事務所に持ってきて、座った瞬間に、パタッと僕は床にたたきつけられた(笑)。その次は、ある喫茶店を設計してその椅子も設計をしたんですが、今度は怖かったから太過ぎたんですね脚が。武骨だった(笑)。

細過ぎてダメ、太過ぎてダメ。おれは椅子のデザインをする能力がないんじゃないかと思って、コレクターに転換したんですよ。コレクターになってみると、こんな美しいものを私がデザインできるはずがないではないかと思います(笑)。

光藤 だけど僕がやっていたころは、宮脇さんもそうだと思うけれど、椅子に限らず、そこへ用意する家具というのはみんなオリジナルで発注して作ってもらわないと、いいものがなかったでしょう。だからその都度図面を作ったわけ。

宮脇 僕はもう少し若いんです(笑)。僕の若いときの建築は全部住宅ですもの。住宅では家具なんか作らないですよ。ベニヤの合板で作る箱物とか棚物はいいけれども、椅子物は無理でした。1本とか2本の椅子をそのためにデザインしたり作らせたりするというのが経済的にできなかったですよ。

光藤 壊れたということ思い出したけれど、横さんが名古屋の豊田講堂をやったときに、あそこの椅子を僕はお手伝いして図面を作ったんです。

宮脇 どの椅子？

光藤 ベンチ。

宮脇 そう言えば、あのころベンチは全部、建築家が設計していましたね。前川國男さんなんかもそうでした。

光藤 そうそう。横さんがその後アメリカへ行って、アメリカでもあれと同じものが欲し

いから作って送ってくれないかという連絡があった。それで同じものを作って送ったら、向こうに着いたときに壊れちゃった(笑)。「日本の木の椅子展」というのがありましたね。あれを見ると、藤井厚二さんとか、あなたのお師匠さんの吉村順三さんだって椅子を作っているでしょう。だから日本にもそういう建築家がいたけれども、今はあまりやらないですね。量産されてひとつのエポックを作るところまででなかなかいっていない。

宮脇 木の椅子と言われて思い出したことがある。さっき僕の書斎はバウハウスで揃えているという話をしましたが、僕は吉村さんの設計したロックフェラーの家に行ったんですが、全部家具はジョージ・ナカシマでした。やっぱり全部ジョージ・ナカシマといたらくたびれちゃって、よくない。

光藤 それはそうかもしれないね。

椅子とクリエイティビティ

宮脇 建築家がなぜ椅子をデザインするかという話は、僕がなぜ建築科に入ったかという話にもつながるんですが、僕はIDをやろうと思ったんです。うちのおやじが名古屋の市立工芸の先生をしていて、そこへ講師で柳宗理さんがきていたんですね。おやじが柳さんに相談したら、柳さんが「今まで世界のIDは全部建築家がリードしている。ミースもコルもプロイヤーも全部建築家だ。だから建築科に入りなさい。美としての建築をやるのは芸大です。芸大の建築にいきなさい」と言われたのが始まりなんです。僕は建築科にいったら建築の方がおもしろかったんで、そのまま流れちゃったんですけどね。

そのころプロダクトデザイナーがいなかったので、プロダクトの中でデザインをする職種としては建築家しかいなかったから、しょうがないからやったという部分があったんじゃないですか。

光藤 それもあるけれど、向こうの建築家にこういう仕事が多いというのは、インテリアから始まっているからでしょう。どんな建築家もインテリアと建築というのは同じに考えていますし、そしてインテリアの仕事から始

まっている人が多いわけですね。

宮脇 そうでした。私の処女作は帝人メンズショップで、僕もインテリアから始まったんですよ。

そのときに、新しいデザインの店をやろうと思ったから家具をPCでやったんですが、コンクリートの家具なんてないでしょう。全部私が原寸を書いたのを思い出しました。脚の上部が凹んでいて、そこが灰皿になったりとか、いろんな家具をやりましたよ。

光藤 コンクリートで椅子をつくったの？

宮脇 いや。カウンターと展示台とディスプレイ用の壁をPCで作ったんです。失敗しましたけど(笑)。だからインテリアから始まったんだ、僕も。

光藤 もっとうがった言い方をすると、向こうの建築家が最初に仕事をするという場合には、骨格としては古い建物が残っていて、その中を時代に合わせて改変していこうと、そういう仕事から始めていくとすれば、どうしても家具をいじらなければいけない。また、家具を発案しなければいけない。そういうところから椅子を手がける機会が多かった。そんなところから椅子に入っていくんですよ。

宮脇 最近の建築家でいい椅子をデザインしている人はいますか。

光藤 例えばハンス・ホラインが「マリリン」なんていうソファをデザインしている。

宮脇 だけどポストモダンのときにやったあの辺の連中の椅子は、はっきり言って、どうしようもないですね。要するに技術においてもスタイルにおいても革命ではなくて、家具の遊びで。

光藤 それは椅子だけでなく、建築だってそういうものがありますよ(笑)。

宮脇 僕は、バウハウスの時代にすべて終わった、あとはイームズとサリネンでおしまいという感じがするなあ。あとは部分を変えただけじゃないですか。

光藤 最近はなかなか出てこないね。

宮脇 残っているのは、脚がないとか、宙に浮いているとか、そういうことをやらない限り、もうダメですね。

光藤 フローティングチェアというのを昔やったことがありますよ。アクリライトが全盛

のころに、脚にああいう透明感のある材料を使って、座と背を浮かしている。

宮脇 あるいは岡本太郎的に「座ることを拒否する椅子」とか。そうでもしない限り、もうあまりないでしょうね。

光藤 あれが出たときにはドキッとした感じだったけれども、今改めて見ると、あれもなかなかいい椅子ですよ。

宮脇 そうですね。

光藤 名画をお尻に敷くなんていうのは、ちょっとした感じのものですよ。

宮脇 建築だって、例えば都市計画をやるときにこのエリアの建築はすべて三層構造としよう、ベースとシャフトとトップを明確にしろと、サンフランシスコなんかでも全部そういうコードが出て作っている。考えたら、あれはパラディオじゃありませんか。パラディオ以後、今日まで建物の全体の構成というのは全然変わっていないのか。椅子もやっぱり、近代の椅子はバウハウスでフィニッシュ、あとは変化がないというのはしょうがないのかもしれませんね。

光藤 それはある意味で当たっていますよ。椅子はもうバウハウスで終わったんだというのは。

宮脇 そう言えば近ごろ、僕も新しい椅子は買わないですね。買おうと思うとライトか……。僕のコレクションの題材というせいもありますが、新しいイタリア物なんて絶対買う気がしませんね(笑)。

光藤 椅子のデザインというのは、何で椅子が好きになったかという話に戻るけれど、やっぱりいいものを見てみると、それに自分のデザインが触発されて、いろいろと影響を与えてくれる。手ごろだといったのもそういうところですね。

宮脇 そうですね。

光藤 そういうのが身近にあるということで、あなたが言った、その椅子が持っている歴史的な背景、あるいはデザインをした建築家のやってきた仕事と、いろいろな意味で関連した形でそれを眺める、見る、触れる、腰かける、そんなところにも大変魅力を持っているという、そういう道具だと思うんです。

そういう意味では、バウハウスでまとめようという意味も理解できるだろうと思うし、

あそこで終わったというふうに言いたいという気持ちを持たせる道具だと思う。だけど、バウハウスでおしまいじゃない、なぜソットサスまでこないのとか、そんなことも言えるクリアランスも椅子にはあるわけですよ。

宮脇 本当に自転車に乗ってバウハウスに通っていたときのプロイヤーは、どういうズボンをはいて、どういう帽子をかぶって学校へ通っていたのかなと思うんですよ。椅子一本からそういうところにまで話がいくというのは、こういう椅子でなければ出てこないものですね。

光藤 だけど感じとして、こういうものをしこしこデザインして、考えている状況を想像すると、あまり明るい感じじゃないね(笑)。

編集 お二人とも椅子をデザインされたわけですが、やはり技術的に新しいことをやらなくてはいけないというような気持ちがありましたか。

光藤 僕はそんな余裕はほとんどなかったですね。ここでそういうものが要だから作らなきゃならないということで。

宮脇 片一方にものすごいものがあるのを知っているわけでしょう。それはわれわれは知識として知っている、体験として知っている。やろうと思うと、ほぞをどう納めるか、ビスをどうとるか、どういう金具でどう引っ張るかということを何も知らないことに気づくでしょう。イームズのあの細かいディテールを全部自分でやっていこうと思ったらあと20年かかるなと思うと、やめようという感じになる。

例えば一番最初買ったヤコブセンの「アンツ」なんていうのは、ベニヤを曲げただけの椅子ですから簡単だけれども、よく見ると、脚受けのゴムを実はクッションにもしている、ビス一個で三本の脚を締めている、このベニヤは三次元の曲げになっている、これは並み大抵のことじゃないなというのが分かってくる。背のしゃくりなんて、あそこまでしゃくってくることによって背のベンディングが出て、なおかつあれより細くすると折れちゃいますから、たぶん何十と作ってやったんでしょうね。その辺のところが買って使っていると分かってくるから、そうするととてもとても私の手には負えませんという気になりますよ。

光藤 木取りの問題もありますね。あれはベニヤだけれども、「バレットチェア」は上がハンガーになっているでしょう。僕が最初に求めたものは折れましたよ。しばらく包帯を巻いて、これも格好いいじゃないかと言っていたけれども、ノールが「折れるわけがない」と言って、そして新しいのと交換してくれました。やっぱり木取りによってヤバイときがあるわけですね。

宮脇 イームズの「ラウンジチェア」(→p.71)を、うちのスタッフで80何キロの男がアームにドンと座ったら折れちゃった。ノールに電話したらパッと取り替えてくれましたね。無料だった。「イームズのアームが折れるはずがないんです」と言って。格好いいね(笑)。

光藤 それはユニットバスを作っているところが、うちのバスタブが漏れるわけがありませんと言うのと同じですよ。やっぱりそれだけの研究をして、それだけのものを作っているわけですからね。

宮脇 うちの「チューゲンハット」が20何年使ってボロボロになって、お客さんの尻がはさまるようになった。ノールに頼んで張り直してくれと言ったら、「このまま使ってください。今張ったらこの味が消えますから」と言って、しばらく替えてくれなかった。やっと最後にバルセロナのシートと取り替えてもらったけれども、やっぱり風格がなくなった。昔の「チューゲンハット」ではなくなった。そういうこともあるんですね。

僕も、自分で作ってみたい、一本ぐらい歴史に残る椅子を残したいとは思いますが、歴史に残る建築もできなかった癖に椅子なんかできるはずがないと言われそうな感じ(笑)。

光藤 歴史に残るものと考えてからできないんですよ。残らなくなっているじゃない。僕はさっきあなたが言ったパウハウスの話に同感で、もうみんなやり尽くしてしまったじゃないですか。イタリアのデザイナーのブルーノ・ムナリーが、「今までものすごい数の椅子のデザインがある。それがあんなものじゃダメなんだと言わんばかりに、新しい椅子がどんどんできてくる。これは一体何だろうか」と言っている。

宮脇 しかしみんなやっている。まだ先があるんだね。

光藤 僕は椅子が持っている魅力というのは、そんなところにもあるんだろうという気がする。

宮脇 光藤さんも最近家具をデザインしないでしょ。

光藤 去年やりました。高山で開催された最初の「日本の木の椅子展」にひっかけて「タカヤマ95」と名付け、プロトタイプなものを。

宮脇 椅子のデザインをしたときの建築家の年齢を調べてみると、大体みんな20~30代ですよ。やっぱりクリエイティビティがピークに達するときじゃないと、新しいものとかいいものは出ない。人間の創造力、クリエイティビティというのは大体25歳をピークで終わっちゃうんですって。名曲名小説、全部そうですよ。もうひとつ才能で伸びていくのは判断力、いろんな情報を総合的に判断しながらまとめていく能力は、80歳までずっと上るんですって。だから、われわれの年はクリエイティビティは枯れちゃっているわけ。われわれは総合的判断だけでなんとかごまかして生きているんですね。

僕も椅子をやってみようかと思ったけれども、歴史に残る創造性のある椅子は、僕にはたぶんできないですね。総合的なうまい椅子はできるかもしれない……。

光藤 非常に謙虚なお言葉ですが、ぜひともトライしてください。

宮脇 そうしましょう(笑)。

(1996年3月26日於：鹿島出版会)

象徴としての椅子

光藤俊夫

椅子は今日、どんな暮らしの中でも欠かせない道具となった。思えば、しかし日本人の私たちにとって、つい最近まで、それが必要欠くべからざる生活材とは言えず、特別な場合を除き、あれば便利、なければないで一向に困ることもない、そんな代物ではあったのだ。普通の家なら、家具と言えば筆筒、茶筆筒、長持、卓袱台であり、せいぜい文机に火鉢などが加わる程度、タタミの上での暮らしで尻当てに座布団は要っても、椅子など使いようがなかったのだ。昭和のはじめ、私が幼かった頃の周辺で、椅子を使って生活しているような家庭はきわめて珍しかった。そう言えば、新しもの好きの父のアイデアだったに違いない、いわゆる応接セットが用意されている部屋がひと間あり、家全体もそうなら、その部屋とて床の間や違い棚が設けられている純然たる和風のものでありながら、タタミの上に絨毯が延べられ、竿縁天井から、これまたシャンデリアの灯がぶら下げられていた、そんなちぐはぐなハイカラさを備えた12畳だった。もちろん子供たちはそこに入ることを禁じられていて、何かしら特別の客が見えた際に、大人たちだけで密かに使用している風があり、私などセットされていたその椅子にちゃんと腰掛けた記憶がない。断るまでもなく、電車やバスやタクシーといった乗り物は言わずもがな、軍隊や役所、会社や学校、芝居小屋や映画館もすでに椅子式ではあったし、喫茶店や洋食屋、またビヤホールやカフェなどもそうだったが、動物園か公園のベンチでならともかく、いずれも子供が単独で出入り出来るところのものではなく、私の目

には、椅子はその時まさに異国のものであり、また大人の世界の道具として映じていたのだ。だから、小学校に上がることになり、お祝いにと叔母から送られた勉強机と、特に椅子が自分のものとなり、堂々？と腰掛けられた時、私もついに大人になったのだという、ちょっとした感激に照れたものだ。

ところで、その昔、椅子は決して庶民のものではなかった。そう言える筋合いもない日本の場合はまったくの論外だが、それが西欧で古代にまで遡らずとも、近世に至ってさえなお、比喩的に言って神か王、あるいは僧侶や高位高官だけが使用出来た、いわゆる権威の象徴としてあったものだ。そして漸くごく普通の家庭でも使用されるようになったのは、ほとんど18世紀に入ってからのこと、ロココ様式の中で萌芽を持つ「人間の椅子」を通じ、チッペンデール (Thomas Chippendale 1718-1779) とかアダム (Robert Adam 1728-1792)、あるいはヘッブルホワイト (George Hepplewhite ?-1786) やシェラトン (Thomas Sheraton 1751-1806) ら、イギリスで優れたキャビネット・メーカーたちが輩出、産業革命の躍進ならびに商工業の発達に伴っての市民生活の向上と需要に答え、機能性と大衆価格を目指して量産しはじめたことからと言えるだろう。そして椅子が持ついろいろな意味について、本当の興味を私が抱くようになったのは、彼らの作品を知った時がきっかけだった。やがてモリス (William Morris 1812-1852) の登場があり、同じイギリスのビュージン親子 (A.W.N.Pugin 1834-1875) やゴットウイン (E.W.Godwin 1833-1886/E. W. Pugin

1834-1875)、またヴォイジイ (C.F.A.Voysey 1857-1941) やマッキントッシュ (C.R.Mackintosh 1868-1928) といった建築家たちが椅子をデザインしていることを知る。建築とインテリアとは本来一緒のものだ。だとすれば建築家も椅子のデザインを手掛けなければいけぬ。そう思いはじめたのはそれからだったが、第二次世界大戦後、続々と導入されたアメリカ文化の一端で、ミース (Mies van der Rohe 1886-1969) やコル (Le Corbusier 1887-1965) の、まさしくある意味で「権威の」ということもあわせ、現代の象徴としての椅子に直に触れることが出来て以来、なおさらその意を強めたことだった。そう、ここで急いで言うておくら、椅子に「権威の象徴」がなくなってしまったわけではないということだ。「大臣の椅子」と言い「社長の椅子」と言う。それはそれで椅子の宿命的要素と言ってしまうところがある以上、ことさらに忌避しては始まらない。マッキントッシュが背高な椅子でその影を遺しながらも、これはヒルハウスのものだと、まさしく建築と対峙したかたちのものを、ものとしているのを知るなら、そのことも椅子の魅力のひとつと捉えることが出来るだろう。しかし、私が椅子を大人の道具として認識することからはじまり、建築家も (だからこそ) 椅子を手掛けねば、と思い続けていたりするのは、あるいはそれが「権威」のであろうとなかろうと、生きていくための「象徴」としての魅力を感じているからかもしれない。

●みつふじ・としお/建築家・昭和女子大学教授

建築家の椅子111脚

掲載建築家リスト

Achille Castiglioni	P.89	Giuseppe Terragni	P.58, 60
Achille & P.G.Castiglioni	P.88	Henry van de Velde	P.19
Adolf Loos	P.14	Ilmari Tapiovaara	P.87
Afra+Tobia Scarpa	P.98, 99, 100	Jean Prouve	P.56
Aldo Rossi	P.108	Joe C.Colombo	P.102, 103
Alessandro Mendini	P.128	Jorn Utzon	P.101
Alvar Aalto	P.52, 53	Josef Hoffman	P.20, 21
Andree Putman	P.138, 140,	Kaare Jensen Klint	P.23
Angelo Mangiarotti	P.90, 91, 92	Kay Fisker	P.54
Antonin Laymand, Noemi Laymond	P.80	Le Corbusier + Pierre Janneret	
Antonio Citterio	P.111	+ Charlette Perriand	P.47, 48, 49
Antonio Gaudi	P.18	Luca Scacchetti	P.141
Antti Nurmesniemi	P.126, 127	Ludwig Mies van Der Rohe	P.44, 45, 46
Arne Jacobsen	P.78, 79	Marcel Lajos Breuer	P.38, 40
Bruno Taut	P.65	Marco Zanuso	P.72, 73
Carlo Bugatti	P.22	Mario Bellini	P.106, 107
Carlo Scarpa	P.104, 105	Mario Botta	P.121, 122
Charles Eames	P.70, 71	Mart Stam	P.41
Charles Pfister	P.129	Massimo Vignelli	P.134
Charles Rennie Mackintosh	P.15, 16	Max Bill	P.75
Cini Boeri	P.110	Michael Graves	P.132
De.Pas+D'urbino+Lomazzi	P.130	Michel Dufet	P.57
Eero Saarinen	P.67, 68	Michele de Lucchi	P.125
Eileen Gray	P.43	Oscar Tusquets	P.135
El Lissitzky	P.35	Otto Wagner	P.24
Eliel Saarinen	P.25	P.Gatti+C.Paolini+F.Teodoro	P.97
Enzo Mari	P.133	Paolo Deganello	P.117
Erik Gunnar Asplund	P.36, 37	Philippe Starck	P.136
Ettore Sottsass	P.123, 124	Pierre Chareau	P.42
Finn Juhl	P.74	Rene Herbst	P.55
Florence Knoll	P.86	Richard J. Neutra	P.66
Franco Albini	P.81, 82	Richard Meier	P.118
Frank Lloyd Wright	P.28, 29, 30	Robert Mallet-Stevens	P.50, 51
Frank O.Gehry	P.137	Robert Venturi	P.131
Gae Aulenti	P.93, 94	Stefan Wewerka	P.119, 120
George Nelson	P.83, 84	Vico Magistretti	P.96
Gerrit Thomas Rietveld	P.32, 34	Vilhelm Wohlert	P.85
Giandomenico Belotti	P.112	Walter Gropius	P.26
Gio Ponti	P.76, 77	Warren Platner	P.95

次頁からの各椅子に関する解説文は、下記の筆者たちに客観的説明だけでなく、むしろ各人の視点による主観的な意見を含めたものを執筆いただいた。

解説者：

大廣保行（東横学園女子短期大学教授）

織田憲嗣（北海道東海大学教授）

島崎 信（武蔵野美術大学教授）

羽原 肅郎（明星大学教授）

光藤俊夫（昭和女子大学教授）

河合俊和（建築家）

図面作成：

光藤俊夫

椅子撮影：

林 義夫

001

ムゼウムチェア 1898 Museum Chair

アドルフ・ロース 1870-1933

Adolf Loos

サイズ：W40×D55×H92×SH45
仕様：ブナ曲木塗装、藤張（座面）
置かれた場所：カフェ・ムゼウム
製造・取り扱い：J&Jコーン/アイデック

この華奢で優雅な曲木椅子とアドルフ・ロースとは結び付かない、と言った人がいる。「装飾」に批判的なロースにしては……というわけだが、ディテールを見ると、ロースなりの工夫に満ちている。

曲木といえばトーネットの製品と比べられるのは半ば宿命みたいなものだが、この椅子は、トーネットのNo.5の笠木の緩やかなダブルカーブと、No.14の笠木と内側の補助笠木の2本でできた背のフォルムを連想させる。笠木が座とのブレースにつながり、補助笠木が後脚にと下ってゆき、座枠と前脚のくびれの曲線を加えるなど、トーネットの影から何とか独自のディテールを出そうとする工夫をいろいろなところに見ることができる。

新興のJ&J・コーン社とのロースのトーネット社に対抗する心意気がひしひしと感じられる私の好きな椅子の1脚である。（島崎）



カフェ・ムゼウム、1899



002

アーガイルチェア 1897

Argyle Chair

チャールズ・レニ・マッキントッシュ 1868-1928

Charles Rennie Mackintosh

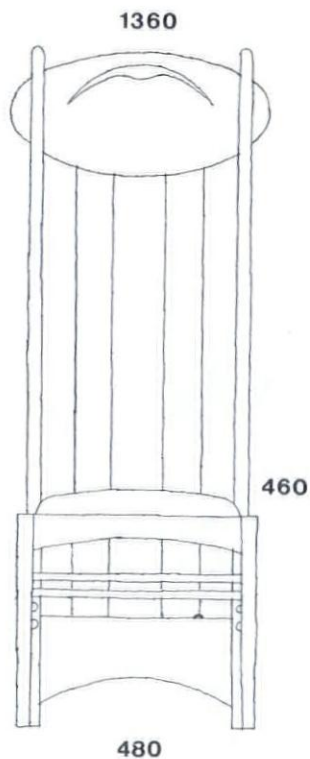
サイズ：W48×D46×H136×SH51

仕様：トネリコ材（オリジナルはオーク材）、布張り（座面）

置かれた場所：グラスゴーのアーガイル街のティーサロン

製造・取り扱い：Cassina/カッシーナジャパン

グラスゴー市アルガイユ街のティールームのためにデザインされたマッキントッシュ初めてのハイバックチェア。優美な楕円形の背板や幾何学的なフォルムの中にアール・ヌーボーの影響が感じられる。背板の透かし彫りはティールームのシンボルマークである。(大廣)



003

ヒルハウス 1 1902

Hill House 1

チャールズ・レニ・マッキントッシュ 1868-1928

Charles Rennie Mackintosh

サイズ: W41×D39×H141×SH46

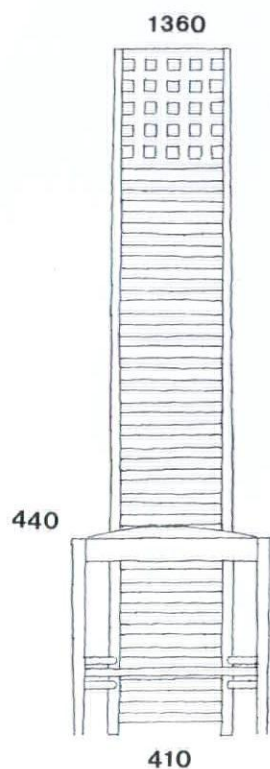
仕様: トネリコ材 (オリジナルはオーク材) 布張り (座面)
置かれた場所: グラスゴーのヘレンボロの別荘Hill Houseの
寝室

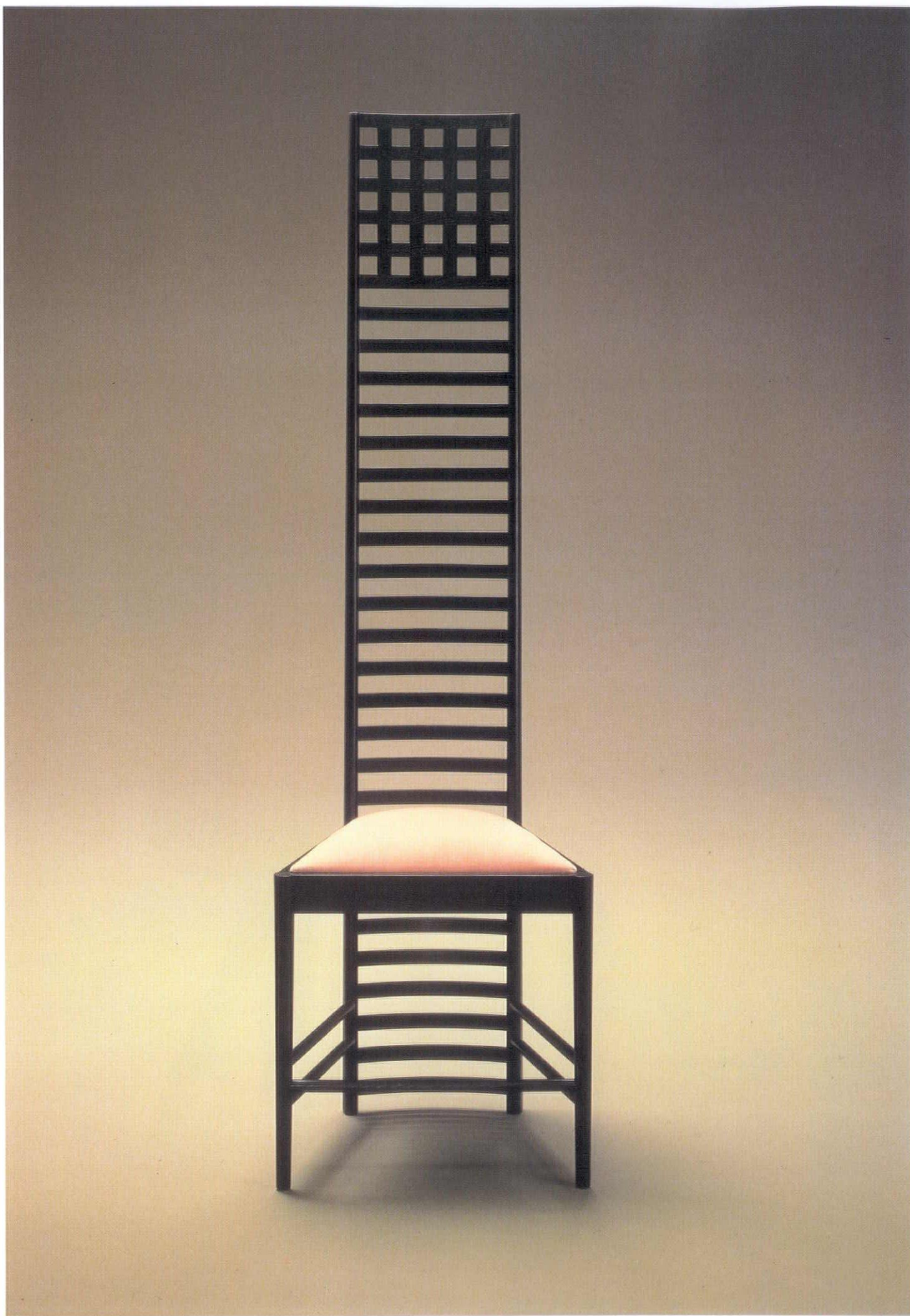
製造・取り扱い: Cassina / カッシーナジャパン

出版業者ウォルター・W.ブラッキーの「ヒル・ハウス」のベッドルームのためにデザインされたラダーバック・チェア。繊細で彫刻的な形態は特定の目的と場所のために意図されたためか。存在感は空間の中で刺激的でさえある。 (大廣)



ヒルハウス、1902-03





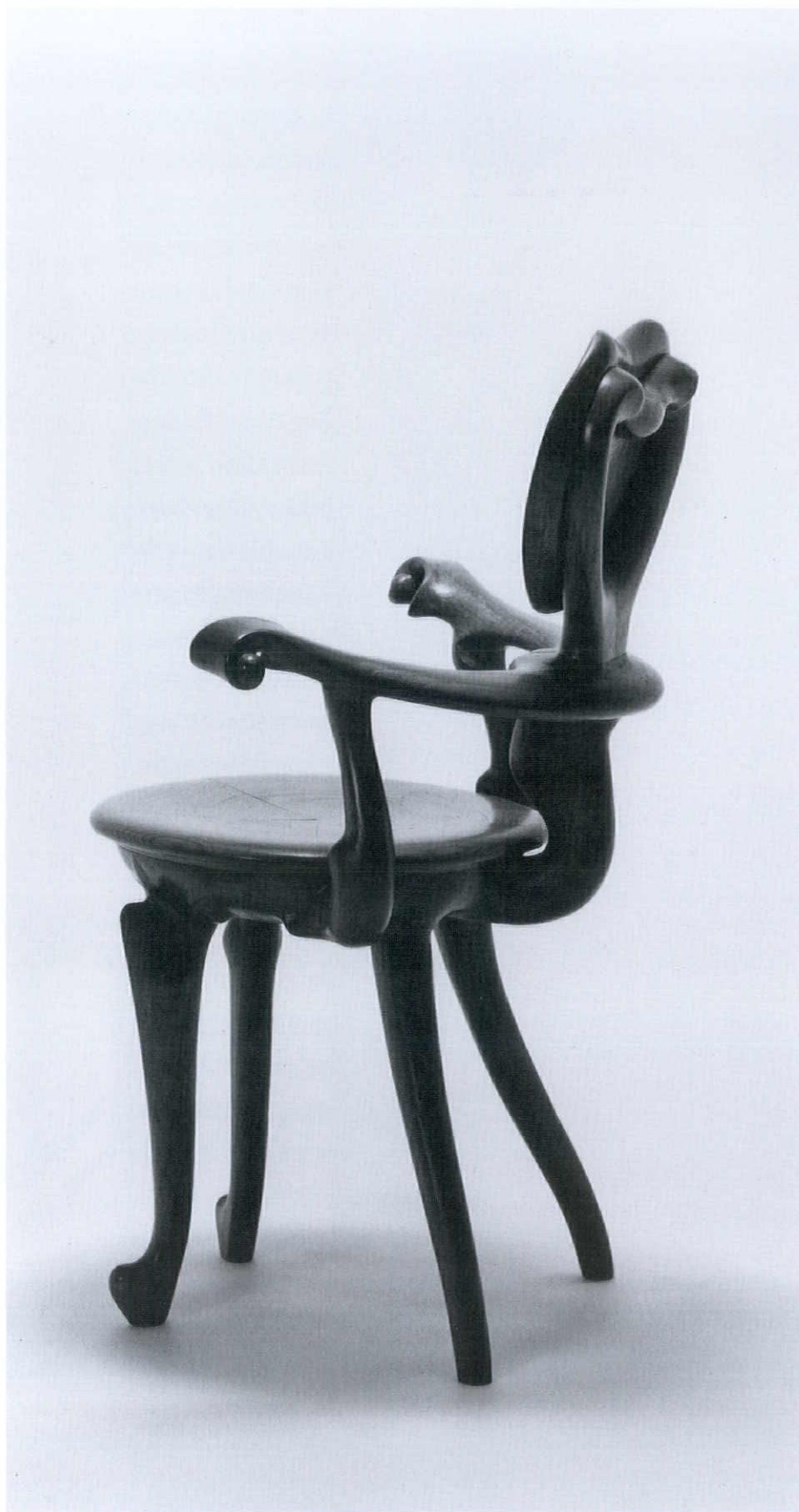
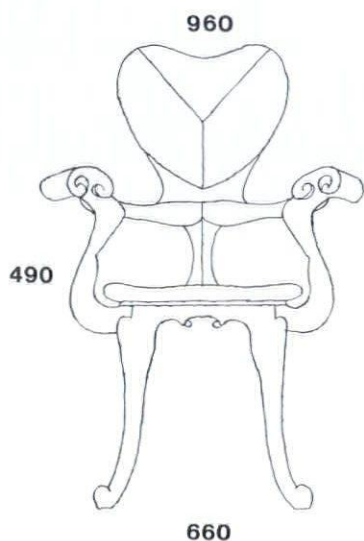
004

カサ・カルヴェの椅子 1898-1899 Calvet Arm Chair

アントニオ・ガウディ 1852-1926
Antonio Gaudi

サイズ：W65×D52×H96×SH49
仕様：櫟材
置かれた場所：カサ・カルヴェ（カルヴェット邸）
製造・取り扱い：アート・フロント・ギャラリー

無垢の木で出来ているから、減法重い。だから扱い難く、ほとんど実用的ではない。ガウディがカルベット邸のためにデザインしたものだから、カルベット邸にあってこそ似合うのは当然のことながら、さりとて、あの特異な曲線がのたうつインテリアだけでしか適合しない、とは決して言えず、むしろ何の飾りも施されず素っ気ない、そんな空間にあった方がピッタリといった趣をも持つその形は、やはり傑作の名に値するものだ。座の高さは、靴を履いて使用してもまだ「高い」という感じのものだが、アームに挟まれるようにして腰掛けてみると、しっくりした気分で落ち着いてしまえるから不思議だ。（光藤）



アンリ・ヴァン・デ・ヴェルデ 1863-1957

Henry van de Velde

サイズ：W51×D48×H96×SH44

仕様：インド紫檀

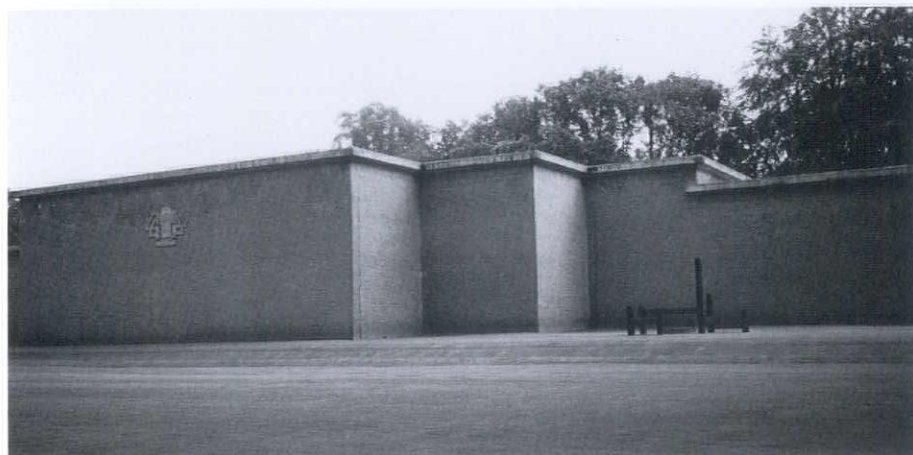
置かれた場所：自邸

私はかねがね、ヴァン・デ・ヴェルデの業績がもっと高く評価されても良いのではないかと考えている。狂信的といって良いほどの、モダニズム一辺倒の日本の建築、デザイン界では、ムテジウスとの論争などともからんで、軽んじられているが、なかなかのものだと思う。

方向を模索していた画家の時代から結婚を機に、自宅とそのインテリア、家具からドアの把手などのすべてをまとめ上げている。機能と構造・技術との結合による「有機的装飾」の具体的な事例としての力量は、水準を抜きん出ていると私は思う。

とりわけ、自宅のための食堂椅子をはじめとする一連の椅子の品性と、すみずみに注がれる造形の処理は素晴らしい。

それにしても、構造や製作手順について、当時は素人のものに近かったデザインを、このようにまとめ上げた職人達の腕前に、伝統の力を感じない訳にはゆかない。（島崎）



クローラー・ミュラー美術館、1937-54

006

ロッキングチェア 1905 Rocking Chair

ヨゼフ・ホフマン 1870-1956

Josef Hoffmann

サイズ：W73×D128×H117×SH46

仕様：曲木塗装、藤張（座面、背）

製造・取り扱い：Thonet/アイデック



作家は、ウィーン美術学校でオットー・ワグナーに師事、その後、自身の工房を設立し、建築から工芸の多方面で活躍、1920年にはウィーン市の建築監督となった。この3段式ロッキングチェアは、独特のデザインによるフォルムには時代の香りとオブジェとしての存在感が刺激的でさえある。

(大廣)

007

フレーダーマウス 1907 Fledermaus

ヨゼフ・ホフマン 1870-1956

Josef Hoffmann

サイズ：W53×D46×H72×SH44

仕様：曲木塗装、オリジナル布地張（座面）

置かれた場所：フレーダーマウス（ウィーンのカフェ）

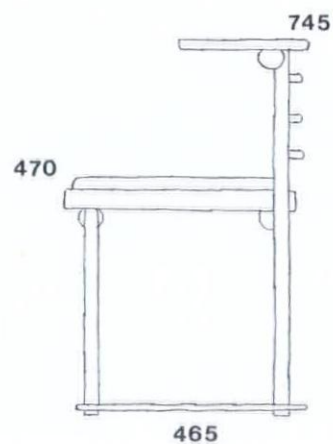
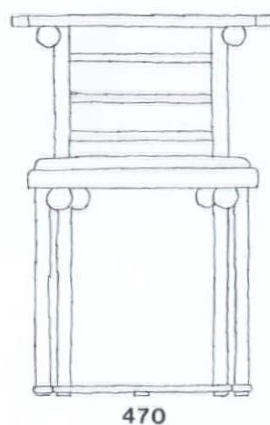
製造・取り扱い：Thonet/アイデック



「こうもり」の名称は椅子の注文主であるウィーンのカフェ「フレーダーマウス」にちなむもの。脚と座の補強に用いられているボールはホフマンのデザインを特徴付けるもので、「ホフマン・ボール」と呼ばれている。（大廣）



ストックレー邸、1905-11



008

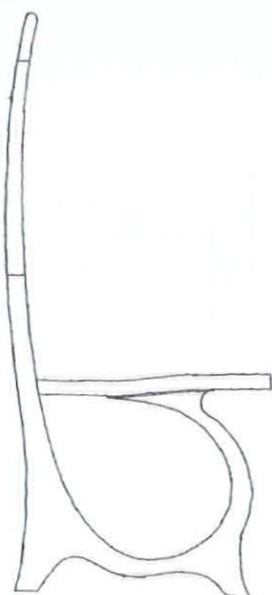
ハイバックチェア 1902 High-back Chair

カルロ・ブガッティ 1856-1940
Carlo Bugatti

サイズ：W44.7×D51×H114.5
仕様：Printed Wood、羊皮紙
置かれた場所：カルロ・ブガッティの自邸のダイニングルーム

「ブガッティ」の名を聞くと、先ず想像するのは芸術作品とも呼べるクラシックカーであろう。カルロ・ブガッティの息子、エットーレ・ブガッティとその息子、ジャンと共にカーデザインにその名を残した。また、カルロのもう一人の息子、レンブラント・ブガッティは彫刻家として数多くの作品を残している。この芸術家一家とも呼べる一族の長老、カルロ・ブガッティはイタリアのアントニオ・ガウディとも言える、一種独特な様式の超過密な建築空間と家具デザインを残している。このハイバックチェアはそれらの中では珍しくシンプルなデザインに仕上げたものである。オリジナルの椅子は彼自身のダイニングルームのために、ミラノの彼の工房で製作されたようだ。1880年頃から、羊皮紙を家具デザインの中に取り入れることを考え、椅子のみならず、収納家具やテーブルにも羊皮紙を張り、さらにそれに文様を細かく描き、独特な世界を生み出した。写真の作品はオリジナルに忠実に復元されたモデルである。 (織田)

1150



480



ファーボーチェア 1914

Faborg Chair

コーア・イェンセン・クリント 1888-1954
Kaare Jensen Klint

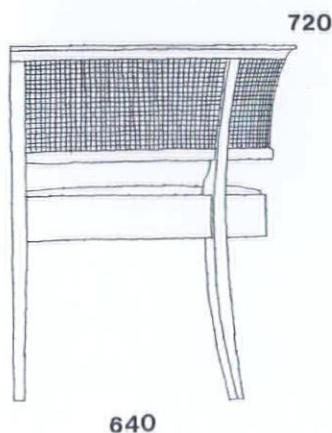
サイズ：W69×D64×H72
仕様：マホガニー、ラタン（背・座）
置かれた場所：ファーボー美術館（デンマーク）

コーア・J・クリントの建築作品と言えば、彼の父親P.V.イェンセン・クリントと共同設計したセント・グルントヴィー教会であろう。砂色レンガを積んで構築された美しい教会であるが、もうひとつの代表作〈ファーボー美術館〉も見逃せない。この美術館はデンマークのフン島南部にあるファーボー市に、マッズ・ラスムッセンにより収集されたフン島の芸術作品を中心に、コレクションされ開設されたものである。この美術館の設計はカール・ピーターセンとコーア・クリントの共同設計であるが、ここに紹介する作品はクリントのデザインによるものである。この〈ファーボーチェア〉のデザインは7タイプがデザインされ、現在商品化されているものは座が革張りとなった1タイプのみである。17～18世紀の様式家具をリ・デザインすることにより生まれた作品で、気品に満ちたデンマーク家具の代表作品であり、象徴的な作品でもある。

（織田）



グルントヴィー教会 1913-26



010

郵便貯金局の椅子 1902 Arm Chair 247

オットー・ワグナー 1841-1918

Otto Wagner

サイズ：W57×D56×H72×SH43

仕様：曲木ステイン仕上、アルミ製当金、布張（座面）

置かれた場所：ウィーン郵便貯金局

製造・取り扱い：アイデック

自身の設計したウィーン郵便局の会議室のためにデザインされたもので、前脚と背を1本の曲木で成型した初めての椅子。背板の意匠や真鍮の金飾りに当時のアール・デコの影響がみられる。作家は近代合理主義建築のパイオニアとして、「ウィーン・ゼセッション」運動の原動力となった。 (大廣)



ウィーン郵便貯金局会議室、1904



011

ホワイトチェア 1910

White Chair

エリエル・サーリネン 1873-1950
Eliel Saarinen

サーリネンはフィンランドの建築家だ。代表作にはヘルシンキ中央駅、あるいは息子のエーロ・サーリネンと共同設計の、アメリカはミネソタ州ミネアポリスに建つルーテル派キリスト教会などがある。ホワイト・チェアは他に対となるソファやテーブルも用意されているが、座に使用されている淡いピンク色の張り布を除けば、木で出来たフレームその他、総てがホワイトでペンティングされていて、それでその名があるきわめて優雅な表情を持つ。ちょっと見にはわからないが、ディテールは繊細かつ装飾的だ。ちなみにいささか形を違えての〈ブルー・チェア〉も、同じ要領でデザインされている。

(光藤)



ヘルシンキ中央駅、1904-14

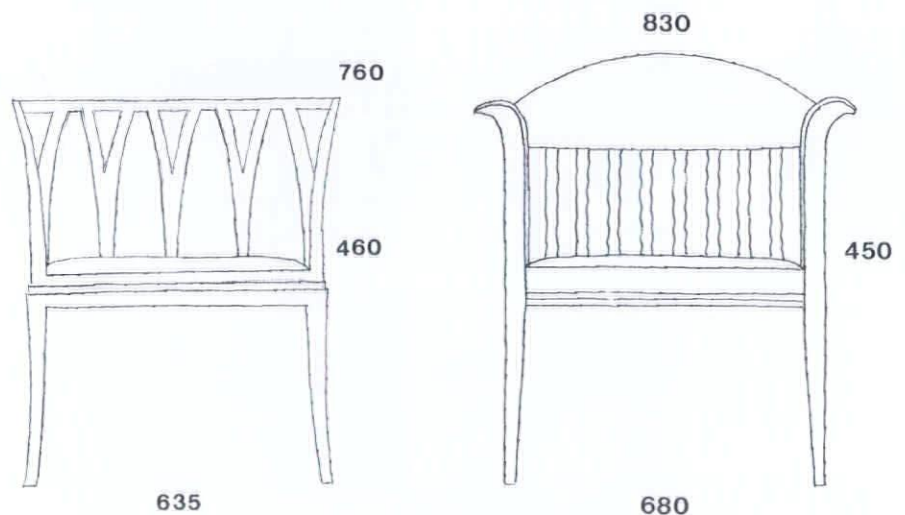
サイズ：W67×D50.5×H83×SH43.5

仕様：木塗装、布張

置かれた場所：ヴィトレスクの自邸兼アトリエのサンルーム



ブルーチェア



012

アームチェア D-51 1910 Arm Chair D-51

ワルター・グロピウス 1883-1969

Walter Gropius

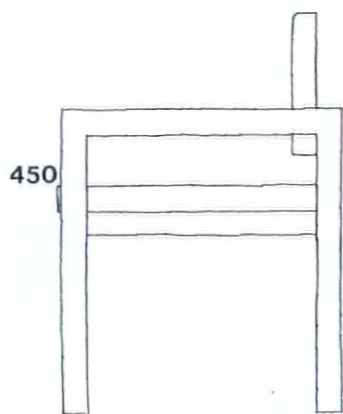
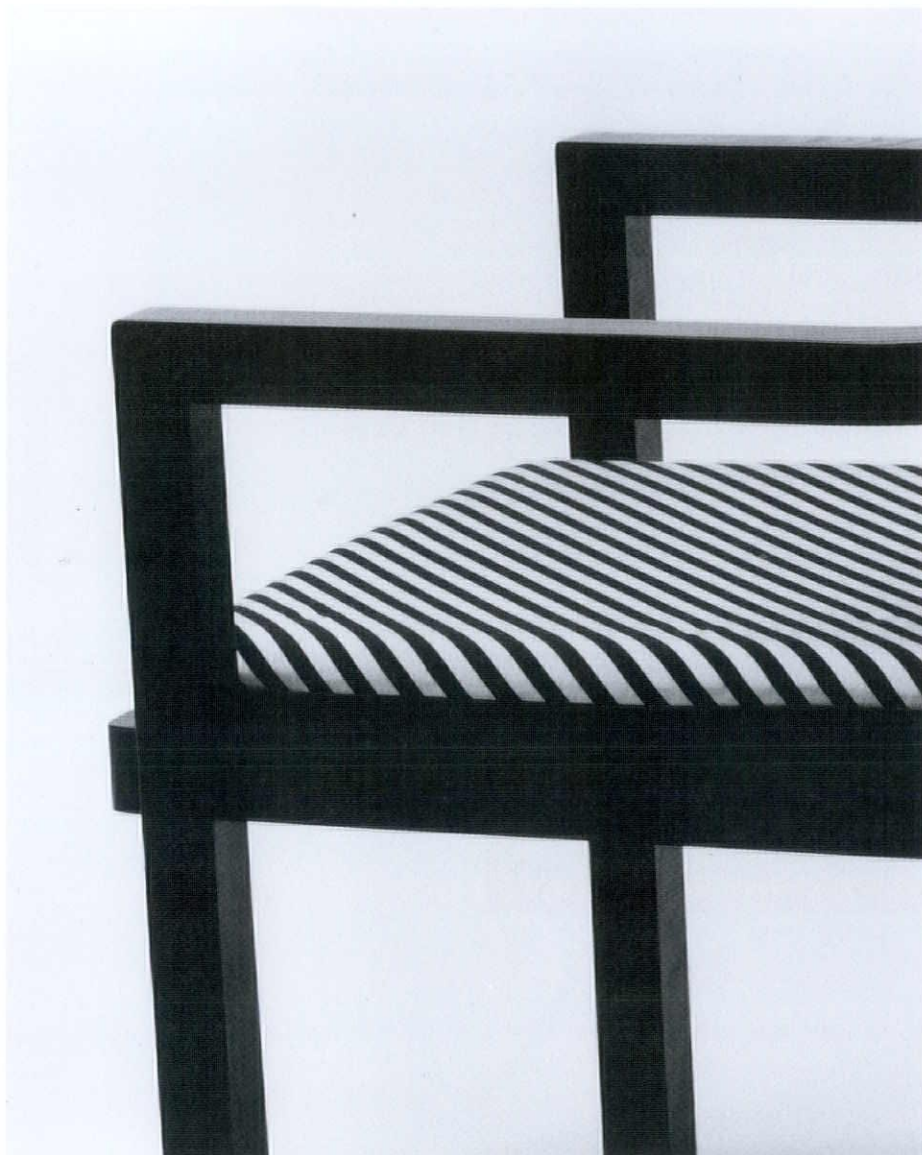
ファーガス (Fagus) 社のためにデザインしたもの。バウハウス創業以前、当時のデ・ステイルの影響を受けながらも、機能に忠実であるとする姿勢が感じられるグロピウス20歳代の秀作である。
(大廣)

サイズ：W61×D56×H79×SH46

仕様：アッシュ材、ラッカー仕上

置かれた場所：ファーガス社ビル

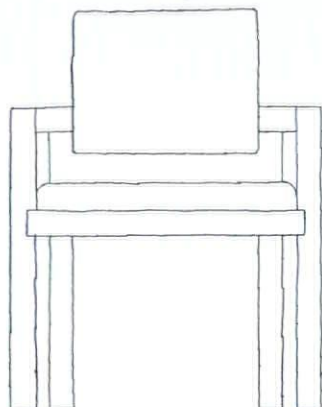
製造・取り扱い：Tecta/アクタス



450

610

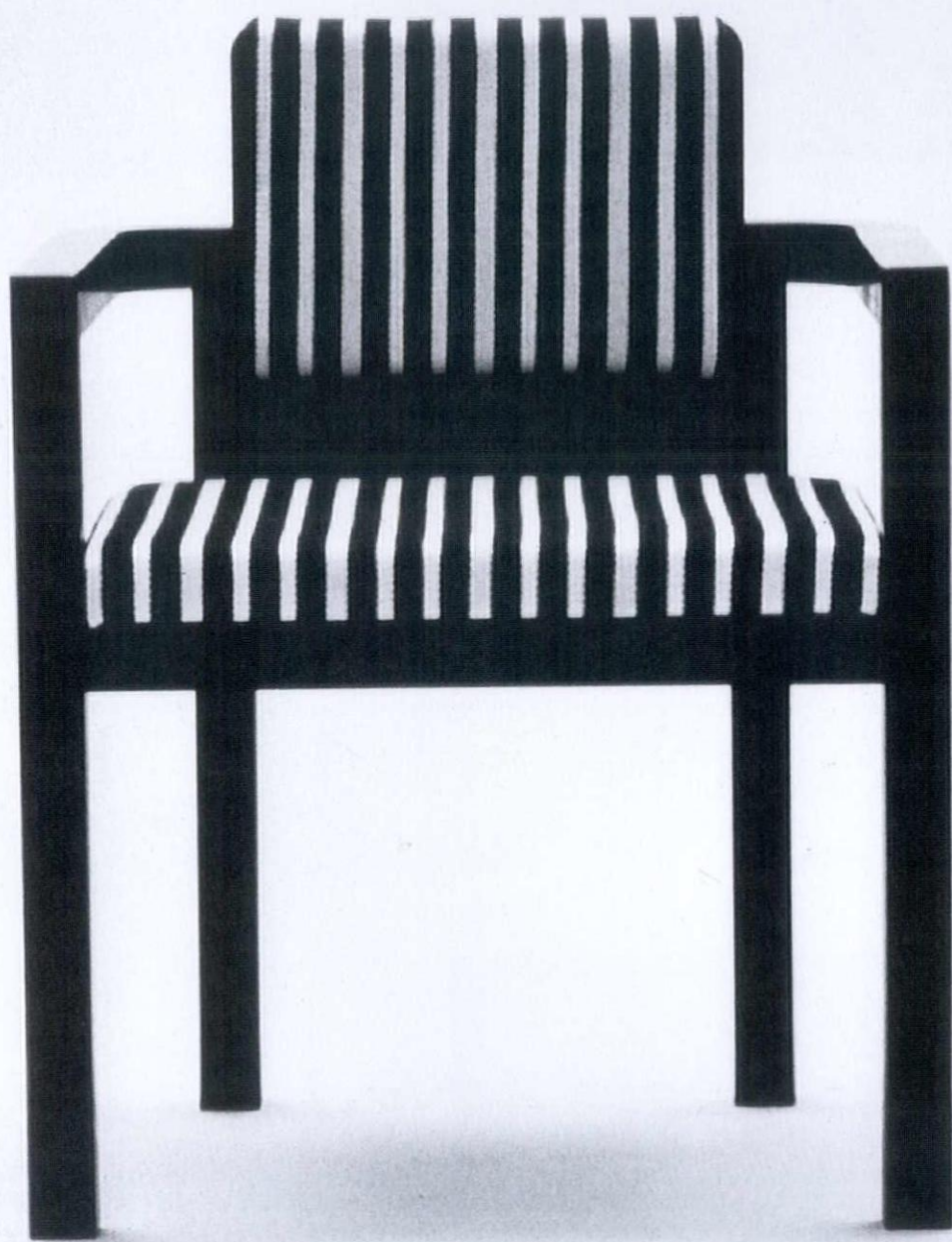
790



560



Dessau Bauhaus 校舎、1925-26



013

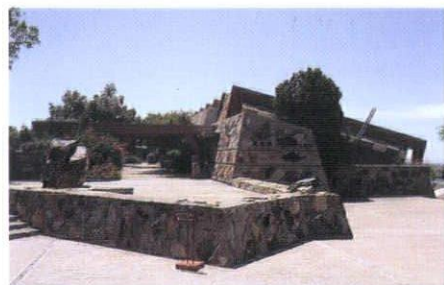
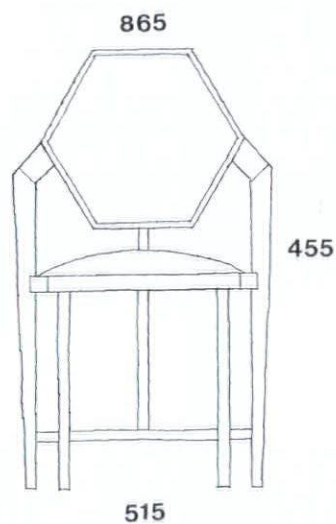
ミッドウェイ 1 1914

Midway 1

フランク・ロイド・ライト 1867-1959

Frank Lloyd Wright

1913年、エドワード・ウォーラー・ジュニアの依頼により、シカゴ大学のそばに、食事、ダンスや音楽、バレエなどを楽しむために建てられたのがミッドウェー・ガーデンであった。1914年の夏開園され、シカゴの話題をさらい、大成功をおさめたが、第一次世界大戦が勃発し、翌年には醸造会社に身売りされ、けばけばしいペンキを塗られピアガーデンになってしまい、1929年にはついに取り壊されてしまった。写真の作品はスケッチの中に見ることができるが実現されずに終わったモデルで、カッシーナ社で実現されたモデルである。ライトはこの椅子の背に見られる六角形をさかんにモチーフとして使い、このすぐ後で、東京の旧帝国ホテルで六角形の背の椅子を新たにデザインしている。この写真のモデルはミッドウェー・ガーデンでは実現しなかったが、旧帝国ホテルのゲストルームで、この作品とよく似た椅子として実現している。それは背から伸びる角材が2本になっており、また貫は前脚から直接後脚へ継っていた。(織田)

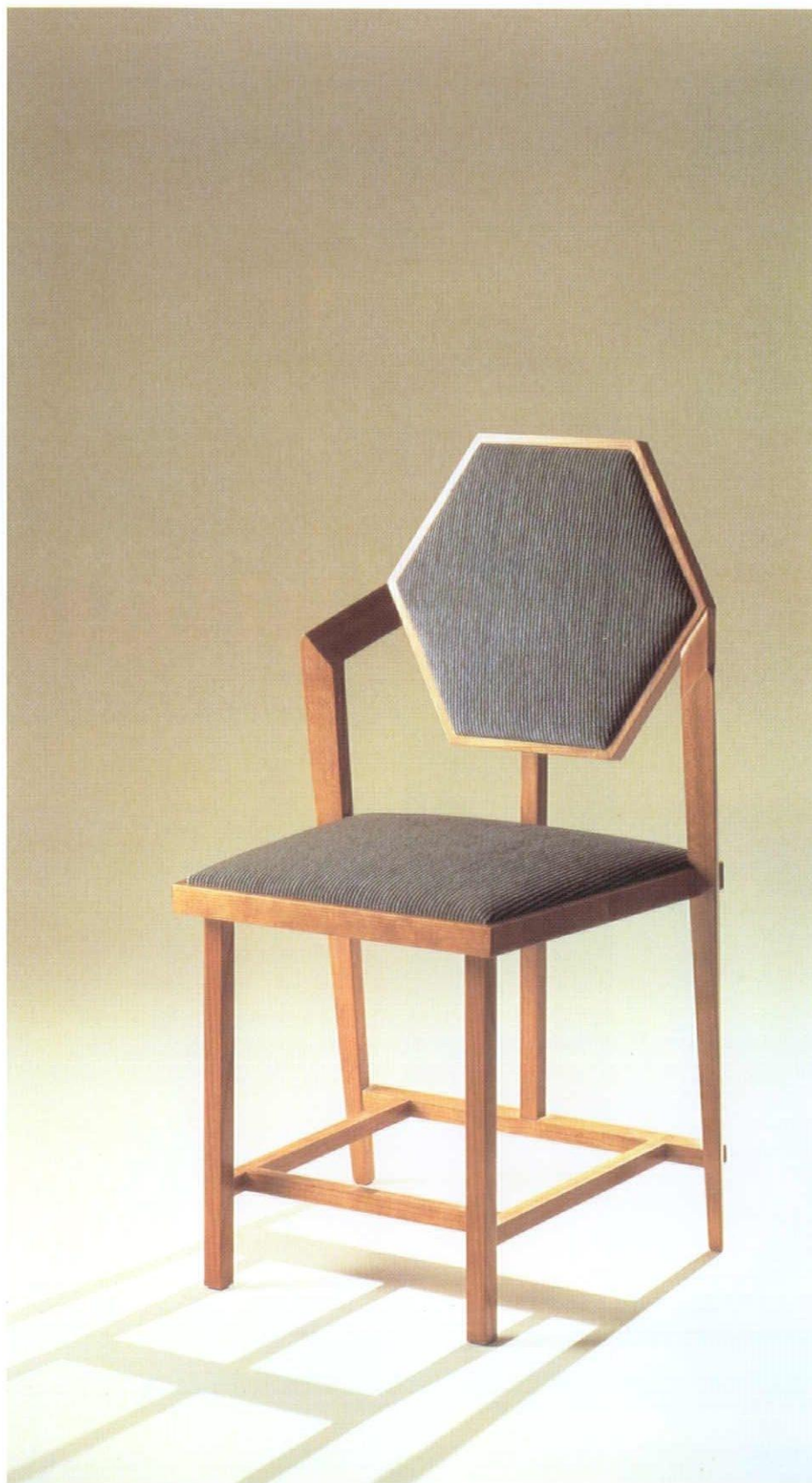


タリ阿森・ウエスト、1927

サイズ：W51.5×D48×H86.5×SH45.5

仕様：サクラ材、布張（座面）

製造・取り扱い：Cassina/カッシーナジャパン



帝国ホテルの椅子 1922

Chair for the Imperial Hotel

フランク・ロイド・ライト 1867-1959
Frank Lloyd Wright

サイズ：W39×D42×H96
仕様：ナラ材、皮革
置かれた場所：帝国ホテル

ライトが日本に残した建築物はいくつかあるが、中でも最高傑作といえるのが旧帝国ホテルであった。〈ミッドウェイ・I〉で見られたような、六角形のモチーフが強調されたこの椅子は、旧帝国ホテルの宴会場や、その他の場所でも多数使われた。この椅子にはふたつのタイプがあり、写真の革張りのタイプのほかに脚部側面に籐を張ったものがあった。また、主な構造材としてはナラ材が使われているが、座枠にはモミジバフウを補助材としてニレを使用している。この椅子は見た目にも、構造的な弱みがある。すなわち、背を支える構造材が後から前方向に固定されているだけで、これでは体格の大きな人の後方への体重を支えるのに無理が生じる。せめて座枠の中に構造材が入っていれば強度が上がると思われるが……。また、背を支える支柱とも言えるこの構造材の横幅が狭く、逆に上の部分の横幅が広いので左右に「ねじれ」を生じ易いのではないだろうか……。ともかくこの椅子にはやや強度に問題があったらしく、修理や取り換えが、かなりの数にのぼっていたとのことである。(織田)



帝国ホテル（明治村移築後のもの）

015

バレル 1937

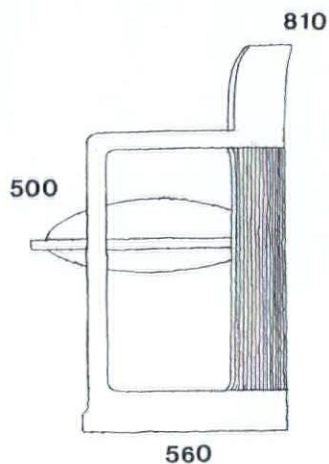
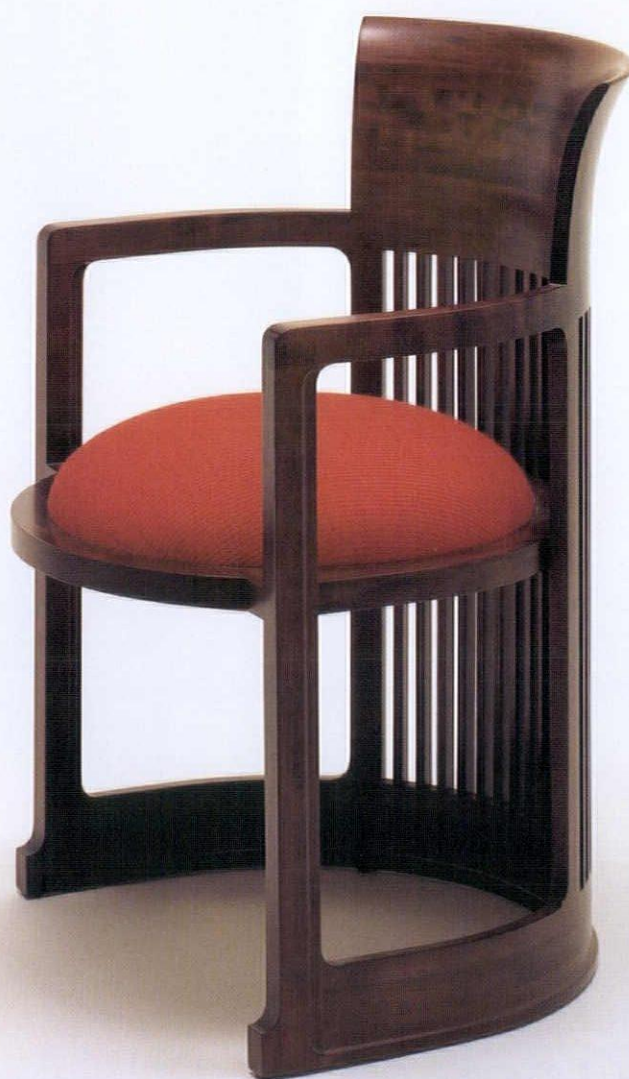
Barrel

フランク・ロイド・ライト 1867-1959

Frank Lloyd Wright

アメリカが生んだ今世紀最も偉大な建築家フランク・ロイド・ライト。彼のデザインした家具は、その多くの建築作品ごとにデザインされており、膨大な数にのぼる。そうした中から、イタリアのカッシーナ社により1989年以来、いくつかのモデルが復刻され商品化されている。また昨年からはヤマギワからも数種類のライト作品が復刻、商品化され始めた。それまで写真でしか見ることはできなかった彼の作品が手に入れられることはありがたいものである。写真の〈バレルチェア〉、その名に樽を連想するデザインである。ダーウィン・D・マーチン邸のためにデザインされたのが最初のモデルで、写真のモデルと比較するとディテールにおいていくつか違いが見られ、もっと重厚なデザインであった。このカッシーナ社のモデルは、ハーバート・F・ジョンソン邸のためにデザインされたモデルである。これとよく似たモデルをサミュエル・フリーマン邸やエドガー・カウフマン邸でもそれぞれデザインしている。(織田)

サイズ：W54.5×D56×H81×SH50×AH63
仕様：サクラ材、布張（座面）
置かれた場所：ダーウィン・D・マーチン邸
製造・取り扱い：Cassina/カッシーナジャパン





016

赤と青の椅子 1918 Red and Blue Chair

ヘーリット・トーマス・リートフェルト 1888-1964
Gerrit Thomas Rietveld

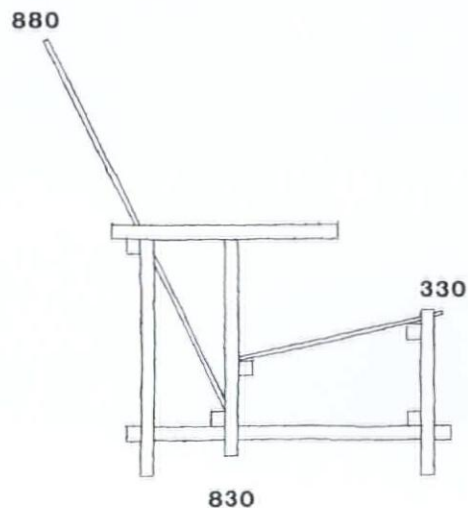
サイズ：W65.5×D83×H87×SH33×AH50.5
仕様：ブナ材、黒アニリン染色およびウレタン塗装仕上げ
製造・取り扱い：Cassina/カッシーナジャパン

赤と青の椅子は今や建築からデザインを志す人には、最も基本的な造形の椅子になりつつあると言って良いであろう。それに対する日本人の記憶は、実例や、複製の格好の作品が殆どである。この見た眼には、ゴツゴツと角張った、派手な形態と色彩が、実際に腰を掛けてみると、尻・背・肘の高さ・広さ・幅とそれぞれの角度等の関係が、意外に心地良い。これに腰を降ろして、静かにクラシック音楽などを聴いていると実に様になっていると言いたい。

(羽原)



シュレーダー邸、1924





017

ジグザグチェア 1934

Zig Zag

ヘーリット・トーマス・リートフェルト 1888-1964

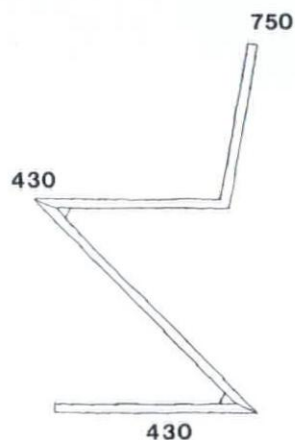
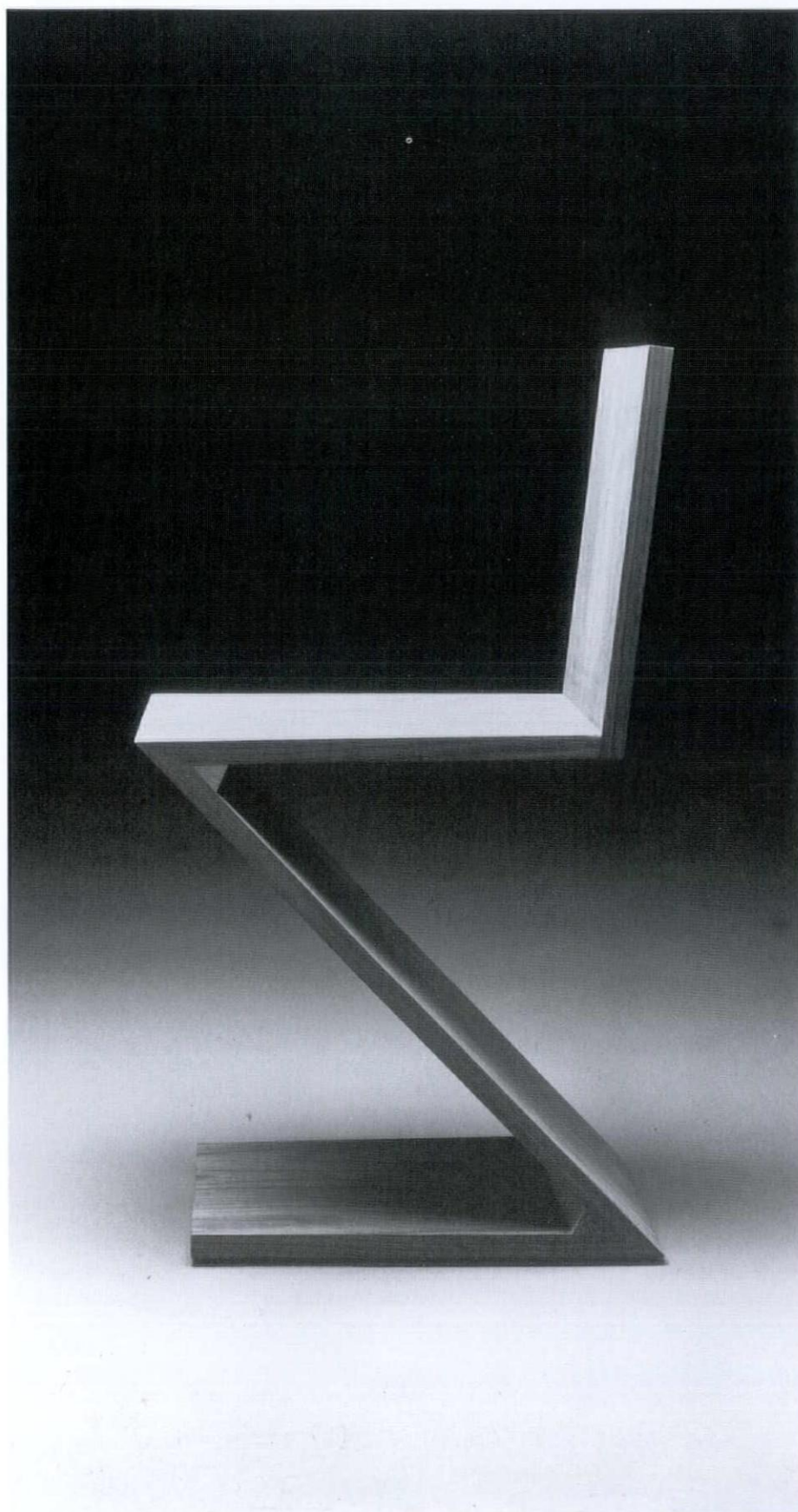
Gerrit Thomas Rietveld

サイズ：W37×D45×H74

仕様：サクラ材

製造・取り扱い：Cassina/カッシーナジャパン

この椅子も、椅子の基本を最も良く現わした椅子である。また眼で見る限り、これほど不安感に満ちている椅子も少ない。これが金属ではなく、木材という、弾力性の少ない材質で完成されているから余計に、危い感じを与えている。とにかく造ってしまえ！というリートフェルトの理念の叫び声が聞えて来るようである。デ・スティール脈の形而下のマニフェストであると筆者は考える。 (羽原)



アームチェア D-61 1920年代

Arm Chair D-61

エル・リシツキー 1890-1941

El Lissitzky

後にデ・スティールの立役者となるテオ・ファン・ドゥースブルフと共に「構成主義」の創始者とされているリシツキーは、「第三インターナショナル記念塔」でよく知られる、同じロシアの建築家ウラジミール・タトリンと世代を一にする逸材だ。そう言えば、彼の作品とタトリンのそれとに、いくつかの共通項が見い出されるような気がする。

写真の椅子は背の部分がブレキシ・ガラス仕上げだが、彼の活躍していた時代に、すでにしてこのような材料が開発されていたかどうか。おそらくは、リシツキー死後のバージョンに違いない。オリジナルは木製、そして座にはナチュラルレザーが使用されている。

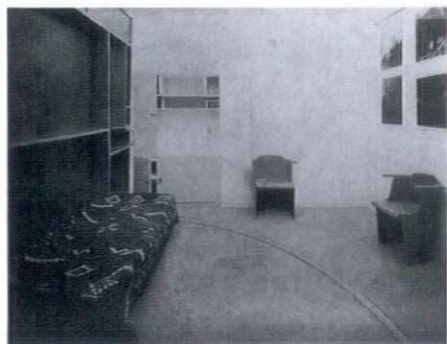
(光藤)

サイズ：W56×D48×H72

仕様：ブレキシ・ガラス、皮革張（座面）

置かれた場所：オリジナル木製椅子はドレスデン国際博覧会ソビエトパビリオン（1930）

製造・取り扱い：Tecta



ドレスデン国際博覧会ソビエトパビリオン内観、1930

019

セナ 1925

Sena

エリック・グンナール・アスプルンド 1885-1940

Erik Gunnar Asplund

サイズ：W92×D115×H112×SH34

仕様：ウォールナット、皮革

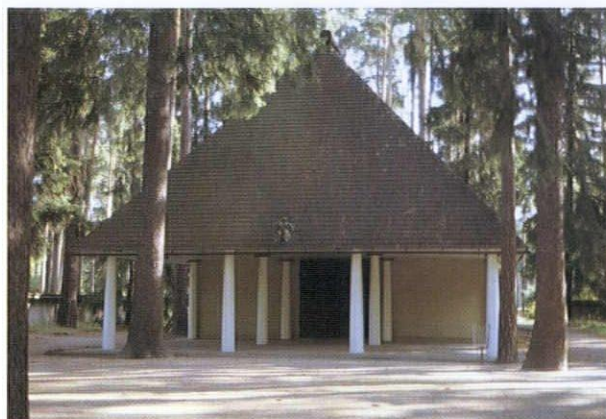
置かれた場所：1925年バリ博スウェーデン館

製造・取り扱い：Cassina/カッシーナジャパン



アスプルンドとえば、ストックホルムの森の火葬場における、あの清冽なデザインが思い出される。そしてこの〈セナ〉にも、簡潔でしかも肌身に優しいカーブを背と座に持つ美しい姿態には、念入りの計測が窺える。大振りなものでありながら、愛くるしく感じられるのは、そうしたところから来るものだろう。アームの部分にしつらえている握り玉がまた可愛い。

(光藤)



森の礼拝堂、1918-20

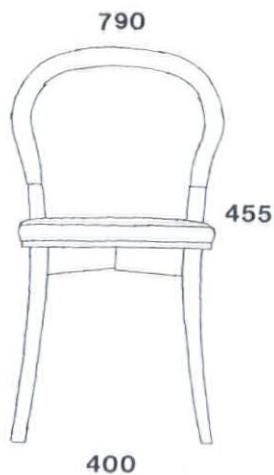
020

ヨーテボリ 1 1934-1937 Goteborg 1

エリック・グンナール・アスプルンド 1885-1940
Erik Gunnar Asplund

サイズ：W40×D52×H80×SH45
仕様：ウォールナット、皮革
置かれた場所：ゴテボルク庁舎、裁判所
製造・取り扱い：Cassina／カッシーナジャパン

無駄なものを一切省き、椅子を椅子らしく構えさせた、と言っていいような即物性がここにある。いわば椅子としての突極のかたちを主張している、そんな代物だ。人の背のほんの一部を支えてくれるだけの、あっさりした輪っば状のフレームに巻かれた革への当たりは優しく、意外に機能的だ。軽いというのもいい。食卓向きと言えるが、持ち運びも簡単なら、およそ何にでも適用されるであろう愛すべき小椅子だ。
(光藤)



ヨーテボリ裁判所増築、1913-37

021

ワシリーチェア 1925

Wassily Chair

マルセル・ラヨス・ブロイヤー 1902-1981

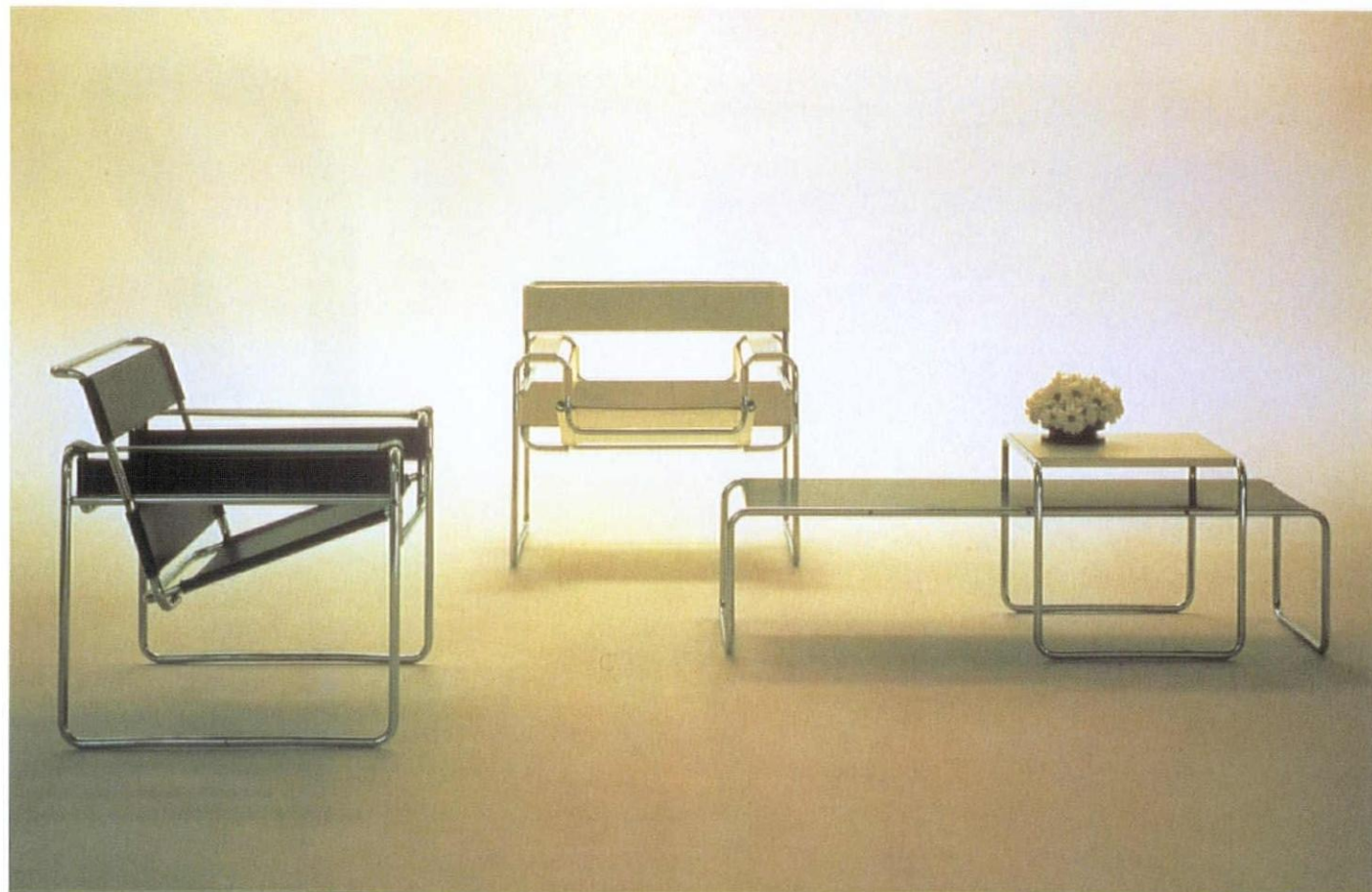
Marcel Lajos Breuer

サイズ：W79×D70.5×H69.5×SH44

仕様：スチールパイプ、皮革、ポリッシュド・クローム

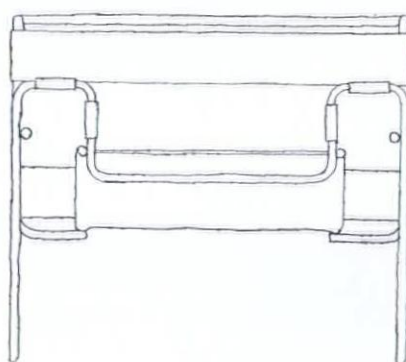
置かれた場所：ワシリー・カンディンスキー邸

製造・取り扱い：Knoll International/ノール インターナショナル
ジャパン

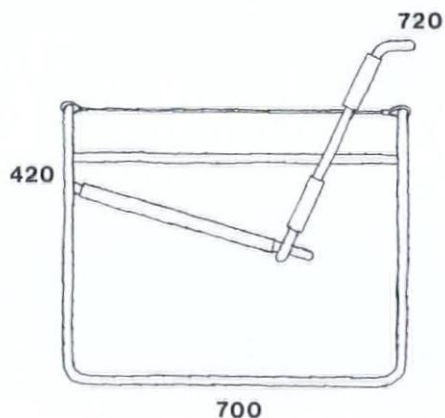


スチールパイプを使用した世界初の椅子で、バウハウスを代表する作品。バウハウスの教授ワシリー・カンディンスキーのためにデザインしたもので、自転車のハンドルからヒントを得たという。スチールパイプによる曲線に対しブロイヤーは「テクノロジーの象徴のみならず、テクノロジーそのものもだ」といっている。

(大廣)



790



Mブロイヤー邸1、1947

SD9606
38



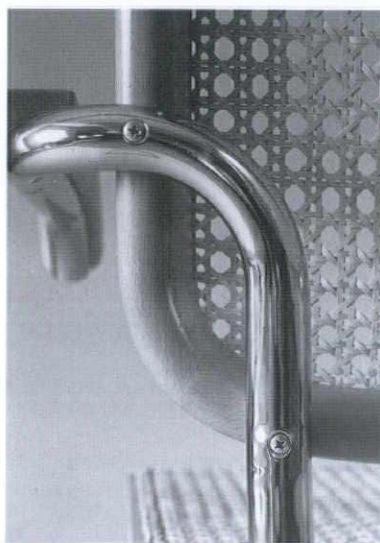
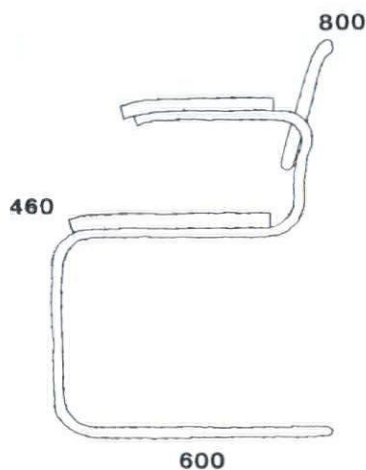
022

チェスカチェア 1928 Cesca Chair

マルセル・ラヨス・ブロイヤー 1902-1981
Marcel Lajos Breuer

サイズ：W47×D60×H78×SH43
仕様：スチールパイプ、ポリッシュド・クローム仕上、籐張り
(座面)
製造・取り扱い：Knoll International / ノール インターナショナル
ジャパン

キャンティレバー（片持ち）構造のバイオニア的椅子。1927年発表されたマルト・スタムスのS 32とは寸法と指のパイプの形状シート
の位置が少し異なっている。シンプルなデザインと座り心地で、今日、世界中で愛用者が
多い。 (大廣)



023

鋼管S33チェア 1926 Cantilever S-33

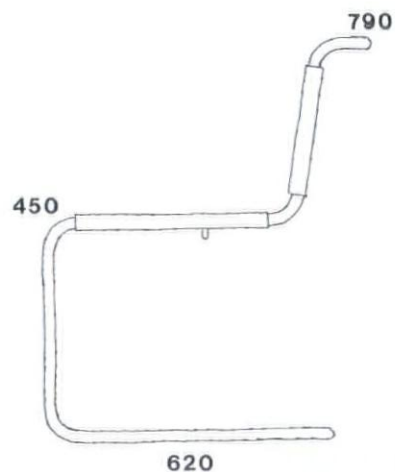
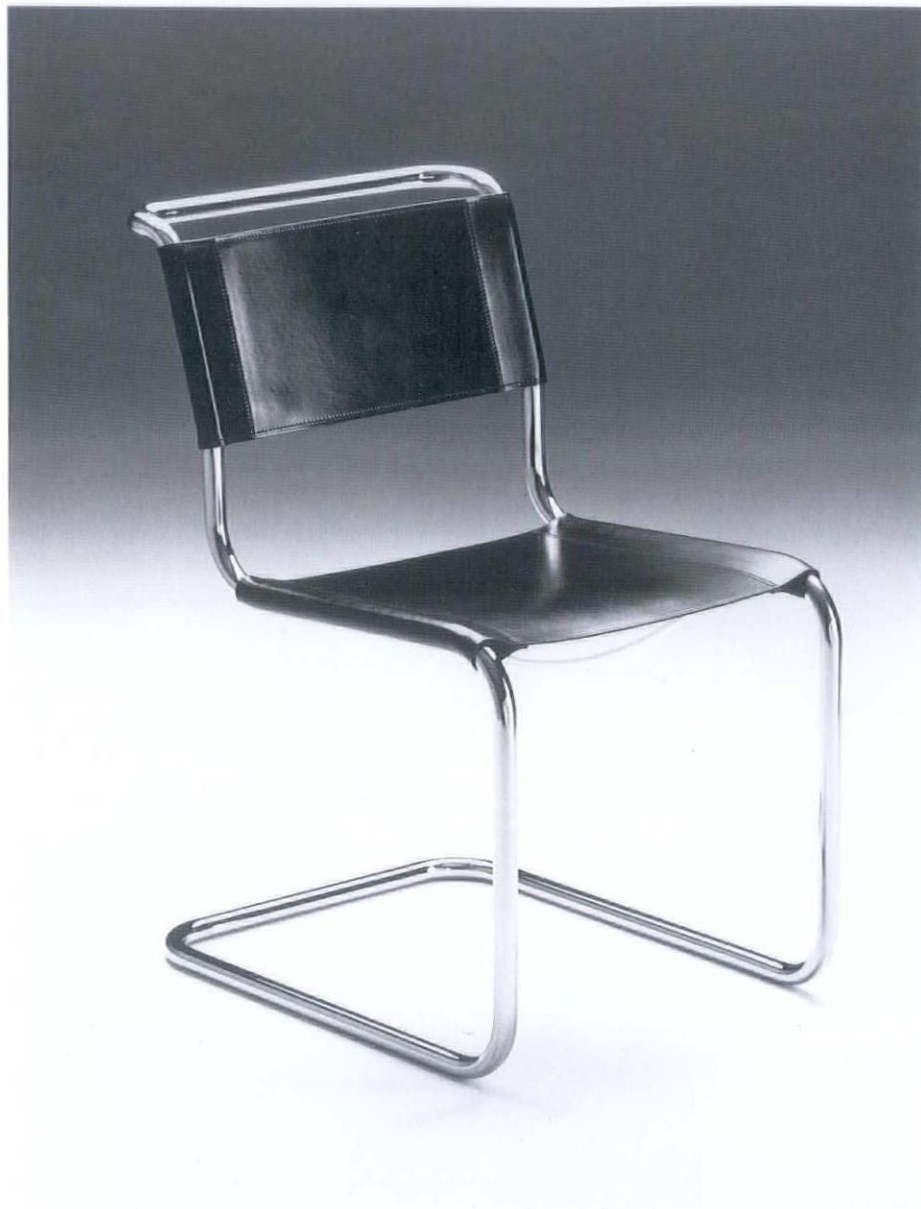
マルト・スタム 1899-1986

Mart Stam

サイズ：W50×D57×H85×SH46
仕様：スチール、パイプクロームメッキ、皮革
製造・取り扱い：Thonet/アイデック

オリジナルは1926年シュトゥットガルトのドイツ工作連盟のワイゼンホーフ・ジードルング展で発表されたもので、キャンティレバー（片持ち）式のスチール製による最初の椅子としての作品である。シンプルでシャープなデザインは今日でもベーシックなモダンスタイルとして若々しいイメージを感じさせる。

(大廣)



ワイゼンホーフ・ジードルング、1927

024

T スツール 1927

T Stool

ピエール・シャロウ 1883-1950

Pierre Chareau

ツール・グランドホテルのために1927年にデザインされたスツール。

木と鉄による素材の組合わせで構成されており、木部はオーク集成材とローズウッド集成材の2種類がある。

U.A.M (Union des Artistes Modernes) の創設者であるピエール・シャロウとメンバーのロベール・マレ・ステファンヤルネ・エルブストらの作品の中に、歴史的なものと新しいものの融合、そして斬新なデザインの展開に彼らとの共通点と時代の具体的な痕跡を見出すことができる。シャロウの作品は、エカール社 (フランス) に受けつがれて今も製作されている。

(河合)

サイズ：W49×D42×H48

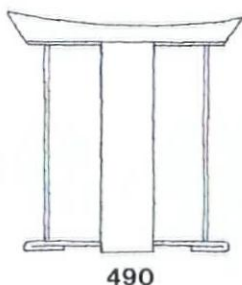
仕様：スチールプレート、オーク・マホガニー集成材 (座面)

置かれた場所：ツール・グランドホテル

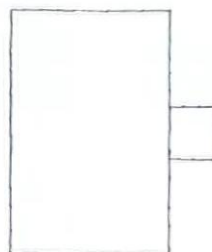
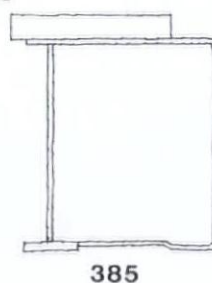
製造・取り扱い：Ecart/H.A.Duex



トゥアー・グランドホテル、1927

SD9606
42

48



025

トランザ 1927

Transat 1927

アイリーン・グレイ 1878-1976

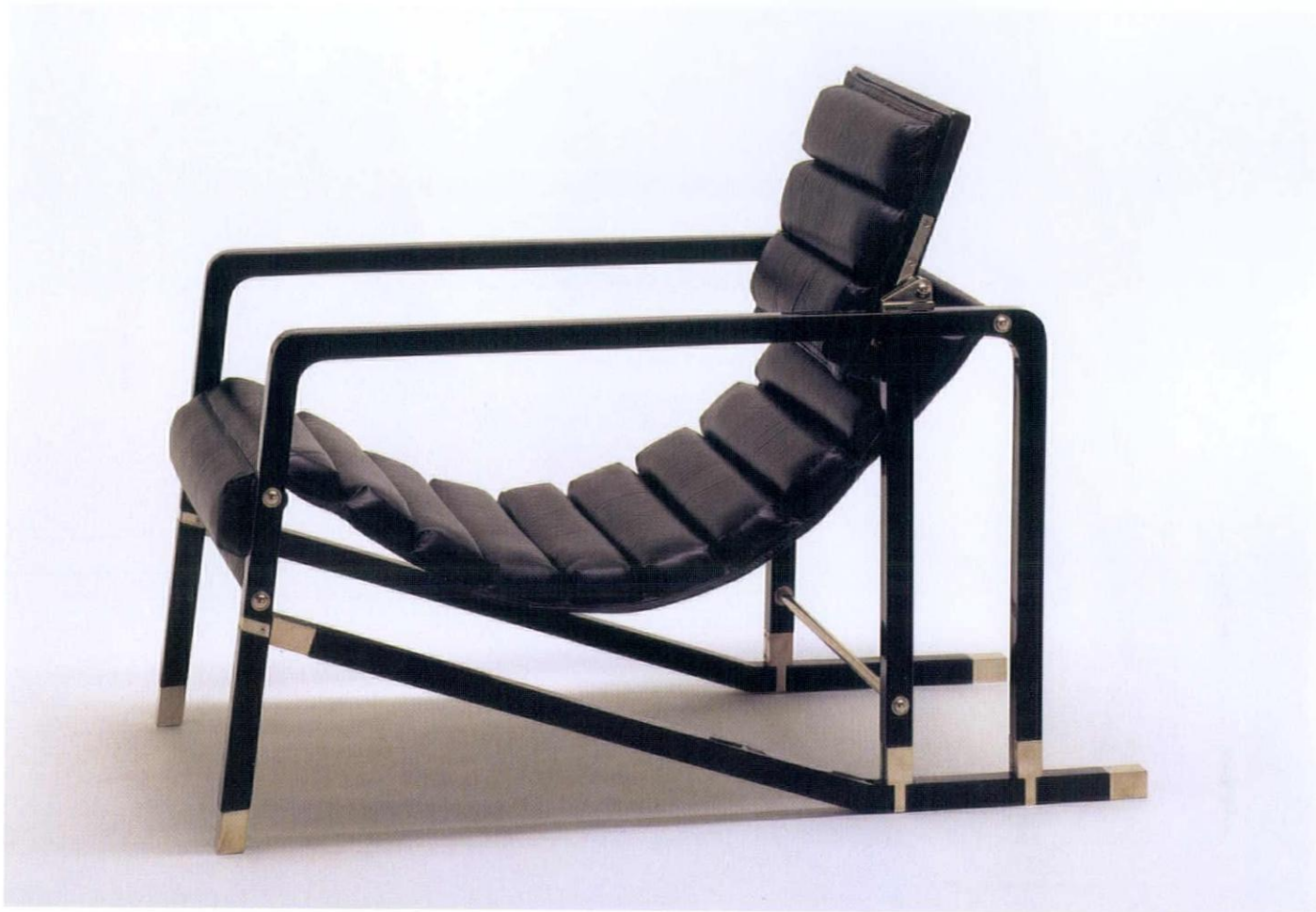
Eileen Gray

サイズ：W55×D106×H79

仕様：ビーチウッド黒ラッカー仕上げ、レザー

置かれた場所：House E-1027

製造・取り扱い：Ecart/H.A.Duex



House E-1027のための1927年にデザインされたシェーズロング。

日本人工芸家、菅原氏の下で漆工芸の技術を習得したアイリーン・グレイは、椅子のみならず、スクリーン等多くのものにその手法を展開する。ラッカー塗木材、ニッケルメッキの金属のジョイント、革等の素材の新しい扱い方を考案し、可動する背もたれを設けてシェーズロングの機能性を求めた。他にもアルミ、ガラス、セルロイド、鉄などの新しい

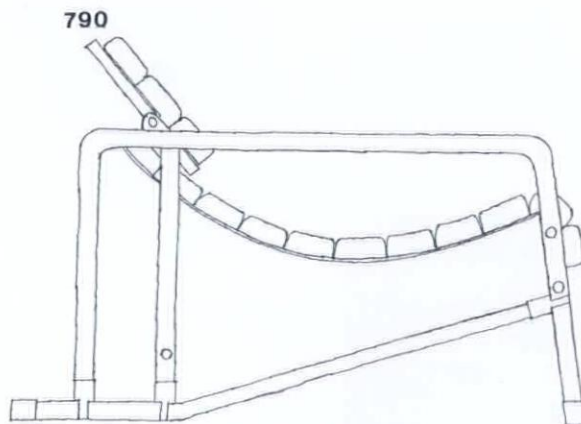
素材を用いた実験を多く試みている。

彼女は後に回想している。

「私が求めたものは、私たちの時代にふさわしいもの、可能ではあったが、まだ誰もやっていなかったものを創造することだった。あの頃、私たちが生きていた世界は、今では考えられないほど時代遅れだった」。 (河合)



住宅E-1027、1929



1090

026

カンティレバーチェア 1927

Cantilever Chair

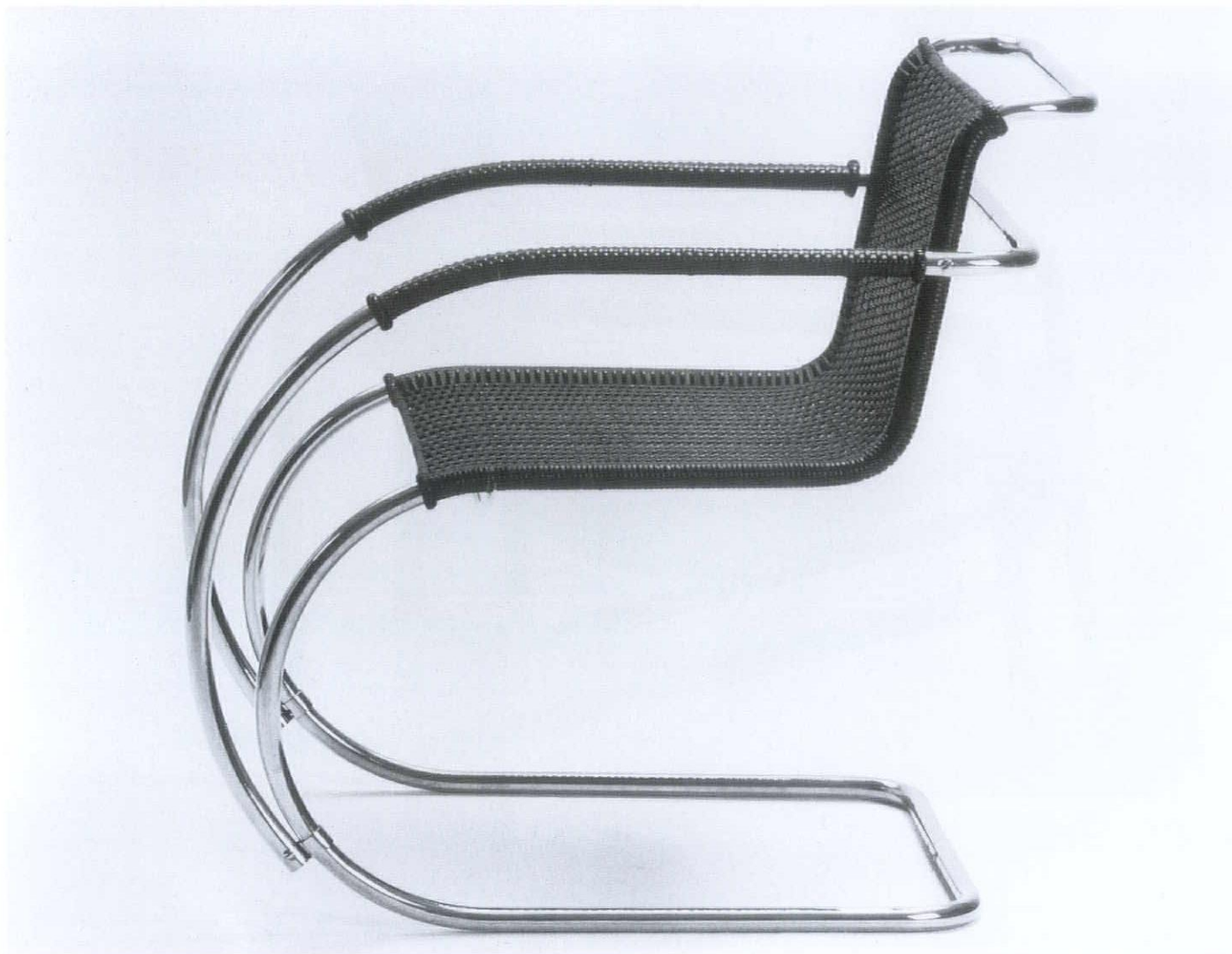
ミース・ファン・デル・ローエ 1886-1969

Ludwig Mies van der Rohe

サイズ：W56×D84×H82×SH44

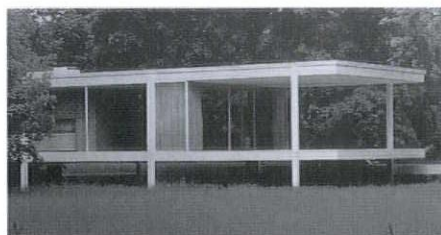
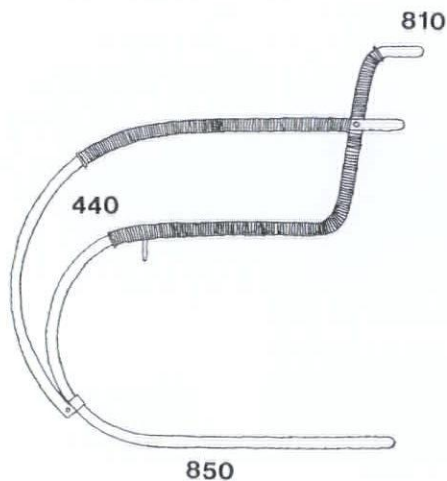
仕様：スチールパイプポリッシュドクロム仕上げ、革張

製造・取り扱い：Thonet/アイデック



Mr. Chairとよばれるキャンティレバーの古典。細部に至る完璧さと優美なフォルムの中に品位の高さと機能主義を超えた芸術性を感じる。ローエのキャンティレバーチェアには他に、チューブラ (Tubular)・チェア (1927年)や、ブルーノ (Brno)・チェア (1930年)などがある。

(大廣)



ファンスワース邸、1950

SD9606

027

バルセロナチェア 1929

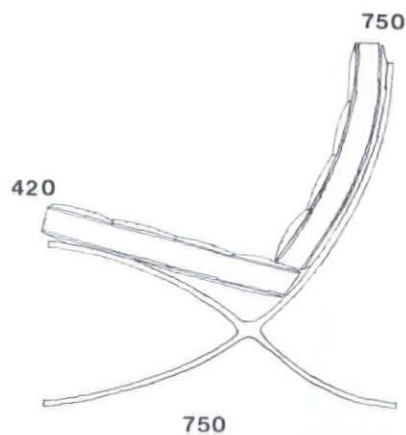
Barcelona Chair

ミース・ファン・デル・ローエ 1886-1969
Ludwig Mies van der Rohe

サイズ：W75×D75×H75×SH42
仕様：ステンレススチール、皮革
製造・取り扱い：Knoll International/ノール インターナショナル
ジャパン

ミースの代表作と言えば、先ずこの作品が思い浮かぶ。日本でも人気のこの作品は、1929年、バルセロナ万国博覧会でドイツ館に展示されたものである。このドイツパビリオンは、彼の設計コンセプトであった「流れる空間」が見事に実現されたオープンプランでもあった。この空間に置かれた〈バルセロナチェア〉は、品位、威厳、風格など、あらゆる意味において、素晴らしい、理想的な組み合わせとなった。そして、この椅子は当時のスペイン国王、アルフォンソ13世に捧げられたものであった。写真の黒革の〈バルセロナチェア〉は、現在ノール・インターナショナル・ジャパンから販売されているが、パビリオンに展示されたものは白い柔らかな山羊革で張られていた。そして数年前、ノール・インターナショナル・ジャパン社ではミースの生誕100年記念モデルとして当時のものと同じものを復元したのである。ちなみに1986年には、旧西ドイツでミースの生誕100年の記念切手も発行された。

(織田)



バルセロナ・パビリオン、1929

028

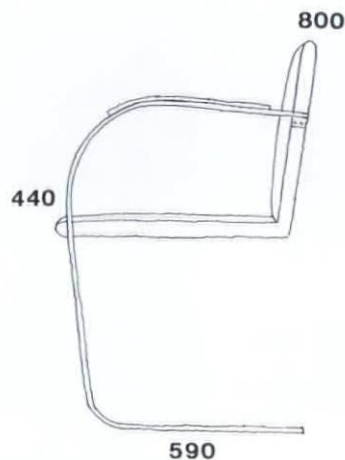
ブルーノチェア 1930 Brno Chair

ミース・ファン・デル・ローエ 1886-1969

Ludwig Mies van der Rohe

ミースの数多い名作の中でも、〈パロセロナチェア〉と並び日本にも馴染み深い椅子である。ブルーノ「Brno」と言うのはブリュン「Brünn」市のチェコ語読みで、この町にミースの代表的建築であるトゥーゲントハット邸がある。この住宅のダイニングルームのためにデザインされたもので、24脚もの〈ブルーノチェア〉が並んでいたそうである。この住宅のインテリアデザインにはオニックスや黒檀、シルクのテキスタイルといった高価なものが使われており、それらにマッチするだけのエレガントさと高貴さを備えたのがブルーノチェアであろう。これら24脚の〈ブルーノチェア〉には、〈パロセロナチェア〉の最初のモデルに見られるような柔らかな白い羊の革が張られていた。最初のモデルはベルリンのヨーゼフ・ミューラー社で製作されたが、後にバンベルク社で製作された。バリエーションとして、金属部分がフラットバーのものと、スチールパイプ製のものがある。どちらもカンチレヴァー構造の名作と言える作品である。（織田）

サイズ：W59×D57×H77×SH43
仕様：ステンレススチールバー、フォームラバー
置かれた場所：トゥーゲントハット邸
製造・取り扱い：Knoll International / ノール インターナショナル
ジャパン



トゥーゲントハット邸、1930

029

スリングチェア LC1 1928 Sling Chair

ル・コルビュジエ 1887-1965

ピエール・ジャンヌレ、シャルロット・ペリアン

Le Corbusier, Pierre Janneret, Charlette Perriand

サイズ：W60×D65×H64×SH40×AH58

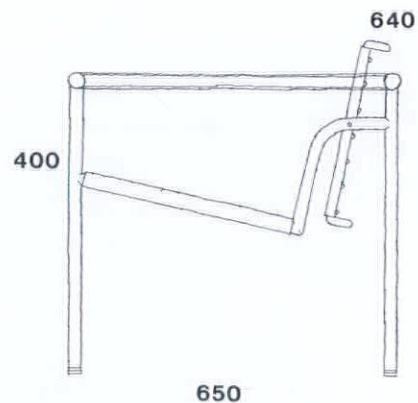
仕様：クロームメッキ仕上、厚革

置かれた場所：スイス学生会館

製造・取り扱い：Cassina/カッシーナジャパン



コルビュジエは、オザンファンと共にピューリズムの運動を起こしたことで知られるように、ある観点から見れば、常に純粹であったのではないだろうか。この椅子も垂直・水平・直角・回転の組合わせという思想であろう。トラス状になったような力学的配慮は見当たらない。だから前後・左右の捻れに対して実に弱々しく、見える。実際にも弱いに相違いない。一見すると、金属パイプと皮の組合わせが、M.ブロイヤー等と同じ様に見えるが、大きな違いがあるだろう。座と背の小牛の毛皮の張り方にはひと工夫しており、毛並みによる滑りの方向が一定になるよう配慮されている。また、その毛皮の自然な偶数の模様が美しい。(羽原)



030

シェーズ・ロング LC4 1928 Chais Longue LC4

ル・コルビュジエ 1887-1965

ピエール・ジャンヌレ、シャルロット・ペリアン

Le Corbusier, Pierre Janneret, Charlette Perriand

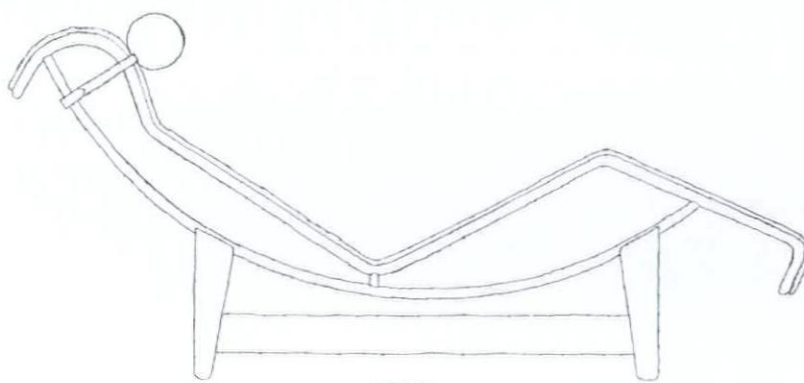
サイズ：W60.5×D160×H85

仕様：スチールパイプ、平鋼、皮革

製造・取り扱い：Cassina/カッシーナジャパン



その言葉に種々の誤解はあるものの、「家は住むための機械だ」というコルの言い様に倣って言えば「椅子は座るための機械だ」ということになる。それにしても、この椅子が持つカーブは、横臥するのにタタミの上が通常だった世代には馴染みにくいものがある。それだけに、特にヨーロッパ的な姿態のものと言えるのだろうが、プロイヤーの寝椅子に見られる優美な線とともに、実に美しくかたちづけられている佳品だ。ここに寝たまま、その角度を変えようとしてもそうはいかないことが難点ではあるものの、そんなアナログなやり方も、ま、いいではないかと楽しめるところも愛されるべきだろう。(光藤)



1600

031

LC7 1928

LC7

ル・コルビュジエ 1887-1965

ピエール・ジャンヌレ、シャルロット・ペリアン

Le Corbusier, Pierre Janneret, Charlette Perriand

サイズ：W62×D55×H73×SH50

仕様：クロームメッキ仕上。革張り

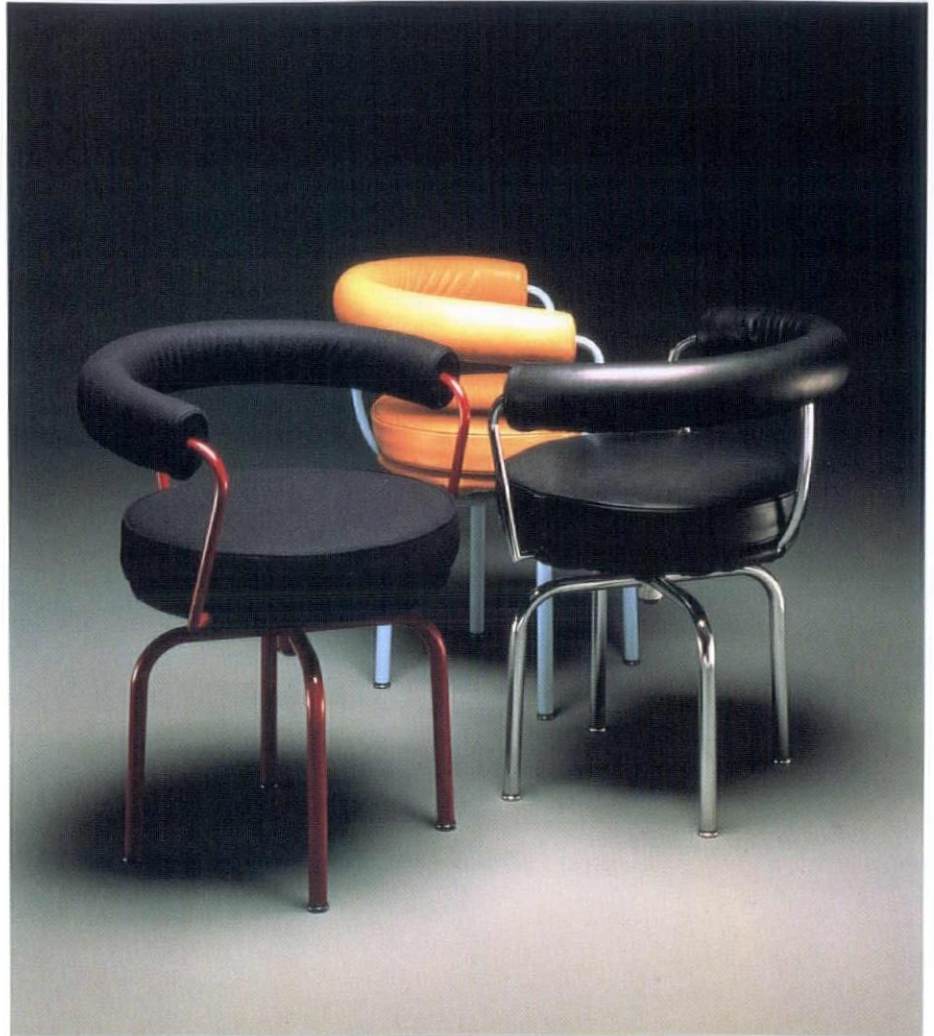
置かれた場所：展覧会「Salon d'Automne」Paris

製造・取り扱い：Cassina/カッシーナジャパン

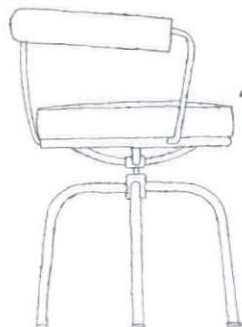
今日では、座高の調節や背のリクライニングなどが可能な、そしていわゆる人間工学的な配慮のもとに開発されたオフィスチェアが種々登場しているのだが、これには仕掛けなど何もない。ただ回転が可能だけで、キャスターさえついていない頑固さだ。もともと休息するためのものではないのだから、これでいいわけだが、今の人たちには決して使い易い代物とは言えないだろう。事実、それほど掛け良い椅子ではない。

コルが持つエスプリを愛でての人でなければ、なんと古くさい格好のもの、ということになる。

(光藤)

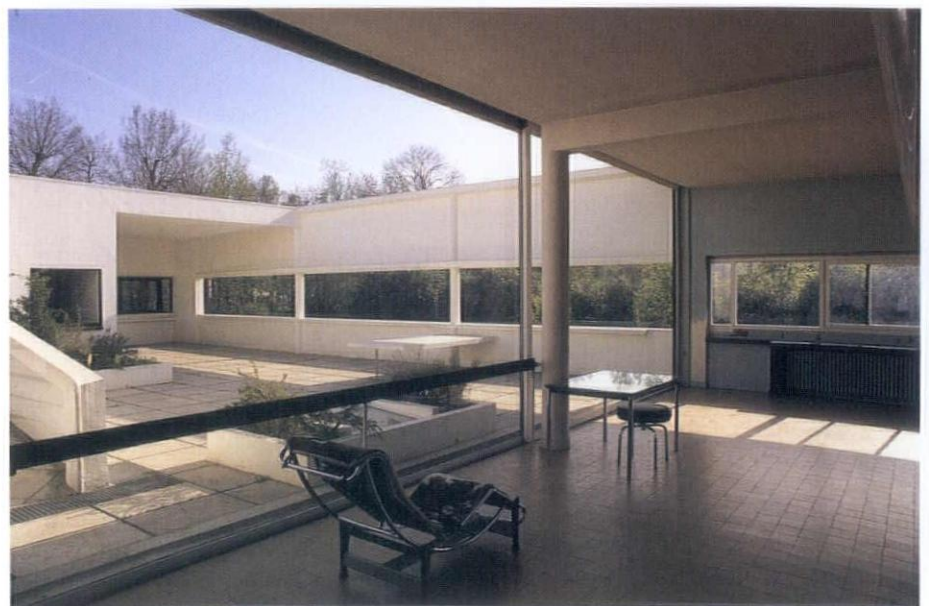


715



430

520



サヴォア邸、1929-31

032

フォートウイユ 1927-1928

Fauteuil

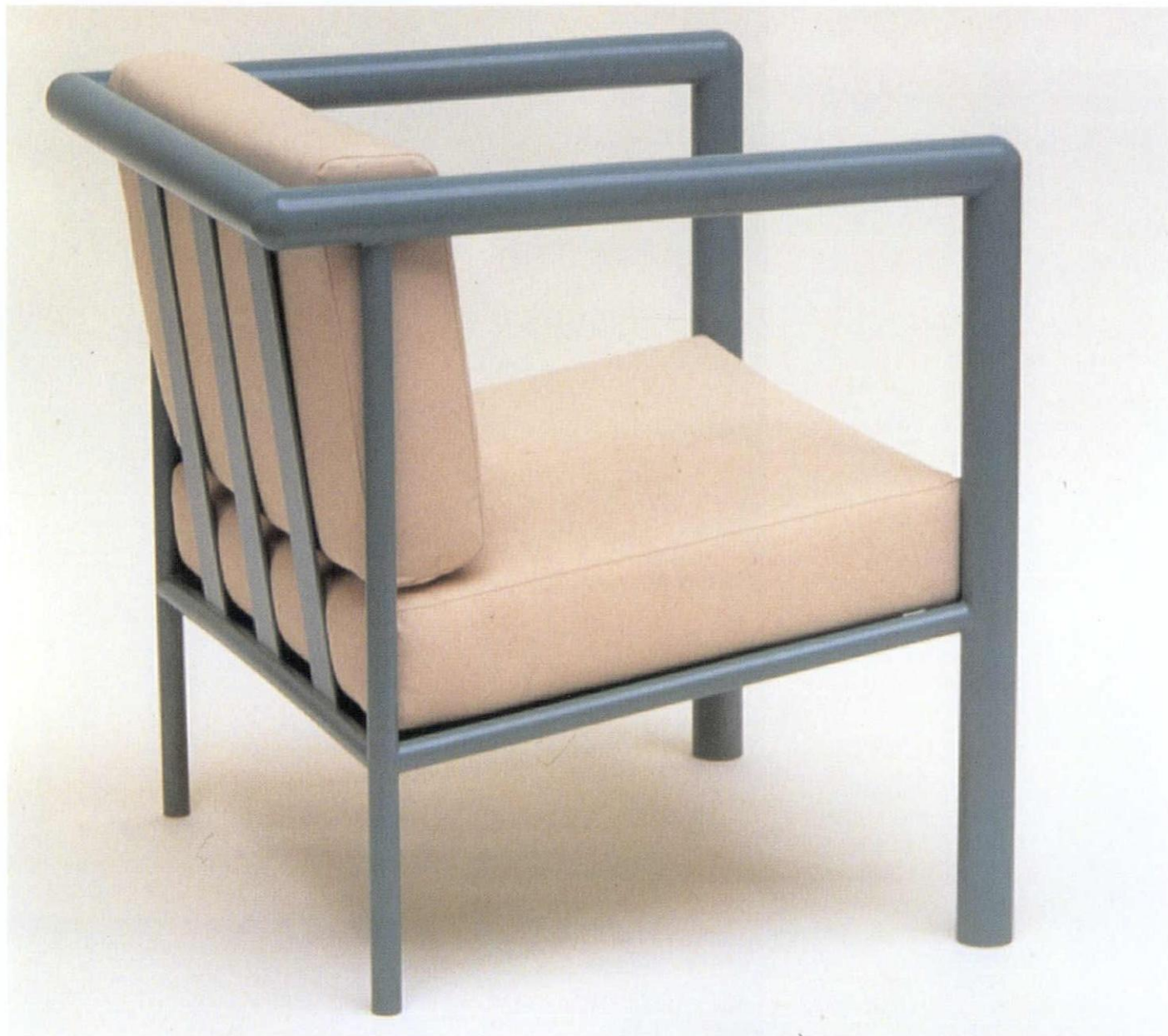
ロベール・マレ・ステヴァン 1886-1945

Robert Mallet-Stevens

サイズ：W44×D54×H83

仕様：スチール、塗装 皮革張（座面、背）

製造・取り扱い：Ecart/H.A.deux



作家は、現代美術家連合U.A.M(Union des Artistes Modernes)の中心的メンバーの1人。他にピエール・シャロウ、ルネ・エルブスト、ル・コルビュジエ、フランシス・ジュルダン等のメンバーによる。"Ecole Speciale D'Architecture"の教授でもあり、数々の著書、建築、デザインの作品を残している。

昔ながらの伝統をひけらかす「骨董趣味」に対し、新しい建築デザインの探究を行なった。工業的生産方式の探究から生まれた、素材としてのスチールパイプはその伝統的なもの

のとして掲げられるが、それにもまして素材と造形の調和が、ゆるぎないものとして確認できる。それは、社会との葛藤の中で新しい時代をつくり出した運動家の力である。(河合)



033

チェア 1930

Chair

ロベール・マレ・ステヴァン 1886-1946

Robert Mallet-Stevens

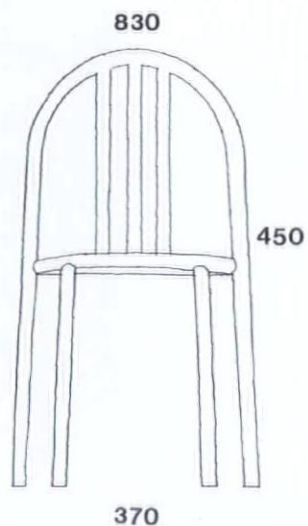
サイズ：W45×D52×H82

仕様：スチール、塗装

製造・取り扱い：Ecart/A.H.Deux

スチールパイプを曲げた家具デザインを見るとその向こう側には必ず「曲木」のデザインが見えてくる。無垢の木を蒸して曲げるという工法がミカエル・トーネットにより開発され、家具デザインの世界に大きな可能性を拓いたのは言うまでもない。その後1925年にマルセル・ブロイヤーが自転車のハンドルをヒントに金属パイプを曲げ、家具に応用した頃から、様々な金属製の名作家具が誕生した。フランスでも様々な建築家やデザイナーが金属を取り入れた作品を発表したが、ステヴァンもそうした一人である。彼の作品には、ヨゼフ・ホフマンの影響を強く受けたものが見られる。この写真の作品も、そのデザインルーツとして、ホフマンの1904年頃の曲木による作品に見ることができる。スチールならではの貫を用いないシンプルな構造となっている。色も写真のものの他に何色か用意されている。

(織田)



034

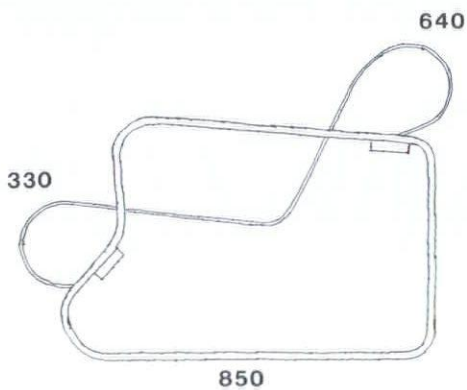
アームチェア (パイミオ41) 1929 Armchair (Paimio-41)

アルヴァ・アアルト 1898-1976

Alvar Aalto

この椅子は1928年のパイミオのサナトリウムのコンペティションで一躍国際的に知られる。コンペ以前から、樺の木を使用した曲木椅子の研究を始めた成果の結晶である。フィンランドの松や樺の森林の、最も効果的な利用法を開発したパイオニアの傑作である。それは半世紀以上を経過しても、そのほとんどは変わらぬ、構造と材料、評価と美的センスの格調は実に素晴らしい。(羽原)

サイズ：W61×D50×H68×SH29
仕様：積層材。成形合板
置かれた場所：パイミオのサナトリウム
製造・取り扱い：Artek／二葉工業



パイミオ・サナトリウム、1928-33

035

スツール 1930

Stool

アルヴァ・アアルト 1898-1976

Alvar Aalto

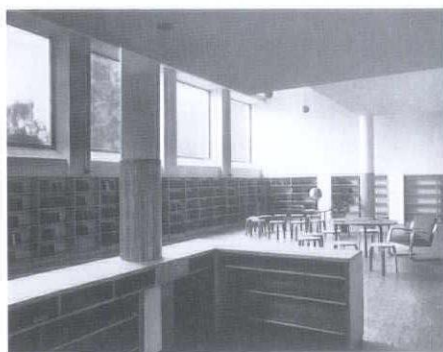
最初の頃の脚は3本である。それは多分、床が一樣に水平ではないこと、材料が少なくて済むこと、もあったろうが、やはり3本という美しさと緊張感がいい、と筆者は言いたい。また、曲げるあるいは曲がる部分の約20cmが10層程の合板で出来ていた。甲板の色彩や材料もいろいろ年代によって日進月歩で変化している。近年は4本脚が普通のようなだが、やはり最初の3本脚の芸術的精神を感じさせるものを大事にしたいものだ。(羽原)

サイズ: $\phi 35 \times H137$

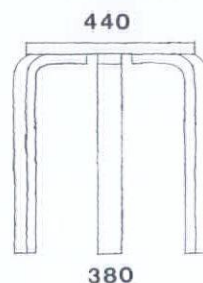
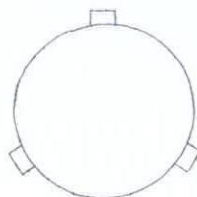
仕様: 白樺材

置かれた場所: ヴィープリ市立図書館

製造・取り扱い: Artek/二葉工業



ヴィープリ図書館、1927-35



デンマーク王立芸術アカデミー建築科の教授として、またデンマーク第二の都市にあるオーフス大学の設計者の一人として（ポウル・ステグマン、C.F.モラーとの共同設計）、デンマークのみならず北欧ではよく知られた建築家である。また、彼は銀器のデザインにおいても数多くの名品を残している。写真のウィングバックチェアは、どの建築物のためにデザインされたものか不明であるが、イギリスの17～8世紀頃に多く見られるウィングバックタイプのものとは、また違った印象を受ける作品である。肘のカーブや、ウィングの処理の仕方などから1930～40年頃のデザインではないかと思われる。実際に掛けてみるとなかなか安楽性の高いものである。1995年、コペンハーゲンのオークションに出品されたもの。カイ・フィスカーの作品はほとんど量産されたことがないため、この作品も量産されたものではなく、どこかの建築のためにデザインされたものと思われる。（織田）



オーフス大学、1931-46



037

リクライニング・ラウンジチェア 1929 Reclining Lounge Chair

ルネ・エルブスト 1891-1983

Rene Herbst

サイズ：W57.2×D88×H58.4〜102.4
仕様：スチール、Cotton elastic straps
製造・取り扱い：エカール



1919年、ドイツにバウハウスが誕生、マルセル・ブロイヤーにより1925年、初の金属パイプを使用した椅子、〈ワシリーチェア〉が登場した。この1925年以降、家具の世界に金属のもつ強さと弾力性を活かしたデザインが次々と発表されることになった。ここに紹介するルネ・エルブストは、フランスにおいて金属パイプを実験的に使った先駆者と言える。彼は弾力性を金属パイプに求めるのではなく、もっと柔らかな弾力性をもつゴムに着目した

のであった。彼はこれらのゴムと金属パイプを使った椅子を、自身の会社、ルネ・エルブスト商会から、〈エクスパンダーチェア〉シリーズとして販売した。写真の作品もそれらの中のひとつで、座の下の方の金具を調節することにより、背の角度を自由に変化させることができるものである。このほかに、肘にもこのエクスパンダーを使用したものもデザインされていた。

(織田)

038

D-80 ラウンジチェア 1928-1930 D-80 Lounge Chair

ジャン・プルーベ 1901-1984
Jean Prouvé

サイズ：W62×D103×H99×SH45
仕様：スチール、スチール曲げプレート
製造・取り扱い：Tecta/アクタス



側面のストラクチュアとなるスチールを曲げ加工したプレート内のサポートバーの内側に軸受けがあり、座面はこれに沿って移動することができる。

「家具のデザインには他のあらゆる建築構造物と同様の複雑な思考プロセスを必要とする（ジャン・プルーベ）」この椅子にはプルーベの素材、技術のあくなき追求を見ることができる。特に構造体となっている側面のスケールプレートの加工にみる技術的工法は建築における壁面パネルのデザインにおいても展開している。建築を家具と同次元で考えた姿勢をうかがうことができる。（河合）



J.プルーヴェ邸、1954

039

チェア 1930

Chair

ミッシェル・デュフェ 1888-1985

Michel Dufet

サイズ：W46×D60×H95×SH48

仕様：スチールパイプニッケルメッキ、ストラップシート

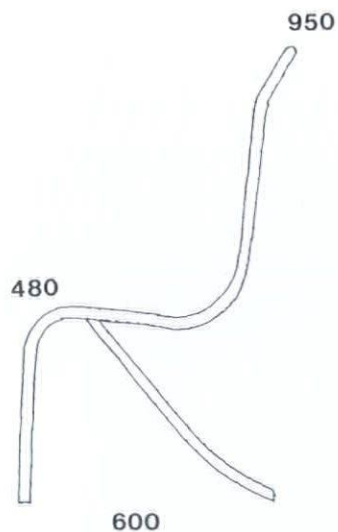
製造・取り扱い：Ecart/H.A.Duex



フランス人の建築家であるミッシェル・デュフェは、美術評論家でもあり、当時、数少ないモダニズム提唱者のひとりである。「工業生産としての家具」という画期的な試みに情熱を傾けた。初期においては、キュビズムを思慮深く採り入れたインテリアの作品を多く発表している。

1922年から1927年には、ブラジル、リオデジャネイロのインテリアデザイン会社を指揮し、1928年にATELIER D'ARAT DU BUCHERONをランドル・ヴァイロンと共働するためフランスに戻る。その2年後、スチールパイプに、伸縮性のあるゴムバンド状の回転式止め金具を用いた家具を発表した。

ルネ・エルブストが同年発表した椅子にも、同素材が用いられ、その同時代性をはっきり見ることができる。(河合)



フォリア 1934

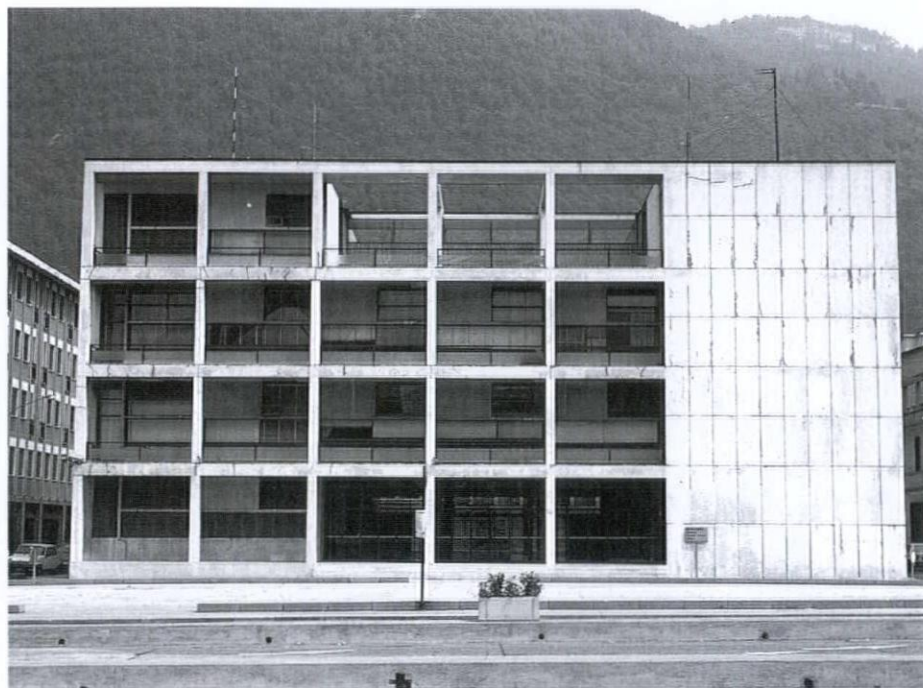
Follia

ジュゼッペ・テラーニ 1904-1943
Giuseppe Terragni

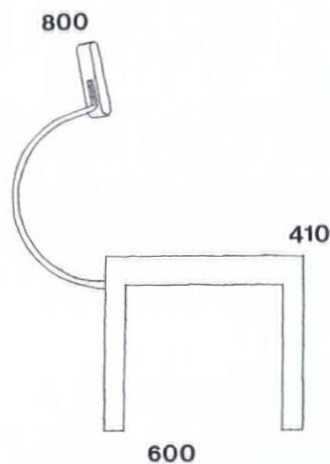
サイズ：W50×D60×H80×SH41
仕様：塗装木材、ステンレススチール
置かれた場所：カサ・デル・ファッショ
製造・取り扱い：Zanotta/ノバ大島

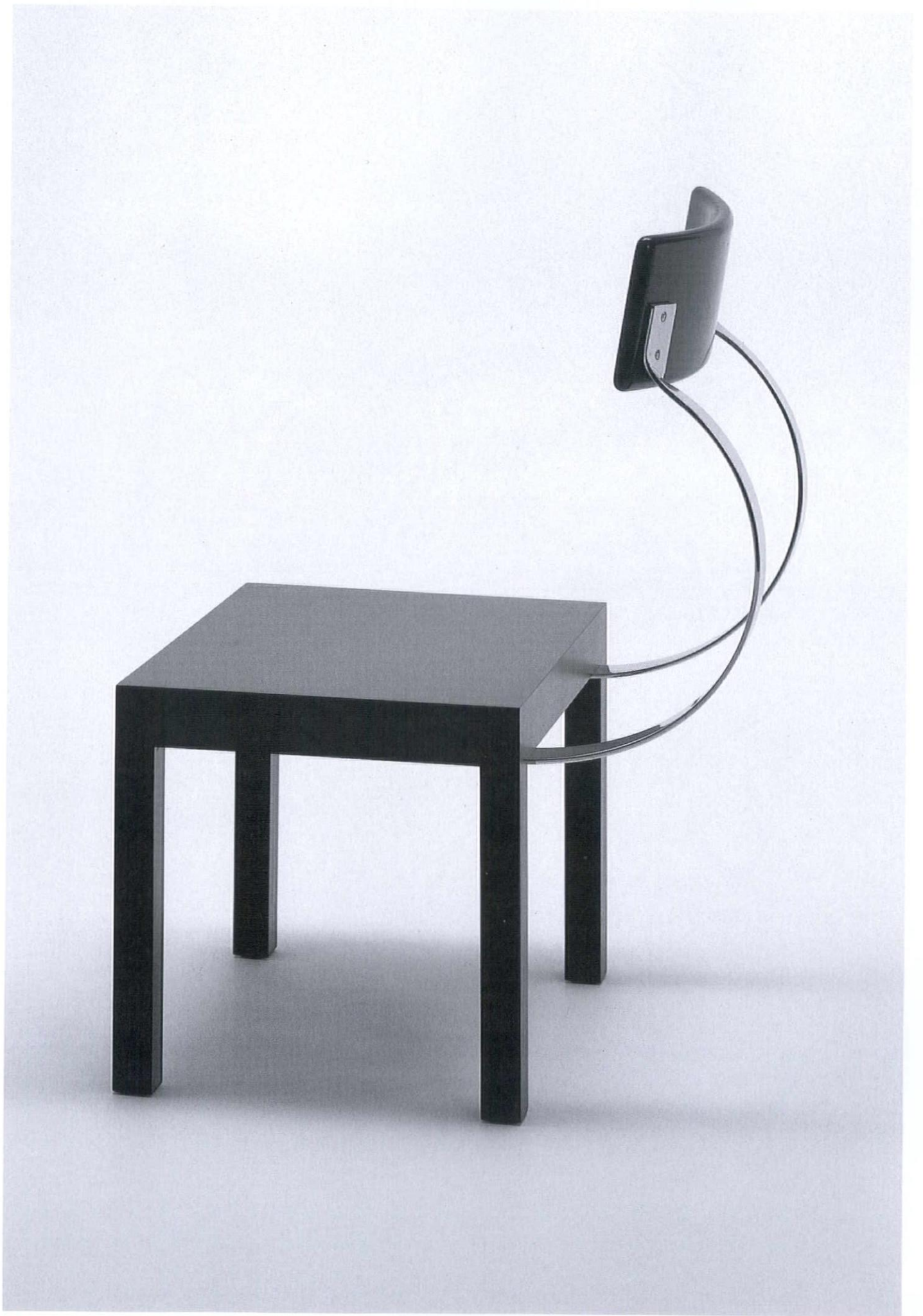
イタリアには世界的にも有名な家具メーカーが多い。中でもザノッタ社・カッシーナ社は過去にデザインされた名作の数々を現代に蘇らせている。それらは一部の作品を除いて、ほとんどが量産されることなく、建築家が設計した建物のためのカスタムデザインとして存在していたのである。そうした歴史的な名作を復刻したのがカッシーナ社である。ザノッタ社はカッシーナ社とはやや異なり、イタリアの独特のデザインの「遊びごころ」を大切に商品構成となっている。日本でならば、まず商品化されないであろうと思われるものでも勇気をもって量産化している。そこにはデザインを大切にすると共に、作家に対する敬意も込められているのではないだろうか。この〈フォリア〉(狂気)と名付けられた作品もそうしたもののひとつと言える。デザインされながら実現されなかったモデルをザノッタ社が誕生させたモデルである。決して安楽性の高い椅子とは言えないが、背をステンレスのパネで支え、ベントを利用した面白い椅子である。

(織田)



カサ・デル・ファッショ、1936





041

サン・エリア 1936

Sant'Elia

ジュゼッペ・テラーニ 1904-1943

Giuseppe Terragni

サイズ：W55×D68×H79×SH41

仕様：Stainless tubular steel、皮革、塗装木材

置かれた場所：カサ・デル・ファッショ（ファシスト党コモ地方本部ビル）

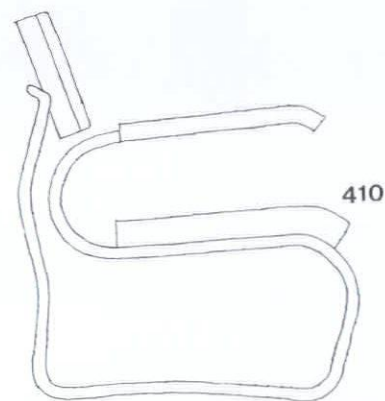
製造・取り扱い：Zanotta／ノバ大島



〈フォリア〉は「カサ・デル・ファッショ」（イタリア・ファシスト党コモ地方本部ビル）のためにデザインされたもので実現はされなかったが、この〈サン・エリア〉は実際に製作されたもの。「サン・エリア」とは紀元前9世紀のヘブライの預言者のことであるが、その名前とファシスト党とどのような関係があるのか……？

一般的にカンティレバー構造の椅子と言えば、前か後の一方を1～2本の脚でそのシートや

背を支えるものであるが、この椅子の様に4本脚で、しかもカンティレバーというのは珍しいのではないだろうか。このため、腰を掛けても背と座のベントの効き方が違い、不思議な掛け心地である。テラーニは、この建物のために同じ構造のサイドチェア〈ラリアナ〉もデザインしており、これらもザノッタ社で復刻され、販売されていた。イタリア人らしいユニークな構造といえるだろう。（織田）



680

椅子の現象学

山口昌男

立つ・座る・寝るというのは、人間の姿態の3つの基本型である。人間の精神の境位が身体の3つの姿態の影響を受けることは哲学者O.F.ホルノーが「空間と書物」という書物の中で明らかにした。

とは言うものの座る座位には、地面に接するものと椅子を使用するものとのふたつがある。日本においては圧倒的にあぐらを中心とした座位が定着していた。仏像の歴史を見ればそれはすぐに知られることである。あぐらの文化は、イスラム教の伝播地域の大半を覆っている。しかし、アジアがすべてあぐらの文化一色というわけではない。中国文化では椅子が圧倒的に支配的であったし、インドからインドシナ半島、更にインドネシアの諸島は椅子が支配者の文化にはつきものであった。特にこの地域一帯では太陽を背にして西を向く玉座の存在が知られていた。

私は昨年12月インドの西ベンガルでひと月を過ごした。この地域にはサニタル族という農耕民が定着している。サニタルの村落を訪れると道に面した家の外壁には同じ土の段が

作られ、そこに座れるようになっている。村民は夕方になると道の両側に座って噂話などに興ずる。時には村の裁判なども行われるから、このヴェラングが村の中心的な施設になる。

インドネシアのフローレス島にはかつて、村の集会所が、船の形をした石の床椅で設けられていた。船の形は宇宙図で、その中で王を中心に長者達の座る位置がきまっていたというのは、椅子が宇宙＝世界における人間の位置を示すという意味で示唆的である。

しかしながら或る種の固定性と反対の移動性を椅子に託している文化がある。東アフリカの牧畜民には、枕にも使える椅子を携行している。彼らは腰に椅子をぶらさげており、休むときは片足で立っている。時には床椅と違ってよい物に坐る。寝るときに同じ物を枕として使う。

ヨーロッパ文化と椅子という時、私たちは知が凝縮する座位を表わすものとしてホルバインの描いたエラスムス像を想い出すことが多い。

しかしながら現代においては磯崎新のマリ

リン・モンローの身体の曲線に基づく椅子の魅力をおぼろげに忘れることは出来ない。また私の行きつけの京都の和式旅館の風呂はタイルであるが、独りで入る横臥式のもので、椅子のような段差がついており、目の前の大ガラス越しに見えるミニ庭園の夜の照明の中で、この夜ともあの世ともつかぬ境界に導き入れる。

もっと個人的に言えば、ニューヨークに半年程住んでいたとき使っていた椅子である。それはイタリアのデザイナーの設計したもので、デッキチェアを一廻り大きくしたものであった。使われたキャンパス(布)は日本と言えば酒を絞るための布という感じ、限りない安堵感を与えられ、私は室内にある殆どの時間をこのオーバーサイズ用のデッキチェアに座って過したのであった。つまり座るという機能の他に、中空に包むという状態に置くことも椅子のもたらす効果のひとつであると思っている。

●やまぐち・まさお／文化人類学者



西ベンガルサニタル族の村、右側の家のヴェラングに注意

西ベンガル、サニタル族の村(筆者スケッチ)

椅子ではない椅子

羽原肅郎

1脚の椅子を置くことによって……その空間の存在が生まれ、1脚の椅子を置くことによって……その空間が鳴り、1脚の椅子を置くことによって……その空間が芸術となる。このように椅子は、その形態と質の使用法によっていろいろの機能を発揮する。ある時は美しい人の裸形のように、ある時は聖なる偶像のように、緊張と感動の時を与える。だから、ちょっと意識のある者、建築家、デザイナー、音楽家、作家、画家等は自ら椅子を創る、もしくは自ら選んでその使用法を生み出す。その椅子は、各自の独特の関係と思い入れと恩恵と信頼に満ち満ちている。

1日に一度も椅子と関係しない人とは、どんな職業の人だろうか。ほとんどいないのではないか。電車の中で時々遭遇する座席を取り合う風景を見ると、腰を掛けるという行為は人間にとって、あらゆる者の本能的な欲望の行動であろうか。食堂で腰を掛け、化粧で腰を掛け、自動車で腰を掛け、腰を掛けて観劇し、腰を掛けて音楽を聴き、腰を掛けて考える。公園にはいくつものカップルが腰を掛けて、恋を語り、接吻をしている。ソファでは本を読み、昼寝をしている。意識する時は猛烈に意識して腰を掛け、意識しない時は本当に無意識に、そこに椅子があるということを感じないで、まるで空気のように、その恩恵を受けている。

椅子とは一体なんだろう。

吉田秀和氏は『現代演奏論』の中で次のように言っている。「椅子？椅子は何のためにあるのか？それは、人がそこに腰をおろし、ある時は安息し、ある時は新聞を読み、ある時は一杯のコーヒーを飲み、ある時は機知に富んだ言葉のやりとりをするためにある。そのためには、頭部がどう自由に動かせて、どういうふうによりかかり、上半身とはどの角度で屈折でき、膝は床上から何センチの高さであり、腰は膝に対して何度の角度をなしている時が最も安定しているか等々が計算される。しかし、こういう機能性から割り出された合理的な形態が良い形であり、そのうえに美しい形でさえあるという思想は、私たちの生活空間を、均一化してしまう。私たちは、機能性の虜となり、それに逆らうことは、人間の人間たる所以、つまり合目的な生活の

実践に逆行する野蛮行為のようにさえ感じられてくる。」前半は椅子の基本概念であり、後半は近代デザインへの感想である。

また、安藤元雄氏は『椅子をめぐる』というエッセーを書いて、椅子をめぐる様々な様相を刻々と記している。

このSDの特集の中に収められた椅子は、それぞれが異なった機能を追究した椅子であろう。材質(料)による・技術による・流行による・社会性(行儀と習性)による・経済による・そして形態と視覚による機能が、それぞれの段階で形成されたものである。しかも建築家のデザインによるものだ。建築は建築が建っている場所に向かないと現物を見ることも、接することもできない宿命の関係にある。しかし、椅子は自分の手元に置いて、使用し、(踏み台になったり、子供の玩具の一部になったり)触り、眺め、鑑賞することさえできる。好きな建築家のデザインした作品には常時接したいと思う時、椅子ならば、その可能性は割合に身近にあるのではないか。その建築家の形態と精神の理念を吸収しようとする者にとって、その建築家の椅子は、ある断面を表徴した最も適切な物体であろう。

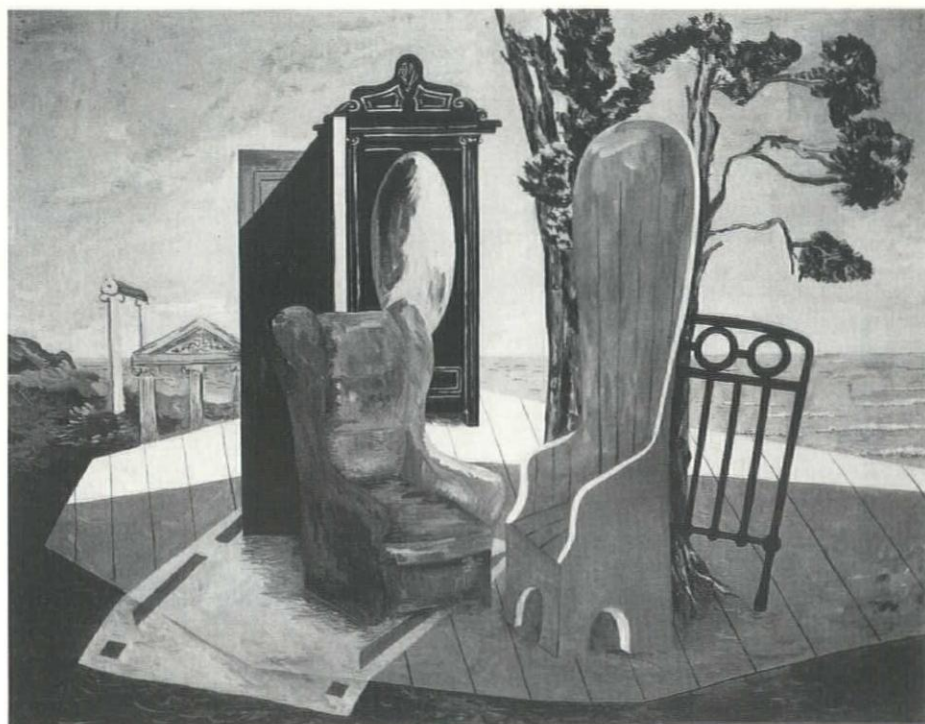
ギリシア生まれの画家ジョルジオ・ディ・

キリコの1927年頃の作品「谷間の家具」や「海辺の家具」には、椅子と椅子とが向かい合っていて、何か怪しげな会話をしている様子が描かれている。それに感心したに相違いない、イタリアの彫刻家、マリオ・チェロリは『海辺の家具』の片側の椅子と、そっくりのものを1967年に「芸術家の証拠」と題して製作している。

また、東山魁夷は『コンコルド広場の椅子』と題した詩画集を1976年に刊行。「貧しい人も 幸福な人も 不幸な人も 私の上に腰を掛ける 悲しい人も 楽しい人も 陽気な人も 淋しい人も 私の上に腰をかける——中略——美しい娘が腰をかけてくれることが 最も嬉しいのは勿論だ そんな時は 仲間の話題になる」などと歌い、エクトール・ギマールが昼寝をした様なコンコルド広場の椅子を、空高くエッフェル塔の上まで飛ばしている。

このように椅子は作家の作品のテーマの対象としても現れる。椅子を意識する時、それは永遠の恋人であり、魔物である。私にとっても、彫刻と同じような精神的な機能の価値をもつ。

●はばら・しゅくろう／明星大学教授



海辺の家具／ジョルジオ・ディ・キリコ、1927

「部屋」と「馬」

林 昌二

クルマには「部屋」と「馬」の2種類があります。冷暖房完備のラクチンなリムジンは前者で、真冬でも風を切って走ろうというスポーツカーは後者に属します。

椅子にも「建築」と「腰掛」の2種類があります。見方を変えれば「建築の延長上の椅子」と「腰をかける道具である椅子」です。

まず「建築の延長……」の方からいきます。私の気に入っているのは、アラブ・トルコ辺りの床座生活圏で発達したものです。豪華版「上段の間」とも言え、建築と家具の中間体とも言えそうな、あれです。人間、贅沢を極めると、食事は横になって摂るものようですが、食事でさえそうなら他の生活行為はすべてごろごろと横になったままで済ますわけで、まあ、見方を変えるとこれは「寝たきり老人」に近いライフスタイルということになりますか。こうしたパターンの全生活を容れ

る装置空間としての「椅子」は、当然ながら人を包み込むように柔らかく、大きく、重く、永久固定的なデザインとなって鎮座します。念のため申し上げますが、上下足分離・床座型の生活形態をとっている地域・民族は地球上の相当な面積を占めています。快適な床座型の家具の開発にもっと力を注いでもおかしくないのです。

次は「腰かけ…」の方です。「建築の…」と対比して考えれば小さく軽く、動かしやすいことを身上とします。代表は何と言ってもジオ・ボンティでしょう。トネリコと籐が作るしなやかさ、掛け心地の良さ、そして何と言っても指1本で持ち上がる2kg!という素晴らしい軽さには脱帽です。しかし、もう出現以来40年を越えています。今日ではプラスチックや炭素繊維やチタンなど、軽薄短小さにかけては自慢の材料・工法が目白押しな

のですから、本気で挑めば簡単に空気のような椅子が出現してもおかしくないのに、一向にそうはならず、ボンティの王座が揺るがないのはなぜですか。

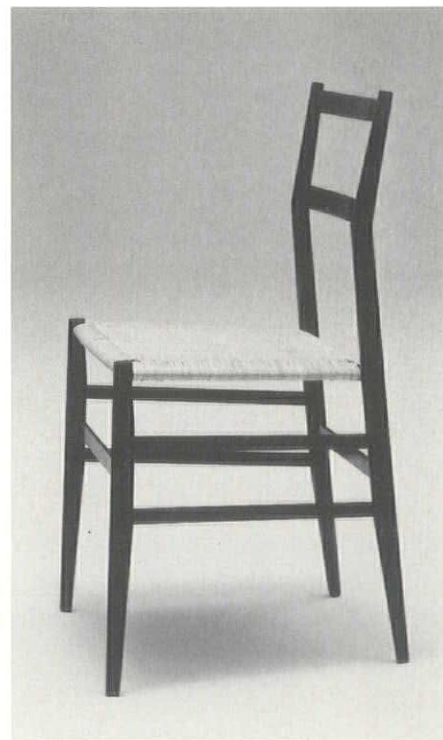
ひとつ思い当たるのは、椅子のカタログに重量が記されたのを見た覚えがないことです。デザイナーもメーカーも、重量への関心が薄すぎるのではありませんか。建築屋が重量に鈍感なものも困ったことだと思っていますが、工業デザインの世界は、飛行機はもちろん自動車、電気器具まで、重量を常に意識していないと勝負にならない筈でしょう。また、椅子は並べ変える機会が多い品物です。高齢化しつつあるビルメンテの世界では、重い椅子との闘いに明け暮れ、腰痛に悩まされ続けています。

誰か、ボンティを超えてください。

●はやし・しょうじ／建築家、日建設計



トルコ、マジアル家居室



スーパーレジェーラ/G,ボンティ

シェーカーのイス

藤門 弘

シェーカーのイスは、木材という天然素材がもつ健全さと、機能主義による洗練とのあやうい均衡上に成立した様式の一端をなすもので、「19世紀の奇跡」とでもいうべき独自の体系と固有の完成度を持っている。

天然素材が持つ軟らかな質感は機能主義によって損なわれることなく、かといって素材感ばかりが強調される民芸的なそれとも大きく違っており、古典でありつつ、いつの時代にも新しくあり続けることが可能なイスである。シェーカーの手によるこのイスを、歴史的名品と呼ぶことにはほくはためらいを感じない。建築家やデザイナーによって作られたイスたちが声高に自分を主張している中で、シェーカーのイスはひとり静かに、楚々として時代を見守っている、そんな印象を持つのである。初めてシェーカーに出会った70年代の後半から20年、家具の作り手として、後には田園生活者の立場からほくはシェーカーに深く関わり、いささかの勉強もしてきたつもりだ。その結果として、ほくはシェーカーに対して客観的であることができなくなっているのだが、そんな主観的な視線の限界をお断りした上で、改めてシェーカーのイスを眺めてみると、そこにはいくつかの明瞭な特徴が浮かび上がってくる。

その第一は、このイスがごく「平凡」である、ということだ。単純なスラット・バック・チェア、というのがシェーカーを初めて見た人の印象だろうし、実際それはその通りだ。がしかし、この平凡さには加えるものも減じるものも一切存在しないのである。歴史によって鍛えられた完成度の高さこそがこの平凡さの本質である。

第二の特徴はその機能性だ。シェーカーのイスは他の生活用具同様に、本来自給用に作られたものであった。生活の必要に応じて作られ、生活のためによりよく機能するものがないものである、というはっきりした方針をもってシェーカーの職人は仕事をした。

第三に、このイスは必要最低限の部材と限界的な各寸法によって作られており、同時に世俗的な装飾の一切を排除している。結果としてイスはごく軽量に仕上がるが、これはシェーカーにとって重要なことだった。精神世界でそうであると同様に、教徒は実生活でも清潔を旨としており、家屋の清掃にはことのほか気を配った。移動が簡単であることはイスに要求される条件のひとつだったのである。質素であること、機能的であること、装飾がないこと、そして軽量であること、こういったシェーカーのイスの特徴は、彼らの信仰生活を背景として理解する必要がある。

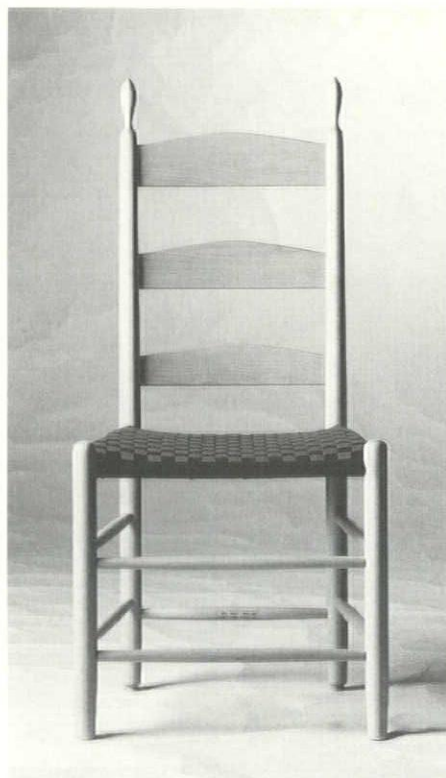
俗世を離れて田園での自給自足経済を営んだ彼らの生活は、「心は神に、手は仕事に」という格言どおりのもので、イスを作った職人は決して自らを主張することなく、仕事は祈りと同義であった。したがって彼らの仕事は徹底的に誠実であり、細部に至るまでどこまでも非妥協的なものだった。

シェーカー教団は18世紀の末から今世紀の中程まで約2世紀にわたって活動をしたが、その歴史の中で彼らは実に多くの家具類を残していった。それらをまとめて「シェーカー家具」と呼ぶが、実はどの時代のどの地方のものをシェーカーの本質と見るか、というあたりが少しむずかしい。初期の家具はかなり素朴なものだし、後期になると工場を作って量産を試みたりもしている。また、アメリカ東部の中心地のものと西のケンタッキー方面のものでは意匠的にかなりの差がある。

シェーカー教団が残した膨大な家具類の中で、私個人は19世紀前半の東部共同体のものを、最もシェーカー的なものとみなしており、復元の仕事はその頃のものを中心に選んでいる。

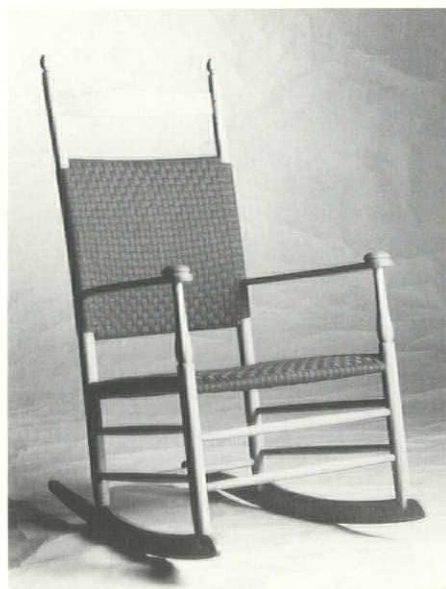
というような事情で、いまやシェーカーのイスはまるで自分の一部のように感じるのである。

●ふじかど・ひろし/アリス・ファーム代表



レバノン・チェア、1850

写真：アリス・ファーム



レバノン・ロッキングチェア、1850

042

レストラン椅子 1934 Restaurant Chair

ブルーノ・タウト 1880-1938
Bruno Taut

サイズ：W40×D48.5×H83.2×SH40
仕様：ナラ材、革、クリアラッカー
製造・取り扱い：BC工房

〈レストラン椅子〉と名付けられているが、どこのレストランのものなのか不明だ。また、どこのであれ、レストランで実際に使用されることもなく、試作品で終わってしまったということだが、1933年に来日し、日本の工芸指導に当たった彼の業績の一端を示すものとして興味深い。背に穿たれた楕形の手掛けに、いかにも実用品としての真摯な配慮のあと、日本の椅子を強調しての意匠性が窺われる。

(光藤)



熱海の家、1936

043

イーjeeチェア 1946 Chair

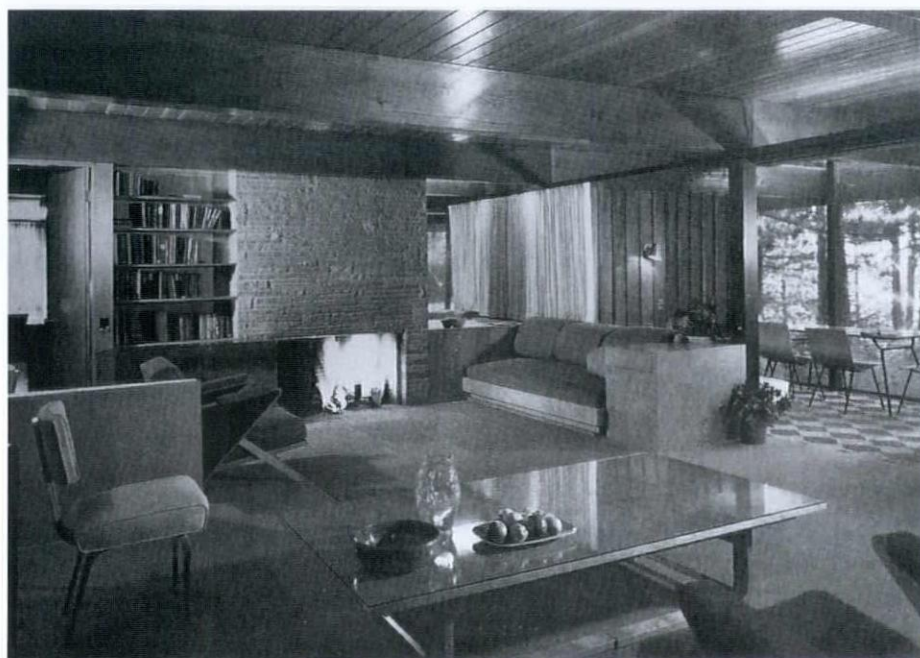
リチャード・ノイトラ 1892-1970

Richard J. Neutra

 サイズ：W44.5×D54.5×H77×SH47
 仕様：ビーチ材（脚）、スチール、皮革張

第二次世界大戦後、日本に滔々として流入されたアメリカ文化の中で、建築家の仕事としてのノイトラの作品は、当時の建築家志望の学生には眩しいものがあった。特にバウムスプリングに建つカウフマンの「砂漠の家」(1946-47)など、雑誌の写真でしか見れなかったにも関わらず、ライトの心意気に似た、地を這って広がるそのおおらかさに感動し、簡潔な線によって纏められた構成の妙には、やはり「ノイトラ様式」とでも称すべき独特の趣があって敬服させられたものだ。

シンプルかつ何のてらいもない。まさしくデザインのないデザインと言うべきか。座高は47センチと高い。しかし、たとえば食卓用など以外にも、いろいろ機能しそうな形のイーjeeチェアだ。(光藤)



アウアーバッシャー・ロッジ、1952

044

ウームチェア 1943 Womb Chair

エーロ・サーリネン 1910-1961
Eero Saarinen

サイズ：W102×D86×H90×SH41
仕様：F.R.P.、フォームラバー、布
製造・取り扱い：Knoll International/ノール インターナショナル
ジャパン



「たらいの椅子」である。身体全体をゆったりと包んでくれて、本当の休息ができる作品である。FRPのシェルにフォーム・ラバーのパッド、ウールの布張りにして、暖かい親近感を出している。筆者の記憶が間違っていなければ、いや間違っている、多分次のような状態を予想するには十分の椅子である。ノールの宣伝広告

に、煙突掃除のおじさん、あるいはサンタクロースが、この真っ赤な椅子に掛けて、何か得意げな顔つきで休んでいる美しい写真があった。サンタがクリスマスの贈り物を持参して帰る前に、ちょっとでも掛けてみたくなるような魔力をも発揮しているのであろう。(羽原)

045

チューリップチェア 1956 Tulip Chair

エーロ・サーリネン 1910-1961

Eero Saarinen

サイズ：W66×D60×H79×SH43
仕様：F.R.Pシェル成型、アルミ鋳造
製造・取り扱い：Knoll International/ノール インターナショナル
ジャパン



この通称チューリップ・チェアは、イームズの
アーム・チェアと共通する。それはイームズの
項目で書いた通り、イームズとサーリネンはク
ランブルックアカデミーで共同研究していた仲
間であり、その後、イームズはハーマン・ミラ
ー社の、サーリネンはノール社の製品を専属でデ
ザインするようになる。ライバルの会社である。

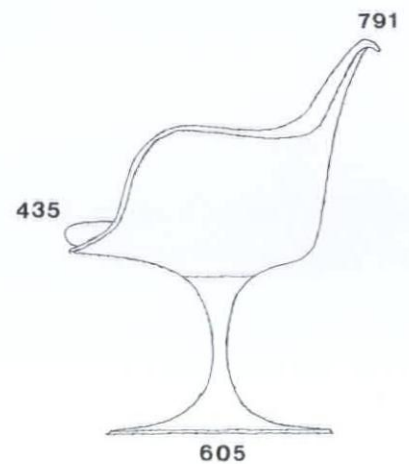
しかし、この親友関係はサーリネンが他界する
まで続いたという。「和して同せず」の親友は、
お互いの家に寝泊まりをしながら、デザインの
理想について語り合ったという。そしてサーリ
ネンは息子にイームズという名前をつけたそう
だ。

(羽原)



JFK国際空港TWAターミナルビル、1962

SD9606





046

プライウッドチェア 1946 Plywood Chair

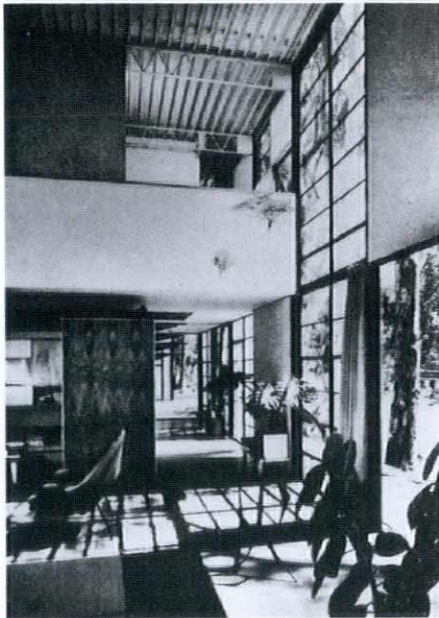
チャールズ・イームズ 1907-1978
Charles Eames

サイズ：W55.6×D62×H68×SH38.5

仕様：オークプライウッド

製造・取り扱い：Harman miller/ハーマンミラージャパン

これら合板を基にしてできた一連の椅子は、1940年ニューヨーク近代美術館で開催された「オーガニック家具コンペティション」に、エーロ・サーリネンと共同で応募し入賞した作品から出発している、と言って間違いないだろう。サイド・チェアとダイニング・チェアとがある。脚が金属の方は現在再生産されており、発表から半世紀を過ぎた今日、なおも新しい魅力に溢れている知的な美しい女性の間でも評判だという噂を聞いている。(羽原)



Ｃイームズ邸、1949



047

ラウンジチェア+オットマン 1956

Lounge Chair + Ottoman

チャールズ・イームズ 1907-1978

Charles Eames

サイズ：W86×D84×H83×SH38

仕様：成形合板、アルミ、皮革張り

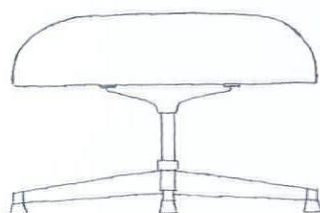
置かれた場所：映画監督ビリー・ワルダーのため

製造・取り扱い：Harman miller/ハーマンミラージャパン

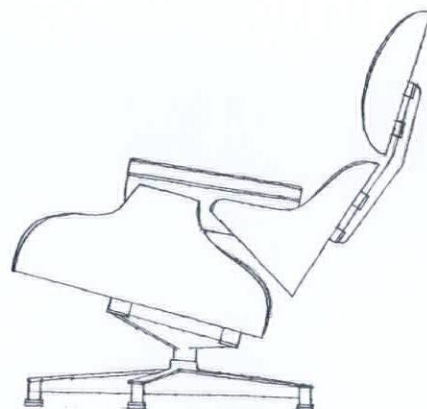


この椅子が発表された時、大きな、豊かな、新しい形と思想に皆が驚いた。こんな椅子に、ゆっくり、ゆったりとした気分で全身を委ねて、読書をするか、テレビを見るか、ステレオの名曲でも聴くか……は羨望であつたに相違ない。いつ頃か、この椅子を「床屋の椅子」と言ったように思う。それは、床屋に行った時(間)しか、この様な椅子に掛けられないからか……、形体がそうなのか、どうだったのだろうか。脚台が五本になったのもこれが最初ではなかったか。

(羽原)



380



834

834

048

アントロプス 1949

Antropus

マルコ・ザヌーゾ 1916-

Marco Zanuso

サイズ：W75×D102×H85×SH40

仕様：モールドウレタン、布地張

製造・取り扱い：alfrex/アルフレックスジャパン



1948年12月28日、ソーントン・ワイルダーの "The Skin of Our Teeth" (伊語訳：ラ・ファミーリア・アントロプス)「危機一髪」という戯曲が、ミラノ・ピッコロテアトロで初演された。この劇場のインテリアは、ザヌーゾの手による。このプロジェクトに取り組んでいた時、この肘掛け椅子がイメージされた。

彼は、この椅子を「ラ・ファミーリア・アントロプス」と名付けた。

マルコ・ザヌーゾは、イタリア合理主義の流れのまっただ中で育ち、ラショナルリストとして教育された理念は、彼の作品の随所にうかがうことができる。デザインと生産システムの関係を研究し、工業方法論を展開していく過程でデザインの決定をしていく。

1948年ビレリー社からの依頼により、剛性

ゴムとエラストリックゴムベルトの新しい素材の利用法の可能性の研究を始め、実験モデルの製作が行われた。そこに、アルフレックス社の誕生があった。1951年第9回ミラノ・トリエンナーレに "Lady" と名付けられた椅子が出品され、ゴールドメダルを受賞した。当時、無名の建築家マルコ・ザヌーゾとビレリー社の出会い、そしてアルフレックス社の誕生によって、ここにイタリア・モダンファニチュアの衝撃的な流れの原点をつくったといっても過言ではない。まさに、アントロプスは、源流の一滴の水に相当する、始まりの椅子である。

(河合)



サンパヴロ・オリペッティ工場

049

チェレスティーナ 1978

Celestina

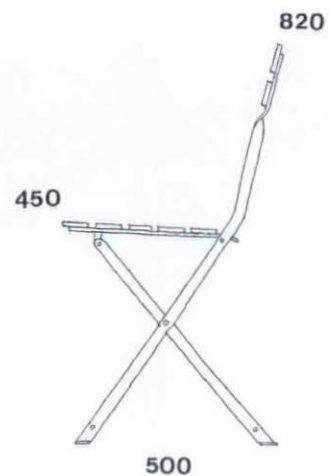
マルコ・ザヌーゾ 1916-

Marco Zanuso

サイズ：W42×D50×H82×SH45
仕様：スチール、牛革
製造・取り扱い：Zanotta/ノバ大島

スチールを皮革で包んだ背と小割板に、柔らかさがあり、全体のフォームに洗練された感覚を感じさせるフォールディングチェアである。作家は、1966～1969年ADI(イタリア工業デザイン協会)会長、ミラノ工科大学建築学科の学部長を務め、またブエノスアイレスのオリベッティ社、ミラノのIBM社、シーメンス社ビルなどの建築を手掛けた。第13回トリエンナーレ展金賞を受賞するなど、インテリアでの受賞も数多い。

(大廣)



050

エジプシャンチェア 1949

Egyptian Chair

フィン・ユール 1912-1989

Finn Juhl

サイズ：W102.5×D91×H93.5

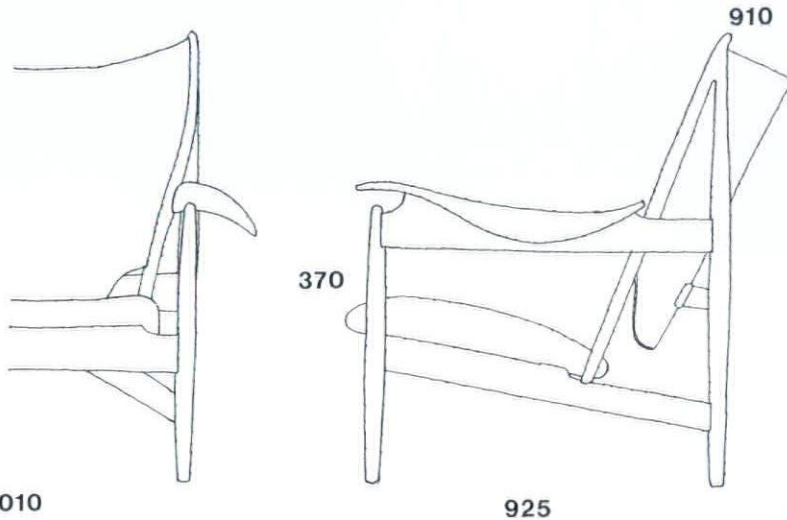
仕様：ローズウッド、皮革

製造・取り扱い：Niels Roth Andersen／小田急ハルク

現代家具デザインの本には必ずと言っていいほど登場する、デンマーク家具の代表的な作品である。デンマークでは家具デザインをする場合、指物師の資格を要求されるが、彼は建築家であったため、その技術も資格もなかった。それをバックアップしたのがデンマークの代表的なスネーカーマスター（指物師の頭領）ニールス・ヴォッダーであった。ユールのデザインする構築的でかつ彫刻的な造形を具現化するヴォッダーがいなければ彼の作品は世に出ることはなかったのではないだろうか。ここに紹介する〈エジプシャンチェア〉と呼ばれる作品はヴォッダーにより78脚だけ製作されたもので、その希少価値からオークションでは大変な高値で落札されたものである。ヴォッダーがリタイアした後、イワン・シュレクターの工房で、製作されたが、現在ではニールス・ロス・アンデルセンの工房で商品化されている。（織田）



フィン・ユール邸、1942



051

ウルムの椅子 1950

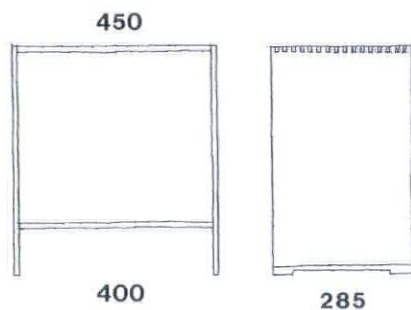
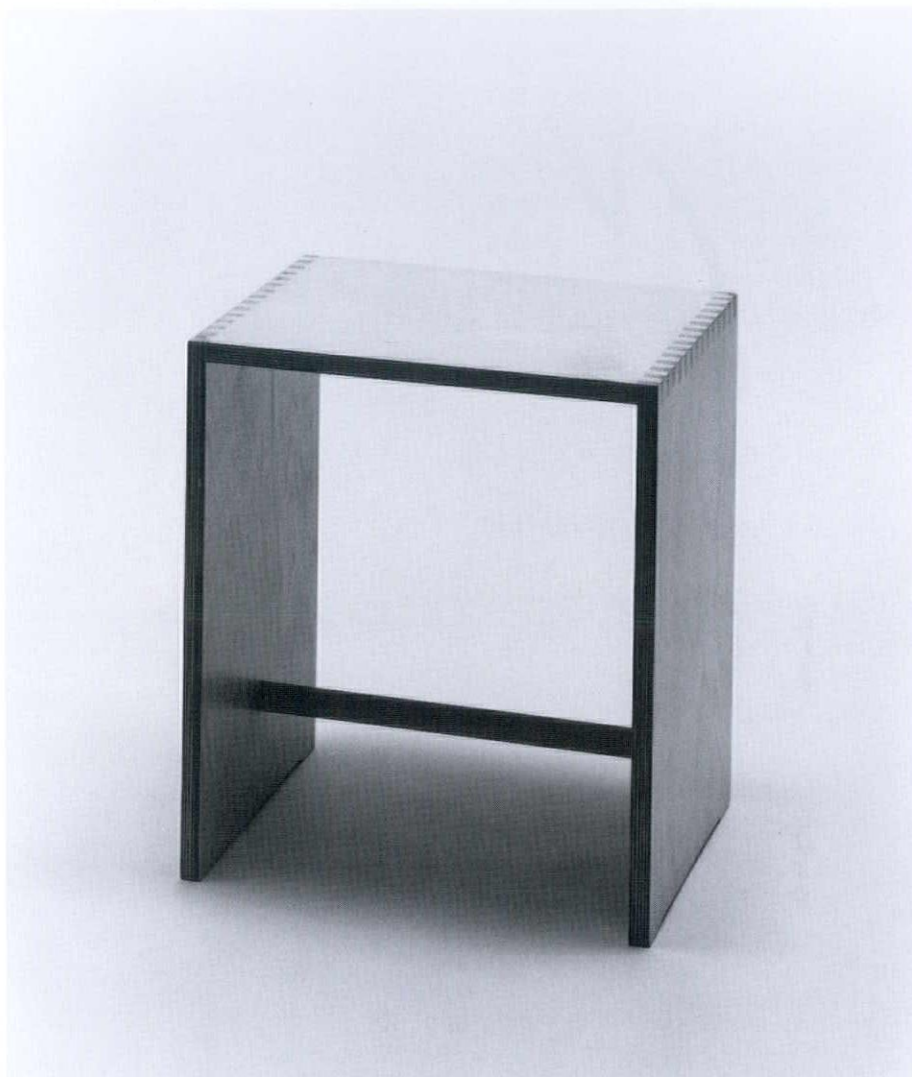
Stool

マックス・ビル 1908-1995

Max Bill

南ドイツのウルムという小さな都市に「ウルム造形大学」というバウハウスを継承する学校が1955—1968年まで開校された。この椅子はこの学校の学生の一人一人のためにデザインされた、と言っても過言ではないだろう。一人の学生が、これを一脚所持して、ある時は本や教材を置いて運び、ある時は展示台になり、ある時は机になる。だからこれはウルム造形大の象徴でもあろう。現在は合板で出来ているものもあるそうだ。(羽原)

サイズ：W40×D28.5×H45
仕様：ビーチ材
置かれた場所：ウルム造形大学
製造・取り扱い：Zanotta／ノバ大島



ウルム造形大学、1950-55

スーパーレジェーラ 1952

Super Leggera

ジオ・ポンティ 1891-1979

Gio Ponti

サイズ：W41×D47×H83×SH45

仕様：トネリコ材、籐張り

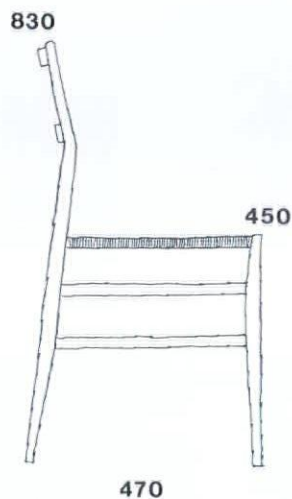
製造・取り扱い：Cassina/カッシーナジャパン

細かい藤の編み方、三角形をした部材の断面、細い細い材料、さらにこの椅子の特徴を最も生かしたヴァリエーションは、明るい生地透明ラッカー仕上げのものだと筆者は思う。この椅子と毎日一緒に生活すると、ある程度の「馴」をされる様な気がするが、どうであろうか。彫刻でいえばジャコモッティの作品の様だというのは、あまりにも単純な見解だが、大空間の中に、ただ一脚だけ置いても、その空間を鳴らすことの出来る椅子である。(羽原)



ピレリービル、1955-60

SD9606



053

カブリエラ 1973

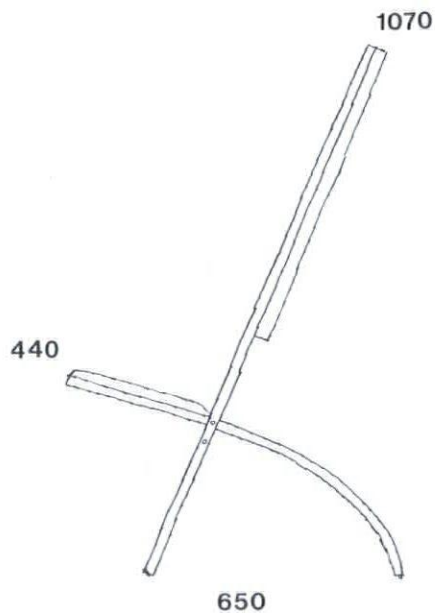
Gabriera

ジオ・ポンティ 1891-1979

Gio Ponti

サイズ：W59×D65×H107×SH44
仕様：スチール・クロームメッキ、皮革張
製造・取り扱い：Pallucco

座の奥行きが極端に短い椅子だ。それだけに、座のテーパーは後ろにストンと落ち込むように設えられてあり、そのことで深く傾斜してしまう人体をしっかりを受け止めてくれる背は幅広く高く大きい。実を言えばこの椅子に座ったことはない。ちょい座りには大いに向くものではあれ、しかし、通常に利用してのかなりの時間でも耐えられるように思われる。もともと、これくらいにもなれば、単に掛け心地などだけ云々しても始まらないだろう。見た目に美しいというだけでも、結構楽しめる椅子だってあるのだ。(光藤)



デンマークには3本脚の名作椅子が数多くある。ハンス・J・ウェグナーやポール・ケアホルム、ルッド・チュエセン&ジョニー・ソーレンセン、ヨルゲン・カストホルム&プレベン・ファブリシウス、ハンス・オルセンなどのデザイナー達がいずれも素晴らしい作品を残している。他の国に比べてデンマークに3本脚の椅子が多いのは、古い民家を見るときに気づける。日本の古い民家のようにデンマークの古い民家にも土間があり、しかもそこには丸い石を沢山敷きつめてあり4本脚の椅子では安定感が得られないため、3本脚の素朴なストूलが使われてきた。この様な下地から現代のデザイナー達も3本脚にこだわり、名作を生み出したのであろう。この、日本にも馴染みの「蟻チェア」はコペンハーゲンのNOVO製薬会社の社員食堂のためにデザインされたもの。製作された当時のものは強度に問題がありスチールパイプの中に補強材が入れられていたようだ。日本ではPL法のこともあり、残念ながら現在は3本脚タイプのものは輸入されていない。(織田)



エッグ・チェア+オットマン 1958-1959

Egg Chair + Ottoman

アルネ・ヤコブセン 1902-1971

Arne Jacobsen

サイズ：W74×D68×H75×SH38, W56×D41×H44(stool)

仕様：F.R.P.、アルミ、皮革

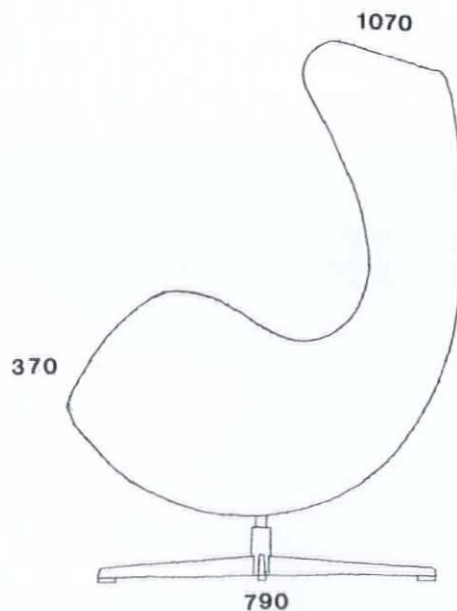
置かれた場所：S.A.S.ロイヤルホテル

製造・取り扱い：Fritz Hansen/アクタス

ヤコブセンはデンマークを代表するインターナショナルスタイルの建築家であった。それだけに彼がデザインする家具には、デンマークの家具デザイナー達とはひと味違った材料の選択が見られる。このエッグチェアもそれまでにない材料の使い方であった。硬質発泡ウレタンを成型し、有機的な美しいフォルムに仕上げたのである。1950年代から60年代にかけては、石油系の新素材がデザインフォルムに新しい革命を起こした時代と言えるだろう。このエッグチェアの初期のスケッチを見ると4本の金属の脚のデザインを考えていたようだ。そして5分の1位のスケールモデルを見るとスチールを使ったカンティレヴァー構造となっている。いくつかのリ・デザインの後に現在のデザインに落ち着いたようだ。このエッグチェアは〈スワンチェア〉や〈ザ・ドロップチェア〉、〈ザ・ポットチェア〉と呼ばれる椅子と共にコペンハーゲンのSAS（スカンジナビア航空）ロイヤルホテルのためにデザインされたものである。（織田）



SASロイヤルホテル、1960



056

ダイニングチェア 1950年代 Dining Chair

アントニン・レイモンド、ノエミ・レイモンド 1888-1976
Antonin Laymand, Noemi Laymond

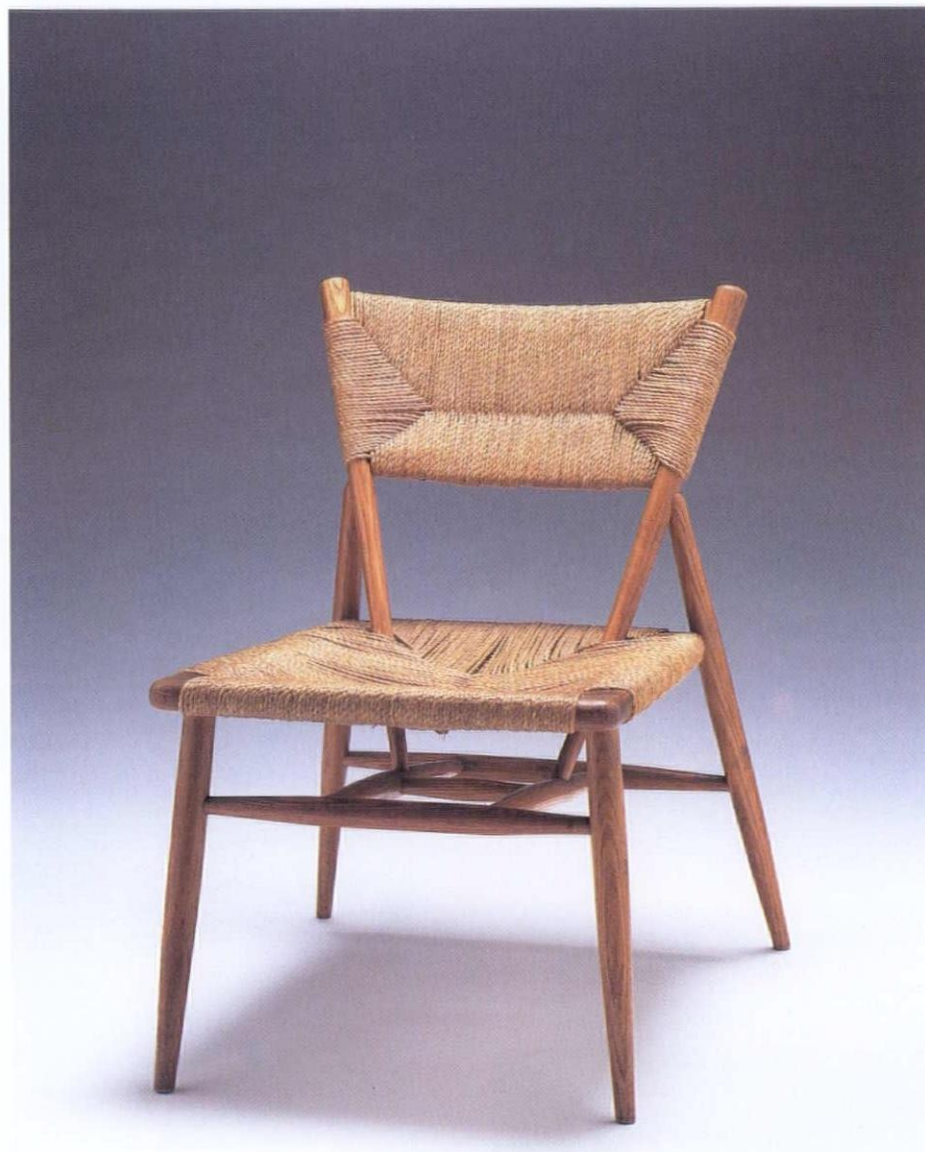
サイズ：W60×D63×H77×SH41

仕様：ナラ材

置かれた場所：井上邸

井上邸のためにデザインされたダイニングチェア。地元の良質なナラ材によってつくられており、直線的で日本的なデザインの中に、初期の北欧モダンを取り込み、うまく融合している。各寸法も日本人に合ったものとなっていて、非常に座りやすい椅子である。椅子の構造美、それを構成する素材の選定、そして、木工職人の質を感じることができる。

(編集部)



057

フィオレンツァ 1952 Fiorenza

フランコ・アルビーニ 1905-1978
 Franco Albini

サイズ：W73×D92×H103×SH44
 仕様：フナ材、ウレタンフォーム、布地張
 製造・取り扱い：alfrex/アルフレックスジャパン

イタリアデザインと言うと、モダンなものか、あるいはクラシックな様式時代の両極端なデザインが思い浮かぶ。そうした中で珍しく、この〈フィオレンツァ〉は古典的な要素とモダンな要素がうまく調和したデザインにまとめられた作品と言える。すなわち、ウィングバックの伝統的な安楽性と、大胆なX型に交差した側面のフレームは、当時、「不朽の肘掛け椅子」と言わしめたほどの名作である。彼はこの〈フィオレンツァ〉と同じ構造のウィングバックの作品を1940年のミラノトリエンナーレに出品している。その作品は、この作品と比べ曲線が強調されたデザインとなっている。そして2人用のソファまでセットでデザインされていた。また、同じ1940年にチャーリッヒの家具デザインコンペには同じウィングバックではあるが、フレームがX型ではないイーゼルチェアを発表している。いずれも同一線上にあるデザインと言える。（織田）



リナシェンテ百貨店、1957-61

058

ルイザチェア 1955

Luisa

フランコ・アルビーニ 1905-1978

Franco Albini

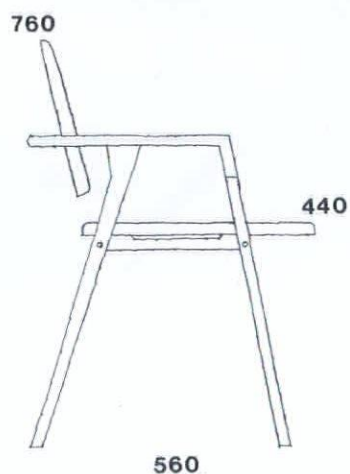
サイズ：W56×D56×H76×SH44

仕様：ウォールナット、茶染木ポリウレタン樹脂塗装、皮革

製造・取り扱い：POGGY/アルフレックスジャパン

ミラノのリナシェンテ百貨店が、あらゆるデザインの向上と振興を目指し、「黄金のコンパス賞—コンパッソ・ドーロ」を設けた。この賞の対象はヨットや自動車からコーヒーカップまで、その分野は広く、厚い。ミラノトリエンナーレと並びこの賞がイタリアのデザインの質を高めたのは言うまでもない。写真のルイザチェアは、1954年、フランコ・ヘルグと共に考案、デザインスケッチが描かれた。翌年、このデザインはカルロ・ポッジ社において実現され、その年の「黄金のコンパス賞」を獲得したのであった。この〈ルイザチェア〉の前にデザインされた、同じ構造をもつ作品が1945年に見られるが、その作品はフレームにスチールパイプを使ったデザインであった。その後、1949年には木製のフレームで、〈ルイザチェア〉の前進とも言えるデザインを発表している。写真のルイザチェアはディテールの美しい作品で、特にその接続部分は組継でデザイン上のポイントにもなっている。

(織田)



059

プレッツェル 1959 Pretzel

ジョージ・ネルソン 1908-1986
George Nelson

サイズ：W58×D48×H79×SH50
仕様：アッシュ材、布張（座面）

ジョージ・ネルソンと言えば、チャールズ・イームズ、エーロ・サーリネンらと並ぶ、アメリカを代表する建築家であり、デザイナーでもある。そしてまた、彼等らは共同で仕事したり、ノール社、ハーマン・ミラー社というインターナショナルな家具会社でも共に活躍している。そのため、彼等のデザインした作品には、よく似たデザインが見られるのもその特徴であろう。特にネルソンの作品には、他のデザイナーの作品との類型的なものがよく見られる。それらのデザイン年を見ると、それぞれ影響を与えたり、受けたりしていることがよく解る。この〈プレッツェル〉と名付けられたアームチェアは1959年にデザインされている。しかし、この作品も1956年にデザインされた、ノーマン・チェーナーのアームチェアにその原型を見ることができる。「リ・デザイン」とは前作を単に模倣するのではなく、前作に超えようとする姿勢がはっきりと見て取れるものであろう。この時代の作品にはそうした活気に満ちた作品が数多く見られ、刺激的な時代でもあった。（織田）



060

ココナッツチェア 1956

Coconut Chair

ジョージ・ネルソン 1908-1986

George Nelson

サイズ：W105×D85×H79.5

仕様：Steel、Fabric



ジョージ・ネルソンと言えば、チャールズ・イームズと共にハーマン・ミラー社を、それまでの名もない小さな家具製造会社を世界のトップブランド企業にまで成長させた人物として名高い。また、建築家としてのみならず、著述家としても数々の著書を残している。その中には『CHAIRS』と言う、椅子ファンなら絶対に欲しくなる著書もあるが、うれしいことに最近復刻版が出版された。ネルソンもイームズと同様、ハーマン・ミラー社から数々の名作を発表しているが、この〈ココナッツ

チェア〉もそのひとつ。ココナッツの割れ殻からヒントを得たとのことである（後にヤコブセンは同じ発想でエッグチェアを発表している）。しかし、この〈ココナッツチェア〉は明らかに、1952年ノール社からハリー・ベルトイアが発表した〈ダイヤモンドチェア〉を意識していたものと思われる。ベルトイアのワイヤーメッシュのものと比べると、このココナッツチェアは5cm程のクッションがあり安楽性ははるかに高い。（織田）

ピアノチェア 1955年頃

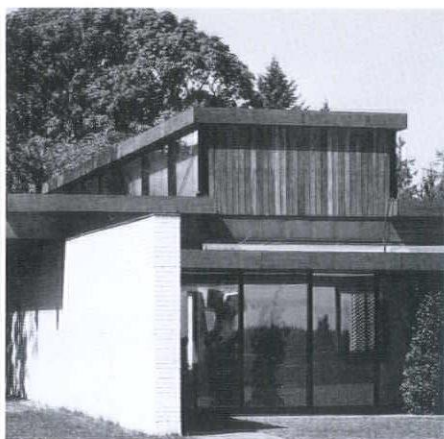
Piano Chair

ヴィルヘルム・ヴォーレート 1920-
Vilhelm Wohlert

サイズ：W47×D46×H74
仕様：Painted Wood

コペンハーゲンから美しい海岸線に沿って北上すること30数キロメートルのHumblebackに、世界的にも有名な、デンマークを代表するモダンアートの殿堂、ルイジアナ美術館がある。展示スペースの一部が地下に設けられ、まわりの環境によく調和した、この美術館は、ヴィルヘルム・ヴォーレートとヨルゲン・ボーの共同設計により生まれたものである。ここに紹介する〈ピアノチェア〉はその美術館のためにデザインされたものではないが、肘を支えるパーツや後脚の処理にいかにも建築家らしい構築的なものを見ることができる。座は、その下部にある金具によって上下に調節することが可能である。木地仕上げのタイプも製作されていたようだ。ヴォーレートデザインのルイジアナチェアはピーター・イエベセン社で製作されていたので、このピアノチェアも同社で製作されたものかもしれない。

(織田)



ルイジアナ美術館、1958-82



062

ラウンジチェア 1957

Lounge Chair

フローレンス・ノール 1917-
Florence Knoll

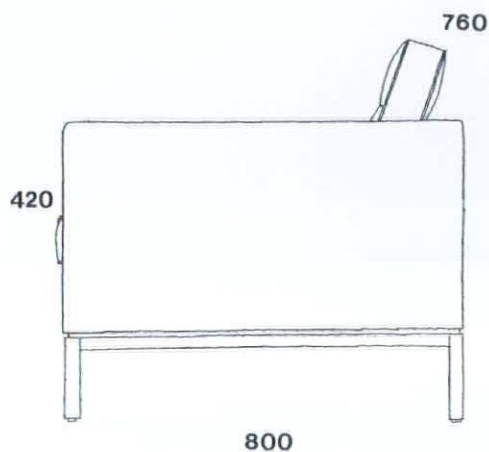
サイズ：W81.5×D80×H76×SH42
仕様：スチールパイプクロムメッキ、ウレタンフォーム芯布地張
製造・取り扱い：Knoll International/ノール インターナショナル
ジャパン



「私はデザイナーではない」と言い切るフローレンス・ノールが「プランニング・ユニット」という名の一群の家具をプロデュースしている。レセプションや応接間に置かれる、ミース、ベルトイア、サーリネンなどの名作椅子を、いわば結びつけて、今迄のオフィス環境を一変させた、このラウンジチェアの出現は新鮮だった。

角パイプの脚に、ボタン締めをした方形の背と座を乗せたカチッとしたフォルムは、バルセロナチェアの背と座を彷彿させる。一連の家具とそのPR印刷物を通じて感じるノール社の企業姿勢は、当時の建築家やデザイナーを魅了した。

フローレンス・ノールとノール社の活動を見ると、人と人との縁から生まれる素晴らしい組み合わせのドラマを見ているようで、デザイン以外の興味も尽きることがない。（島崎）



063

アスラックチェア 1957 Aslak Chair

イルマリ・タピオヴァアラ 1914-
Ilmari Tapiovaara

サイズ：W53×D50×H73.5
仕様：birch(polywood)
製造・取り扱い：アスコ社

エリエル・サーリネンやアルヴァ・アアルトと言った巨匠の建築家は日本でも馴染み深いですが、イルマリ・タピオヴァアラと言うとあまり詳しくは知られていないようだ。しかし、フィンランドデザインというものを広く世界に知らしめた中心的な人物の1人として彼の功績は大きい。1951年のミラノトリエンナーレでフィンランドが獲得したメダルは6個のグランプリ、7個の金メダル、8個の銀メダルであった。以降、フィンランドがデザインの分野で世界の注目を集めることになったのである。タピオヴァアラは当時北欧最大の家具メーカーでもあったアスコ社と契約、数多くの家具を発表していった。この〈Aslak〉もアスコ社からのもの。背、座、脚部などすべて成型合板製。特にこの椅子を特徴づけている後脚上部の肘部分では、合板をフィンガージョイント式に組み合わせ、縦横の曲げを可能にしている。脚部の断面も上部から下部へとその形を変化させた、ディテールの美しい作品である。(織田)



ラウタサリ教会、1955

メッツアドロ 1957

Mezzadro

アキッレ&ピエール・ジャコモ・カスティリオーニ 1918-
Achille & P.G.Castiglioni

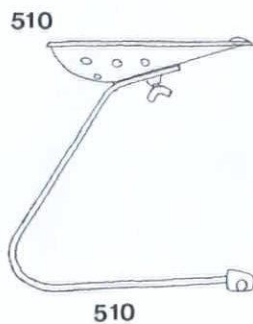
サイズ: W49×D51×SH51

仕様: スチール(座面)、スチールクロームメッキ、ブナ材(脚)

製造・取り扱い: Zanotta/ノバ大島

メッツアドロは、その原型を1954年に開催された第10回ミラノ・トリエンナーレに見ることができる。その3年後、同じく第11回トリエンナーレにおいて、現在の形となる椅子を出品している。

カスティリオーニの才覚と彼自身の機転の良さは、日常的に私たちが見かける部品を組み合わせ、再編成する作品に明瞭に現れている。そして、今や人々によってわすれられてしまった、過去に考案されたものを再発見し、その可能性を見出す。彼によって手を加えられたものは、量産に適する形に変えられ、誰もが慣れ親しんだものをその時代にふさわしい新しいものへと移し変える。メッツアドロは、トラクターの椅子を私たちに想像させ、彼の厳密な計算のもと、部品のひとつひとつは最高の次元までリファインされている。その密度は高い。(河合)



065

スプルーガ 1960

Spluga

アキッレ・カスティリオーニ 1918-

Achille Castiglioni

ミラノのビアホール“Splügen”のバーカウンター用ハイスツールとして、デザインされたもので、60年代流行したポップの先駆けとなった作品。斬新で大胆なフォルムは当時の行動力さえ感じさせる。 (大廣)

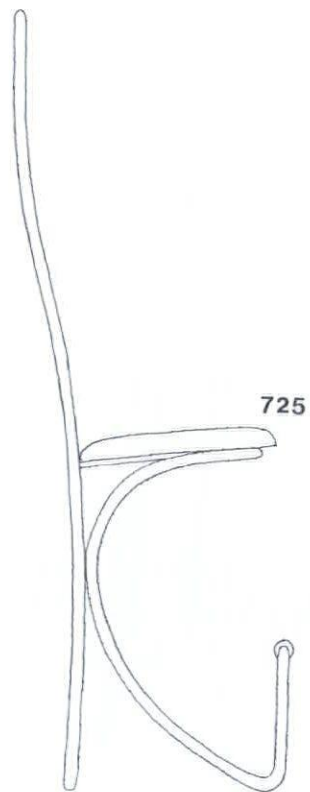
サイズ：W36×D52×H157

仕様：スチール、皮革（座面）

置かれた場所：ミラノのビアホール「シュプリューゲン」

製造・取り扱い：Zanotta／ノバ大島

1570



725

520



チンクアンタノーベ 1959

Cinquantanove

アンジェロ・マンジャロッティ 1921-

Angelo Mangiarotti

3つの素材からの発想

第1は、木の素材を用いたハイバックチェアである。イタリア産ノーチェ（ウォールナット）材を使用したもので、椅子の構造上必要な断面を最小限まで、絞り込んだ超軽量の木造の椅子である。しかし木という素材をあくまでもやさしく、あたたかく表現している。その姿は、エレガントの一言に尽きる。

第2は、グラスファイバーにより補強されたFRPを用いた椅子である。自由形態が可能な素材の特性を限りなく生かしたものである。マンジャロッティの感性と力学的な冷静な判断が、椅子の構造上必要な各部を一体化して、3次元曲面での構成を実現化させている。スプーンを曲げたような独特の形態を持つこの椅子は、何かに包まれたような、やさしい不思議な座り心地である。

第3は、イタリア産の石、ピエトラセレーナを用いた外部用のベンチである。カラララの石工場で開発された特別なカットニングの技術を利用したものである。コンピューター制御されたカットニングマシンが、ひとつの石のブロックから図にある平面形を切り出していく。長年にわたる素材の特性と技術の研究の中で、石のブロックの有効利用を考えたスタディのひとつとしてデザインされたものである。人が座るという機能をもつ椅子において座面に緩やかな曲線をしつらえ、石の椅子は、冷たさから温かさへと変貌し、また、建築家、アンジェロ・マンジャロッティは、その表面を人間の美しい肌のように仕上げた。

(河合)



067

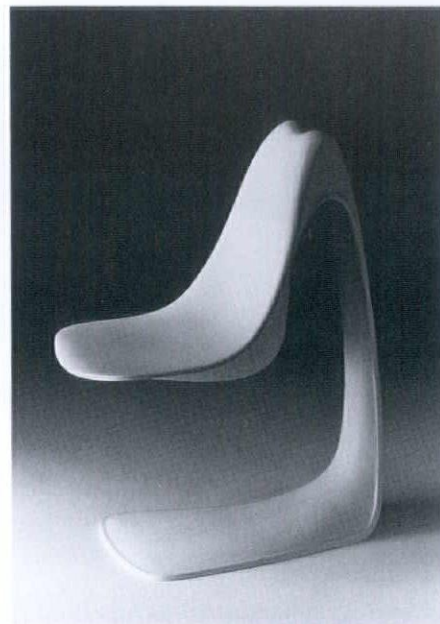
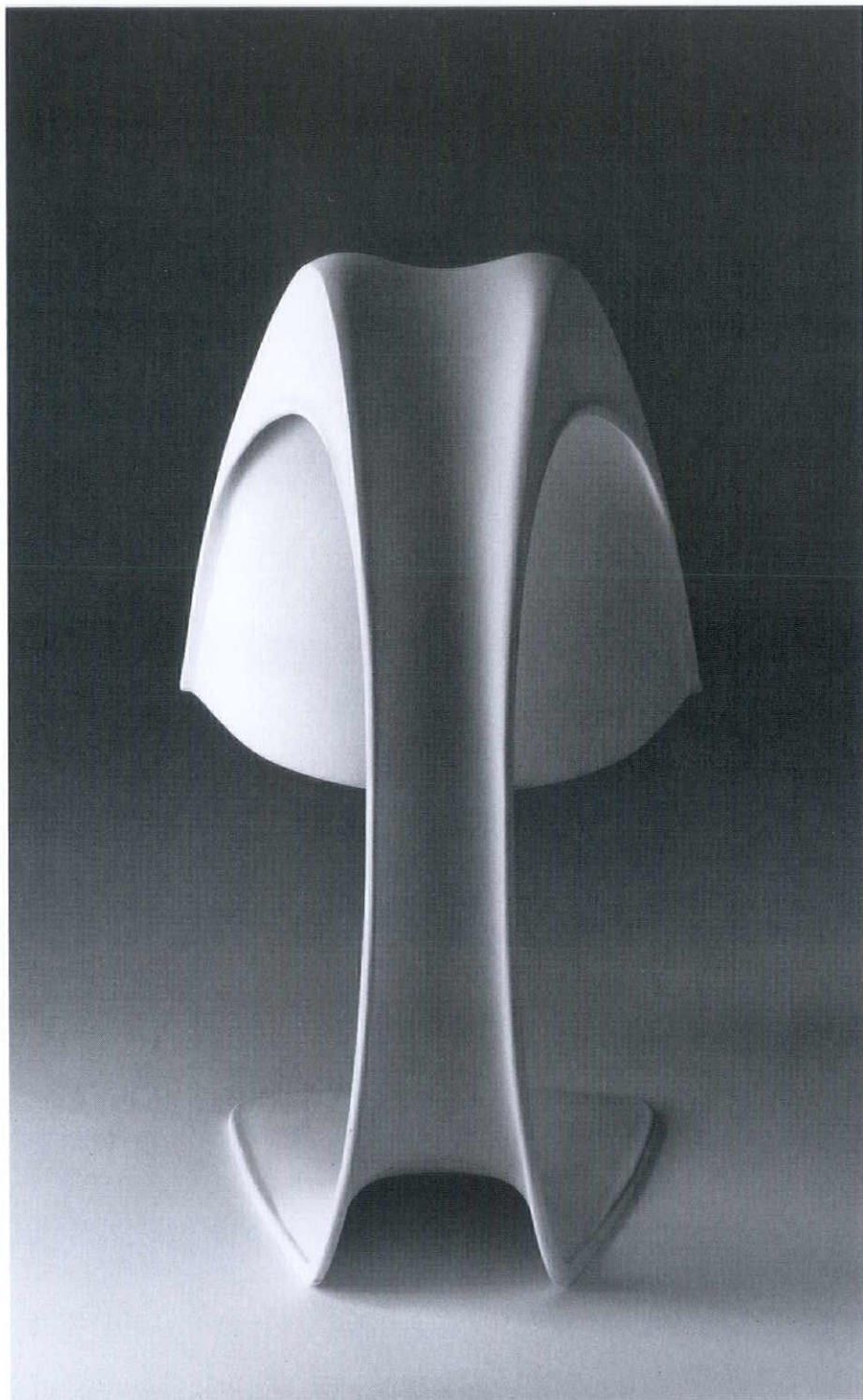
シカゴ 1983

Chicago

アンジェロ・マンジャロッティ 1921-

Angelo Mangiarotti

サイズ: W60×D70×H92×SH45
仕様: グラスファイバー強化F.R.P



068

サイズ：W49×D55×H41

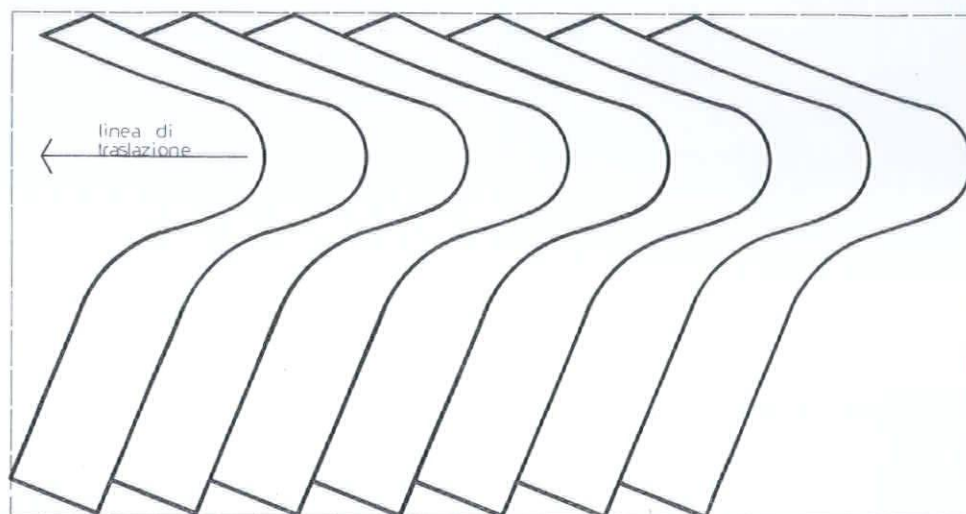
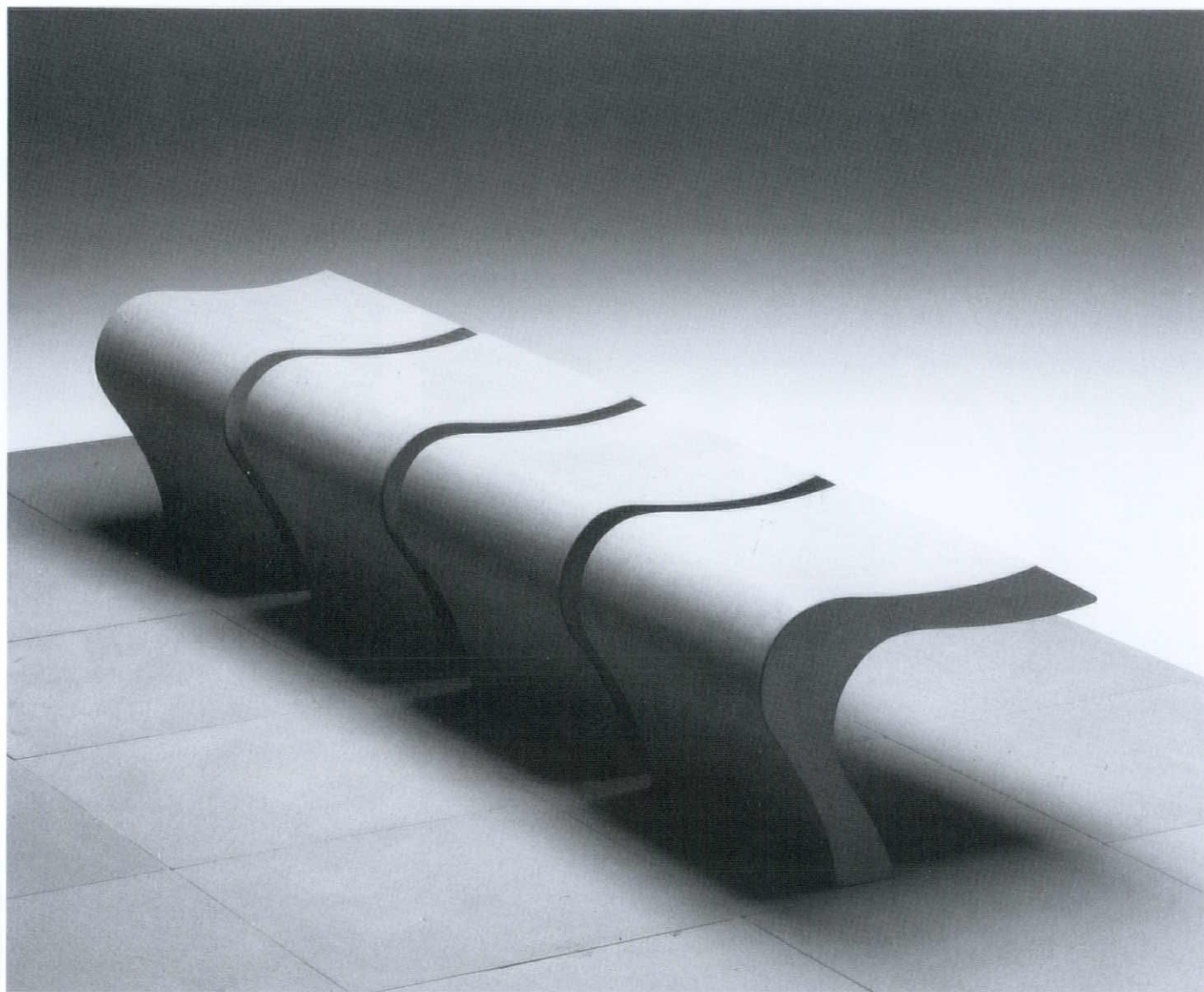
仕様：ピエトラセレーナ

クリツィア 1990

Clizia

アンジェロ・マンジャロッティ 1921-

Angelo Mangiarotti



069

ロッキングチェア 1962 Rocking Chair

ガエ・アウレンティ 1927-
Gae Aulenti

サイズ：W75×D100×H90
仕様：曲木、塗装、皮革張り
製造・取り扱い：Poltronova



オルセー美術館、1980-86

古くから親しまれている曲木のロッキングチェアを現代風にアレンジしたもの。エレガントでシックなフォームの中にどこかエクレクティクな感性が感じられる。

(大廣)

070

アームチェア 1975 Arm Chair

ガエ・アウレンティ 1927-
Gae Aulenti

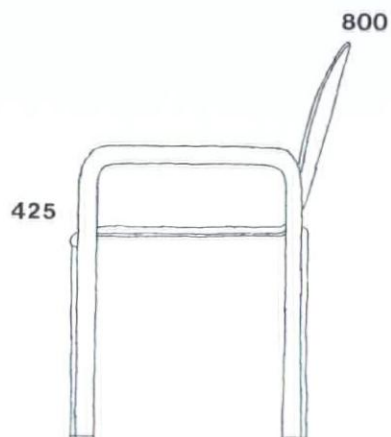
サイズ：W80×D86×H75×SH41

仕様：アルミ押出成型、皮革

製造・取り扱い：Knoll International / ノール インターナショナル
ジャパン



軽やかでエレガントなフォームはシックで格調高いイメージと洗練された感性を感じさせてくれる。同タイプには他にラウンジチェアがある。作家は女性建築家として高い評価を得ており、1960年にはイタリア工業デザイン協会(AID)理事、1960年にはバリ建築アカデミー建築家メダルを受賞している。住宅設計や造園、舞台装置など多方面に活躍している。 (大廣)



540



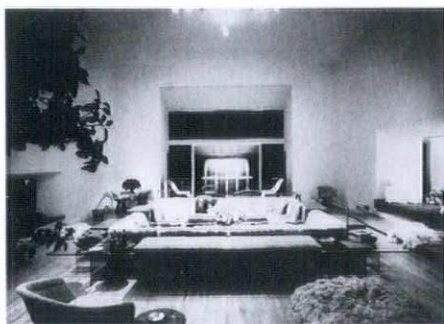
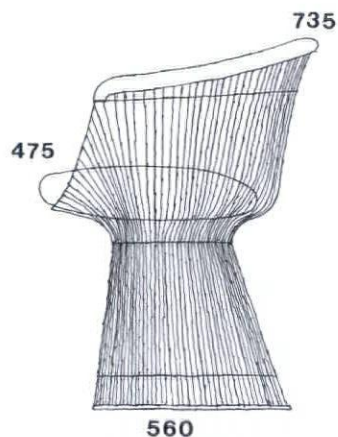
071

アームチェア - 1725 1966

Arm Chair - 1725

ワーレン・プラットナー 1919-
Warren Platner

サンフランシスコのホテル・ハイヤット・リージェンシーのラウンジに、スカルパのソリアナと、そしてプラットナーのこれが並べられていた。70年代に入ってすぐの頃で、世界のめばしい都市には、まだヒッピー族が大手を振っていたのだが、ここでも裸足で蓬髪、髭ぼうぼうの彼らが、そしてソリアナのあちこちに屯している情景が見られたものだ。しかし、今思い出せば、プラットナーのそれに腰掛けていたヒッピーは居なかった。そう言えばアームチェア・1725（何故1725なのかは知らない）に「裸足で蓬髪、髭ぼうぼう」は似合いそうもない。そんな品格がこの椅子にはある。だからと言ってソリアナならいいというわけではないが、彼らがそれとなく敬遠した理由が分かるほどに重厚そのもの、といった代物だ。ちなみに物理的にもきわめて重く、簡単には移動出来ないのが難点だ。（光藤）



W.プラットナー邸、1970

サイズ：W66.5×D56×H73.5×SH47.5

仕様：スチールワイヤーニッケル仕上げ、グラスファイバーシ
ェル、モールドフォーラムラバー布地張り

製造・取り扱い：Knoll International / ノールインターナショナル
ジャパン



072

セレーネ 1969

Selene

ヴィコ・マジストレッティ 1920-

Vico Magistretti

サイズ：W47×D50×H75

仕様：グラスファイバー強化F.R.P.

製造・取り扱い：Artemide/アルテミデ



紙の模型でアイデアを練ったという。弾力性のあるシンプルなデザインの中に何か若々しさを感じさせてくれる作品である。作家は、ミラノ工科大学卒業後、都市計画から建築、インテリア、家具の分野で活動。特に家具デザインでは、カッシーナ社の「マラルunga」を始め、多くの作品がニューヨーク近代美術館の永久展示品となっている。 (大廣)

073

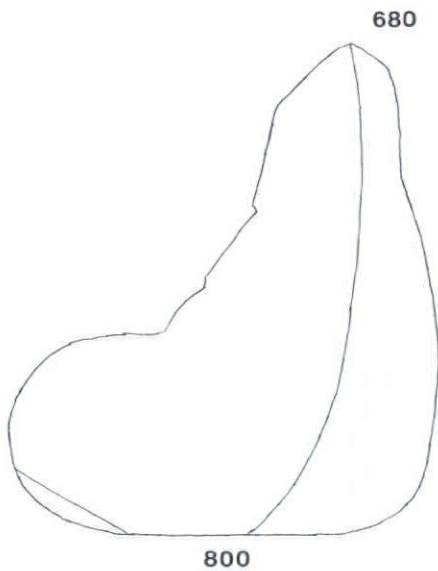
サッコ 1968

Sacco

P. ガッティ+C. パオリーニ+F. テオドロ 1940-, 1937-, 1939-
P. Gatti, C. Paolini, F. Teodoro

サイズ：W80×D80×H68
仕様：耐候性ポリエチレン、皮革
製造・取り扱い：Zanotta/ノバ大島

ポリスチロールの細粒子をスキフレックスカバーに入れたもので、座る姿勢により自由に形状を整えることができる。座る人をこばまない自在変化の椅子。座り心地は決して良いとはいえないが、ポップ時代の最大の革命的椅子として、その発想は世界的に大きな評価を得ている。「サッコ」とはイタリア語の袋の意味。1968年のオリジナルでは塩化ビニールの袋が使用されている。(大廣)



074

ソリアナ 1970

Soriana

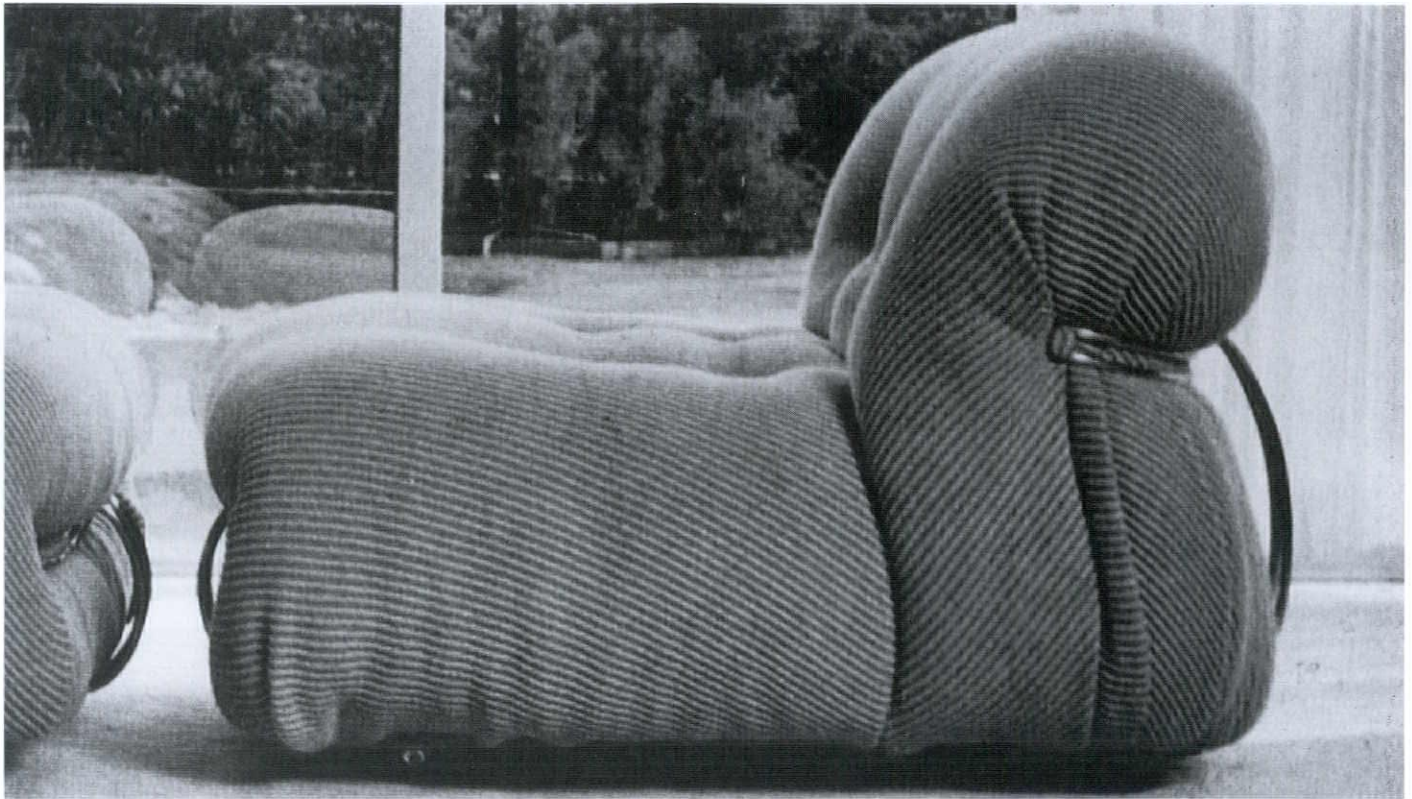
アフラ+トビア・スカルパ 1937-, 1935-

Afra+Tobia Scarpa

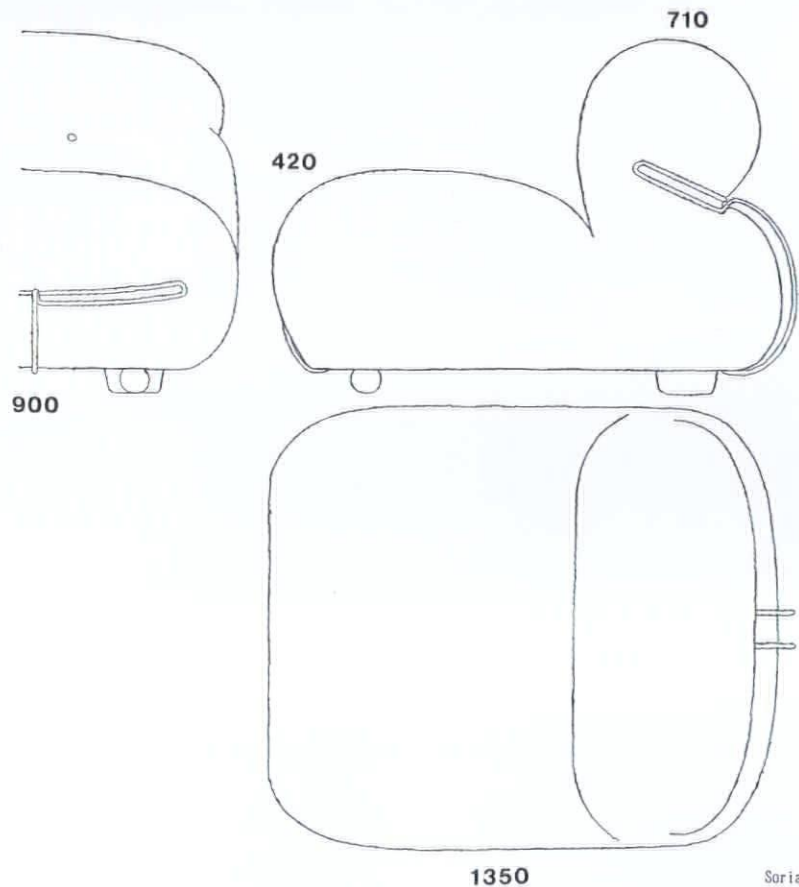
サイズ：W90×D135×H71×SH42

仕様：ダクロンガラス繊維、布張

製造・取り扱い：B&B ITALIA/アルフレックスジャパン



最もイタリアらしい、イタリアでなければ生まれて来ない椅子である。その材料・形態・構造などが、創造性と自己完結的独立的平衡感覚によって形造られている。イタリアの歴史が語るように建築家を中心に、あるいは建築家から出発するイタリアのあらゆる造形の、あるひとつの表現と言えるだろう。金属と布の対比が、それぞれの特徴を生かして、見せる場を作っている。(羽原)



Soriana

075

ディアロゴ 1974 Dialogo

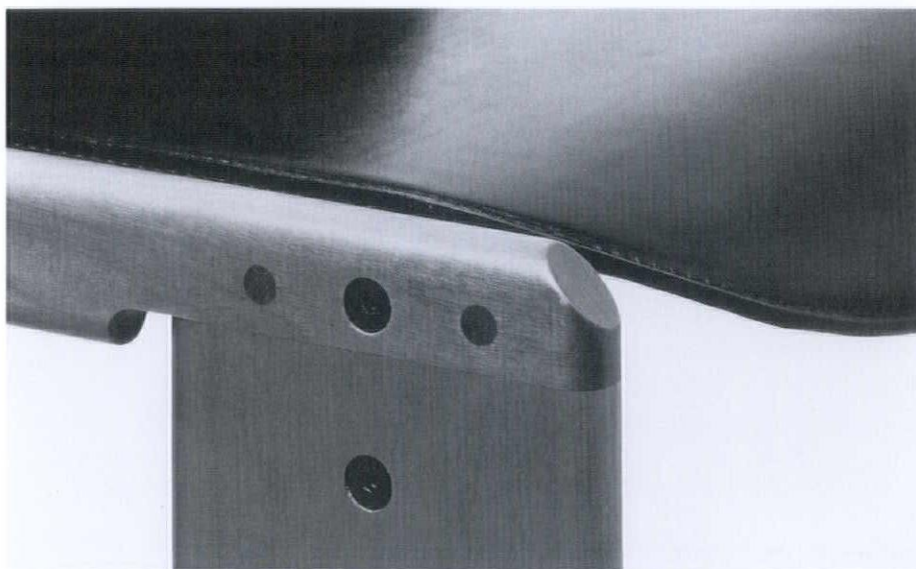
アフラ+トビア・スカルパ 1937-, 1935-
Afra+Tobia Scarpa

サイズ：W54×D54×H80
仕様：トネリコ材、皮革張
製造・取り扱い：B&B ITALIA／アルフレックスジャパン

木目の美しさと皮の美しさ、さらにビスの美しさをそのまま生かした、ちょっとオーバーに言えば、いわゆるエレメンタリズムを主張する椅子である。ある部分を隠すのではなく、全部を見せるのである。だから、すべての材料・部材を厳密に選択しなくてはならない。写真でも分かるように、ディテールの仕上げにも神経が行き届いている。永年使用して透明の塗料が薄くなり、手の脂で、独特の感じが背や座の皮の部分と共に出てくるに相違いない。（羽原）



アフラ+トビア・スカルパ邸、1969-75



076

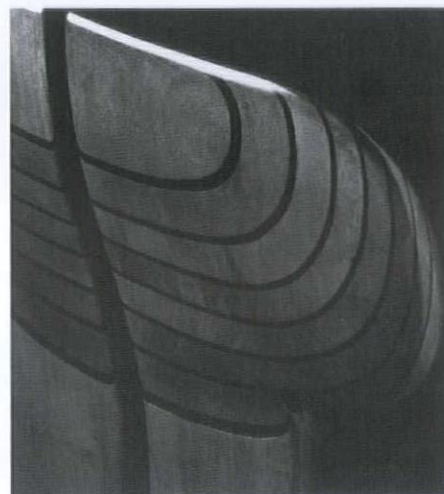
アフリカ 1975 Africa

アフラ+トビア・スカルパ 1937-, 1935-
Afra+Tobia Scarpa

サイズ：W56×D50×H78×SH44
仕様：ウォールナットおよびローズウッド、ムク材重ね細工、
革張（座面）
製造・取り扱い：B&B ITALIA/アルフレックスジャパン



アフリカという名前が、まず面白い。名前が先なのか、製品ができたのが先なのか筆者は知らないが、背につけられた線の形がどこかアフリカを感じさせる。色彩もアフリカ的である。アフラ+トビア・スカルパの一連の椅子には、棒状の脚はない。家具等も含めて脚の部分が全てと言ってもいいほど、板状である。この板状の形体がアフラ、トビア・スカルパ独特の雰囲気を出している。また、色彩も高品質の材料の質感を満足させる、自然なものが多い。（羽原）



077

ラウンジチェア(プロトタイプ) 1968 Lounge Chair

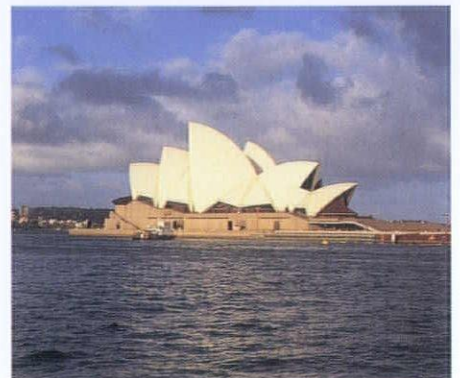
ヨーン・ウッツォン 1918-
Jorn Utzon

サイズ: W75×D97×H92
仕様: 楓材、スチール、布地張



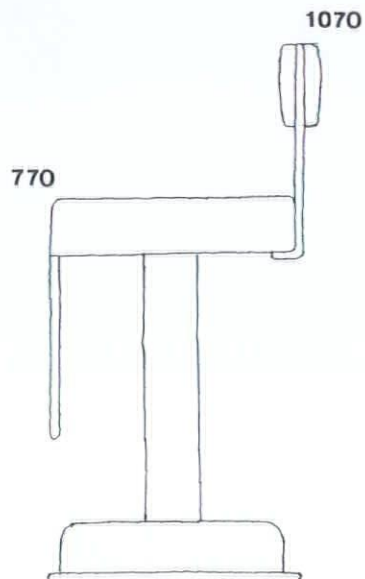
ヨーン・ウッツォンはアルネ・ヤコブセンと共にデンマークを代表する国際的な建築家である。ウッツォンの名前は知らなくても、シドニーのオペラハウスの美しいカーブは日本人にも馴染みの深いものである。その美しく、ダイナミックな曲面がこの椅子にも見られる。背はメープル材のラミネート製である。この作品の商品化されたモデルは、スチールパイプの脚部が後方に流れるようなラインを描くデザインとなっている。写真の作品はウッツォン自身が所有していた4脚のプロトタイプ

のうちの1脚で、7～8年前にコペンハーゲンのオークションに出品されたものである。かなり大振りな椅子である。(織田)



シドニー・オペラハウス、1973

イタリアを代表する建築家で、デザイナーでもあったジョエ・コロンボ。わずか41歳という若さで亡くなってしまったが、34歳からの7年間に40にものぼる受賞や称揚を獲得している。彼の家具デザインの歴史を見ると31歳頃から次々と作品を発表している。この点からも数々の受賞の対象となったのは家具、照明器具などのプロダクトデザインの分野であったと思われる。そしてそれらはオリジナリティに溢れており、また、彼の建築空間に見られるようなフレキシブルな感覚がそのデザイン全体にも感じられる。イタリアのデザインと言うとデザインが先行し、機能性がやや疎かにされがちであるが、彼のスケッチを見ると、そうした機能面や、生産ラインに合った構造についても検討がなされており、優れたインダストリアルデザイナーとも言える。このバー・ストूलもよく考えられており、ベース部は安全性を高めるためかなり重くしてある、また、シート部は回転するが、必ず正面の位置にもどる機構となっている。このシリーズとして座高の低いストूलやオフィスチェアもデザインされていた。（織田）



コロomboチェア 1965 Colombo Chair

ジョー・コロombo 1930-1971

Joe C. Colombo

サイズ：W42.5×D50×H71×SH43
仕様：ポリプロピレン
製造・取り扱い：Kartell/インターデコール

元来アルミニウムによって製作されるために考えられたものである。実際は、ポリプロピレンにより1967年に製造が開始された。この椅子は脚部と座部の2種類のパーツで構成され、脚部は取り替えられるよう考えられている。写真のものは、スタンダードで、より高いバーストゥールへも変えることができる。また脚部を除いた上部のみでは、子供のための椅子としても使用できる。そしてスタッキングをも考えられたものである。

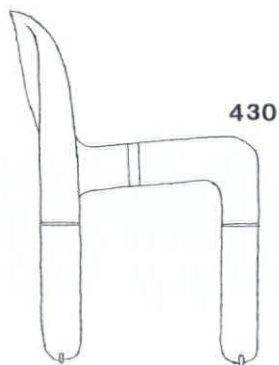
この椅子は、パリ装飾美術館、アムステルダム・ステデリック美術館、ニューヨーク近代美術館のパーマネントコレクションになっている。

単一素材を用い独自の形態と機能性を持ち合わせた、ジョー・コロomboのオリジナリティーあふれる作品である。

1970年Compasso d'oro賞（イタリア）を受賞。

（河合）

710



500



080

ダイニングチェア 1976 Dining Chair

カルロ・スカルパ 1906-1978

Carlo Scarpa

サイズ：W44×D44×H91×SH44

仕様：ノーチェ材、皮革

製造・取り扱い：Bernini

カルロ・スカルパは日本の仙台で死んだ。聞くところによると彼は非常に日本が好きであり、日本の形から影響さえ受けていたと言う。確かに、日本の箱根細工の彫刻を思わせる様な幾何学的で精緻なディテールがある。この椅子は息子のトビアのものと形態・材料は一見似ているが、ディテールやわずかなプロポーションの相違に、カルロ独特の美学が潜んでいる。それを発見できるか、できないかがカルロ・スカルパを見抜くか、どうかに関わっている。

(羽原)



プリオン・ヴェガ墓地。1970-72

081

ケンタッキー 1977

Kentucky

カルロ・スカルパ 1906-1978

Carlo Scarpa

サイズ：W50×D41×H105×SH45

仕様：ノーチェ材、皮革

製造・取り扱い：Bernini

シェーカーと言えば、1774年アン・リーがイギリスからシェーカー教団を率いて、アメリカ東海岸に上陸し、そこで展開した独特の建築・家具のデザインから始まっている。それは、できるだけ装飾を排除し、できるだけ贅肉を取り、できるだけ単純明解にしようとした思念から生まれた作品群である。そして「作ったものは1000年使用し、自分達人間は明日死ぬつもりで仕事をしなさい」と説教したのであった。このシェーカー教の影響を受けた、デザイナーは多い。このスカルパもそうであろう。東に、デンマークのデザイナー、Børge Mogensenにもシェーカーと命名された名作がある。

(羽原)



082

キャブ 1977

Cab

マリオ・ペリーニ 1935-

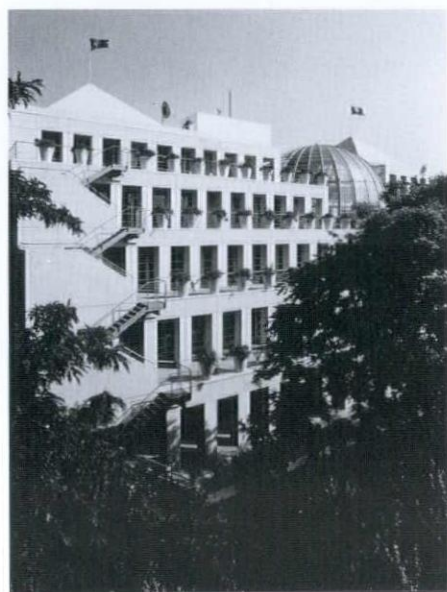
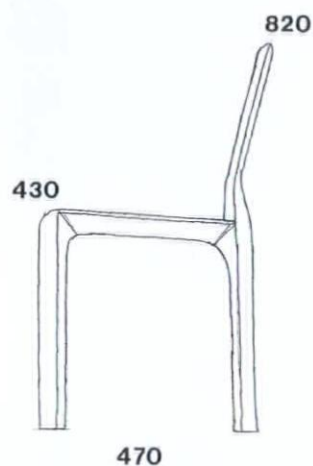
Mario Bellini

サイズ：W52×D47×H80×SH43

仕様：スチールベース、コードバン革

製造・取り扱い：Cassina／カッシーナジャパン

スチールの楕円パイプをコードバン皮革で包み込んだ最初の椅子。最初に見たときの鮮烈なイメージは今でも忘れない。ペリーニのもつフレキシブルな感性とオリジナルティ豊かな作品群は20世紀を代表するものといって良いだろう。
(大廣)



東京デザインセンター、1992



083

ブレイクアームチェア 1989

Break Arm Chair

マリオ・ベリーニ 1935-

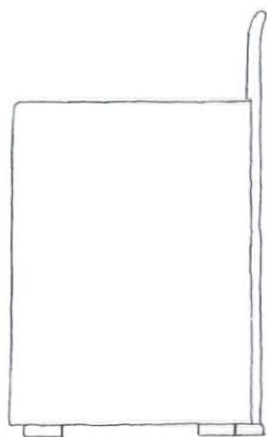
Mario Bellini

サイズ：W56×D51×H85×SH45

仕様：皮革

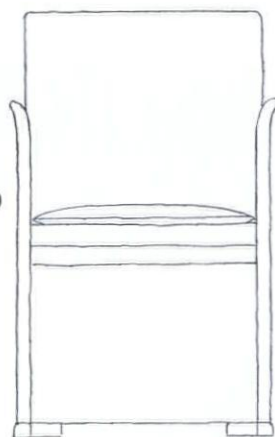
製造・取り扱い：Cassina/カッシーナジャパン

シンプルでベーシックなデザインの中に洗練されたクオリティを感じさせてくれる作品。この建築家は、オリベッティ社の顧問を務めたこともあり、その後1971年には環境問題の研究機関「ハビタ・ワークショップ」を設立している。ゴールデン・コンパス賞、ピエンナレ名誉賞など受賞も多い。 (大廣)



510

850



450

560



084

テアトロ 1981

Teatro

アルド・ロッシ 1931-

Aldo Rossi

サイズ：W51×D50×H77×SH44

仕様：ラッカー塗装仕上、布地張

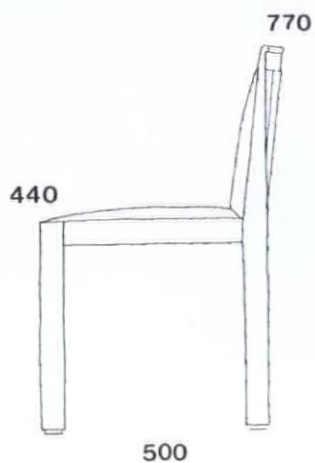
製造・取り扱い：Molteni & C.SPA/アンビエンティンターナショナル



「劇場」という名の椅子。シンプルな形態と漆塗風の仕上げ。どこか東洋的なイメージを感じさせるのは、彼の日本好きのためだけではなく、彼の感性の中に東洋人と共感できるものをもっているためであろう。（大廣）



アンビエンティンターナショナル青山本社ビル、1991



500



プロトタイプ



085

ストリップス 1979

Strips

チニ・ボエリ 1924-

Cini Boeri

サイズ：W77×D68×H70

仕様：ムク材塗装（脚）、合成綿キルティング加工

製造・取り扱い：Arflex/アルフレックスジャパン



オリジナルは1979年に発表している。柔らか
でゆったりとしたルーズクッションが包み込む
ようなフォームは、優しい母の子宮空間を想像
させる。ストリップのシリーズには、アームチ
ェア、ソファベットなど自由に構想できる楽し
さがある。

(大廣)

086

フィリピーネ 1981

Filippine

アントニオ・チッテリオ 1950-

Antonio Citterio

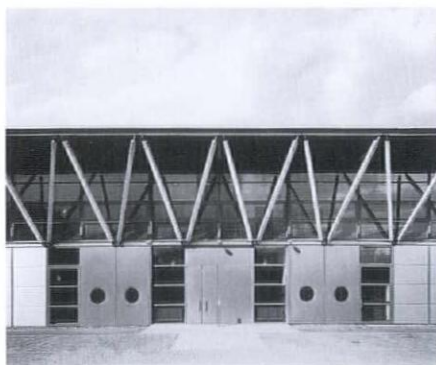
サイズ：W540×D62×H82

仕様：モールドウレタン（スチールフレーム）、水牛革編み込み
木製脚部

製造・取り扱い：B&B. ITALIA/アルフレックスジャパン



アントニオ・チッテリオの近作であるフィリピーネ（Filippineはフィリピン共和国のこと）のシリーズである。アルフレックス社のプロデュースによるもの。素材に、2種類のバリエーションがあり、小枝編みと呼ばれる藤編みのようなものと、水牛の革の編み込みを用いている。それらがモールド・ウレタンでつくられたベースを覆う構造になっている。脚部は木製で、脚端に金属をあしらっている。土着的な素材と古典的な椅子のフォルム、そして現代の技術と感覚の融合に、コンテンポラリーな彼のセンスを感じる。（河合）



ヴィトラ家具工場、1992

087

スパゲッティ 1979 Spaghetti

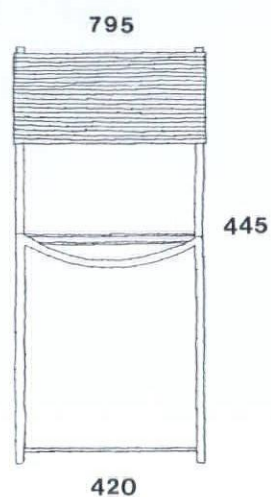
ジャンドメニコ・ベロッチィ 1922-
Giandomenico Belotti

サイズ：W40×D54×H84×SH46
仕様：スチールフレーム、PVCコード（クリアー）
製造・取り扱い：Alias/インターデコール

スチールパイプとクリアPVCコードによって構成されている。座と背面に使われたPVCコードは、その素材の特性上、弾力性を持ち、ループ状に配することにより人間の体重を支える剛性をもつ。

繊細なディメンションによって構成された全体のフレームと、クリアのPVCコード（スパゲッティ？）の素材の面白さにより、透明感のある椅子になっている。

ニューヨーク近代美術館永久展示品。（河合）



懐かしい椅子・気に入っている椅子

池田武邦

私が子供の頃、即ち昭和初期における一般的な日本人の家における日常は畳の上での生活が主で、椅子での生活はあまり馴染みがなかった。私が育った家も、母方の従兄で建築家の山本拙郎の設計であったが、50余坪の家の中で椅子のある部屋は、八畳の客間に広縁で連続している洋風の応接間のみであった。

そこには端正な形の本製の肘掛け椅子が四脚、丸テーブルの四方に配置してあった。その他、椅子と名のつくものは、居間に当たる座敷に続いた陽当たりの良いヴェランダに籐椅子が置かれ、父が良く新聞などを読むくつろぎの時間を過ごしていたのを覚えている。そんな状況で椅子を使うのは一家の長か、客人などで、私達子供には家の中で椅子を使う機会は殆どなかった。処が、面白いことにその頃の小学校には、全国殆どすべて木の机と椅子が用意されており、子供たちは一人残らず椅子に馴染んでいたのである。授業の始めと終わりに級長の起立、礼の言葉でクラスが一斉に立ったり腰掛けたりする時に動かす椅子の音が、眼を閉じると今でも耳に残っているような気がする。

ぬくもりのある頑丈な木の椅子は、甲板を上げて教科書を納めていた木製の机と共に、私達の原風景の一部を成しているといっても過言ではない。

その古く懐かしい木製の椅子が、つい先日我が家の玄関に鎮座することになった。小学校の教師をつとめる息子の学校で、古くなった木製の椅子を鉄パイプと合板の近代的な椅子に取り替え、古い椅子は焼却処分することになったという。古い椅子への愛着から、処分される運命となった山程の椅子の中から3脚だけ我が家に持参してきてくれた。たまたまその時居合わせた友人が自分も欲しいと言って、一脚さっさと持ち去ってしまった。一目見て子供の頃の旧友に出会えたような懐かしさが込み上げてきた。おそらく友人も同じ想いであったのであろう。その懐かしい想い出のシンボルとして、また一寸した物置き台という実用も兼ねて、以来、我が家の玄関の一部を占めている。

それにしても、まだ十分使えるこの頑丈な椅子を、焼却処分してまで交換しなければならぬ程の重要な理由が本当にあるのであ

うか。私には全く不可解なことである。

ところで私が最も気に入って、既に20年以上仕事場で使っている椅子はチャールズ・イームズの作品「ラウンジチェア」(1956)である。

机上でものを書いたり、書類に目を通す時は、腰を落ち着けた上で、背もたれからは体を離し、左肘のみ肘掛けについて他は自分勝手な姿勢で身体を動かして仕事を進めている。休む時はすっかり身体力を抜いて椅子に深く身体を沈め、両肘も背も椅子に密着させた姿勢になる。そうすると後頭部が適度に背もたれの頂部に支えられ、身も心も休まるのである。そのあと、新鮮に甦った身体の中から新しい創造への意欲が沸いてくるようなそんな気持ちにさせてくれる椅子である。これまで随分色々な椅子を使ってみたが、仕事をす

る上でこれ程私の身体に適合した椅子は他にはなかった。

●いけだ・たけくに／建築家、日本設計池田研究室代表



小学校の木製椅子



ラウンジチェア：チャールズ・イームズ、1956

写真：斎藤博司

村井 修

ペンシルバニア州、ニューホープの豊かな緑に囲まれたアトリエで、ウッドワーカー、ジョージ・ナカシマは、木と共に生き、ひたすら木の甦生を願いながら家具を創り、独自の世界を築いた。そしてその地に没して5年が過ぎている。

年輪が、ひとつ間違えば趣味悪に陥りそうな樹の断面を、控えめながらシャープな脚の上に載せてテーブルに仕立てあげる。また、滑らかな座板が宙に浮くような構造の合理でつくられたコノイド・チェアやラウンジ・チェアが、そのテーブルを囲むとき、それぞれ異なったデザインのインテリアの中であっても、その一角が独自の気配を漂わせる。インドの修業なども経て彼の心のよりどころである、興味を持ちつづけた東洋哲学を背景として、アメリカにあって世界を見続けて辿りついた創作で、木の普遍を求める姿勢から生まれてくる気配のように思う。それは自然界の輪廻の具現化であろう。

そのあたりは、アメリカで出版されて、『木のこころ』と邦訳された自伝に詳しい。(神代雄一郎、佐藤由己子訳、鹿島出版会)

私が接したジョージ・ナカシマは、全く創作の思想的背景は語らなかった。しかし、彼に接した人の多くは、素朴で温い人柄を通して、その潜むものを見ていたのではないかと思う。

この特集で「椅子と空間」のテーマを与えられた時、主旨とはズレることを案じながら「ナカシマ」を書くことを申し出た。

時流の中で椅子が、デザインの表象で捉えられることが多い昨今だからこそ、潜むデザインの心を大切にしたいと思ったからである。

とはいえ、彼の椅子の背後を探ることが出来るかどうか心もとないが、出合いの一端を振り返ることによって、僅かでも見出せないかと考えたのだが、独りよがりの思いと、限られた紙数で徒労かも知れないが。

30数年前、確か流政之氏の引き合せて彼に会い、その後早稲田大学で建築を学ぶ娘ミラさんと共同で設計をした建築、〈京都・桂カトリック教会〉の撮影を依頼された。HPシェルのゆるやかに天へ飛翔するような屋根に覆れた礼拝堂は、すべて彼の家具でまとめられており、スクリーンの前に小さなキリストの

十字架が浮遊している祭壇を見て、天への指向を思い描いたであろうその建物は、今も印象深く残る。

レイモンド事務所のスタッフとして建築の経歴を持つ彼が、家具の世界へ入って見せた作品が、建築との共生の巧みさをみせるのは必然で、至るまでに経た道程を示しているように思う。

1978年に『家庭画報』誌の特集のため、数日間アトリエに密着しての取材をし、日常生活、仕事の進行などを通して、制作の様子を見て、創作の感触を確める機会を持った。

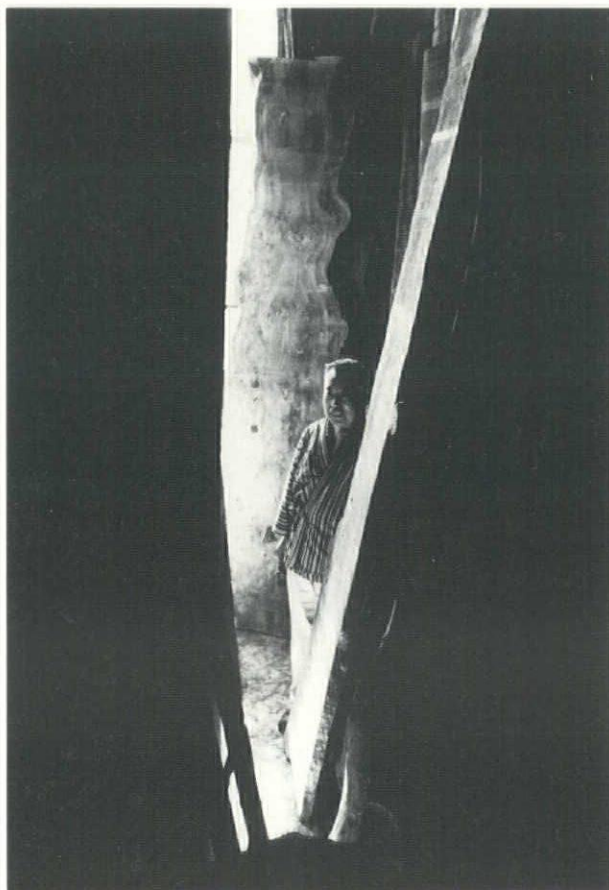
広大な敷地のアトリエの入口に、土曜日の午後のみオープンと書かれた小さな立札が立っている。居合せたその当日、州外からも来る多くの訪問者のなかに、ボストンから高級車でかけつけた中年の夫妻が、テーブルを依頼する場に立ち会う。コノイド・スタジオに立てかけられた10枚ほどの板の中から、話し合って選ばれた1枚の板を前にして、その板と対峙するかのようになり、フリーハンドで素早

く描き上げていくナカシマの眼は鋭く、立会う夫妻は一言も発せず見守るなかでスケッチが示される。そのスケッチが半年後に完成するテーブルの契約書になるのだという。その対応を見ながら、一寸思いが飛躍して、ルネッサンス期の芸術家が、理解者を得て後世に名作を残したことなど、両者の関係をふと思い浮かべたことであった。

ある時間がくるとナカシマが取材を中断した。リューマチを病む夫人を風呂に入れる時間である。その不自由な身体で夫人が、私達にサンドウィッチを作ってくれる。70歳を過ぎた夫婦の温い人間愛を見る感動も体験した。

いつか、確かウォールナットの話だったと思うが、英国の木目は特に気品が高く素晴らしい、と強調し木に対する執着の一端を語った。私は英国の木ということにこだわり、品性について人間と木の相関のなかで思いを巡らしたことである。

●むらい・おさむ／写真家



アトリエでのジョージ・ナカシマ

写真：村井修

落着かない椅子いろいろ

山口勝弘

日本人にとって坐といえば、しっかりと床に座ることである。椅子という道具など必要のない生活であった。ところが生活の西欧化にともない椅子なしの日が消えてしまった。ところが椅子が輸入され日本製のものが作られるようになって、いまだに、がっしりと尻と腰を包みこんでくれるような本格的な椅子は日本には少ない。新幹線の椅子だって身体を落着かせるというよりは、ほんの腰掛け程度の出来だからどうしようもない。

この間、岡本太郎が亡くなって、青山のアトリエで久しぶりに「座ることを拒否する椅子」に腰を下してみた。もちろん色鮮やかな陶製の椅子で、顔になっていたりするから尻が凸凹に当って、心地良いはずはない。しかし岡本太郎はすでに50年ほど前から、心地良い絵を描くなど言っていた。心地良い椅子なんかに座るなど言いたかったのだ。それは僕に言わせれば、日本人は不適合な立派な椅子に座るとかえって落着かないよ、と思う。岡本太郎のように作品が椅子になったのか、椅子が作品になったのか分らないようなものの方

が面白い。

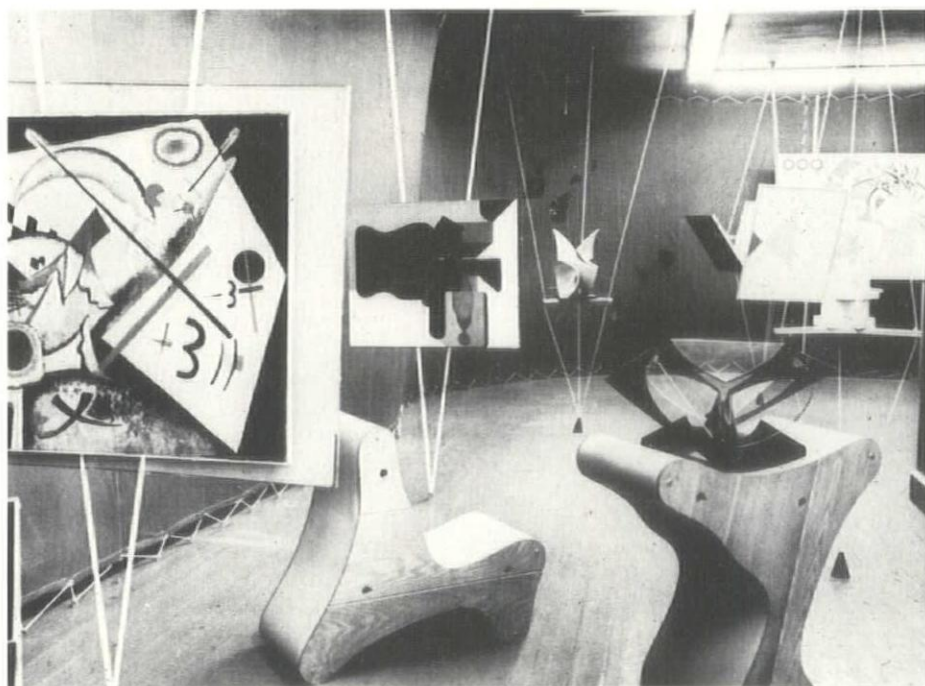
それで思いだすのは、倉俣史朗の「スプリング・チェア」である。これも30年近く前に、彼が思いつきで作った椅子である。僕は若い頃の倉俣の真面目で冗談をやっていた軽みが好きだった。この「スプリング・チェア」というのは、岡本太郎のと同じように一種のツールなのだが、支えがスプリングになっている。丸い座に腰を下すとスプリングがゆらゆらして、はなはだ落着かない。両脚をしっかりと地面につけて、しかも少し腰を浮かし気味にしないと、危い。でもスプリング、スプリング、スプリングと唱っていると多少は楽しくなるものだった。

ついでにもうひとつおかしな椅子を挙げておこうか。それはフレデリック・キースラーの「休息の形」という椅子である。これは本来椅子のためだけに発想されたものではない。1942年、ベギー・グッゲンハイムの委嘱によって「今世紀の芸術」美術館の展示デザインとして生み落されたものだ。座った時と横たえた時の身体の背から腰の線をひとつの形に

まとめたものである。この連続的な曲面の椅子が出来上ってみると、椅子以外にさまざまな目的に使えることが判明してきた。キースラーは18の異った機能を見出して、その中には彫刻の展示台や絵画を支える架台などにも使えることを展覧会で実地に示しさえした。1989年、キースラーの回顧展がウィットニーで開かれた時、実際に座ってみたが、これまた落着かない椅子の仲間に入れてもいいことを発見した。

さてもうひとつ、これはおまけで私自身のスツールを紹介したい。アルミのパイプを束ねたものだが、そのパイプの上をひとつひとつ丸いクッションで蓋をしたから、試作を頼んだ椅子屋は大変面倒くさかった。しかし私は作りたかった。何故なら、座の蓋をとれば、このパイプの中は酒瓶の隠れ家として丁度よかったからである。そしてこの椅子は確かに座りにくくはない。が酒飲みにとっては、やはり尻の下が気になって落着かない椅子であった。

●やまぐち・かつひろ／造形作家



Art of This Century/フレデリック・キースラー、1942

フィン・ユール氏の思い出

織田憲嗣

デンマーク家具の研究を始めて間もない頃、フィン・ユール氏と逢う機会にめぐまれた。氏は日本から訪れた私達を快く迎え入れてくれた。自身の設計による自邸は、さながらミュージアムハウスとでも呼べるものであった。壁にはデンマークを代表する画家のヴィルヘルム・ルンドントストロームやアスガー・ヨーン、アメリカのベン・シャーンを始め、様々な芸術家の作品が、実にさりげなく彼の建築空間にとけ込んでいた。もちろんその空間に置かれている家具は、すべて彼のオリジナルデザインの名作ばかり。リビングルームには〈チーフティンチェア〉(別名エジプシャンチェア)や、「最も美しい肘をもつ椅子」と言われる〈NO.45〉のアームチェアを始め、彼の最後のプロダクトモデルで、骨を象嵌細工に使った美しい作品等々。ダイニングルームでは楕円形の天板に銀の象嵌細工がほどこされたエレガントなテーブルと椅子。ガラスの食器棚には、彼のデザインによるチェークのくりぬきボールや、グレーテ・メイヤーの陶器など。そしてメインベッドルームには、やはり自身の作品でもある美しいベッドや、1948年ミラノトリエンナーレでゴールドメダルを獲得した〈NO.48〉のアームチェアとテーブル…。「家具の彫刻作品」とも言われる彼の家具、それらは美しいディテールの集合体でもあるが、決して華美ではなく知性と威厳を備えたその人、フィン・ユール氏をそのまま象徴するような存在感のある作品である。

10数年前以降、このフィン・ユール氏には幾度となく訪問することになったが、1989年、友人の建築家との訪問は悲しい思い出となった。5月17日昼頃、コペンハーゲンのカストラップ空港に着き、入国手続きを済ませ現地時間に時計を合わせた。時は12時30分。その日の夕方彼の家に電話をし、訃報を知らされた。それによるとその日の12時30分に亡くなられたとのことであった。享年77歳、何かしら因縁めいているが、私の誕生日は7月7日である。その夜、婦人のハンナ・ヴィルヘルム・ハンセンさんから是非家に来てほしいとのことでお訪ねしたが、主を失ったチーフティンチェアが淋しげに見えたのが印象的であった。

日本への帰途、友人達と是非追悼展をやろうと言うことになり、早速、10数名の「フィ

ン・ユール追悼展」実行委員会(多田学委員長)を結成、彼の命日5月17日にその展覧会をスタートさせ、大阪、京都、名古屋、東京、旭川の5カ所での巡回展となった。やる以上はなるべく資料性の高いアカデミックなものとしたいとの願いから、単に家具を並べるのではなく実行員が描いた現寸図面や、5分の1のスケールモデル、彼のドローイングや図面、作品の写真、スライドなど本格的な展覧会となった。週に一度の実行委員会は5時間に及ぶこともしばしば。議論が白熱、展覧会規模も当初の予定よりはるかに大きなものとなり、160ページもの図録まで製作することになった。すべての実行員が素人、意見や考え方の相違もあったが、彼の作品に魅せられた者同士が協力しあい、どうにか準備も整った。一方、運営費は、いくつかの企業と個人の貴重な寄付金によって賄われたが、そうした寄付金の中には、デンマーク王室、デンマーク大使館、デンマーク国立銀行、ロイヤル・コペンハーゲンなど、日本では到底考えられないところからの御寄付を頂いた。また、私の親しくさせて頂いた方からは、名前を出さないことを条件に100万円を提供して下さいたり、反面、広告を載せてくれるのなら少し寄付をしてやってもよいが…などという会社もあったり、様々なことを考えさせられた寄付金集めではあった。

あわただしい準備期間が過ぎ、オープンの日を迎えることになった。デンマークからはハンナ婦人が二人のミュージシャン(彼女は世界的な楽譜出版社の社長であった)と、そして彼女のお姉さんがオーストラリアから駆けつけて下さった。オープニングパーティでは、若いミュージシャン〈サファリ・デュオ〉の打楽器による演奏で盛り上がり、会場に入りきらないほどの人達であふれた。この時の楽器でもいくつかの難題があった。日本に一つしかない楽器や、音楽大学にしかない楽器等、その手配でも実行員以外の方々の多大な御協力を頂き実現したのであった。その後各地で成功をおさめ、その幕を閉じた。

終了後の実行委員会の会員共通の感想は「もうこんな展覧会はこれ一度きりで充分」というものであった。それはメンバーひとりひとりが、それぞれの受け持ちの仕事を、責任

をもって成し遂げた満足感からであった。もう、あんな展覧会は二度と出来ないのではないだろうか。すべて手弁当で、各自の本業の仕事を犠牲にし、あれだけ夢中になれたのも、フィン・ユールと言う人とその作品の素晴らしさからではないだろうか。改めて氏のご冥福をお祈りすると同時に、実行委員の一人として、すばらしい経験をさせて下さったことに感謝をしたい。

●おだ・のりつぐ/北海道東海大学教授



故フィン・ユール

写真：林義夫

088

トルソ 1982

Torso

パオロ・デガネロ 1940-

Paolo Deganello

サイズ：W145×D106×H116×SH45

仕様：スチール、ウレタンフォーム布張

製造・取り扱い：Cassina/カッシーナジャパン



人間と椅子との対話をテーマとしたアシンメトリックで、優美かつ軽快なフォルムには、従来の椅子にない自由な開放感を感じさせてくれる。80年代（ニューウェーブ）を代表する作品のひとつとして評価したい。（大廣）

089

アームチェア 1982 Arm Chair

リチャード・マイヤー 1934-
Richard Meier

サイズ: W53×D51×H70

仕様: メイプル厚板縁付、ウレタン塗装仕上

製造・取り扱い: Knoll International / ノール インターナショナル
ジャパン



特異な曲面を持つ座が用意されている椅子だ。アームチェアでもあるので、もともとそうはいかないのだが、とにかく横座りはもちろんのこと、粗雑な姿勢で腰掛けることの出来ない代物だ。まるでデッキの手すりのような厳格な囲いに囲まれたそれは、そして座る人の姿勢を厳しく取り締まるかのごとく清冽だ。

それはちょうど彼の建築作品にみるそれと同じ趣と言える。これと対に考えられたスツール、寝椅子およびコーヒーテーブルがあるが、こちらの方は縦線が強調されたフレームで構成されている。

(光藤)



ダグラス邸、1973

090

カンティレバーチェア B-5 1982 Cantilever Chair B-5

ステファン・ヴェヴェルカ 1928-
Stefan Wewerka

サイズ：W60×D53.5×H76×SH45

仕様：スチールパイプ、皮革張

製造・取り扱い：Tecta/アクトス

「一筆書き」といったパイプのフレームがユニークなスツールだ。見た目ほどに不安定さはないが、腰を下ろすのに一応の「構え」が必要だ。何にしてもシンメトリーを嫌うヴェヴェルカの、これも代表作のひとつだが、それほど普及しているものではないらしく、滅多にみられない。どちらかといえば、背にハンドバックなどひっかけてのご婦人向き、小店舗のカウンターなどに似合っている。

(光藤)



091

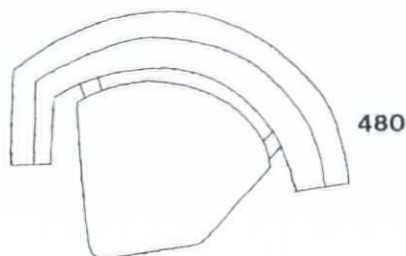
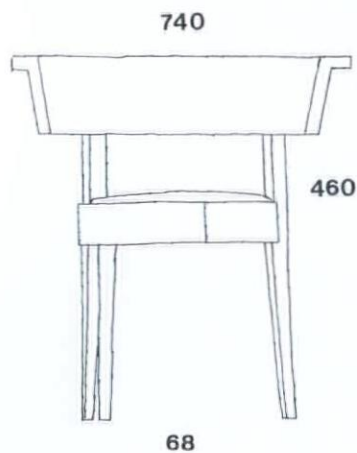
B1 チェア 1979

B1 Chair

ステファン・ヴェヴェルカ 1928-
Stefan Wewerka

サイズ：W68×D48×H74×SH46
仕様：ビーチ材ラッカー仕上げ、布張り
製造・取り扱い：Tecta/アクタス

大抵の椅子の左右は対称的に出来ている。だからそれを素直に利用しようとする人の大方は、正面向いた体をシンメトリーに構えることになる。しかしそれでは窮屈も甚だしい。そうでなければならないこともしばしばあるが、椅子を利用するのに、何もそう堅苦しく考えることはないだろう。それでこんな椅子の登場になったのかどうか、それはともかく、アンシンメトリーな椅子とは珍しい。長時間向きとのことだが、椅子の上で、ときに体を和ませようとしての場合の便を配慮して、ということらしい。ま、しかし、これを「どうぞ」と勧められ、さてどういう風に腰掛ければいいのかとまごついてしまう人も居ないではない、そんな椅子でもある。(光藤)



092

セコンダ 1982

Seconda

マリオ・ボッタ 1943-

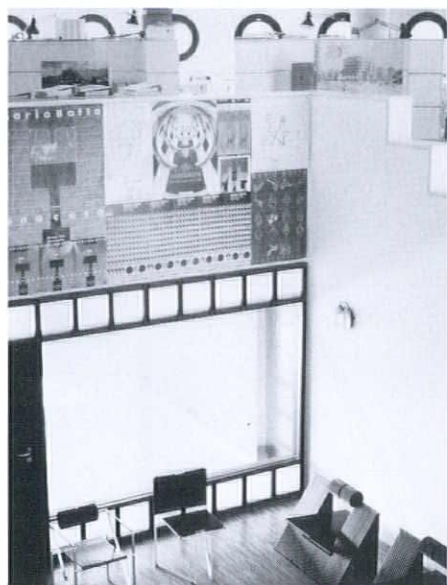
Mario Botta

サイズ：W52×D58×H72

仕様：スチール。パンチングスチールプレート。ポリウレタン
（青）

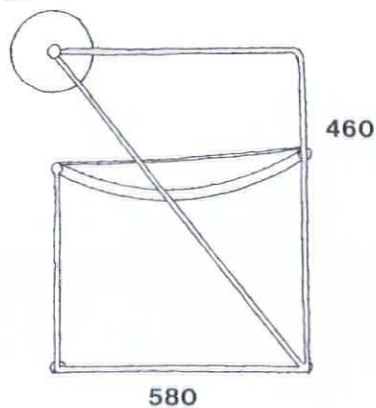
製造・取り扱い：Alias/インターデコール

スチールパイプとパンチングスチールプレートによる幾何学的形態には、80年代のデザインを象徴する冴えた感性と極限の美学さえ感じる。作家は、ヴェネツィア大学卒業後、コルビュジエ建築事務所に入所、パリを経て、ルガーノに自身の建築事務所を設立した。1983年にはドイツ建築家連盟、1984年にはアメリカ建築家協会の名誉会員となっている。（大廣）



スタジオ・マリオ・ボッタ、1990

720



580



093

クインタ 1986

Quinta

マリオ・ボッタ 1943-

Mario Botta

サイズ：W45.5×D57×H93×SH43

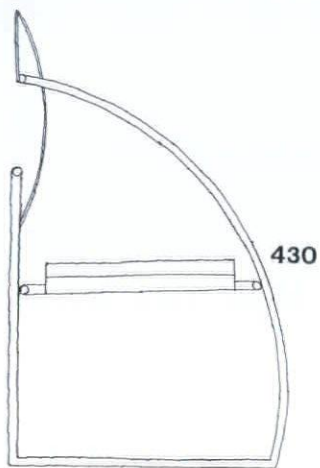
仕様：スチール、パンチングスチールプレート

製造・取り扱い：Alias/インターデコール

スチールパイプとパンチングスチールプレートによる軽快なデザイン。背と座の処理がユニークで何か空間を刺激するものがある。作家は各国の建築家協会に加盟し、1985年にはスイス建築賞「コンクリート85」を受賞するなどしている。

(大廣)

930



570



094

ウエストサイドラウンジチェア 1983 Westside Lounge Chair

エットーレ・ソットサス 1917-

Ettore Sottsass

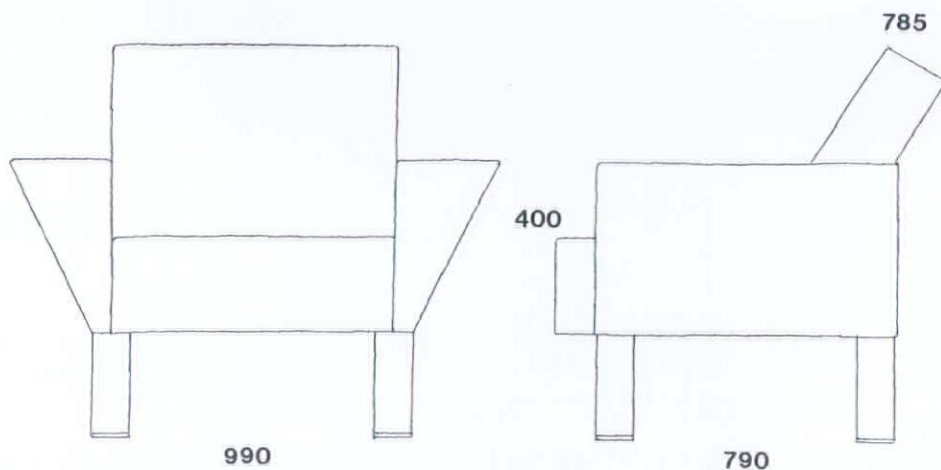
サイズ：W99×D79×H78.5×SH40

仕様：スチールパイプ塗装（脚）、スネークスプリング、ウレタンフォーム、ラバー

製造・取り扱い：Knoll International / ノール インターナショナル ジャパン



モダンデザインにないアート性とインスピレーション、フレキシブルな感性で、色彩や形態を感覚のコミュニケーション言語とし、カラーージュ化している。このクオリティの高い作品は、従来のモダンデザインにない概念と、新しい表現で鮮烈なイメージがある。(大廣)



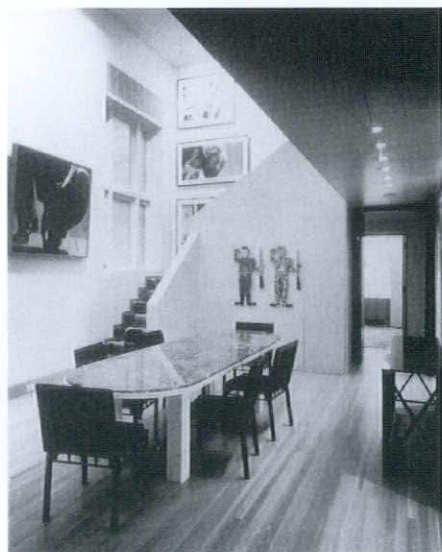
095

ブリッジ 1986 Bridge

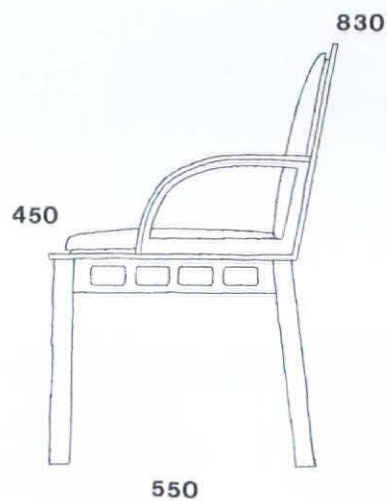
エットーレ・ソットサス 1917-
Ettore Sottsass

サイズ：W50×D66×H83×SH45
仕様：ビーチ、ウレタンフォーム、布張
製造・取り扱い：Knoll International/ノール インターナショナル
ジャパン

ソットサスの、〈メンフィス〉グループの総帥
だった頃の作品だ。〈ブリッジ〉なる名のいわ
れは知らないが、座を受ける部材に繰り抜か
れた四角い穴の並び様に、橋桁をイメージさ
せているものがあるからだろうか。それにし
ても、足元の頑状そうな表情に比べ、綺麗な
カーブで設えられた肘部分のディテールは繊
細で、難しい収まりを手際よくこなしている
作品だ。もっとも、図の方に示されているよ
うな、「肘部分」を二重に固めたものも存在す
るようだが――。(光藤)



マンハッタン・アパートメント、1988-89



096

ファースト 1983

First

ミケーレ・デ・ルッキ 1951-

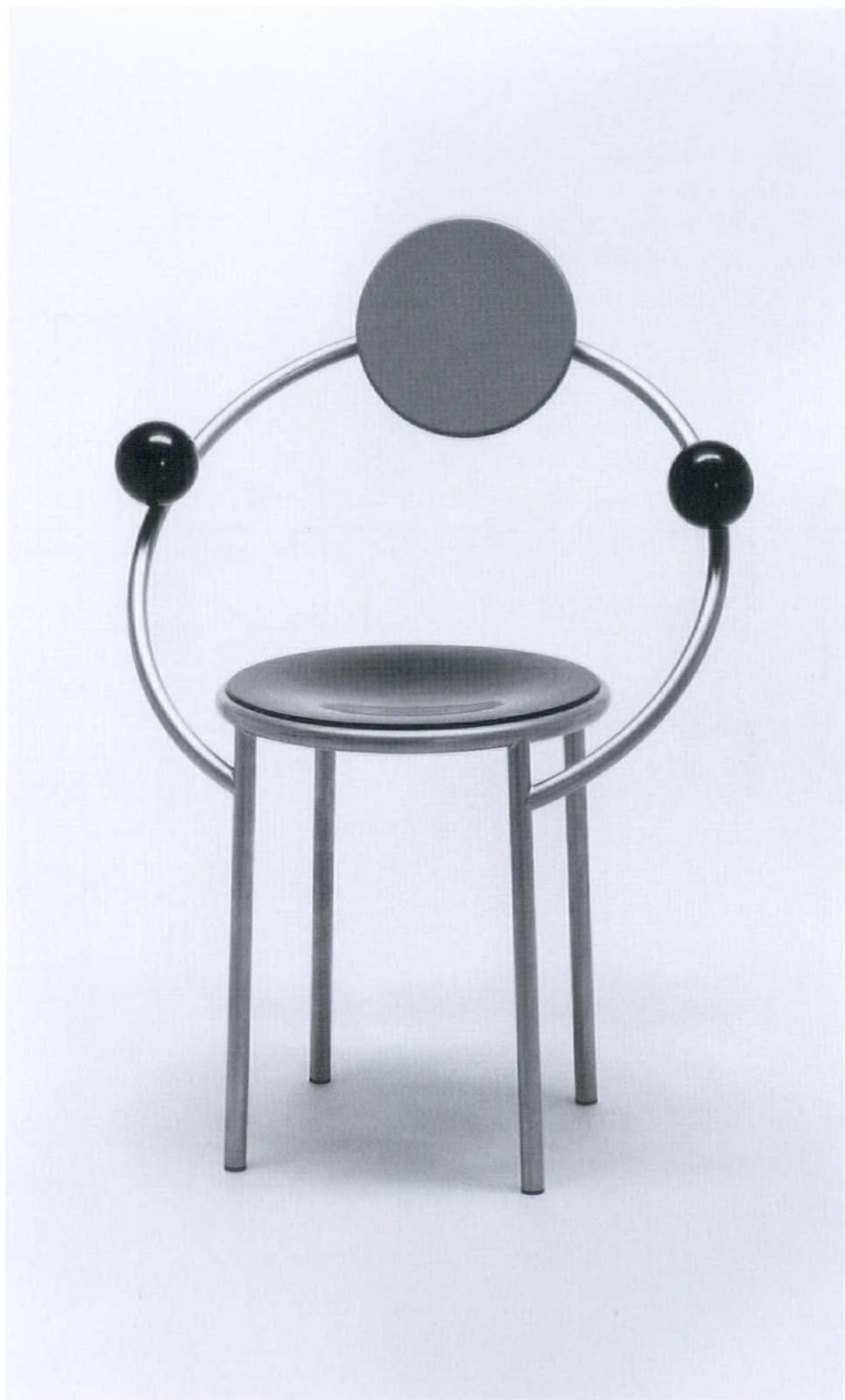
Michele de Lucchi

サイズ：W69×D50×H90×SH46

仕様：スチール塗装

製造・取り扱い：MEMPHIS/プロジェクトインターナショナル

従来のモダンデザインにないノスタルジーと実在感のある前衛的なデザイン。一見無邪気なフォルムの中にモダンデザインのニヒリズムとパロディを感じる。作家は、80年代ポストモダン・ムーブメントの騎手として、ソットサスらとともに「メンフィス」を結成、世界のデザイン界に大きな影響を与えた。 (大廣)



097

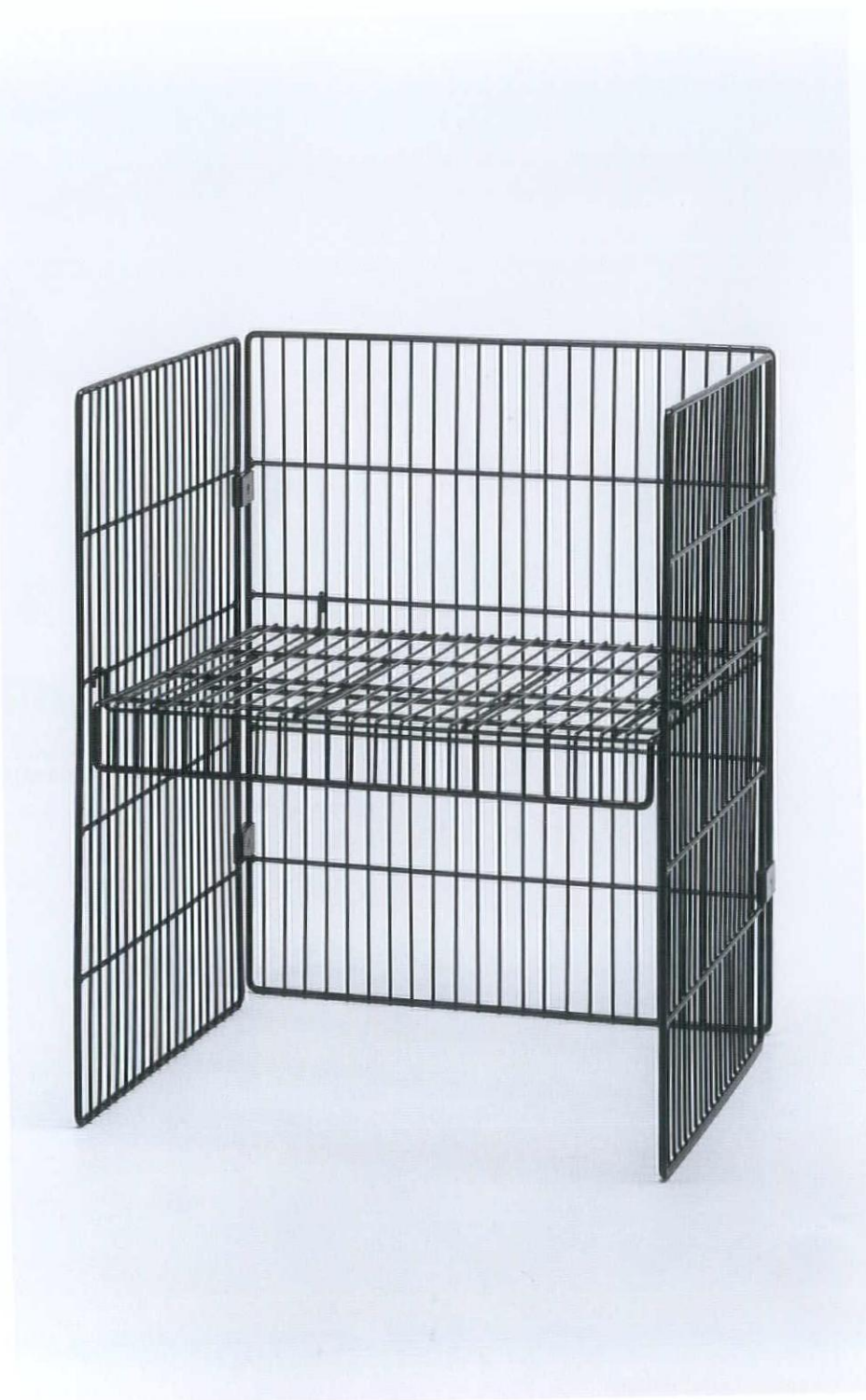
ノックダウンチェア 1983 Knock Down Chair "Teraslankaa"

アンティ・ヌルメスニエミ 1927-
Antti Nurmesniemi

サイズ：W60×D54×H75
仕様：塗装スチール
製造・取り扱い：Vuokko

夫人のヴォッコ・ヌルメスニエミの名前をつけたブティック「Vuokko」。彼女のデザインしたテキスタイルやファッションだけでなく、アンティのデザインした家具も販売している。このスチールワイヤーをネット状に溶接したノックダウン構造の椅子も「Vuokko」から販売している。両サイドは内側に折り畳めるもので、シート部分は、側面の垂直構造体にフックで吊り下げる構造となっている。いかにも建築家らしいアイデアの椅子である。アウトドアで使用することを考慮に入れてデザインされたものであろう。室内で使用する場合には、専用のクッションも準備されている。色は白と黒の2色。また、シート部分の吊り下げる位置を、変えることも可能である。よく似たアイデア、構造のものでこの作品の前年に発表された「PUUTA」というシリーズもあるが、そのシリーズは木製であった。

(織田)



098

シェーズロング 1967 Tuoli-001

アンティ・ヌルメスニエミ 1927-
Antti Nurmesniemi

サイズ：W60×D16×H68
仕様：スチール、布



ミラノ・トリエンナーでフィンランドデザインを強烈に世界にアピールしたのはイルマリ・タピオヴァラをはじめ、アンティ・ヌルメスニエミ、タピオ・ヴィアッカラ、ティモ・サルパネヴァの4人であった。特にヌルメスニエミは建築家でありながら照明器具や、家庭用品などその活躍の場は広い。また、3年に1度開催される「国際家具デザインフェア・旭川」の審査員としても毎回来日しており、親日家でもある。ここに紹介するシェーズロングは彼の自宅でも使用されているもの。明

快なデザインを、より一層引き立てているテキスタイルはヴォッコ夫人のデザイン。彼女はフィンランドを代表するテキスタイル&ファッションデザイナーでもある。この作品には、いくつかのバリエーションがあり、座の下にベースの金具が付いたものや、全くないタイプ、さらに、壁に取り付けるタイプのものもある。ほぼ同じデザインで籐張りのものは<NOJATUOLI-001>として、ドイツのテクタ社で商品化された。

(織田)



アトリエ・ヌルメスニエミ、1975

099

ザブロテーブルチェア 1984

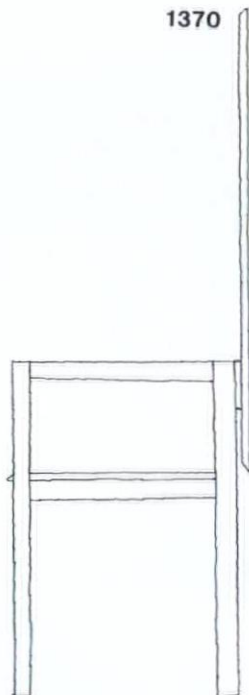
Zabro

アレッサンドロ・メンディーニ 1931-
Alessandro Mendini

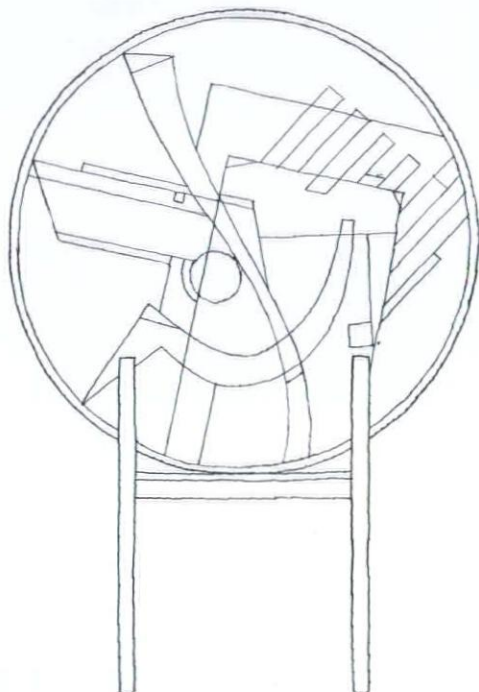
サイズ：W93×D50×H137
仕様：積層合板、ハンドペイント
製造・取り扱い：Zanotta／ノバ大島

イタリアのインテリア雑誌の編集長を歴任、
「ラディカル・ネオモダン」を推進した建築家
らしく、この作品もラディカルなポストモダ
ン。色彩をコミュニケーションの手段とし、
視覚的イメージを先行したアート性に富んだ
作品。当時のモダンデザインの終焉を予見す
るものとして評価したい。(大廣)

1370



500



930



プルアップチェア 1984

Pull-up Chair

チャールズ・フィスター 1940-
Charles Pfister

チャールズ・フィスターのデザインによるプルアップチェアは、主にエグゼクティブ・オフィスや、会議用チェアとしてデザインされ、このタイプの椅子としては珍しくロッキング機能を兼ね備えている。

この椅子は、フィスターデザインの特徴である丸面で全て仕上げられ、美的にもすぐれており、モダンにもトラディショナルにも融合する折衷主義的なデザインとなっている。サイドに取り付けられるパネルは、ロングサイズとショートサイズを選択でき、フレームの色、張り地の色柄の多様な組み合わせによりあらゆる表情を演出できる。（編集部）

サイズ：W60×D59.5×H79×SH43

仕様：木製塗装仕上げ（脚）、シートウエビングテープ、フォームラバー張り込み、バックティルト付き

製造・取り扱い：Knoll International/ノール インターナショナル
ジャパン



101

パルミラチェア 1984

Palmira

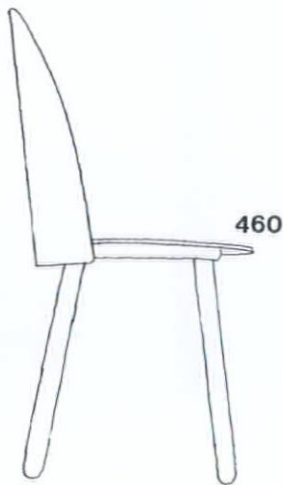
デ・パス+ドゥルビーノ+ロマッツィ 1932-1991, 1935-, 1936-
De.Pas, D'urbino, Lomazzi

サイズ：W40×D51×H92×SH46
仕様：ブナ材、硬質ポリウレタンベース、皮革張（座面）
製造・取り扱い：Zanotta／ノバ大島

コードバン(皮革)張りのシンプルでさり気ないデザインの中にネオ・クラシックな感性が冴えている。作家の3人は「Abitare Fresco (フレッシュな生活)」をテーマにスタジオを開設し、建築、工業、インテリアの各デザイン分野で活躍。1967年に発表したPVフィルム成形の空気椅子「Blow」や野球グローブ状の「ジョニー」などがあり、いずれも従来の家具の概念を打ち破る発想で高い評価を得ている。

(大廣)

960



460

510



クイーンアン 1984

Queen Anne

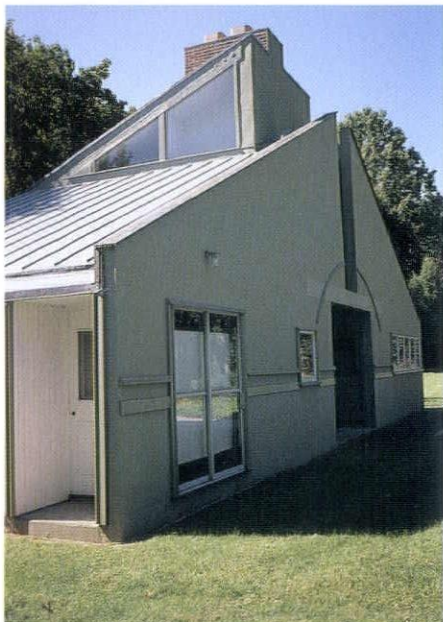
ロバート・ヴェンチュリ 1925-
Robert Venturi

「Madified Queen Anne」と呼ぶべきブライウッド・チェアだ。例のクイーン・アン・スタイルを模し、今日風に合板で形作られた椅子だ。「ポスト・モダン」の声がはなやかだった時期の、ほとんど後尾を飾って登場した作品だが、他にもゴシック、エムパイヤ、ピーダーマイヤー、シェラトン、アールヌーボー、アールデコなどなど、古いスタイルをなぞってシリーズ化されている。にも関わらず、彩色はかなり派手だ。そう言うのはなんだが、これに腰かけてみるより、見ている方が楽しいオブジェ、そう言える代物でもある。(光藤)

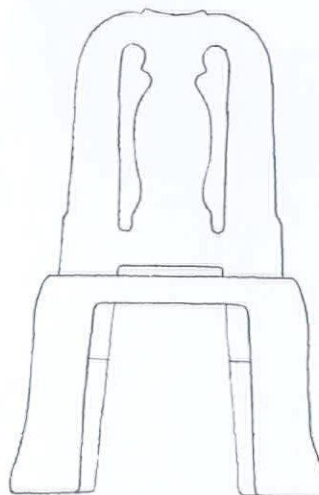
サイズ：W67×D60×H98

仕様：積層合板にペインティング

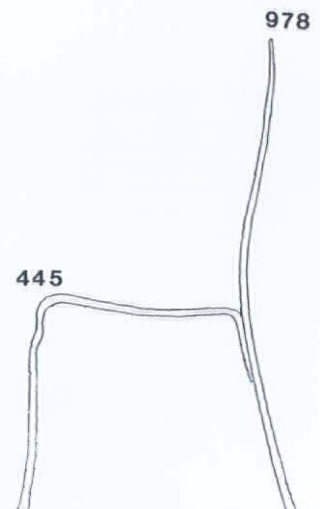
製造・取り扱い：Knoll International / ノール インターナショナル
ジャパン



母の家、1963



667



597

978

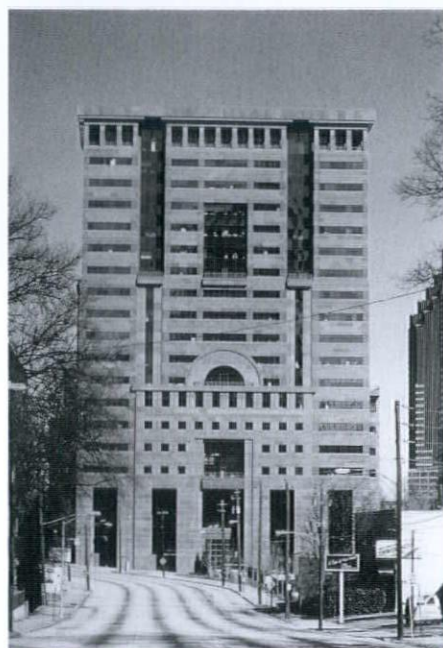
MG2アームチェア 1985

MG-2 Arm Chair

マイケル・グレイブス 1934-
Michael Graves

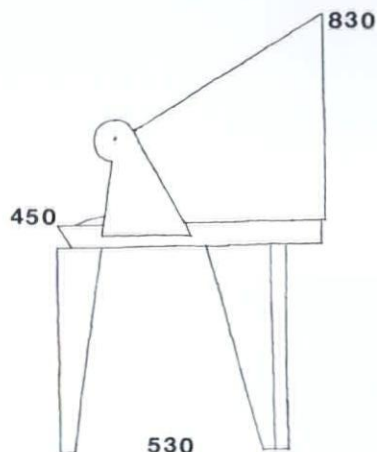
サイズ：W55×D53×H83×SH45
仕様：木製、布地張（座面）
製造・取り扱い：Sawaya & Moroni/アクトス

側面図で見ると、いささか不安定な感じを受けるが、かなりの重量級で、後ろにそっくり返ってしまうような、そんな心配はまったく無い。これと対になって使用される安楽型のもの、ならびにソファがあるが、いずれも仕上材のメープルの木肌の美しい椅子だ。座はパステルカラーの布張り、見掛けによらず優しい雰囲気があって、和風趣味の部屋にも似合いそうな、しかし古代ギリシャやローマ時代の王座にも見合うかたちがユニークな、はなはだ豪勢な逸品だ。ポストモダン全盛の頃の作品。
(光藤)

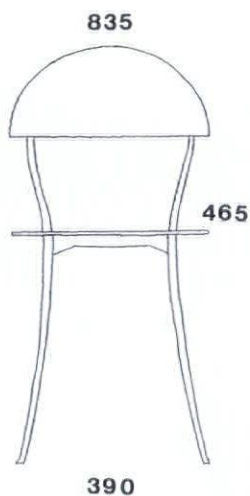


ビーチツリー・プレイス、1987

SD9606
132



このE・マリは機知に富んだ万能のデザイナーである。この椅子は金属(アルミ材)と皮とをうまく組み合わせ、形も有機的な湾曲が現れているが、他のものは全く別の違った、材料や形をしている。1971年にデザインされたプラスチックの椅子は、カラフルであり、ほとんど垂直と水平に近い構成である。また、1973年にデザインされた総て同幅の木材板を使用した一連の家具は誰にでも目曜大工でできそうなものである。その他、インダストリアル・デザインからグラフィック・デザインまで行なっている。それらは皆、何か芸術性を感じさせる独創的なものが多い。(羽原)



ハンカチーフチェア 1985

Handkerchief Chair

マッシモ・ヴィニエリ 1931-
Massimo Vignelli

サイズ: W58×D57×H74×SH46
仕様: 成型F.R.P.、スチールワイヤーベース
製造・取り扱い: Knoll International/ノール インターナショナル
ジャパン

まるでハンカチーフが空に軽やかに舞っているような流線的なフォルムにより、室内に軽快でやわらかな雰囲気を出すハンカチーフチェア。腰を降ろしてみると、体を包み込むような座り心地のよさに驚く。そのエレガントな形態は視覚的な効果だけではなく、人間工学に基づいて丁寧に計算され、素晴らしい座り心地と十分なサポート力を兼ねそなえており、さらにスタッキングの機能をも合わせ持つ。ほとんどどんな環境にもぴったりフィットするデザインの椅子といえるであろう。

(編集部)



実用性と美しさ、簡潔さをデザインの基本とし、普遍性を追求した同作品は、未来へ残る現代の名作として評価されている。「ガウリーノ」とは海に棲む怪魚の意味で、ガウディとカルロ・モリーノに敬意を表したオマージュとして生まれたという。有機的なこの作品はスペイン風土のもつ南国の鮮烈なイメージを感じさせてくれる。

(大廣)



カタロニア音楽堂増築、1981-89

フィリップ・スタルク 1948-

Philippe Starck

東京の浅草吾妻橋に建つアサヒビールスーパードライホールはフィリップ・スタルクの作品だが、ここのピアホールのためにデザインされた椅子の名は〈Asahy〉だ。同じように〈Costes〉は、パリのカフェ・コストのために手がけられたものだ。このカフェ、確か、映画「ニキータ」で、レストラン・トラン・ブルーと一緒にロケされていた、多分ボンビドウ・センター近くにある白っぽいテントのアレだろう。それにしてもテラスを利用して、中に入ったのはトイレを借りた時だけ、だからこの椅子があったのには、とんと気付かずじまいだった。スタルクの椅子には三本脚のことが多い。(光藤)

サイズ: W48×D55×H80×SH45

仕様: アルミニウム、曲面練付合板(背板)、皮革(座面)

置かれた場所: カフェ「Costes」

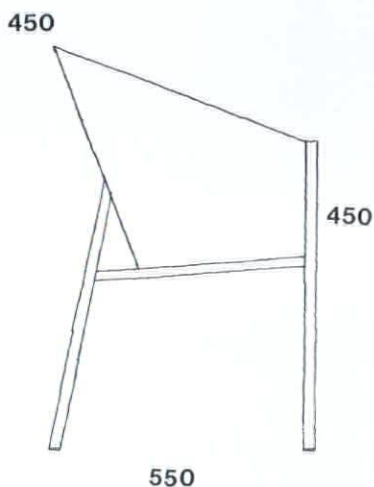
製造・取り扱い: Driade Piacenza/アンビエンテ・インターナショナル



アサヒビール吾妻橋ホール、1990

SD9606

136



クロスチェックアームチェア 1992

Cross-Check Arm Chair

フランク・O.ゲリー 1929-

Frank O. Gehry

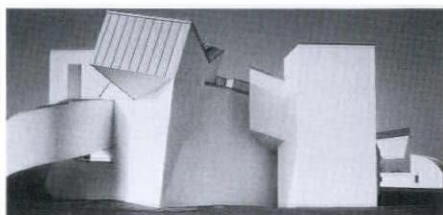
7層に重ねられた幅2インチ、厚さ32分の1インチの量産品である。メイプル単板積層材のみで構成されている。素材の特性の考察からデザインの展開において、興味深い椅子である。それは、素材が持つ自然な弾力性と編み込み、曲げ加工による剛性の考察、軽量化へのデザインを含めたスタディ等が挙げられる。椅子の軽量化は、その素材の特性と構造において、最大限考察されていることを意味する。そして、単一素材が形成する椅子のバリエーションが無限の可能性をもつことである。しかし、ゲリーの椅子から伝わる印象は、合理的で緻密に計算されたものというよりは、ユーモアあふれるかたちの心地よさと、自由で自然なものである。人が座ることを目的とした椅子が、逆に椅子が人を包み込むような感じさえある。

(河合)

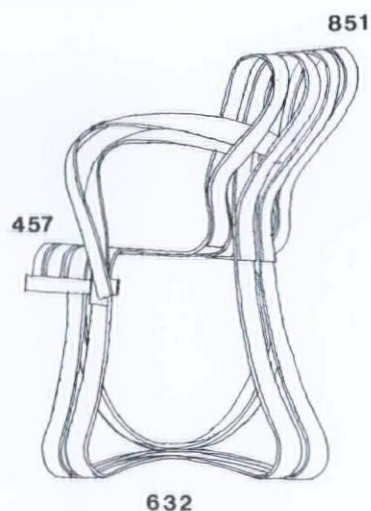
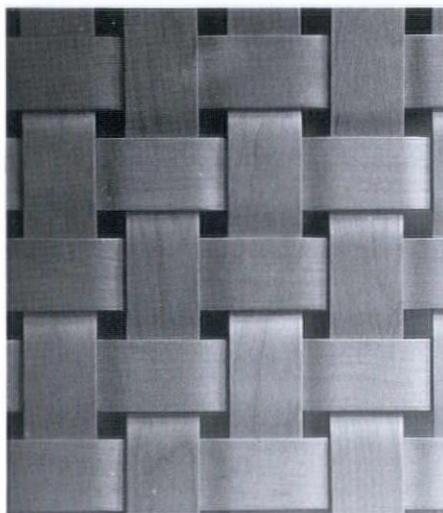
サイズ：W72.39×D63.18×H85.09×SH45.72

仕様：メイプル単板積層材

製造・取り扱い：Knoll International/ノール インターナショナル
ジャパン



ヴィトラ・デザイン・ミュージアム, 1989

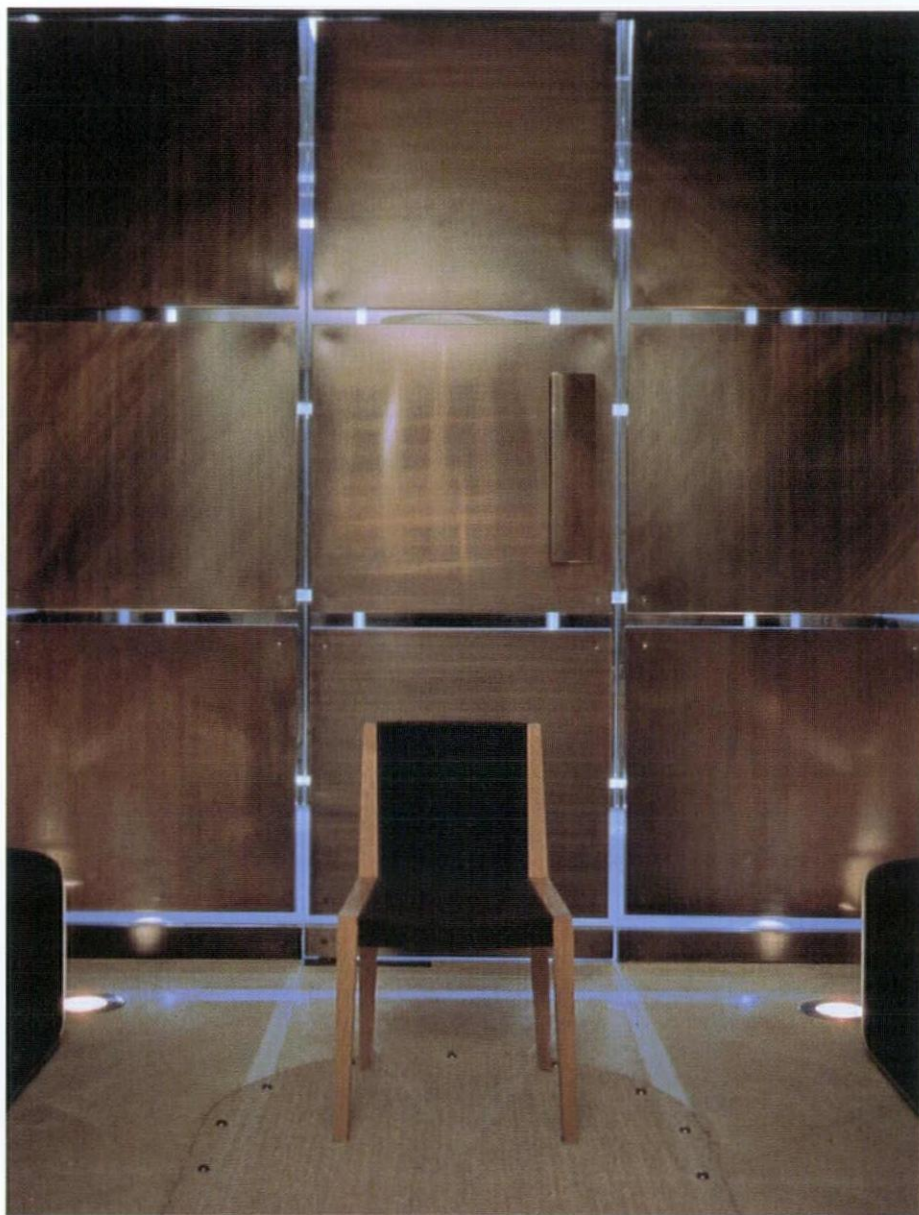


Rue du Bacとは、サンジェルマンからオルセー美術館を通りモンパルナスに抜けるストリートの名前である。古い街並みに、新しいブティックが点在するエリアに位置している。

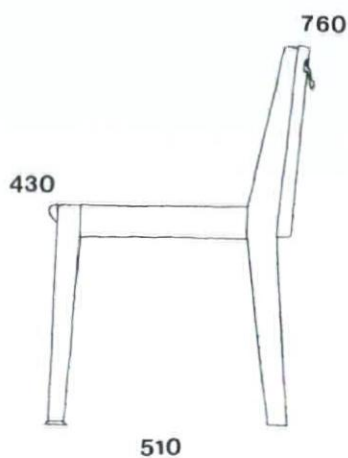
歴史あるものと今を融合させることがコンセプトとなり、時代の経済的要求、人々の直接的な要求すなわち、素材、寸法を考えた結果のデザインとして、提示されている。椅子の背に設けられた真鍮のハンドルや木の仕上げ方、ディメンションの扱い方に、彼女が求めた時代性を感じることができる。

また椅子のみならずソファを含めたシリーズとしての提案は、現代の生活文化を考える上でも興味深いものである。1990年日本で初めて発表され、1992年ヨーロッパでも発表された。プットマン自身が命名したこの椅子は、フランスの香り高さ、エレガントな椅子であるとともに、アイリーン・ 그레이の家具がそうであるように、時代を超えて存在する要素ももっている。

(河合)



ホテル・デ・ラック、1990





110

カクトア 1993

Cactoa

アンドレ・プットマン

Andree Putman

サイズ：W42.5×D49×H76×SH44

仕様：メープル材、布張（座）

置かれた場所：カール・ラガー・フェルド部

製造・取り扱い：H.A.Duex



＜カクトア＞チェアは、ファッション・デザイナー、カール・ラガーフェルドの自邸のため、1993年にアンドレ・プットマン／エカールによりデザインされたものである。後に、フランス、エカール社と日本のアッシュ・アー・ドゥ社により新しく展開された。

直線部材のみで構成されたシンプルなフォルムと、その重量の軽さ、ファブリックの美しさに特徴をもつ。独特のフォルムから醸し出される「愛らしさ」からその存在そのものに嬉しさを感じる。現代の複雑なディテールをもつ椅子群の中で、「本来椅子とはこういうものだった」ように感じる。（河合）

キャスター 1994

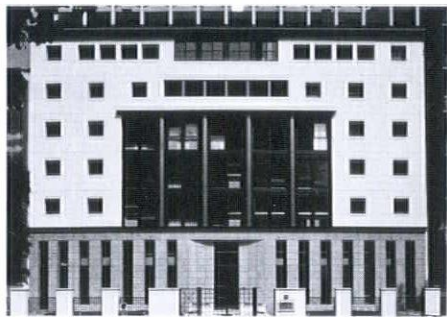
CASTER

ルカ・スカケッティ 1953-
Luca Scacchetti

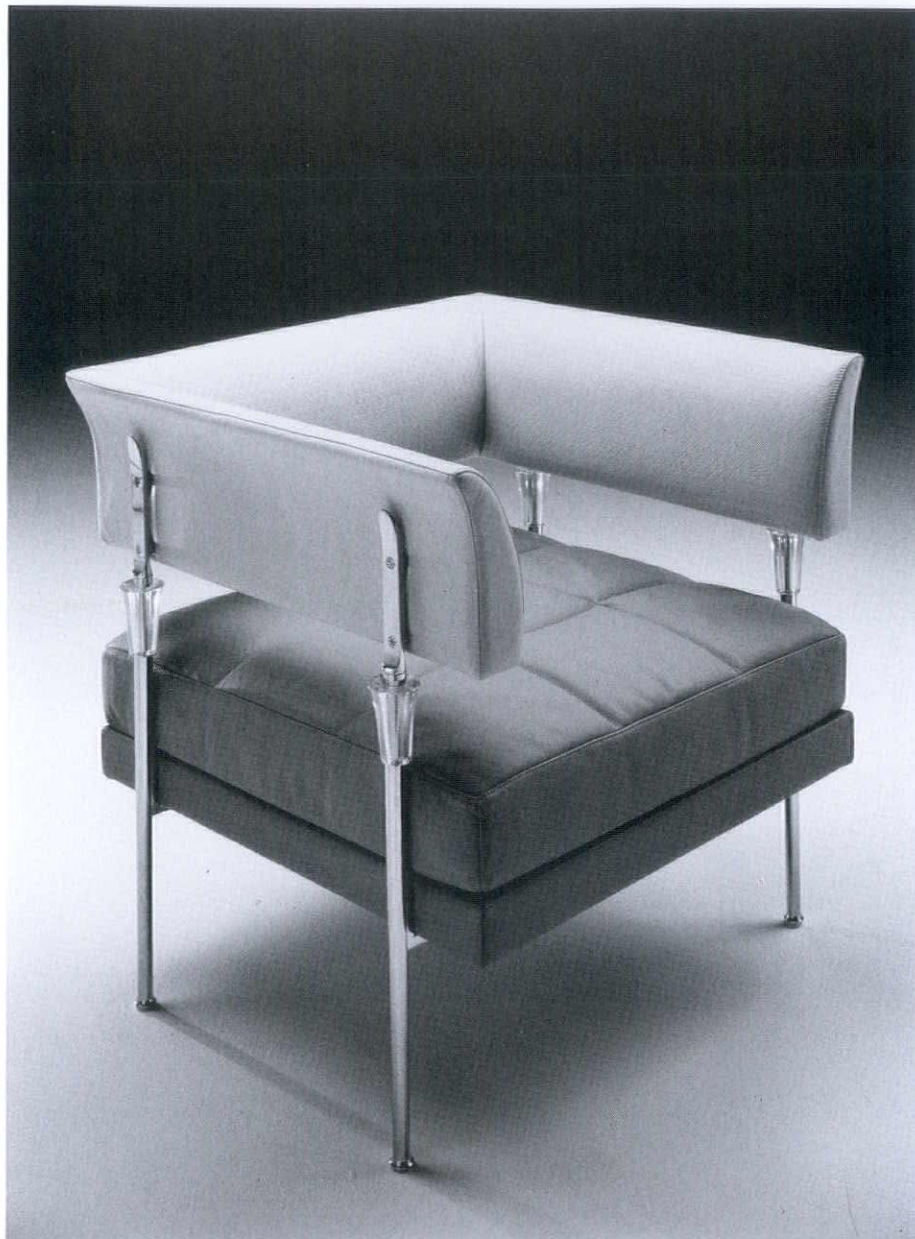
サイズ：W73×D70×H73×SH43
仕様：スチール・クロームメッキ、皮革張
製造・取り扱い：アクタス

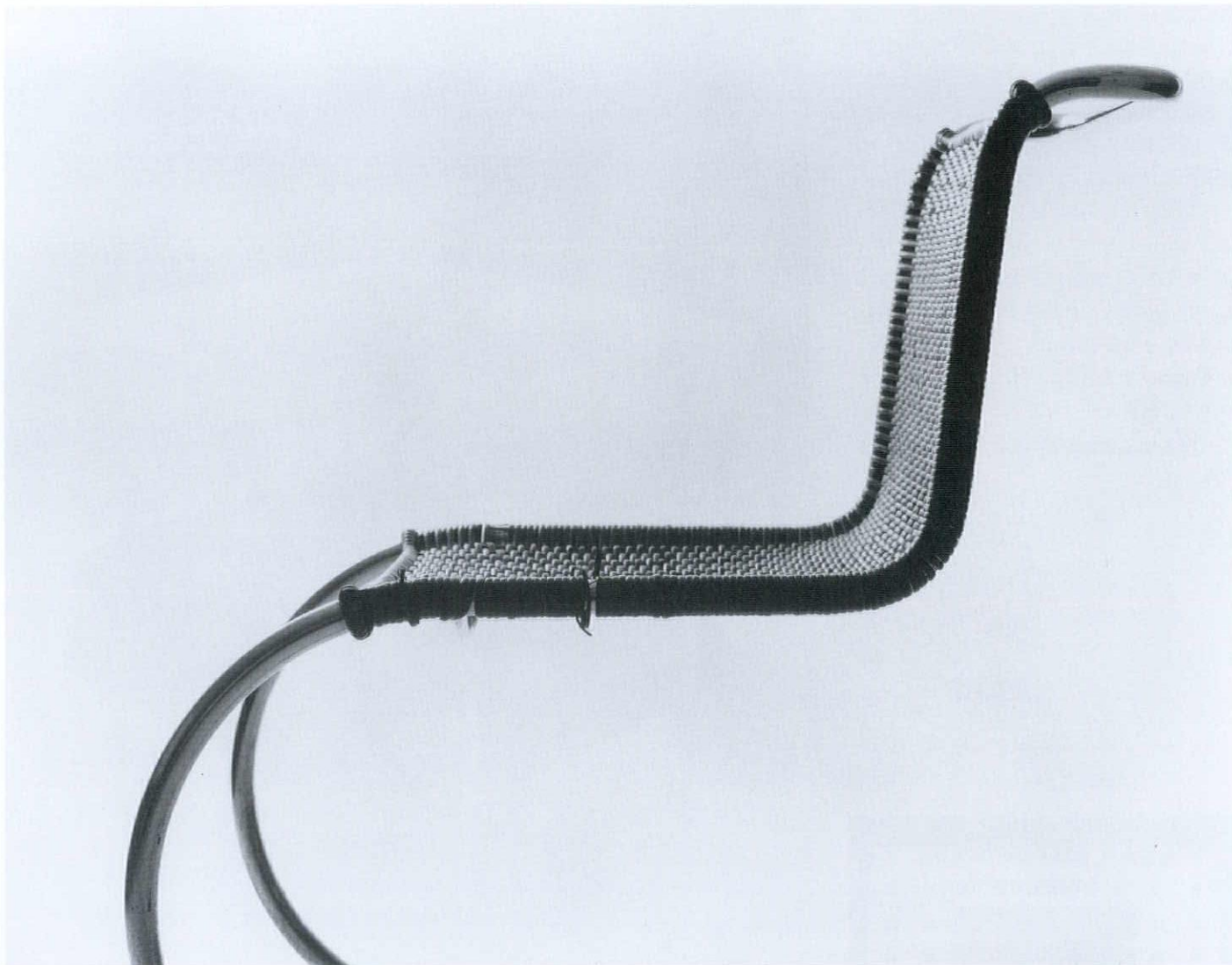
実に建築的な作品だ。スカケッティは、空港ビルのような大きなプロジェクトから公共建築のいろいろ、またことにもユニークな住宅作品を次から次へと発表している、今やミラノで人気絶頂の現代建築家だが、家具のデザインにも造詣が深く、これまた特異な作法による傑作を数多く世に送り出している逸材だ。そして、いつぞや、彼と話し合う機会を得て聞いたことで、ある成り金の人の家を設計するのに、そのことを象徴させての「金色」を、ひそかにところどころあしらっておいたと、そんなユーモアを作品の中に仕組んでみせたりする、悪戯っ子でもある。さて、この椅子にも何かそんな仕掛けが隠されているのかどうか。

(光藤)



マイノ通りの集合住宅、1986-90





カンティレバーチェア / ミス・ファン・デル・ローエ、1902

近代椅子デザインを通して

島崎 信

今回の「建築家の椅子111脚」を中心とした近代椅子の年表には、19世紀、1800年代のごく末期4～5年の間に生まれた椅子も含まれているが、基本的には1900年代に入ってから95年間あまりの間にデザインされた椅子を俯瞰的に考察している。

ここでいう建築家によってデザインされた椅子には、大別してふたつの性格がある。

その第一は、建築を設計した折に、その空間で使うことを目的として建築家自身がデザインをした椅子。それらは、空間創造の重要な一要素として、内部空間での人間の行動と密接な接点となる椅子デザインをした、という姿勢を明確に出そうとしている。その椅子は、特定空間のためにデザインされたものであったが、水準以上の、椅子本来の機能と造形的な特性を持っていることから、後にその建築空間以外の不特定の空間での使用に供する、既成品の椅子として商品化されているものである。

第二は、建築を設計する建築家としての職能を第一義的に持つ造形家が、とりたてて特定の空間のために……という目的を持つことなく、ひとつの造形活動としてデザインした椅子である。これは、プロダクトデザインとしての視点に立ってデザインされた椅子、と言い換えることもできるだろう。

デザインされた発端がこれらのうちのどちらであっても、ここでは、空間に存在感を主張しようとする何らかの造形性と、生活の道具として求められる椅子としての機能性を（その強弱は別として）相互に対応させてバランスを保とうとする姿勢の見られる椅子を、できる限り取り上げようとしている。

何よりも一時的な流行を越えて、椅子としての機能性と造形性の面だけでなく、できれば経済性についても、一定の評価に耐えられるものでなくてはならない。

いわば年月と国境を越えた、時間の審判に耐えられる普遍性を備えた椅子を見出すことは、けっして楽なことではない。それだけに、優れた椅子に出逢う機会を持つことは愉しみなことといえよう。

1980年前後からの、いわゆるポスト・モダニズムの時代から今日までの15年間にデザインされた椅子の中には、「時間の審判」に十分

に耐えられるかと心配をしなくてはならない椅子もないとは言えない。その期間に生まれた椅子のすべてとは言えないが、時間が過ぎる内に、自然に淘汰されて、残るべくして残ってゆくという自然の摂理は、椅子の世界でも例外ではない。

今世紀の「椅子」のデザインを年表として組み上げてみると、1920年代後半から1930年代と、1940年代後半から1950年代のふたつ、それぞれ15年間ずつに、優れた椅子が生まれた山脈の秀峰を見ることができる。

新しい画期的なデザインが生まれる背景には、それまでにない特性を持つ新しい素材の出現と加工技術の発達を、必ずといってよいほど見出すことができるものであるが、このふたつの秀峰もまた画期的な素材と技術に支えられながら、広い意味での社会の変化による価値観の変動をエネルギーとして出現した。

木材の持つ質感に対して、その対極にあるような金属の製品が1920年代から自転車をはじめとして家具、日用品の分野に広まってきた。当初は違和感を持った消費者層も時とともに慣れ、その冷たさや鋭さも新しい造形美として受け入れるようになり、新しい分野として定着していった。第一次世界大戦後の工業化は金属加工の可能性を拡大し、木材加工もまた接着剤などの資材の開発によって新しい造形が可能となった。

近代化、モダニズムの思潮は、量産、集合住宅、機能性などのさまざまなキーワードの下に、新しい住まい方、都市、建築、そして椅子を世に送っていった。

第二次世界大戦中の1940年代後半からは、戦時目的のためにさまざまな新素材と技術が開発されてきた。椅子の分野に関連するものでは高分子化合物——プラスチックの出現は、それまでの木材や金属に加えて第三の主要材料として椅子デザインの世界を大きく広げていった。高分子化合物系の素材と加工技術は、接着剤、塗料、張り地などあらゆる分野にわたって進出し、加えて今までの木材、金属の加工技術の進歩と併せて、大戦後の生活復興のための民需の分野に爆発的な広がりを見せていった。

大戦中の資材不足、軍需目的一辺倒の重苦しい状態の中で圧迫され、蓄えられてきたモ

ノづくり、デザインへの願望のエネルギーが建築、家具、日用品という身近の平和な分野に集中的に注がれていった、と判断するより他にないようである。

アメリカを主体とした新素材、技術による工業製品的な椅子と、北欧、とりわけデンマークを中心とした人間味あふれる感性を求めたクラフト製品的な椅子のふたつの流れが、一般庶民の生活を潤いのあるものにしていった。

椅子に求められるいくつかの要素、丈夫で軽く座り心地が良いという機能性と、美しく存在感があり、多様な空間に順応する造形性、さらに適当な価格で国籍、年齢、時代に関係なく長い年月、広い地域で現役の商品として生き続ける社会性。これらの点を念頭に置きながら全体を通して見ていくと、建築家が否かを超越して4人の「椅子デザイナー」の大きな存在を感じざるを得ない。

曲木の技術を完成し、150年あまりの長い間、そして今日尚それ以上のデザインは生まれていないという、曲木家具を完成させたミカエル・トーネット。

時代の新しい素材と技術を駆使しつつ、住宅から事務システムまで視野に入れながらも、人間味を失わぬデザインを生み出してきたチャールズ・イームズ。

その時代の先端の技術と造形を持つ建築の数々を設計しながら、成形合板、硬質発砲ウレタンなどの新しい素材と技術を開発して、美しい椅子のデザインをするとともに、照明器具やテーブルウェア等幅広い造形を残した、真に総合的な造形家アルネ・ヤコブソン。

人間とは長い付き合いの木材をこよなく愛し、古い伝統の造形を今日の技術と生活に調和するように、人間味あるディテールに配慮を重ね、常に第一線を歩き続けるハンス・ヴェグナー。

これらの椅子デザインの「巨人」が活躍した時代にはそれなりの時代相があって、幸運な時代にデザインをすることができたという見方もできるだろう。これからの時代はこれらの「巨人」を超えるデザイナーが生まれるのにやさしい時代なのだろうか。

●しまぎき・まこと／武蔵野美術大学教授

■写真撮影

林義夫 p.15, 18, 22, 23右, 25右, 26上, 30, 31, 35
 右, 36上, 37上, 39, 40上, 43上, 45上, 46右, 47, 48,
 51, 52上, 54右, 55, 59, 60, 66上, 67, 69, 70右, 71,
 74右, 75上, 76右, 77, 78, 79右, 82, 83, 84, 85右,
 87右, 88, 93上, 94下, 95右, 96, 99上, 101上, 102,
 103, 104右, 105, 106右, 108下右, 112, 117, 118上,
 119, 121右, 124右, 125, 126, 127上, 135右
 アイデック p.14右, 20, 21上, 24右, 41上
 アクタス p.27, 44上, 56上, 141上, 142
 アサヒビル p.136左
 アッシュ・アー・ドウ p.42右, 50, 57, 138, 139,
 140
 アルフレックスジャパン p.72上, 81右, 99下右,
 100, 110, 111上
 アンビエンテ・インターナショナル p.108上, 下左,
 109, 136右
 カッシーナ/インターデコール p.17, 28右, 33,
 34, 49上, 63右, 107, 122
 ノール インターナショナル ジャパン p.38上,
 40下, 68上, 86, 94上, 123, 129, 131右, 134,
 137右, 下
 ノバオーシマ p.73, 89, 97, 128, 130, 133
 B C工房 p.29右, 65上, 80
 二葉工業 p.53右
 リビング・デザインセンターOZONE p.8左, 右
 有川幸雄 表紙
 越後島研一 p.49下
 片木篤 p.16, 21下, 23左, 28左, 29左, 36下, 58,
 93下
 河合俊和 p.104左
 桜井義夫 p.121左
 島崎信 p.19上
 下村純一 p.16上, 26下, 32, 37下, 45下, 52下,
 76左, 79左
 Studio Mangiarotti p.90, 91, 92
 ディー・サイン p.8中
 東京デザインセンター p.106左
 東京都立大学小林研究室 p.101下
 羽原肅郎 p.75下, 131左
 光藤俊夫 p.19下, 41下, 68下, 98, 132右
 村井修 p.65下

■参考文献・図版出典

“ADOLF LOOS” Rizzoli International Publications, Inc., 1988
 “EL LISSITZKY” Thames and Hudson, 1968
 “MARCEL BREUER” Benedikt Taschen, 1992
 “VIIPURI LIBRARY” Academy Editions, 1994
 “Modern Danish Architecture” Arkitektens Forlag, 1982
 “Modern Architecture Europe” Dennis J. De Witt and Elizabeth R. De Witt, 1987
 “Richard Neutra and The Search for Modern Architecture” Thomas S. Hines, 1982
 “Michael Graves 1990-1994” Rizzoli International Publications, Inc.

“ILMARI TAPIOVAARA” Museum of Applied Arts, Helsinki
 “ANTTI NURMESNIEMI” Kaupungin Taidemuseo, Helsinki, 1992
 “Arkitekten FINN JUHL” Arkitektens Forlag, 1990
 “ZANUSO” Trevor Wilson Publishing, 1971
 “PIERRE CHAREAU” Rizzoli International Publications, Inc., 1984
 “Louisiana” Louisiana Museum of Modern Art
 “Jean PROUVE” Wient
 “Richard Neutra and the Search Modern Architecture” University of California Press, 1982
 “VIIPURI LIBRARY” Academy Editions, 1994
 “MARCEL BREUER” BENEDIKT TASCHEN, 1992
 “EILEEN GRAY” Harry N. Abrams, 1987
 “ANTONIO CITTERIO & TERRY DWAN ARCHITECTURE & DESIGN” Artemis, 1993
 “FINN JUHL” Arkitektens FORLAG, 1990
 “Modern Danish Architecture” Arkitektens Forlag, 1982
 “ANTTI NURMESNIEMI” KAUPUNGIN TAIDEMUSEO, 1992
 “ADOLF LOOS” Rizzoli International Publications, Inc., 1982
 “MODERN ARCHITECTURE IN EUROPE” DENNIS J. DE WITT & ELIZABETH R. DE WITT, 1987
 “EL LISSITZKY” THAMES AND HUDSON, 1968
 “ILMARI TAPIOVAARA” Taideteollisuusmuseo, 1984
 “The Modern Chair” Studio Vista, 1974
 “MOBELTEGNINGER” 1996
 “Achille Castiglioni” Electa, 1989

『世界の椅子絵典』光藤俊夫／彰国社、1987
 『椅子の世界』光藤俊夫／グラフィック社、1977
 『現代の家具と照明』大廣保行／鹿島出版会、1988
 『続・現代の家具と照明』大廣保行／鹿島出版会、1991
 『建築家によるデザイン 家具・照明器具・ステイションナリー・装飾372』ジュリ・カベラ／クィム・ラレア編／現代企画室、1990
 『日本の木の椅子』別冊商店建築78／商店建築、1995
 『椅子の本』エル・デコ別冊／タイムアシュツジャパン、1992
 『アリバ・コレクション1803-1978』ビンセント・マズチ／建築資料研究社、1993
 『デ・キリコ展』日本アドヴィザー、1993
 『椅子の時代』文・内田繁 写真・稲越功一／光文社、1988
 『ファニチュアデザイン』内堀繁生、藤城幹夫／理工学社、1975
 『20世紀の家具のデザイン』ゼンバハ、ロイトハイザー、ゲッセル／ベネディクトタッセル、1992

■監修

光藤俊夫
 ■編集協力
 羽原肅郎
 河合俊和
 織田憲嗣
 ■資料協力
 織田憲嗣十北海道東海大学織田研究室
 島崎信
 アイデック
 アクタス
 アッシュ・アー・ドウ
 アルフレックスジャパン
 アンビエンテ・インターナショナル
 カッシーナ/インターデコール
 ノール インターナショナル ジャパン
 ノバ オーシマ
 ハーマンミラー・ジャパン
 BC工房
 二葉工業
 リビング・デザインセンターOZONE

この特集に掲載した各椅子の年代・データは既存の書籍、雑誌、および製造・取り扱いメーカーのカatalog等を参照している。それらの中においても、年代など若干の違いがあったり、不明のものもあった。また、年代の古い椅子などは参照資料がほとんどなかったが、貴重な椅子として敢えて紹介した。各椅子の解説をお願いした著者たちの資料や協力のもと、編集部判断において現時点でのできる限りのデータを付記した。読者にとっては、不十分さを感じられるかもしれないが、その点は何卒御容赦願いたい。また、フリーハンド図面のスケールは15分の1、そして建築写真は、その椅子の置かれた建築または代表作として挿入した。(編集部)

- 1836○パリ エトワール凱旋門完成 (仏)
1853○G.F.オースマン パリ都市大改造計画着工 (仏)
1859○P.ウェブ (W.モリス邸 赤い家) (英)
1864○フェーレ (大浦天主堂) (日)
1879○辰野・片山・曾禰・佐立 工部大学造家学科第1回卒業 (日)
1883○J.コンドル (鹿鳴館) (日)
1884○A.ガウディ (聖家族教会) (スペイン)
1889○G.エッフェル (エッフェル塔) (仏)
1891○ (ニコライ堂) (日)
1893○V.オルタ (タッセル邸) (ベルギー)
1898○A.ガウディ (カサカルヴェ) (スペイン)

- 1900○H.ギマール (パリ地下鉄入り口) (仏)
1904○C.R.マッキントッシュ (ヒルハウス) (英)
1909○片山東熊 (赤坂離宮) (日)

- 1910○A.ロース (シュタイナー邸) (オーストリア)
1911○J.ホフマン (ストックレー邸) (オーストリア)
1912○O.ワグナー (ウィーン郵便貯金局) (オーストリア)
1913○ニューヨーク摩天楼建設 (米)
1914○B.タウト (ガラスの家) (独)
1914○辰野・葛西 (東京駅) (日)
1914○エリエル・サールネン (ヘルシンキ中央駅)
1914○ (バウハウス・ワイマール) (独)

- 1922●F.L.ライト (帝国ホテル) (日)
1924●G.T.リートフェルト (シュレーダー邸) (オランダ)
1925●ル・コルビュジエ (エスプリヌーヴォー館) (仏)
1926● (バウハウス・デッサウ) (独)
1927●M.スタム (ワイゼンホーフジードルング) (独)
1929●R.J.ノイトラ (ローヴェル邸) (米)
1929●ミース.v.d.ローエ (バルセロナ万博ドイツ館) (伊)

- 1931●ル・コルビュジエ (サヴォア邸) (仏)
1933●A.アアルト (バイミオのサナトリウム) (フィンランド)
1936●F.L.ライト (カウフマン邸) (落水荘) (米)
1937●坂倉準三 (バリ万博日本館) (仏)

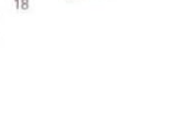
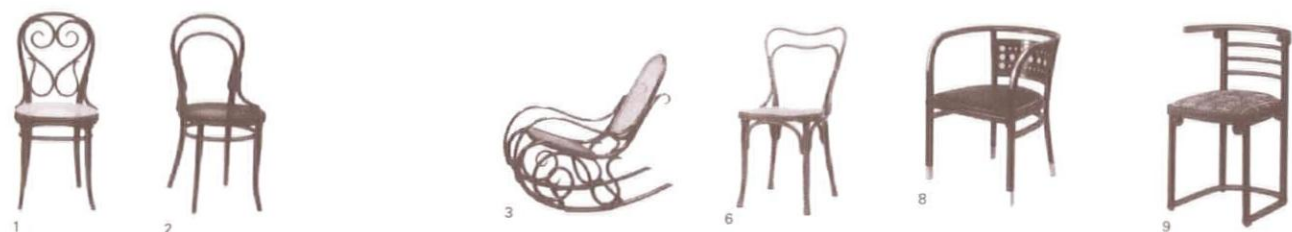
- 1841○ミカエル・トーネットコブレンツ博に出品 (独)
1849○M.トーネット曲木量産椅子 (ダウム) (独) *1
1859○M.トーネット14号椅子 (オーストリア) *2

- 1890○M.トーネット (ロッキングチェア) (オーストリア) *3
1895●アンリ・クレマン・ヴァン・デ・ヴェルデ (自邸の椅子) (ベルギー) *4
1897●チャールズ・レニ・マッキントッシュ (アーガイルチェア) (英) *5
1898●アドルフ・ロース (ムゼウムチェア) (オーストリア) *6
1898●アントニオ・ガウディ (カサカルヴェの椅子) (スペイン) *7
1902●オットー・ワグナー (郵便貯金局の椅子) (オーストリア) *8
1902●カルロ・ブガッティ (ハイバックチェア) (伊)
1902●C.R.マッキントッシュ (ヒルハウス1) (英)
1905●ヨゼフ・ホフマン (ロッキングチェア) (オーストリア)
1907●J.ホフマン (フレダーマウス) (オーストリア) *9

- 1910●ワルター・グロピウス (アームチェア D-51) (独)
1910●エリエル・サールネン (ホワイトチェア) (フィンランド)
1914●コア・イェンセン・クリント (ファーボーチェア) (デンマーク) *10
1914●フランク・ロイド・ライト (ミッドウェイ1) (米) *11
1917○カール・マルムステン (ストックホルム市庁舎の椅子) (スウェーデン)
1918●ヘリット・トーマス・リートフェルト (赤と青の椅子) (オランダ)

- 1920年代●エル・リシツキー (アームチェアD-61) (ロシア)
1922●F.L.ライト (帝国ホテルの椅子) (米)
1925●エリック・グンナール・アスプルンド (セナ) (スウェーデン)
1925●マルセル・ブロイヤール (ワシリーチェア) (独) *12
1926●マルト・スタム (鋼管S-33チェア) (独) *13
1926●ミース・ファン・デル・ローエ (MRチェア) (独)

- 1930●ジャン・ブルーベ (D-80 ラウンジチェア) (仏) *19
1930●A.アアルト (スツール) (フィンランド) *20
1930●M.v.d.ローエ (ブルーノチェア) (独) *21
1930●ミッシェル・デュフェ (チェア) (仏)
1930●R.M.ステヴァン (チェア) (仏)
1933○モーエンス・コッホ (折りたたみ椅子) (デンマーク) *22
1934○型面工房 (アームチェア) (サイドチェア) (日)
1934○ブルノ・マットソン (合板椅子) (スウェーデン) *23
1934●ジュゼッペ・テラーニ (フォリア) (伊)
1934●G.T.リートフェルト (ジグザグチェア) (オランダ)
1934●ブルーノ・タウト (レストラン椅子) (日)
1936●G.テラーニ (サンテリア) (伊)
1937●F.L.ライト (バレル) (米)
1937●E.G.アスプルンド (ヨーデボリ-1) (スウェーデン) *24
1938○ハンス・コーレイ (ランディチェア) (スイス) *25



註：● は本誌掲載椅子、* は図版の番号をあらわす

- 1801○メートル法制定 (仏)
1804○ナポレオン1世皇帝即位 (仏)

- 1851○第1回万国博覧会開催・ロンドン
1858○日米通商条約調印・安政の大獄 (日)
1861○W.モリス「モリス商会」設立 (英)
1863○ロンドン地下鉄開通
1868○江戸開城
1876○G.ベル電話発明 (米)
1879○T.エジソン白熱電灯発明 (米)

- 1883○ダイムラー高速ガソリン機関開発 (米)
1893○アールヌーヴォー運動始まる
1894○日清戦争 (日)

- 1901○マルコーニ無線電信成功
1903○ライト兄弟初飛行
1904○日露戦争
1904○日本初のデパート三越呉服店開店

- 1908○大衆車フォードT型発売 (米)
1910○日韓併合

- 1911○アムンゼン南極点到達
1914○第1次世界大戦
1914○パナマ運河完成
1917○ロシア革命

- 1923○関東大震災 (日)
1925○ヒトラー「わが闘争」
1927○リンドバーク大西洋横断飛行

- 1929○世界大恐慌

- 1930○W.アレンNYクライスラービルに初めて大量のステンレス使用
1931○満州事変
1934○ドイツ総裁にヒトラー就任
1934○モンサント社メラミン樹脂完成 (米)
1939○第2次世界大戦開戦
1939○米GE社蛍光灯製作

1940○J.クリント〈グランドヴィ教会〉(デンマーク)
1942○P.ジョンソン〈ガラスの家〉(米)

1948○谷口吉郎〈藤村記念堂〉(日)
1949○A.ヤコブセン〈クランケンホルグの連続住宅〉(デンマーク)
1949○C.イームズ 工業規格による実験住宅〈自邸〉(米)

1950○M.ビル〈ウルム造形大学〉(独)
1951○A.レイモンド〈リーダーズダイジェスト東京支社〉(日)
1952○ル・コルビュジェ〈マルセイユのアパート〉(仏)
1952○H.ヘルツェン〈タピオラ団地〉(フィンランド)
1955○前川・板倉・吉村〈国際文化会館〉(日)

1956○P.L.ネルヴィ パリユネスコビルに初めて折板構造使用〈仏〉
1956○L.コスタ ブラジリアマスタープランコンペに入選〈ブラジル〉
1956○J.ウツォン シドニーオペラハウスコンペに入選〈オーストラリア〉
1958○J.ボウ&V.ヴォーラート〈ルイジアナ美術館〉(デンマーク)
1958○G.ボンティ〈ビレリビル〉(伊)

1960○A.ヤコブセン〈SASロイヤルホテル〉(デンマーク)
1960○B.フラウ〈マンハッタン島ドーム計画〉(米)
1961○F.アルビーニ〈ローマリナセンテ百貨店〉(伊)
1962○エーロ・サーリネン〈TWA空港ビル〉(米)
1963○菊竹清訓〈出雲大社庁の舎〉(日)

1964○丹下健三〈オリンピック屋内体育館〉(日)
1966○M.ブロイヤー〈ホイットニー美術館〉(米)
1967○K.ローチ〈フォード財団ビル〉(米)
1968○山下寿郎〈霞ヶ関ビル〉(日)
1969○T.スオマライネン〈テンペリアウキオ教会〉(フィンランド)

1974○J.ポートマン〈ハイアットリージェンシーホテル〉(米)
1976○J.ウツォン〈ハウスベア教会〉(デンマーク)
1976○M.ヤマサキ〈ワールドトレードセンター〉(米)
1977○R.ピアノ他〈ボンビドーセンター〉(仏)
1978○安藤忠雄〈住吉の長屋〉(日)

1982○M.グレイブス〈ボートランドビル〉(米)
1982○K.ローチ〈ゼネラルフーズ本社〉(米)
1984○金寿根〈オリンピックスタジアム〉(韓)
1985○N.フォスター〈香港上海銀行〉(香港)
1986○P.ジョンソン他〈AT&T本社ビル〉(米)
1986○G.アウレンティ〈オルセー美術館〉(仏)
1986○R.ロジャース〈ロイド・オブ・ロンドン〉(英)
1988○吉村順三〈ハヶ岳高原音楽堂〉(日)
1989○L.M.ペイ〈ルーブルピラミッド〉(仏)

1991○丹下健三〈東京都新都庁舎〉
1992○M.ペリーニ〈東京デザインセンター〉
1994○久米設計〈恵比寿ガーデンプレイス〉
1995○R.ピアノ〈関西国際空港〉
1995○C.ペリ〈NTT新宿本社ビル〉

1940●カイ・フィスカー〈ウイングバックチェア〉(デンマーク)
1942○C.イームズ〈EA.アームチェア〉(米)
1943●エーロ・サーリネン〈ウームチェア〉(米) *26
1944○ハンス・ウェグナー〈チャイニーズチェア〉(デンマーク)
1945○フィン・ユール〈アームチェア〉(デンマーク)
1946○C.イームズ〈ブライウッドチェア〉(米) *27
1946○C.イームズ〈DCM〉(米) *28
1946●リチャード・J.ノイトラ〈イージーチェア〉(米)
1947○H.ウェグナー〈ビーコックチェア〉(デンマーク) *29
1949○H.ウェグナー〈ザ・チェア〉(デンマーク) *30
1949○F.L.ライト〈タリアセン〉(米)
1949●F.ユール〈エジプシャンチェア〉(デンマーク) *31
1949●マルコ・ザヌーソ〈アントロブス〉(伊)

1950年代●アントニン・レイモンド〈ダイニングチェア〉(日)
1950○C.イームズ〈DAR〉(米)
1950○ピーター・ヴィート他〈AXチェア〉(デンマーク)
1950●マックス・ビル〈ウルムの椅子〉(独)
1951○H.ウェグナー〈Yチェア〉(デンマーク) *32
1951○ハリー・ベルトイア〈ワイヤーチェア〉(米)
1952●アルネ・ヤコブセン〈アンツチェア〉(デンマーク) *33
1952●フランコ・アルビーニ〈フィオレンツァ〉(伊) *34
1952●ジョー・ボンティ〈スーパレジェーラ〉(伊) *34
1952●ジョージ・ネルソン〈プレッツェル〉(米) *35
1954○渡辺力〈ひもいす〉(日) *36
1955○A.ヤコブセン〈セブンチェア〉(デンマーク)
1955●F.アルビーニ〈ルイザチェア〉(伊) *37
1955○ポール・ケアホルム〈PK22〉(デンマーク)
1955●ヴィルヘルム・ヴォーラート〈ピアノチェア〉(デンマーク)
1956○柳宗理〈バタフライstuhl〉(日) *38
1956●C.イームズ〈ラウンジチェア+オットマン〉(米) *39
1956●G.ネルソン〈ココナッツチェア〉(米)
1956●E.サーリネン〈チューリップチェア〉(米) *40
1956○イングヴェ・エクストロム〈ラムミノ〉(ノルウェー)
1957●フローレンス・ノル〈ラウンジチェア〉(米) *41
1957●イルマリ・タピオヴァアラ〈アスラックチェア〉(フィンランド)
1957●アキレ+ピエール・ジャコモ・カスティリオーニ〈メツァドロ〉(伊)
1958●A.ヤコブセン〈エッグチェア+オットマン〉(デンマーク) *42
1958○カール・アクセル・アックキング〈トウキョウチェア〉(スウェーデン)
1959●アンジェロ・マンジャロッティ〈チンクアンタノーベ〉(伊)

1960●A.カスティリオーニ〈スプルーガ〉(伊)
1960○アンティ・スルメスニエミ〈トリエンナーレチェア〉(フィンランド)
1962●ガエ・アウレンティ〈ロッキングチェア〉(伊)
1965●ジョエ・コロンボ〈コロンボチェア〉(伊)
1965○イングマル・レリグ〈シエスタ〉(ノルウェー)
1965○オリビエ・ムルグ〈ジン〉(仏)
1965○ピエール・ボラン〈リボンチェア〉(オランダ)
1966●ワーレン・ブラットナー〈アームチェア〉(米) *43
1967○ドゥルビノ他〈ブロー〉(伊)
1967●A.スルメスニエミ〈シェーズロング〉(フィンランド)
1967○トビア・スカルバ〈シプレチェア〉(伊)
1967○V.バントン〈プラスチック・スタッキングチェア〉(デンマーク)
1968●ヨーン・ウツォン〈ラウンジチェア〉(デンマーク)
1968●ガッティ+パオリニ+テオドロ〈サッコ〉(伊) *44
1969○カルロ・ブカッティ〈Gala〉(伊)
1969○ガエターノ・パシェ〈UP-1チェア〉(伊)
1969●ヴィコ・マジストレッティ〈セレーネ〉(伊) *45

1970●アフラ&トビア・スカルバ〈ソリアナチェア〉(伊)
1970○A.カスティオーニ〈プリマテ・スツール〉(伊)
1970○新居猛〈ニイチェア-X〉(日) *46
1971○マリオ・マレンコ〈マレンコチェア〉(伊)
1971●J.コロンボ〈ピリッロ〉(伊)
1972○ジョージ・ナカシマ〈コノイドチェア〉(米) *47
1973●G.ボンティ〈ガブリエラ〉(伊)
1974●A.&T.スカルバ〈ディアロゴ〉(伊) *48
1975●G.アウレンティ〈アームチェア〉(伊) *49
1975●A.&T.スカルバ〈アフリカチェア〉(伊) *50
1976●C.スカルバ〈ダイニングチェア〉(伊)
1977●C.スカルバ〈ケンタッキー〉(伊)
1977●マリオ・ペリーニ〈キャブ〉(伊) *51
1978●マルコ・ザヌーソ〈チェレスティーナ〉(伊) *52
1979●チニ・ボエリ〈ストリップス〉(伊)
1979●ジャン・ドメニコ・ベロッキ〈スバゲッティ〉(伊)
1979○ピーター・オプスヴィック〈バランステア〉(ノルウェー)
1979●ステファン・ヴェヴェルカ〈B1チェア〉(独)

1980○喜多俊之〈ウインク〉(日)
1981●アルド・ロッシ〈テアトロ〉(伊)
1981●アントニオ・チツェリオ〈フィリビーネ〉(伊)
1982●フィリップ・スタルク〈コスト〉(伊)
1982●パオロ・テネガロ〈トルソ〉(伊)
1982●マリオ・ボッタ〈セコンダ〉(スイス)
1982●リチャード・マイヤー〈アームチェア〉(米)
1982●S.ヴェヴェルカ〈カンティレバーチェア〉(独)
1983●ミケーレ・デ・ルッキ〈ファースト〉(伊)
1983●エッソーレ・ソットサス〈ウェストサイドラウンジチェア〉(オーストリア)
1983●A.スルメスニエミ〈ノックダウンチェア〉(フィンランド)
1983●A.マンジャロッティ〈シカゴ〉(伊)
1984●ロマッツォ+ドゥルビノ+デ・バス〈バミラチェア〉(伊)
1984●アレクサンドロ・メンディエーニ〈サブロチェア〉(伊)
1984○チャールズ・ジェンクス〈サンチェア〉(米)
1984●チャールズ・フィスター〈ブルアップチェア〉(米)
1984○V.マジストレッティ〈ペランダ〉(伊)
1984●ロバート・ヴェンチュエリ〈クイーンアン〉(米)
1985●マッシモ・ヴィニエリ〈ハンカチーフチェア〉(伊)
1985●マイケル・グレイブス〈MG2 アームチェア〉(米)
1985●エンツォ・マリ〈トニエッタ〉(伊)
1986●E.ソットサス〈ブリッジ〉(オーストリア)
1986●M.ボッタ〈クインタ〉(スイス)
1986○P.スタルク〈ローラムンド〉(仏)
1987●オスカル・トウスケツ〈ガウリーノ〉(スペイン) *53
1989●M.ペリーニ〈ブレイクアームチェア〉(伊)

1990●アンドレ・ブットマン〈ルー・ドゥ・バック〉(仏)
1990●A.マンジャロッティ〈クリツィア〉(伊)
1990○ナンナ・ディツェル〈ベンチフォートゥー〉(デンマーク)
1992●フラック・O.ゲリー〈クロスチェックアームチェア〉(米) *54
1993●A.ブットマン〈カクトア〉(仏)
1993○トルベン・スコウ〈リザード〉(デンマーク) *55
1994●ルカ・スカゲッティ〈キャスト〉(伊)



26



27



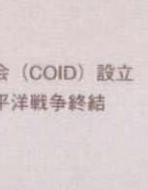
28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



56



57



58



59



60



61



62



63



64



65



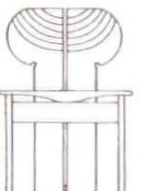
66



67



68



69



70



71



72



73



74



75



76



77



78



79



80



81



82



83



84



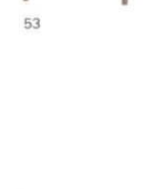
85



86



87



88



89



90



91



92



93



94



95



96



97



98



99



100



101



102



103



104



105



106



107



108



109



110

Knoll

SOHO
SoHo Office System

SoHo は伝統を守り続ける Knoll の最新プロダクトです

75 年前、ドイツ バウハウスは、プロダクトデザインの分野において新たなアプローチをする先駆者的存在であった。バウハウスの思想は、注意深くデザインを練り、そして熟練工としての精

神を通して、新たな工業技術へと発展するというものだった。グッドデザインとグッドバリューがバウハウスの目指すゴールであり、そして 50 年以上にわたる ノール インターナショナルの哲学でもある。

Knoll International Japan

〒100 東京都千代田区丸の内3-1-1 国際ビル TEL 03-3213-6767

SDレビュー1996

第15回 建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

募 集 要 項

【募集対象】

実施を前提とした設計中ないしは施工中の建築、屋外空間、インテリア 国外に建つものも含める。
但し、応募の時点で既に完成しているもの、雑誌などに発表済みのもの、
実施の見込みが全く無いもの、コンペの応募作品(公開、指名、入選、落選を問わず)は対象外とする。
応募作品点数は原則として一人一点に限る。



【応募者の資格】

特に必要なし。

【提出物】

プレゼンテーション:

1. 設計意図を説明するために必要と思われる図面、写真等、特に制約はなく、各自選択すること。
表現方法は自由であるが、プレゼンテーション
それ自体の技術や密度は、審査に当たっての
主要な評価の対象とはされない。
2. プロジェクト名、建築用途、施主名(事業主体名)、
工事予定期間、主体構造、主要仕上げ材料、
建築面積、延床面積。
3. 400字以内の設計趣旨文(省略してもよい)

以上をA3判用紙(420×297mm)4枚以内に
まとめたもの、パネル化は不可(クリアファイル
等に入っている場合は審査時に取り外します)。
設計者氏名、設計組織名は一切記入しないこと。
2、3は添付書類に含めず1と共にA3判用紙に
記述することに注意。



添付書類:

プロジェクト名、応募者(=設計者)名・フリガナ、
応募者の年齢、職業、勤務先名とその住所
(以上、組織の場合は、その担当者について明記)、
応募者への連絡先(自宅か勤務先か明記のうえ、
郵便番号、住所、電話番号、FAX番号)、共同設計者名、
以上の事項をA4判用紙に記載したもの。

【応募の受付】

1996年7月1日(月)より7月8日(月)
郵送または持参のこと。(持参の場合は平日の
午前11時から午後5時まで。郵送は当日消印有効)
受付後、受領通知を発送いたします。
提出後10日以内に通知が届かない時は、
SD編集部へお問い合わせください。

【提出先】

〒107 東京都港区赤坂6-5-13
鹿島出版会SD編集部 SDレビュー係
TEL.03-5561-2555 FAX.03-5561-2565
(地下鉄千代田線赤坂駅より徒歩5分
鹿島建設赤坂別館4F)

【主催】

鹿島出版会SD編集部



【入選通知】

前記の審査員により15点前後が選抜された後、
入選者のみに7月下旬までに書類にて通知する。

【提出物の返却】

提出物(図面、添付書類等)は、1996年8月23日から
9月17日までの平日午前11時から午後5時までの
間に、鹿島出版会SD編集部まで直接受取りに
来られた場合に限り、返却します。但し、
梱包材、クリアファイルなどはお返しできません。

【入選者の出展】

入選者は通知後、指定期間(約40日間)以内に、
展覧会に出展するための図面、模型、その他の
プレゼンテーションを製作し、後日指定の
日時、場所に入展する。
この作品は、SD1996年12月号に掲載され、
誌上発表される。入選者には製作費用として、
一律5万円が支払われる。

【審査員】

香山壽夫 (建築家、東京大学教授)
渡辺邦夫 (構造家)
内藤 廣 (建築家)
妹島和世 (建築家)



【SDレビュー1996入選展】

東京展

期間:1996年9月中旬—10月上旬(予定)
会場:東京都渋谷区猿樂町18-8

代官山ヒルサイドテラスF棟

アサクラギャラリー

大阪展

期間:1996年10月(予定)

会場:大阪府南河内郡河南町東山

大阪芸術大学芸術情報センター

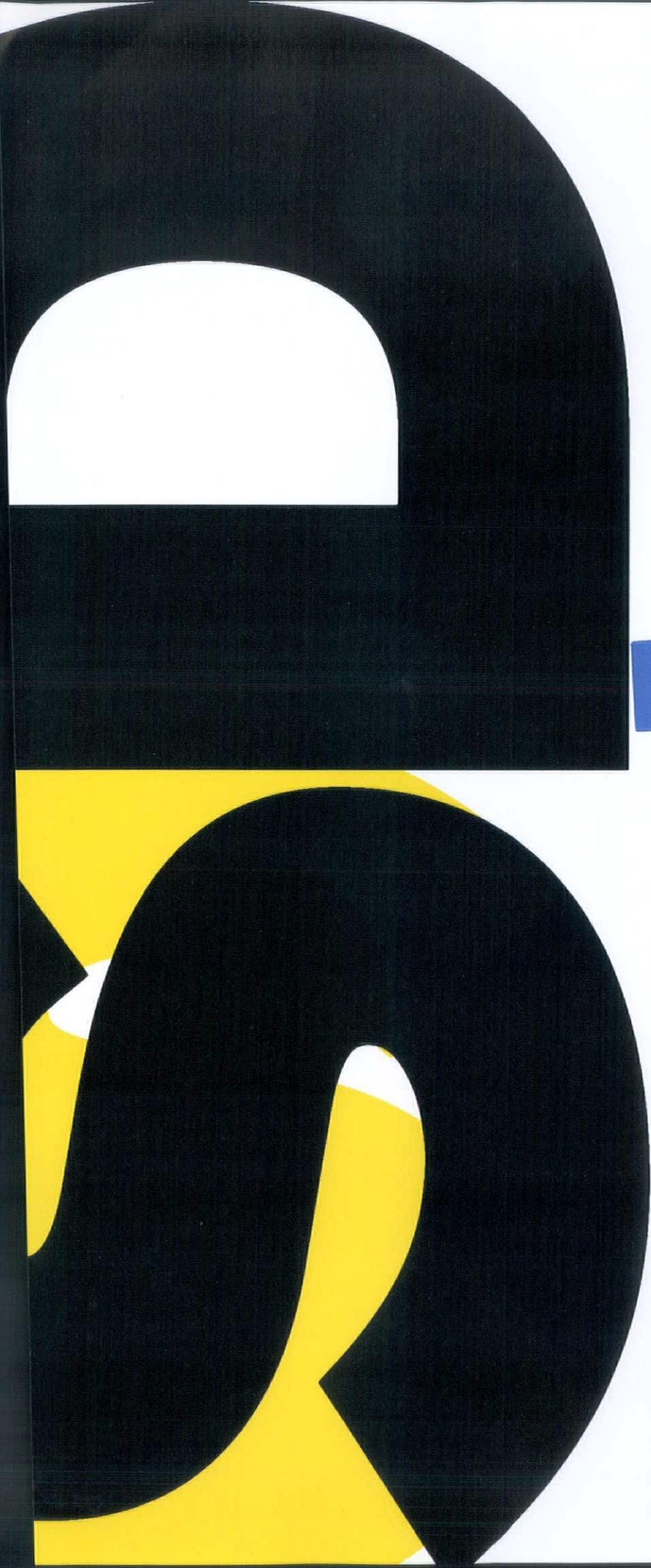
【誌上発表】 SD1996年12月号(予定)

【鹿島賞、朝倉賞、SD賞】

入選展に展示された作品の中から、3点を選び
鹿島賞、朝倉賞、SD賞として記念品を贈呈します。
発表はSD1996年12月号誌上にて行う予定。

【お問い合わせ】

SDレビュー1996についての御質問は、
SD編集部へハガキまたはFAX(03-5561-2565)
にてお問い合わせ下さい。



Review Piece

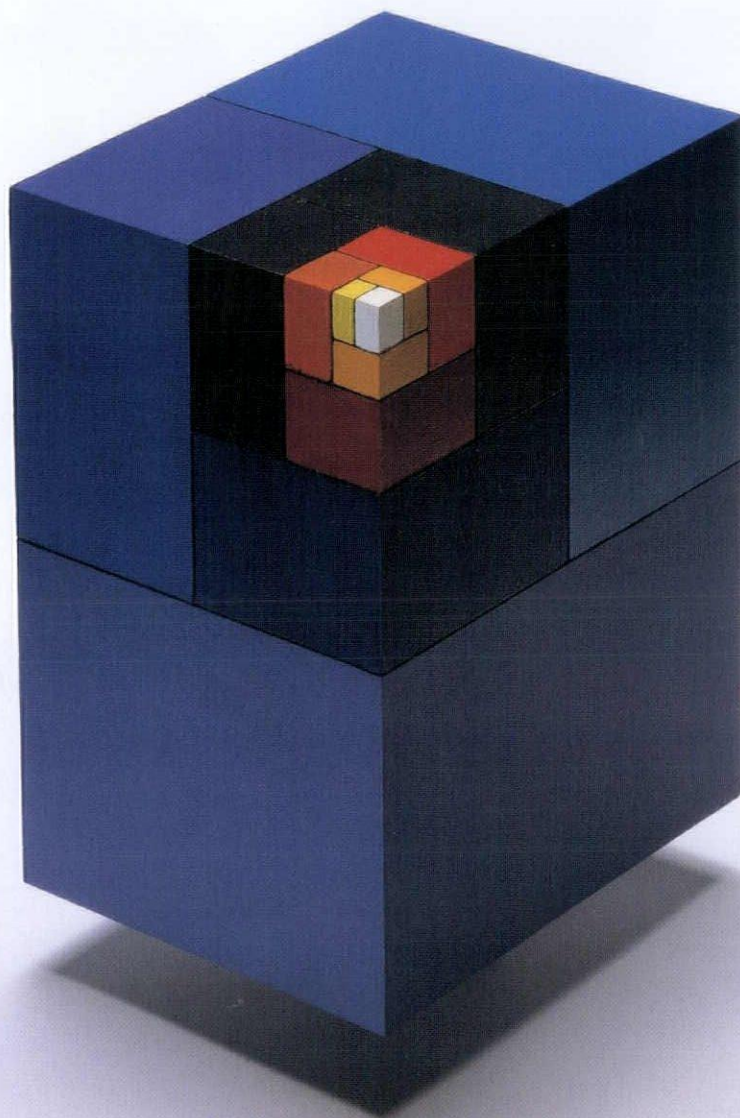
1999 9999

The 15th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings



戸村 浩

MONOLITH



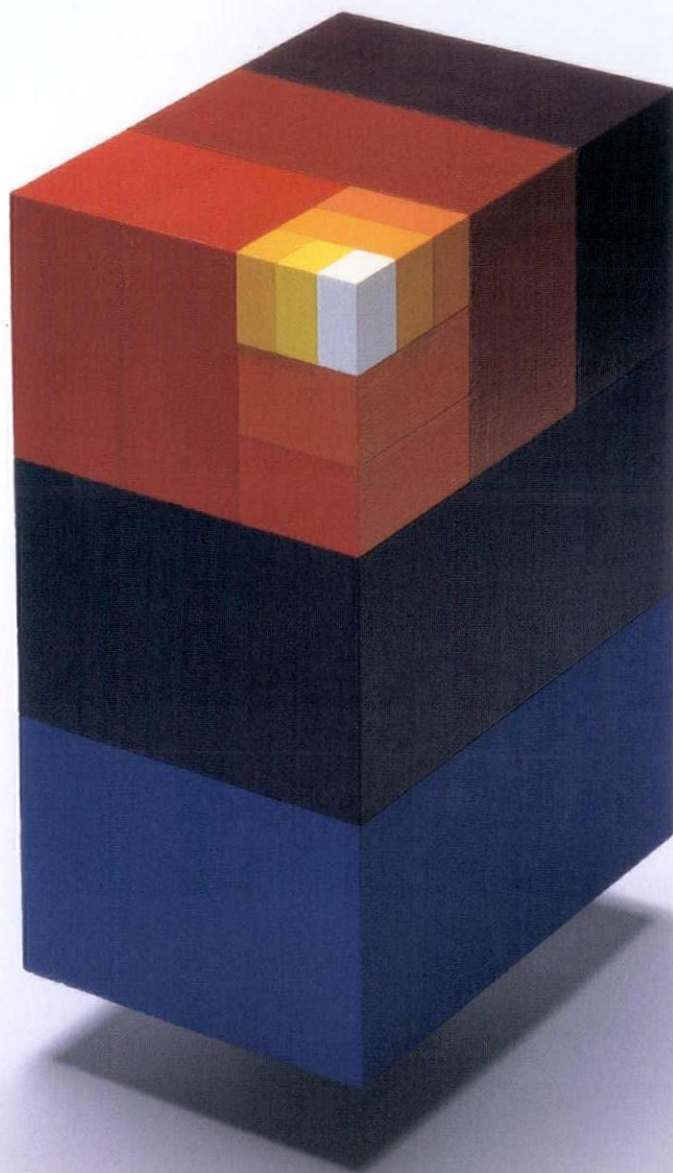
時と天地の数であろう50本の筮竹の中から、不易を司り神明の宿る、中心本体である太極の1本を取り、うやうやしく置く。次に王道の義を念じつつ、残った変易なる49本の筮竹を天と地に二分する。左手の筮竹は天であり右手は地である。その地策から1本を取り、これを人とし、簡易なるこの天地人の象から、陰陽の千変万化する卦を得て、吉兆を占う。

これは、不易・変易・簡易なる易の占筮法の基本手続きである。このように人は天と地に分かれた地より生まれ、森羅万象の流転変化に

おびえ、易によって求めた卦にも、天と地の隙間で右往左往する。

所詮、人間は地に属するものであり、易にびくつき、天を仰ぎ見るだけの小心者だろうか。確かに、我々は地の球の人であり、球形といえども平らな地平の民である。かつて、我々の祖先は、大地の窪みから窪みへと身を隠し、暗い洞窟内を這い回り、または、枝から枝へと飛び移って、樹木の揺れるがままに身を任せていた。その頃の彼等の空間感覚は、少なからず豊かなものであっただろう。

だが、現代人の空間把握の感覚は、前人より如何に平面的であるこ



とか。そのことに我々はいささかも気付いていない。ハイテクのコンピュータを巧みに操作して、3次元グラフィックスを見事に描こうが、我々の思考と創造性は、いまだ表皮的であり平面的である。

震える手で、中心本体の太極なるモノリスに触れ、やっと平らな大地に直立し得たとき、水平と垂直の頑固な概念が確立し、不動のものとなった。そして、流転する宇宙を知り、人類は、その世界を我が物顔で闊歩した。だが、如何に走り回り、飛び、這い、登り、潜り、まるで鳥や魚や昆虫のように振る舞っても、頭脳の中のその直立感覚が

水平を目指し、行動の報酬としての進展と仮初めの太平を求める。

今や、その欲望は天使のような翼を持って、エヤープレーンが水平の天空を自由に飛び回り、ロケットは天空を突き破り、垂直に宇宙に向い飛び立っている。我々は、もうすでに、新たな、次なるモノリスに触れたのだろうか。

だとすれば、ここに提示する $\sqrt{2}$ と $\sqrt{3}$ のルート直方体も、そのモノリスのひとつかも知れない。

●とむら・ひろし／造形美術家

芸術としての光——天使の舞う都市

今回の講座は、パリ在住の写真家・アーティストの田原桂一氏をお招きし、「照明探偵の5つの心得」の第3番目、「芸術的な光に大袈裟に感動すること」に焦点を当て、光が街の中でいかに芸術たらしめられるか、を考えようというのがテーマであった。タイトルは「光の中の天使」。氏自らの命名である。21歳でフランスに渡り、日本の優しい包み込むような光とはあまりに違う強烈な光と出会う。「光の違いは、言語、思考、風景や人も左右する」と、以降、パリに定住し、写真から始まり、立体、環境をも巻き込んだ光を体言化・顕在化するための広範な表現活動を精力的に続ける田原氏にとっての光の天使とは、一体何だろうか。

まず、探偵レポートの澤田が、照明探偵団活動の中で出会ってきたと思われる光の天使たちにスポットを当てて、天使の居所を垣間みた、—それは山の風景であったり、折り重なる雲、珊瑚礁を照らす月明かり、夏祭りの火などの素直に感動に震える瞬間である—と思われたショットの数々を逸話を交えながら紹介した。それに対する田原氏のコメントは、「大袈裟に感動することが大切、と言うが、自然現象も含めた素晴らしい光を見て、それに感動するのは当たり前のこと。大切なのは、そこから自分が何を考えるか。太陽や宇宙であるところの『白い光』、そして、自分の体の中にある、或いは宇宙の暗黒であるところの『黒い光』、天使はその内なるところのもので、

外に存在するものではない」という痛烈なものだった。アーティストの世界に迫ろうとしたデザイナー集団が愚かだったと言うことか。

メソポタミアにまで遡った神話にも天使は登場する。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、仏教に於いては羽衣、という形で、天使は宇宙と自分たちを繋ぐ媒介者として存在し続けてきた。つまり、天と人間を結ぶものとして、光がそこに在った。光はメッセンジャーである。人間の想像力はそこに天使を見いだした。天使論にはじまる田原氏との形而上学的な光の観念論は、それだけで十分な題目になり得たはずだが、具体化した都市の光を語ろうとする照明探偵団の講座の今回の目的は、公共としての街の中にどこまで、芸術的な光環境が持ち込まれ得るか、ということである。そのために、まず、田原氏が1987年より行っている、ガラスやクリスタル等の素材を通して、より明白に光の体言化を図った、「光の彫刻」シリーズが紹介された。東京の光が丘団地で80台のサーチライトを使用した「光のオペリスク」、横浜で海に向かって行われたインスタレーション「光跡」、北海道の雪深い恵庭での、光が音楽に対応する幻想的な「光の庭」などである。

それに引き続き、現在パリで手がけている恒久的なパブリックアートとしての「カナル・サンマルタン」計画の進行状況が語られた。以下がそのプロジェクトの概要と背景である。

1980年末より、パリ市は芸術を公共事業として発注する政策を始め、今までにシャトレ劇場におけるガルス（第1アート）、市立劇場のモレーレ（第4アート）、サンジェルマン教会のなかのサンフォリアン聖堂のブラリオ（第6アート）等の作品を実現させている。1993年から4年にかけて、エスパース・エレクトラに於いてパリ市文化局、造形芸術課の主催で行われた「パリ・光の都」展では、20人のアーティストたちが選出され、各自が選んだパリの場所を題材に、現在のテクノロジーを使つての表現を企画発表した。この中で、ビル・フォンタナの「音の島」が94年6月凱旋門で実行され、アンリ・アレカンとパトリック・リムーの「光の道」が95年6月モンマルトルで実施された。田原氏は、この展覧会で、サン・マルタン運河における光のプロジェクトを発表し、「私にとっての光は、ただ物質や素材を『照らす』という本来、光を定義づけていた役割を担うものではない。光そのものを光本来の構造から捕らえ、或いは伝播させて、光自体の持つ表情をサン・マルタン運河という特異な場所と調和・相互作用させてみたい」と語った。

映画「北ホテル」の舞台となったことでも知られるこの場所は、パリ市の二大河流の一つで、パリの中心を一部は地上を、一部は地下に潜る航行用の運河の総称である。

この運河の地下ドームにおける田原氏の提案は、地下部分の丸い天井部に開けられた採



会場での対談風景



ゲストパネラーの田原桂一さん



パリの市街地図、カナルサンマルタン計画はセヌ川からバスチーユを通して北へ延びる

光用の窓にプリズムを固定し、更に、50台のプリズムを内蔵する人工光源による発光装置をアーチの側壁に埋め込み、それらの光を回折させ、その虹色の光の強弱や向きをコントロールすることであった。トンネルに絶えず響く水の音も要素に取り込んだこのプロジェクトは「光のエコー」と名づけられている。

現在進行中であるこのプロジェクトは、パリ市環境局管轄、特に運河局の技術協力の下に実現される予定である。総経費のかなりの部分を市が支給し、残りはプライベート・メセナの協力による。「芸術的作用によって市の遺産をさらに価値づける」というパリ市の政策は、田原氏のアーティストの立場としては、行政との交渉・主張・妥協も含めて、駆け引きはかなり難航を極めた模様である。

しかし、近頃日本でも街にアートを配置する、といういわゆるパブリックアートの現象が盛んになっては来たが、光や音というメタフィジカルな表現も含めて環境をアート化しようとするパリ市の文化政策は、いつも時代を一步先んじているように思われる。

このことについて、田原氏は、行政は行政として、フランスにおける民意の力の大きさを強調する。「自分たちの住んでいるところを良くしたい、自分たちの環境の中に引きつけられるものを作りたい、という熱意。僕も含めていろいろな人がそういうエネルギーと意識を持ってそれを維持させてゆく。それは、

クリティシズムというフランス語の言語の根底の部分でもある。日本には、批判する、クリティークする、という構造がない。その違いは大きい。」

また、評論家の力が民意を盛り上げるパワーとなっていることも指摘する。評論・批評する精神、文化社会について語ることでできる構造が、芸術的な都市環境を厳しく育てていく、と言うことか。田原氏は、常にパリは（文化的）土壌が違う、とその優越性を称え、日本の現状を憂うだけの状況定義には痛烈な批判を浴びせる。

光を当てる、何かを照らす、ことから光そのもののメッセージを伝えるデザインへ。十分すぎる明るさを手に入れた都市の生活では、真っ白い強い光で足し算をするのが戦後の近代化のシンボルになってしまった、と唱えるだけではもはや意味をもたない。そこから何を、どうしていくのか・・・。

街の光環境をデザインする立場として照明探偵団の役割を考える時、田原氏の示唆に富んだ批判精神は、照明や光が都市の中でどうあるべきかを、観察することから更に深く進んでいくことを要求する。まずは、「見る」という行為が眺めることに近い、とすれば「観る」こと、状況をもっと鋭く観察しながら自分の気持ちの中の暗黒の光も含めてもっと鍛えていく。身勝手な光が与えられすぎて価値判断の收拾すらつかない都市の氾濫状態で、

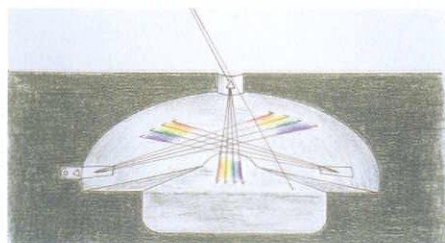
どのように天使に巡り会うような環境をつかっていくか。

パリ市のように、アーティストに公共環境のイメージ提案を依頼し、それを技術者が実現させる、という街づくりが日本で実現されるかどうかは、また別問題である。しかし、新たな転換期を迎えている今、現状を見据えながら、住民としての私たちひとりひとりが、ここに生活するものという意識を持つことがまず大切だ。そして、安全に、効率よく、経済的に・・・と作られてきた街の照明に対して積極的に提案がしていけるような、民意の高まりが、まさに必要とされているのではないかと、結論づけられた。

たくさんのスライドによる作品紹介に、あっという間に2時間の講座が経過した。今回は終了時に時間が延長され、田原氏プロデュースにより95年10月に完成した、35分の彼の自叙伝的映画を上映した。作家田原桂一の光との出会いを、ゆらめく光の映像のシルエットとフランス語のナレーション、幻想的な音楽とで表現したこの映画は、田原氏の心の内に存在してきた光の中の天使像を垣間みることができるような、美しい叙情的なものだった。

さて、私たちの内なる世界に天使は羽ばたくであろうか。

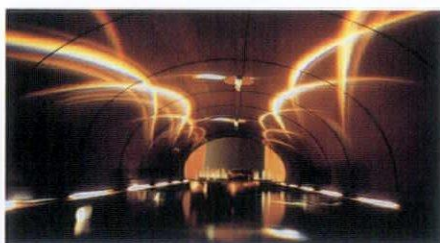
●葛西玲子/LPA



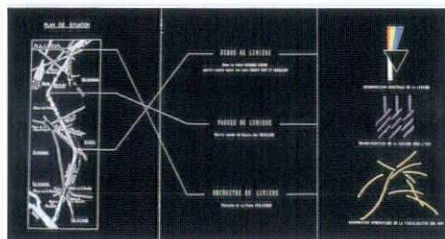
地下部分の計画案断面スケッチ／プリズムによる光の効果



カナルは途中で地下に入り込む



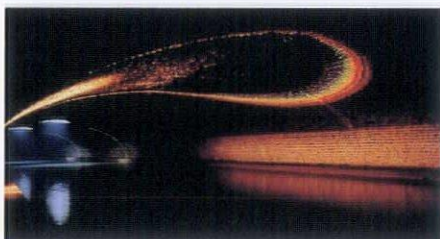
模型による計画案のシュミレーション



カナルは3つの光から構成される。光のエコー、光のオーケストラ、光のヴァーグ、と題されている。



地下には劇的な自然光が射し込んで来る



計画案の現場での効果実験。人工照明による虹が天井を染める

第4回「KAJIMA彫刻コンクール」入賞作品決定

鹿島主催による「KAJIMA 彫刻コンクール」の第4回入賞作品が決定した。1989年に鹿島創業150年記念事業としてスタートし、その後ビエンナーレ形式で行われているこのイベントは、彫刻コンクールのひとつとしての認識もほぼ定着しており、若手の応募がさらに増えている。

初回から一貫しているテーマは「彫刻・建築・空間」。「彫刻と建築が互いに刺激し合う新しい空間の創造」「彫刻と建築空間が生み出す緊張感・生命感あふれる空間を、都市や人々に提供する」とうたいながら、彫刻と建築の関係や新しい可能性を求めている。その今日的な解答として選抜されたものが次に紹介する作品である。パブリックアートへの関心がまだまだ高まっている中で、企業が主催するアート・イベントとしてさらに注目されるだろう。

今回の応募総数は289点。本年から始まったインターネットによる国際公募の結果、海外からは10点の応募があった。第1次審査で6点の入選作品が選出され、それらの実物制作が依頼された。実物作品による第2次審査により、金賞1点、銀賞1点、銅賞1点、奨励賞3点が決定した。作品の傾向として、例年目立った石材の使用がかなり減少したということが言える。

なお、この入選作品6点は、3月9日～22日まで、鹿島KIビル・アトリウムにて一般公開展示された。

審査員：

三木多聞（美術評論家）
酒井忠康（美術評論家）
清水九兵衛（彫刻家）
井上武吉（彫刻家）
谷口吉生（建築家）
鹿島昭一（鹿島相談役）
主催：鹿島
協賛：（財）鹿島美術財団、（株）イリア
運営：KAJIMA彫刻コンクール実行委員会



四間五柱／金賞／柴田純生（京都造形芸術大学助教授、1957年生）／素材：エポキシ樹脂、ポリエステル樹脂、大理石、雲母、ウレタン塗料



高層の壁／銀賞／高橋勇一郎（武蔵野美術大学講師、1960年生）／素材：鉄



交差する形 95-2／銅賞／内田晴之（彫刻家、1952年生）／素材：ステンレス、スチール、マグネット、塗料



PONKO 134／奨励賞／本郷重彦（成安造形大学教授、1942年生）／素材：鉄



∞億光年（ムゲンオクコウネン）／奨励賞／ヒサオ・カメヤマ（彫刻家、1953年生）／素材：カラーチタン、ステンレス、アルミニウム、鉄



baby's breath／奨励賞／清田佳世子（いけばな作家、1961年生）／素材：ステンレスワイヤー

SANKI

人を育む。自然を守る。産業を支える。
三機のエンジニアリング技術は多彩。



人間活動のすべてを支える社会環境を一体化させ、
そして調和させようとする三機の総合エンジニアリング技術。

快適で機能的な都市生活、
合理的で先進的な産業活動、そして、それをとりまく自然。

三機は、これらを単独ではなく、
総合技術を通して見つめ、有機的なひとつの流れを実現しようとしています。

多彩な技術を結び、
新たなシステムを展開している三機。



三機工業株式会社

本店 東京・日比谷・三信ビル TEL.(3502)6111
支店 北海道・東北・北関東・東関東・横浜・名古屋・北陸・大阪・
神戸・四国・中国・九州

「神秘の地」東洋から「今ここにある」アジアへ

ASA——JIAデザインワークショップ “Bangkok in Two Weeks”

Bangkok in Two Weeks——デザインワークショップ

会期：1996年3月23日～4月7日

会場：ASA（タイ建築家協会）

主催：ASA+JIA

日本側の学生参加者：戸沢啓治、恵本涼太郎、太田啓介、落合千佳子、京野弘一、宋知殷、西岡真紀、松原弘典、宮沢透、横山武志

「バンコクラしさ」とは一体何なのだろうか？昨今の経済成長は伝統的な「バンコクラしさ」を脅かしているように見える。しかし一方で、この「乱暴な」成長ぶりは、今までどの世界の大都市も経験したことがないような現代都市を生み出しつつあるのかもしれない。

1996年3月23日から4月7日まで、ASA（タイ建築家協会）とJIAの共催で学生のためのデザインワークショップ“Bangkok in Two Weeks”がバンコクで実施された。このイベントは、そもそも1950年前後生まれの日本の建築家、写真家、建築史家のグループ（岸和郎、北川原温、北山恒、妹島和世、Tom Heneghan、内藤廣、原尚、村松伸、古市徹雄、古館克明、古谷誠章）が2年前に始めたアジア地域での巡回展に併せて企画したものである。従来のものが展覧会中心であったのに対し、今回のバンコクのそれは、新しく学生同士のワークショップが同時に企画された。以下はその報告である。

深夜11時30分入国、早朝6時10分出国。ノース・ウェストの定期便は、信じられないような時間にバンコクを離発着するのだが、今にして思えば、それは最も「納得のゆく」スケ

ジュールだった。インフラ整備の不十分なこの大都市では、6時過ぎにもう渋滞が始まる。排気ガスまみれの道路を車でのろのろ進むのがいやなら、早起きするか遅寝するしかないのだ。

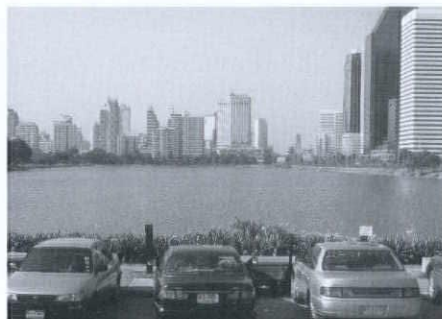
2週間の最初の3日間、僕は特に早起きした。タダオ・アンドーの講演会参加や芸術大学訪問など多くのスケジュールを渋滞を切り抜けながらこなすためにである。最も早起きの甲斐があったのは、バスでバンコク郊外の小さな村を訪ねボートで川や運河を往来したときだ。そこにはゆったりとした流れの両側に今でも水と共生した生活があった。

2週間の日程は大きく3つに分けられる。①最初の3日間のバスツアー。伝統的なタイの水辺空間を訪ねてそれを今日のバンコクの状況と比較する②各学生が自分の興味を発表し、プロジェクトのためのグループ分け。さらに適宜タイのクリティック（大学教授や建築家など）の指導を受けながら、グループ作業の進行③中間発表と、後から到着した日本のクリティックを交えてのプロジェクトのまとめ。こうしたスタジオの進行と併せて、ほとんど毎日夕方にレクチャーも開かれた。

第2段階のころの僕たちの興味は様々だった。あえて共通の傾向を挙げるなら、ほとんどの僕たちの指向は「多少感傷的になりながら、失われたバンコクの記憶を取り戻そうとするもの」であったように思う。スメット・ジュムサイ氏やヴィーラ・インファンタン氏のレクチャーはそうした傾向を励ます方向にあった。彼等は今のバンコクを否定し、自分が設計したお金のかかった「美しい」建物をスライドで次々と紹介した。建築は、まだこの国では金持ちのものであるように思える。面白いレクチャーをしたのは、ソムソーク・ポーヤンバンチャ女史という住宅問題の専門家だった。スラムの改善策として彼女が示した実例は、部分的に細かい対策を重ね合わせていくという現代的な手法だったし、実際の都市を対象にしているの、そこに説得力や国際的な視点も見出せた。

一週間もすると大体街のスケールが日本の学生にも把握できてくる。スタジオと並行して花市や週末市を駆け回ったのもこの時期だ。

そして、このころには僕達もすっかり早起き遅寝につぐ第2の渋滞対策案に気付いていた。それは水辺に出ることだ。チャオプラヤ



超高層が街中に林立するバンコク



線路の上に開かれた市場、バンコク郊外



舟で運河をゆく

川は、都市をふたつに分断しかねないくらい大きい。ところが、バンコクっ子は完璧なまでに自由にこの川を往来する。兩岸は無数の水上船で結ばれ、そしてここには渋滞はない。水辺にさえ出てしまえば、人は遠距離でも車の比でないほど速く市内を移動できるのだ。

日本の学生1人につき、タイの学生は大体2人でグループを組んだので、次第にお互いのことがよく見えるようになる。日本の学生は皆修士の1年だったが、タイの学生は学部(5年制)の最終学年を中心に、3、4年生もいた。面白いと思ったのは、文化的背景の差や受けてきた教育の違いよりも、今のその国の経済状況の違いが、明らかにタイー日本の学生の間のギャップになって現れていたことである。タイの学生の多くが、皆実証性よりもイメージを前面に押し出してくるのを見て、バブル期の日本のデコン流行を思い出した。レイヤリング、インスタレーション、カオスといった言葉と一緒にイメージを次々と膨らませてゆくタイの学生を見て、日本の学生の多くは、そのスピードに驚きながらも、彼らの「詰め」の甘さに距離を感じもしたようだ。

スタジオも後半に差し掛かり、日本からのクリティックも参加するようになると、プロジェクトの中には、感傷的なものから今のバンコクの状況そのものを積極的に引き受けるものもでてきた。スラム、仮設性、迷宮的市场空間、駐車場など、都市の具体的な部分に注目した提案が次第に姿を現し始めた。

実際のところ、バンコクは興味深い現代都市だ。それはセンチメントで切って捨てられ

るほど平板で醜悪なものではない。都市基盤の整備という点では、世界的中で恐らく最も近代化に失敗した不幸なメトロポリスのひとつだが、反面それは社会の新たな面を生み出しつつある。ここでは自動車は単なる移動手段ではなく、携帯電話と併せて空調の効いた(パッケージされた)最小単位の執務空間になっているし、バイク便はピザと郵便物ばかりでなく人間も運ぶ(最後に残された多少危険な、ただし確実に速い、第3の渋滞対応策がこれだ)。ポケベルは、東京の高校生が流行で持っているのとは違って、ここでは本当に必要に迫られて流通している。バンコクの「情報化」はファッションではなく、現在の不十分な都市構造、物理的な移動の困難さが本質的に求めているものなのである。よく比較される70年代のトーキョーとここが決定的に異なるのは、高度経済成長が情報化の進展と同時に進行しているという点だろう。バンコクを東洋の「神秘の地」と叙情的に捉えるのではなく、多くの問題を抱えながらも新しい萌芽を含んだ「今そこにある」アジア都市と見なす方向性が僕たち学生の間にも徐々に見えてきた。

最終的には、世界中の建築学校が皆そうであるように、提出前の慌ただしい徹夜を経て10のプロジェクトがまとめられた。ジュリーは盛況で、多くの学生の他、昨年までのホスト国であったマレーシアや、シンガポール、来年のホスト国であるインドからも建築家がゲスト・クリティックとして参加した。

結果としては多に楽しめる、教育的効果

の高いワークショップだった。「アジア国同士の」イベントであることで特徴的だったのは、タイには日本以上に「和の空間」がある、ということだった。例えば、アメリカの留学体験を日本人学生が語るとき、決まって向こうのスタジオの徹底的な論証性を強調するが、日本からタイを見るとこの現象が全く反転して現れる。少なくともワークショップにいたタイの学生は、日本の学生以上にゆっくりとおおらかに、意見が衝突しても個をむき出しにすることはあまりなかったように思う。どちらが優れているかは別にして、そういった違いに気付くことが、アジアでこうした交流をする上で大事なことなのだろう。

4月8日から2週間、日本大使館の領事部が入っているセームミットタワーのギャラリーで、11人の日本のクリティックの展覧会と併せて僕らの作品も展示された。明日は帰国という日、翌日は朝3時に宿舎を出て6時の飛行機に乗る日本の学生のために、多くのタイの学生が一晩中さよならパーティを開いてくれた。思えば3つの渋滞対策のうちの第1、早起き遅寝というのはこの日に完全な形で成就した。ふたつをいっぺんにやると徹夜ということになる。そしてこれはまさに、最もバンコク的なさよならの作法のように思えた。つまり、物理的な移動の困難さがコミュニケーションを活性化させる最適の事例を、僕らは最後の日の晩から朝にかけて自らの身をもって実践してきたというわけである。

●松原弘典/東京大学大学院大野研究室。8月よりモスクワ建築大学研究生



スタジオ風景



ファイナル・プレゼンテーション風景



展覧会オープニングでのクリティック



ファイナル・プレゼンテーション風景



ファイナル・プレゼンテーション風景



クリティックと談笑する学生

いいものだけを世界から

いま開幕、 スポーツ ニューステージ。

多目的スペースがスポーツアリーナに一変！



ロビンス・オールスターは、世界中で広く使われているポータブル・スポーツフロア・システム。本格的なフローリングならではのボールのバウンドの正確さと均一な反撥音はもちろん、プレーヤーへの衝撃を吸収する弾力性や永年の使用にも反りや狂いを起こさない高品質設計。独特のジョイント・ロッキング方法により、組立て・取外し

はきわめて短時間。しかも収納性もコンパクト。多目的コンベンション施設、インドアスタジアムなど多目的スペースに、北米産ハードメイプルによる本格的なスポーツアリーナ機能を付与することができます。ロビンス・オールスターは、バスケットのみならず、バレーボールやバトミントンにも使用することができます。

ロビンス

JBA・NBA公認コート

オールスター

ポータブル スポーツフロア システム

good new days
人間らしい美しい未来を

ヤナセ

総輸入元 株式会社 ヤナセ
商事事業部

東京都港区芝浦一丁目6-38 〒105
TEL. (03)3452-4311

本社 ■ 大阪支店 ■ 名古屋支店 ■ 福岡支店 ■ 札幌支店 ■ ヤナセ東北 ■ ヤナセ静岡
03(3452)4311 ■ 06(488)9801 ■ 052(241)2531 ■ 092(522)1331 ■ 011(231)2313 ■ 022(221)4171 ■ 054(261)4105

資料請求券
50

詳しい資料を差しあげます。ハガキに資料請求券を貼付のうえ、ヤナセ 商事事業部までお送りください。

アーティストがつくった交番 ゆめおおおか・アートプロジェクト

谷 新

横浜市の上大岡地区の再開発プロジェクトが話題になっている。京浜急行の駅舎をはじめ商業地区、文化施設を取り込んだ新しい街が誕生しようとしているのだ。上大岡駅は神奈川県でも3番目に乗降客の多いターミナル駅。いにしえを忍ばせる史跡も多い鎌倉街道に面している。

ここが話題になっているのは、よくある市街地再開発とは一風変わった考え方で臨んだためだ。現代アートの作品を街区のなかに設置していくのである。ひと昔前ならば「環境彫刻」として一般に認識されているものである。1960年代以後盛んになった「環境彫刻」だが、今日では「彫刻公害」といういい方もあちこちで聞かれるほど、街中や公園などに置かれていく彫刻は、良いイメージばかりで受け止められているわけではない。

こうした彫刻の誕生から約30年経って、その問題点がさまざまな角度で論議されるようになってきた今日、まったく新しいコンセプトで、こうした彫刻による「アートのある街づくり構想」が浮上してきたことも事実だ。1994年、住宅都市整備公団による東京・立川地区の再開発事業〈ファール立川〉（アート・プランナー、アートフロント・ギャラリー）の完成がそのきっかけになったといつてよい。相次ぐように、東京・新宿では西口の副都心の一角に〈新宿アイランド〉（アート・コンサルタント、ナンジョウ・アンド・アソシエイツ）が誕生した。事業規模の大きい前者では内外の92作家、109点が街区や建物周辺に設置されている。

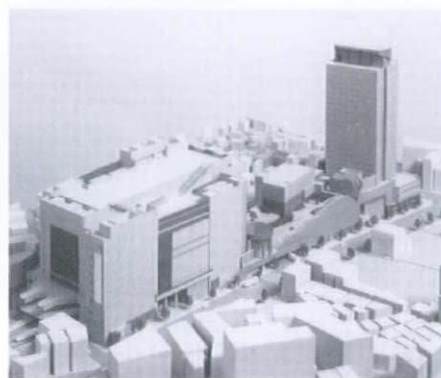
これらの特徴は、いずれも従来の「環境彫刻」のイメージをぬぐい去っていることだ。作家の選定においても、さして実績のない若手を思い切って登場させるなど、随所に斬新さがあふれている。また、車道と歩道の間の車止め、駐車場や駐輪場の案内を兼ねた作品など建築や街区に必要な機能に作品を関係させている点も特徴だ。

上大岡の〈ゆめおおおか・アートプロジェクト〉も従来の環境彫刻に代わる「パブリックアート」の新しいありかたを示す最新事例といつてよい。「ゆめおおおか」は京急百貨店、ショッピングセンター、区民文化センター、オフィスビルなど大規模複合ビルの愛称だが、

このビルおよび周辺地区の約18カ所に、日本とアジアの作家約20人（日本人16人、外国人4人）によって20の作品を設置していく計画。商業施設は今年10月、全施設は来年3月の完成予定だが、今年4月、アート作品のひとつである倉重光則の〈不確定性正方形——正方形のある交番〉がオープンした。倉重は1946年生まれ、1960年代末から発表を始めた作家で、今回のプロジェクト参加者のなかでは一番キャリアがある。ミニマルな作風で1970年代から今日にかけて活発な活動を続けてきた。早くから作品にネオン管を使うことでも知られている。作風からストイックなイメージを与えるかもしれない。この作家の作品が交番に設置されたのだ。京急駅の鎌倉街道に面する位置に交番はあるが、その外側には4色の塗装されたアルミ板が取り付けられ、これが交番かというイメージを誘う。4色は肌色、黒、黄色、水色。それぞれ肉体、強い精神、暖かな感情、純粋な精神を示している。それが「人間のあるべき姿」だと作家は考えている。なるほど厳格なイメージの正方形を基準にした作品だが、交番にうってつけともいえる。変に大衆受けさせようとして奇妙キテレツな形の交番はあるが、機能性を損なうことなく、品位もコンセプトもしっかりしたこの手の斬新なイメージの交番は多分日本では初めてだろう。これは地元のロータリークラブの寄贈ということだが、このロータリークラブの進取の心もさることながら、使う側の警察署の受けもよいという。アーティストが普段無縁なお堅い職業の建造物とフィットした数少ない事例といえるかもしれない。

こうしたアート・プロジェクトは、今後各地に波及していくだろう。若いフレッシュな感覚で都市デザインしていくことの大切さが現在ほど必要とされている時代もない。そして何よりこのプロジェクトを成功に結びつけているのは、地元住民が計画段階から協議に加わっていることと、作家、作品選考に加わったキュレーターの存在だろう。

●たに・あらた／美術評論家



プロジェクト全体模型



photo: ナカサ&パートナーズ

ゆめおおおか・アートプロジェクト／港南警察署 上大岡駅前交番
作家：倉重光則
材料：アルミニウム、蛍光灯、ガラス

1996年デンマーク・デザインセンターID賞決定

[ID賞]はデンマーク・デザインセンターが1965年に創設し、優良な工業デザインと認められたものに毎年贈られる賞である。工業製品の開発に対する興味を刺激し、優良で高品質な製品イメージを得ようとするデンマーク工業界の努力を促そうというものだ。選考対象は、デンマークで製作され、製品化されたものに限られるが、デザイナーは外国人でも構わない。これまでに通算158の製品が受賞している。審査員の構成は、5人のデンマーク人と1人の外国人。選定基準は、新製品であること、単に親しみやすいばかりでなく、革新的な技術が使われていること。この賞は既存の製品の変革を強く求めており、そのため審査員は今年から新しく[ID Vision 賞]を設置し、製品化されていないが、革新的なアイデアが示されたものに対して賞が贈られた。

審査員：

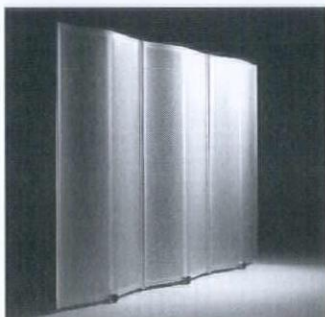
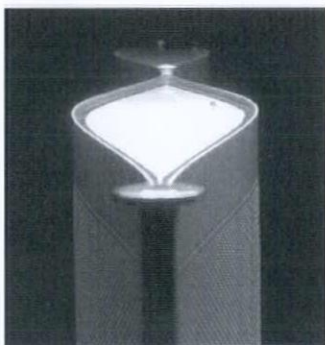
Kjell Berentzen (chairman),
manufacturer
Bent Harlang, director
Alfred Homann, architect
Vibeke Lassen Nielsen, designer
Jens Møller-Jensen, architect
Dieter Rams, professor

[ID賞]

WING——フレキシブル・可動間仕切り

デザイン：PELIKAN DESIGN
(Niels Gammelgaard (architect), Lars Mathiesen (architect))
製作：Art Andersen & Copenhagen

近代のオフィスビルはオープンで親しみのある環境を創るために「壁」を取り払ってしまった。その努力は一方で、音響特性やプライバシーを損なう結果を招いている。しかしこの製品の問題解決の仕方には説得力があり、形態も美しい。透光性や遮音性に優れるが、これらはアルミニウム材を使用した結果生まれたものだ。また同時にアルミニウムという素材の柔軟性を最大限に生かされている。移動しやすく、クリーニングは簡単で、耐久性が高いのも特徴。



[ID Vision 賞]

Portable vacuum cleaner

デザイン：Steen Mandsfelt Eriksen

デザイナーは次のテーマにとりかかっていた。バス、列車、航空機の中などの困難な場所をいかにクリーニングするか。彼の解答は、小型でバッテリーで作動する掃除機を背中に

DigiFocus——デジタル補聴器

デザイン：Søren Louis Pedersen (project manager), Henrik Andersen, Thomas E. Christensen, Ole Ekstrøm, Niels Farver, Mette Beck, Flemming Frøeslev, Peter Mark, Bent Severin, Per Kokholm Sørensen, Niels Toft (Christian Bjørn Design)
製作：Oticon A/S

生まれつき、または老化、病気による聴覚障害者は増加の傾向にあり、現代文明の中でその補助機能がさらに求められている。長年 Oticon社は補聴器を開発、改良してきた。その最新作がDigiFocus——プログラム可能な聴覚コンピュータ——である。

ID賞の選定理由は次の2点であった。デジタルテクノロジーによって劇的に補聴能力が改善されたこと。もうひとつは、プログラム可能な機能によってシンプルなデザインになったこと。ボディには、目立たないスキンカラーから鮮やかな原色まで、豊富な色が用意されている。若年層へのアピール度も少なくないはずだ。



2 Light——自転車ライト

デザイン：Lars Kjærulff
製作：COLOC

デンマークでは自転車に乗る時、後方に赤色ライト、前方白色ライトを点けなければならない規則がある。しかし、この2つのライトを自転車にくっつけたまま駐輪すると、戻ってきたときにはおそらく無くなっているだろう。一方、このライトをポケットやハンドバッグに入れて持ち運ぶには限度がある。それにライトは2つもあることを忘れてはならない。

COLOC社の「2 Light」は非常にフレンドリーである。それはどこまでも丸みを帯びていて、どんなすき間にも収まってしまう。ふたつのライトはひとつのユニットに合体するので煩わしさが無い。ライトは操作しやすく、カラーラベルを取り替えることによって、自分のものがすぐに判る(例えば家族で複数もつ場合)。後方ライトは節電型のダイオードでできており、バッテリーの寿命は長い。さらに、懐中電灯として使うこともできる。

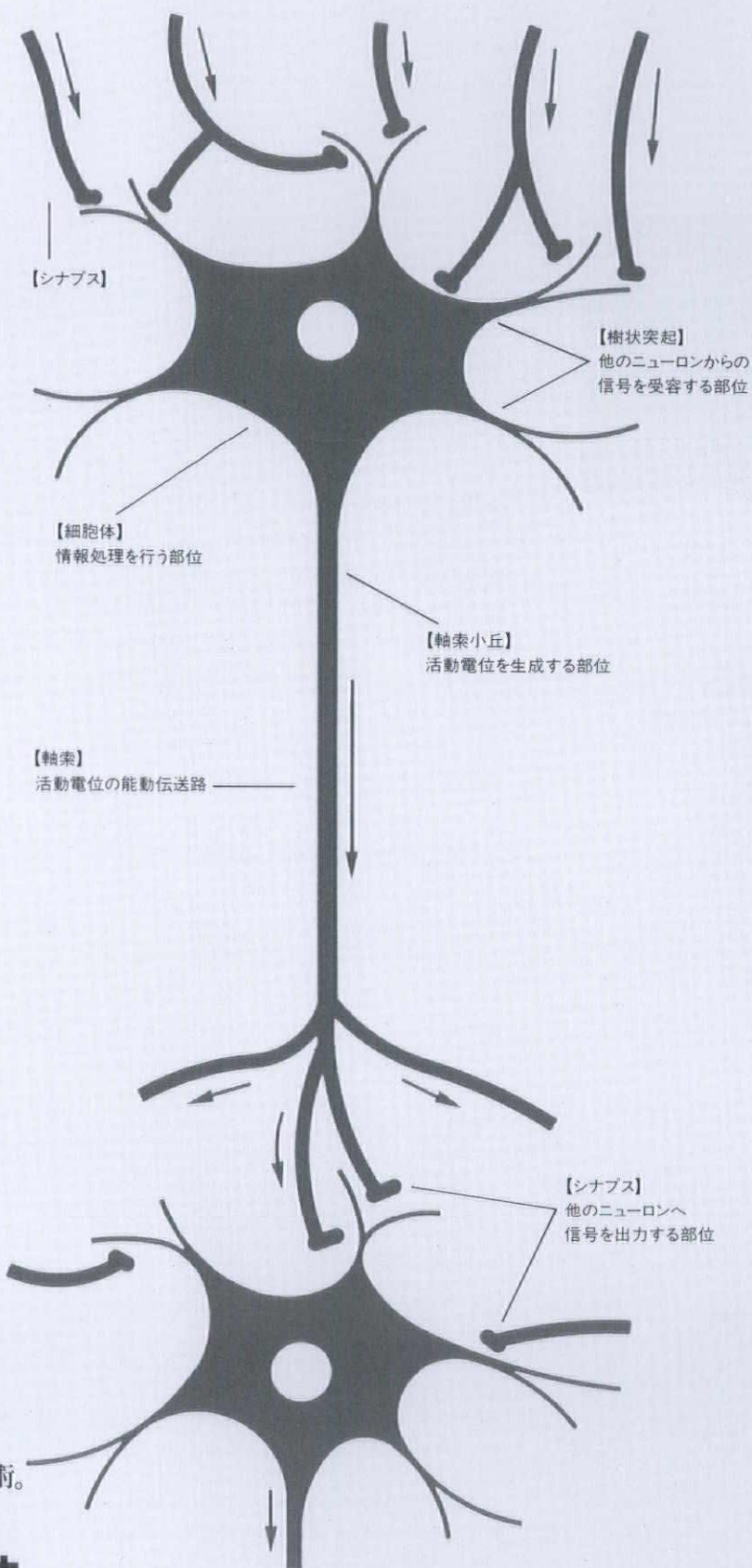


背負うことであった。一般的に言って、これは人間工学上非常に難しい解法である。しかし、彼は、本体をふたつに折り曲げ、体の動きに合わせることによって、この問題を完全に解決している。

審査員はこのプロジェクトのメーカーが見つかることを切に願っている。ところで、この掃除機を一般家庭用に使えないなんて、誰が言えようか。



21世紀の空調は、人間の脳神経がお手本になる。



私たちは「ニューラルネットワーク」理論を応用した、次世代の空調システムの開発に取り組んでいます。誰もが心地よい空気を作り出すことは、本来、極めて微妙なコントロールを必要とします。もっと簡単かつ鋭敏に、人が求める快適さを感じてくれないだろうか。そのテーマにこたえるべく、私たちは生体の脳回路に着目。脳の神経細胞が行う高度な学習機能や適応能力を応用することで、エア・デザインング技術の新たな主流となるシステム研究を始めています。

東洋熱工業株式会社 〒104 東京都中央区京橋 2-5-12 TEL 03-3562-1351

時代の呼吸に応える技術。



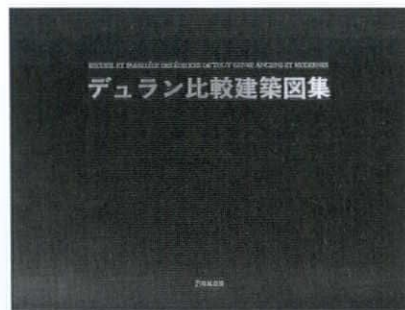
東 熱

『デュラン比較建築図集』

長尾重武＝編著

A2判 66枚

玲風書房 55000円



評者＝

鈴木博之

超豪華な図面集に流れる
理性的な眼ざし

フランス18世紀の合理主義的建築観が示すふたつの側面、すなわち建築の理性的な解釈と、建築の考古学的探究という二側面を、本書はきわめて興味深いかたちで示している。大型のシート63枚に印刷された建築の図面は、西欧の建築のみならず、エジプト、イスラム、中国の建築を含み、橋などの土木施設をも含む。

この図集をまとめたJ.M.L.デュランは、エコール・ポリテクニーク（理工科学学校）で教鞭をとることによって、理論家としての影響力をもった建築家であり、その影響力はフランスのみならず、ドイツをはじめとして、数多くの国に及んだ。そしてその影響力の源泉のひとつが本書であったのである。

世界中の建築の図面をあつめて一望のもとにしようとする精神は、すでにドイツのJ.B.フィッシャー・フォン・エルラッハによって『歴史的建築の構想』（1721）というかたちで実現されていた。これは世界建築史の始まりを画する業績だといわれるものであり、デュランはその路線を継承したといえるかも知れない。しかし、実際には両者の態度はかなり異なっており、エルラッハは世界の建築を驚異の眼をもって眺め、集めるといった態度を見せるのに対して、デュランは理性的であり、世界の建築に対して「比較」の態度を堅持する。

これは図面の構成によく現れており、読者は自ら図面を選択しながら読み進むことが可能である。その意味で、本書はたしかに図集であり、ストーリーを展開する著作ではない。だが、それではデュランは何を目指したのか。おそらく、それは「比較」であったろう。世界の建築を自らの立場から「比較する」という主体性の保持が、デュランの真骨頂であり、それがフランス合理主義の建築観である。わ

れわれもまた、現代の目でこの図集を主体的に利用すべきであろう。そこで問われるのが、われわれの主体的態度である。ここにデザインソースを見つけようとする態度も、主体的態度といえるだろうが、それでは単なるアンチョコとしての利用にとどまる。歴史的資料として利用するというのも主体的態度であるが、それにはこれほど大きな図面は必要ないかもしれない。とすれば、われわれはデュランの「方法」を読むべきなのであろう。

本書の解題は、デュランの生涯、その著作、本書のテキストの翻訳を含んでいて、丁寧である。それによると、本書は1936年にパリのヴァンサン・フレアル社から復刻されたものの再復刻であるとのことである。図版の数は、1936年の時点で詳細図が省かれたために、デュランの時代の92図から、63図に減らされている。「比較」という視点を見るためには、こうした図面構成によって、その目的は十分に果たされるのであろうが、歴史的資料としてはどうであろうか。18世紀の刊行本を復刻するという選択は、ありえなかったのだろうか。その点が疑問として残った。図版の状態の良さを選んだのかとも思われるが、解説において、欠落図版の縮小掲載を行うなどして、書誌学的分析がもう少ししっかりととらえられていれば有り難かった。しかし日本において、異本の校訂を含む十分なテキスト・クリティークを行うことは極めて難しいので、これはないものねだりなのであろう。

●すずき・ひろゆき／東京大学教授

Metropolitan
Library

6月の評者＝

難波和彦

近代における技術の役割を概観するために、技術論に関する最近の本を読んだ。

『技術屋の心眼』は、科学技術が進歩した近代の工学的設計の過程においても、数式や計算といった解析的な方法だけでなく、直観や言葉に表せない暗黙的な思考が重要な役割を果たしていることを、多くの事例を紹介しながら検証している。しかし、それは神秘的な思考ではなく、豊かな経験によって培われた「技」や「勘」に基づく思考である。そこには図面や模型を用いたイメージ思考が含まれている。つまり工学的な設計とは、経験を積み重ねることで答をつくりあげる「帰納」でもなく、原理から答を論理的に導き出す「演繹」でもない、両者を組み合わせることによって、不連続に飛躍した暫定的な答を「仮説」として立て、それを批判的に「検証」する作業だと言ってよいだろう。

カール・R. ポパーは、このような考え方が科学の進歩や社会の改革に対しても当てはまることを生涯主張しつづけた哲学者である。『よりよき世界を求めて』の中で、彼は仮説を立てるプロセスを、生命の進化、知識の発展、社会の改革にも当てはめ、それを総称して「問題解決をもたらす創発」と呼んでいる。ポパーの考えでは、創発をもたらすのは試行錯誤（トライ・アンド・エラー）と、それを合理的な根拠に基づいて批判的に検証していく作業、すなわち「批判的合理主義」である。このプロセスは、人間社会におけるほとんどすべての行為に適用できると彼は主張する。この考え方に従えば、デザインとは、問題解決をもたらす仮説的なシステムを考案し（創発）、それを批判的に検証する作業となる。

『技術——クリティカル・セオリー』は、同じような考え方を現代の科学技術＝テクノロジーそのものの

『パリ 都市の詩学』

海野弘=文

村井修=写真

A4判 128頁

河出書房新社 3000円



評者=

植田 実

パリの奥行きとその切断面

これほど数限りなく語られてきた都市について、A4判130頁近く、エッセイとオールカラーの写真半々といった構成の、ごく一般向けの顔をした本を出すというのはとても大変だと思う。しかも目次を見ても、広場、大通り、盛り場、市場、墓地、橋、セーヌ左岸、駅、美術館、庭園、噴水、運河、と、見どころをごくオーソドックスに仕分けしているようだし、その章立てに付かず離れずの写真も、例外なくパリを真正面からとらえているといった印象が強い。

しかし、いざ中味をよく見てみると、この本はなかなかの曲者だ。

世界最高のメジャーな都市の歩き方としたら、いかに自分のアイデンティティを活かすかということになりそうだが（例えばブルトンの『ナジャ』みたいに）、海野弘はまるでそんなことには無頓着な風情で、冒頭から「秋のすがすがしい大気の中で、パリは目覚めつつあった。私はいつものカフェに出かける」なんて常套句なシーンから始めて平気なのだ。そして、パリに関して書かれたさまざまな本を、バルザックやボードレール、グリーンやヘミングウェイ、それこそブルトンやベンヤミン、永井荷風も藤田嗣治も武者小路実篤も、50冊ほどから息継ぐ暇もない勢いで次々に引用しはじめる。いずれもその場所を説明するのにドンビシャリの引用で、この作業だけでも何十年もかかってしまうと思うほどだが、言いかえれば海野弘のアイデンティティとは、パリをとんでもなく知り尽くしていること、パリについて書かれた膨大な著述を自分の言葉のように解説し尽くしていることだと思ふ当たりのだ。

おもしろいことに、ここではノートルダムもエッフェル塔もボンビッドゥ・センターも建

築としては登場しない。そうしたランドマークはパリの核になっていないと言わんばかりに、裏通りや墓地にすぐ入っていくのだが、といってこの都市の裏の顔を偏愛しているわけでもない。そこからパリの「二重化」を見出し、「ふたつに引き裂かれ、矛盾したふたつの夢を追いかける」都市の歴史的意味を解明しようとしている。つまり、パリの特性をはっきり位置づけているのである。瀟洒で平明なエッセイの奥行きは19世紀の意味が見えてくるまでに深い。その結論に急がずに、我慢強く静かに歩いている足取りが見えてくる。

海野弘の長年の友人である村井修もまた、我慢強い写真家である。大型カメラから、また現代建築を撮る仕事から解放された眼は確かに軽快で、暁方から深夜までのパリを楽しんでいるように見える。だが、その構図は頑なにまでにオーソドックスで、これまでにパリを見てきた数限りないカメラアイの歴史のなかに自分を埋め、それでも眼の裏に洩れてくる光だけを掬いあげているとさえ見える。その光のなかでパリの思いがけない断面が、並木や壁や鉄道といったマチエールとして石切り場からのように切り出されてくる。

このパリの恒久性と一体化するような、不動で遠くまで届く眼が主調として確立されているために、パサージュや路地への、あるいは夜の町角への一瞥が、ほんとうに愛すべき都市生活に共振して長い長い吐息をつくように画面が滲んでいたりするのに、はっとさせられる。おそらくは手持ちでシャッターを切った宵のボン・デザールの、古いフランス映画の記憶と重なるような情景に、村井修のパリ歩きの身体性に直に触れる思いがしたのである。

●うえだ・まこと／編集者

に適用したものである。著者によれば、テクノロジーと現代社会との関係については対照的なふたつの捉え方がある。ひとつは、テクノロジーは道具的な存在であり、問題を生じさせるのはそれを使う人間の価値観であるとする道具説である。もうひとつは、テクノロジーはそれ自体に機械論的な価値を内蔵しており、従って必然的に自然や人間性を破壊するとする自立的存在説である。著者の提唱する「テクノロジーの批判理論」はどちらの図式にも属さない。それはテクノロジーは道具でも自立的存在でもなく、その時代の支配的な文化的コンテクストによって規定された構造を持つと考える。そしてテクノロジー、合理主義、民主主義の三者の相互関係を批判的に検証することによって、その構造を変革することができると考える。やや壮大な議論だが、一考の価値はあると思う。

『マルティン・ハイデガー』を取り上げるのは、ハイデガーの技術哲学が典型的な自立依存説だからである。彼にとってテクノロジーは近代の啓蒙的理性そのものである。彼はこう書いている。

「機械技術は、形而上学の本質のこれまでのうちでもっとも明白な最終形態である。その本質は近代形而上学の本質と同一である」

ハイデガーはそのようなテクノロジーを否定し、それをもたらしたデカルト的な合理主義やカント的な批判的理性を拒否した。要するに近代ヨーロッパの思想的伝統を全否定したわけである。それが最終的にナチズムに結びつく結果をもたらしたのだとすれば、ぼくたちはやはり批判的合理主義を捨てるわけにはいかないだろう。

『技術屋の心臓』

ユージン・S. ファーガソン=著 藤原良樹+砂田久吉=訳
平凡社 3200円

『よりよき世界を求めて』

カール・R. ポパー=著 小河原誠+藤山泰之=訳
未来社 3914円

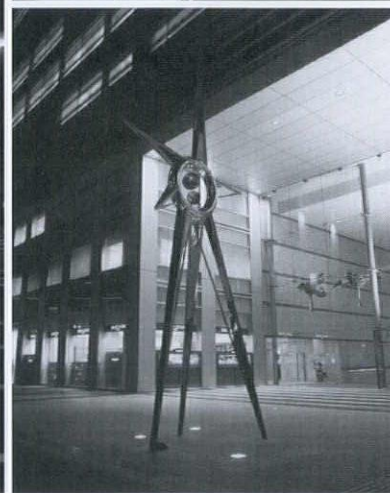
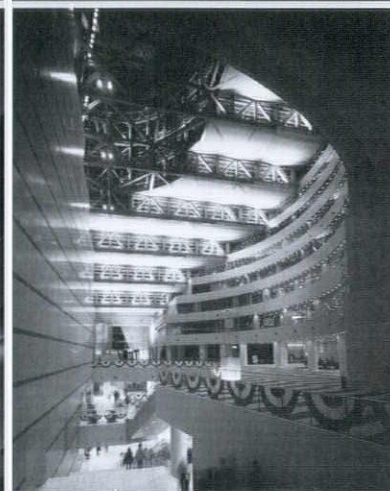
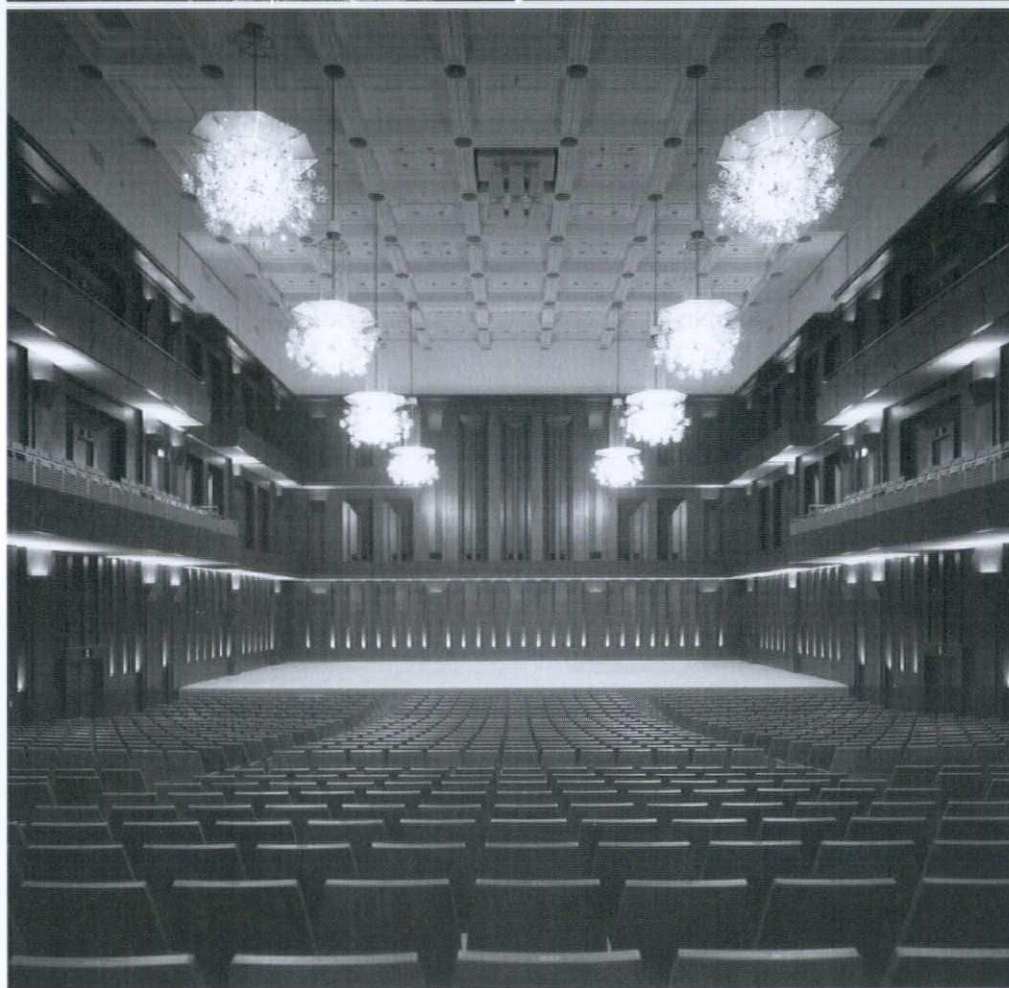
『技術——クリティカル・セオリー』

アンドルー・フィンバーク=著 藤本正史=訳
法政大学出版局 5459円

『マルティン・ハイデガー——哲学とイデオロギー』

ハンス・エーベリング=著 青木隆嘉=訳
法政大学出版局 2884円

表情多彩



照明は空間づくりの重要なポイント。人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。

アクロス福岡 (福岡)

山田照明株式会社 本社/ショールーム 〒101 東京都千代田区外神田 3-16-12 TEL 03-3253-5161 横浜支社/ショールーム 〒220 横浜市西区南幸 2-20-1 TEL 045-311-1731
仙台支社/ショールーム 〒980 仙台市青葉区二日町 11-11 (ANDOUビル) TEL 022-267-1630 大阪支社/ショールーム 〒542 大阪市中央区日本橋 1-21-23 TEL 06-643-3421

福岡支社 〒810 福岡市博多区店屋町 8-30 TEL 092-282-7635 名古屋営業所 〒460 名古屋市中区 5-16-14 (新東宝ビル) TEL 052-252-5161 札幌営業所 〒003 札幌市白石区菊水七条 2-61 TEL 011-811-2215
北関東営業所 〒370 高崎市緑町 3-14-8 TEL 0273-63-1442 千葉営業所 〒260 千葉市稲毛区緑町 1-25-14 TEL 043-244-2540 静岡営業所 〒420 静岡市西草深 23-9 TEL 054-247-0811
広島営業所 〒730 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL 082-293-6119 鹿児島営業所 〒890 鹿児島市上之園町 4-14 (東信ビル) TEL 0992-58-0031 宇都宮出張所 〒382 宇都宮市海道町 618-2-1002 TEL 0286-60-1381
長野出張所 〒380 長野市三輪 2-9-27 TEL 0262-43-8420

『ドイツ中世の都市造形——

現代に生きる都市空間探訪』

永松栄一著

四六判 227頁

彰国社 2400円

ドイツの12の中世都市を取り上げ、都市の成り立ちと現在の運営を紹介する。都市は空間領域を伴う運命共同体であり、リーダーである市民の意思によって都市の遺産を現在に生かそうと、筆者は言う。

「都市の文化遺産の重みを改めて感じ」させる1冊。



『ディスプレイ デザイン』

魚成祥一郎＝監修

四六判 189頁

鹿島出版会 1854円

日常生活の様々なシーンに関わるディスプレイデザインを解く。日本には昭和30年頃に定着したという「ディスプレイ」について、その源流から解説、都市空間や流通、消費との関わり、さらに具体的なデザインの手法、今後の展望などを解いた、ディスプレイデザインの入門書。序文は清家清が担当。



『設景——その発想と展開』

小林治人＝著

A5判 380頁

マルモ出版 3500円

筆者は、豊かな自然環境の中で育ち、日本の原風景ともいえる花鳥風月の空間づくり「設景（ランドスケープデザイン）」に携わる。その筆者が、これまでの関わった人々や仕事を通して、設景の考え方、その目指すものなどを、具体的な事例を挙げながら論じる。



『世界の空港』

新井洋一＝編著

A4判 171頁

商店建築社 4900円

空港の利用者は年々増加し、また単なる乗客が乗り降りする通過場所ではなく、地域の都市構造の一部に組み込まれつつある。本書は関空を含めた世界各地の空港の施設を紹介し、周辺環境や人を主役にした「ヒューマン・エアポート」の実現に向けた試みを紹介する。



『TN Probe第3号——

世界の建築美術館・ギャラリー』

TNブロープ＝編

A4判変形 44頁

TNブロープ 1000円

世界の建築ギャラリー、美術館53ヶ所の活動を紹介。ボンビドゥ・センターの建築部門キュレーターへのインタビューなど、美術館というメディアにおける建築の表現や楽しみ方、あるいは存在意義なども論じる。2000年までの展覧会スケジュールも掲載。



『新浦安物語——高度複合都市の誕生』

荻谷昭久＝著

四六判 248頁

日刊建設通信新聞社 1500円

浦安の開発は、行政と民間建設業者の熾烈な交渉から始まり、市と業者の理解を経て、最終的には全国都市景観百選のひとつに選ばれる都市となった。駅前のマンション開発構想から、オフィスビルや複合商業ビルに結実するまでの街づくりを詳細に追い、「地域開発」の本来的意義を問う。



建設を アシストする 技術で貢献!!

- 一般電気設備工事＝設計施工
- 防爆電気設備工事＝設計施工
- 計装工事＝設計施工
- 電気加熱保温工事＝設計施工
- 静電気接地用リール＝販売

ASTEC

SHOWA ASTEC

昭和アステック株式会社

(旧社名 昭和電機工業株式会社)

取締役社長 浦道雄

- 本社／東京都港区東新橋2丁目7番3号
電話03(3437)3851(代表) ㊦105
- 支社＝関東・中部・関西・中国
- 営業所＝新潟・鹿島・千葉・四日市・堺
倉敷・岩国・徳山・坂出・松山
新居浜・大分・福岡
- 駐在事務所＝ジャカルタ・テヘラン・タイ
シンガポール・マレーシア

情報とエネルギーの ネットワークをつくる 日立電線



情報やエネルギーを伝える技術を中心に、人と人、人と世界を結ぶグローバルなネットワークをつくり、「私達の住む地球をまーるくつづける」。日立電線は、いま、快適で豊かな暮らしの創造をめざして多彩な活動を展開しています。21世紀に向かって、ますます進展する情報化社会——たえず革新を続ける情報・通信、エレクトロニクス、エネルギーの世界でひとつの大きな役割を担っているもの——それは、ハイテク技術を駆使した日立電線の製品です。

日立電線株式会社 ☎東京(03)3216-1616

お知らせ

第7回照明探偵団・連続実践講座 「光と水のある風景」

探偵団が視た世界のウォーターフロント開発の実例から、日本の都市に適った光と水のある風景を学ぶ。
日時：6月20日(木) 18:30～20:30
会場：東京デザインセンターガレリアホール
参加費：一般2500円、学生1500円
応募方法：往復はがきに住所・氏名・Tel・年齢・職業を記入の上、
141 東京都品川区東五反田5-25-19
東京デザインセンター照明探偵団講座係まで
問い合わせ：
東京デザインセンター照明探偵団講座係
Tel: 03-3445-1121

1996年日本建築学会賞

1996年日本建築学会賞が発表された。大賞は「建築構法計画に関する一連の研究および設計活動による建築界への貢献」で内田祥哉、「鋼構造建築の研究と発展への貢献」で藤本盛久、作品部門では、＜黒部市国際文化センター(COLARE)＞で新居千秋、＜日本橋の家＞で岸和郎、＜植村直己冒険館＞で栗生明、＜彩の国さいたま芸術劇場＞で香山壽夫がそれぞれ受賞した。業績部門では、「新宿アイランド地区における環境デザインを重視した複合拠点の形成」で西新宿6丁目東地区再開発推進協議会理事長、石黒良雄、住宅・都市整備公団都市再開発部長の木村光宏、日本設計副社長の村尾成文、新宿アイランド設計監理チーム代表の六鹿正治、「中央合同庁舎第6号館赤レンガ棟(旧司法省庁舎)の保存活用」で建設大臣官房庁営繕部の照井進一、法務大臣官房営繕課の小峰信、「WESTビル建設における免震構造の企画、設計、監理」で郵政大臣官房建築部の野々村俊夫、「おほらい町の町並み保存再生」で赤福代表取締役の濱田益嗣、清水建設開発計画本部副部長の西川創、竹中工務店名古屋支店設計部部長の小川清一、建築家の高橋徹、伊勢市長の水谷光男、「南極昭和基地建物の設計と建設に関する一連の業績」で平山善吉、半貫俊夫、佐藤裕雄がそれぞれ受賞した。さらに、学会会員以外に贈られる文化賞には、「日本の文化財建造物の保存手法に対する国際的理解の向上に果たした功績」でノルウェー工科大学教授のクヌート・アイナル ラールセン、「タイルの文化的価値の確立とタイル仕上げによる建築文化の向上に関する一連の業績」でマルニシ代表取締役会長の山本正之が受賞した。

イメージフォーラムアンコール上映 「アンディ・ウォーホル映画回顧展VOL.2」

会期：6月14日(金)～6月30日(日) 13:00～19:00
会場：イメージフォーラム 東京都新宿区四谷3-5不動産会館6階 Tel: 03-3358-1983
入場料：一般800円
問い合わせ：イメージフォーラム Tel: 03-3357-8038

マンチェスター大学短期留学生募集

東京大学高橋篤志教授とマンチェスター大学マーチン・サイムズ教授の協力により1991年より開設された国際的な建築研究のためのサマースクール。ヨーロッパ各国及び日本の若い建築家・技術者や学生を含めて参加対象を幅広く設定している。
実施期間：1996年8月23日～11月1日
応募資格：建築学科に在籍する学生・大学院生、建築の仕事に従事する者
参加料：£2500 (全コース履修の場合)
問い合わせ・申し込み：
渡辺治建築都市設計事務所 渡辺
211 川崎市中原区木月515サークルビル
Tel.044-422-0502 Fax.044-411-8430

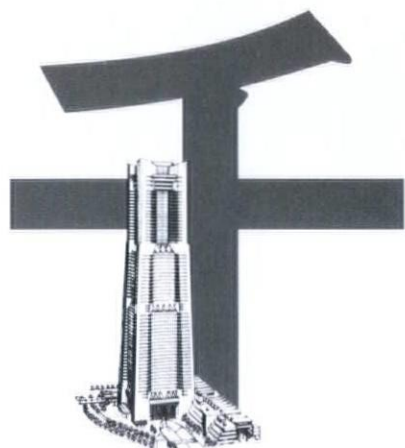
建築家倶楽部6月のイベント

展覧会
タイトル：今福島建築が面白い
会期：6月3日(月)～6月13日(木)
11:00～19:00(土日・祝日休館)
入場料：500円
展示後援：福島県庁
講演会
日時：6月5日(水) 18:30～
講師：北川原温 Tom Heneghan
安藤和浩 古市徹雄
入場料：2000円(懇談会費込)要予約
会場：建築家倶楽部
104 東京都中央区銀座6-4-12 KNビル5F
展覧会
タイトル：内藤廣展
会期：6月17日(月)～6月27日(木)
11:00～19:00(土日・祝日休館)
入場料：500円
講演会
日時：6月26日(水) 18:30～
講師：内藤廣
入場料：2000円(懇談会費込)要予約
会場：建築家倶楽部
104 東京都中央区銀座6-4-12 KNビル5F
問い合わせ：建築家倶楽部
Tel.03-3289-1888 担当/藤岡

福田晴彦講演会 「ルネッサンスの建築と庭」

日時：6月15日(土) 17:30～19:30
会場：博多デザイン倶楽部 Tel.092-651-8008
講師：福田晴彦(九州大学工学部教授)
入場料：一般3000円、学生2000円(懇談会費込)
申し込み：Faxにて氏名・連絡先を博多デザイン倶楽部まで 定員150名 Fax.092-651-9556
問い合わせ：博多デザイン倶楽部
Tel.092-651-8008

いろいろな未来を乗せています。



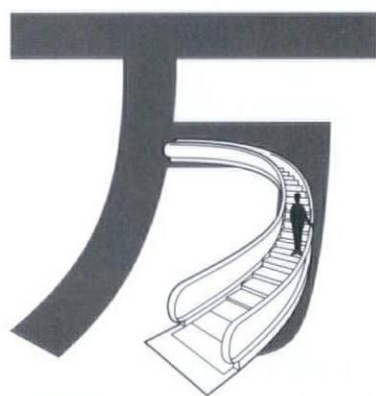
夢の分速1,000mを目指して。

乗用エレベーターで世界最高速、ただいま分速750m。高層・高速エレベーター横浜の新しい顔、ランドマークタワー。そのビル内交通を支えるのが、私たちのエレベーターです。現在、乗用としては世界最高速。高性能・省エネルギーの最新インバータ制御方式を採用し、安全性についても最先端技術を結集しています。



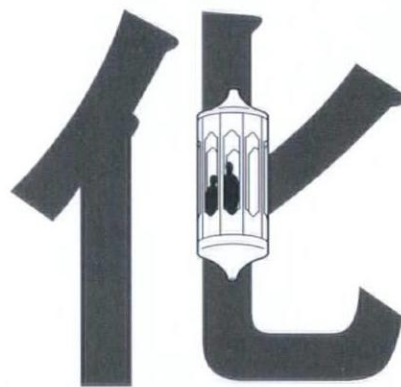
カタチが変われば、気分も変わる。

そこで、途中でほっと一息つける工夫をしました。踊り場付きエスカレーター。長くて急なエスカレーターの、あの不安な視界をやわらげたい。そこで、私たちはエスカレーターに踊り場を設けました。生まれたものは、今までにない安心感。子供からお年寄りまで、すべての人に快適を。三菱電機のひとつの答えです。



近ごろの空間設計は、千差万別。

それでは、こんなフォルムはいかがでしょうか。スパイラルエスカレーター。あなたはお乗りになりましたか。三菱電機ならではの技術が生んだ、カーブを描くエスカレーター。ショッピングセンターを始めとする、全国の様々な施設で大活躍。動くほどに変わってゆく光景と広がる視界が、なかなかの評判です。



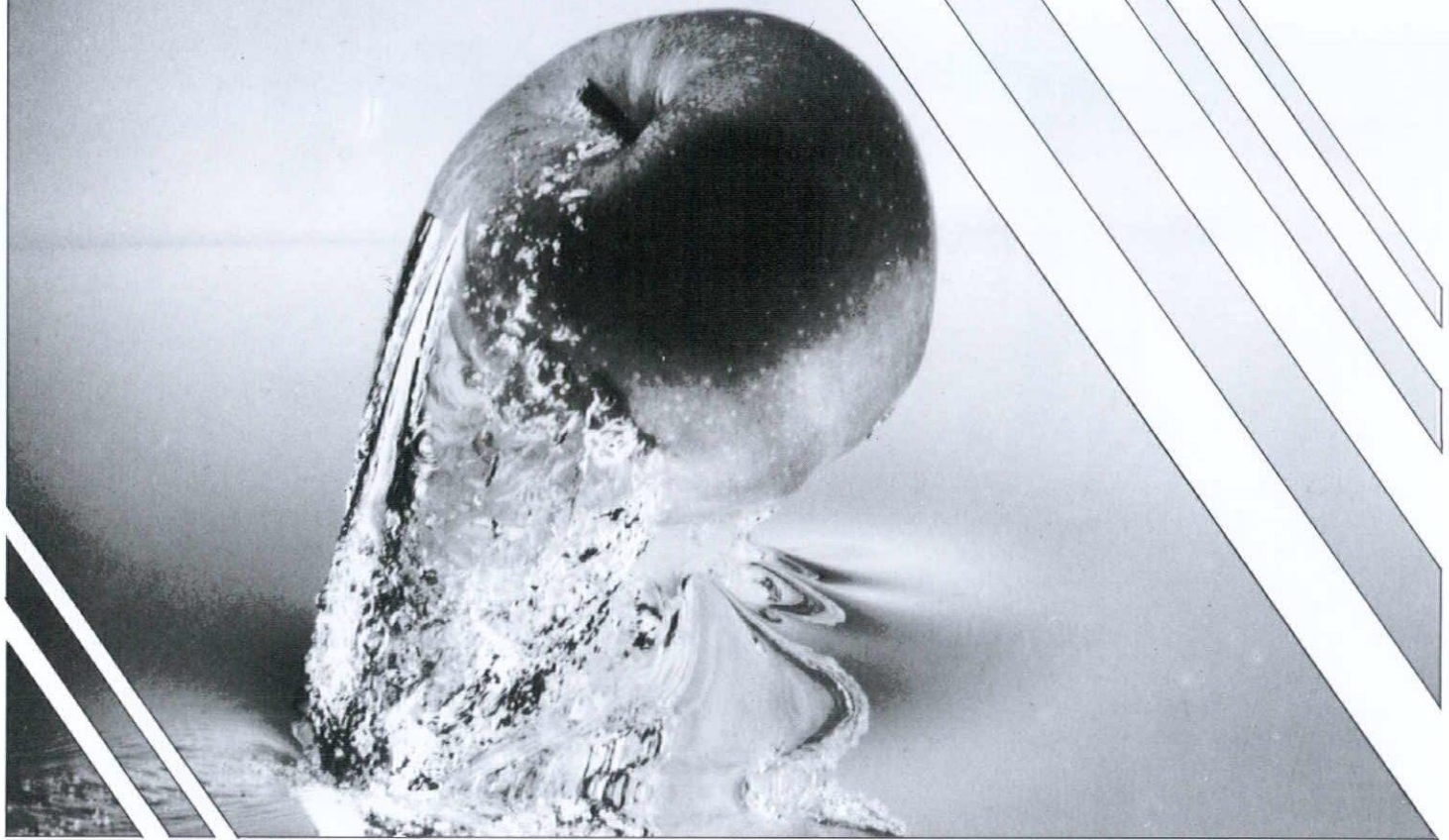
ビルにあわせてお化粧するエレベーター。

乗って、眺めて、ますます楽しい乗り物になりました。展望エレベーター。美しいビルに気付いたら、エレベーターにもご注目を。きれいにお化粧した展望エレベーター。単なる移動手段をこえて、ビルの空間に溶け込む、美しい乗り物へ。多様化するビルとともに、個性豊かに進化していく三菱電機のビル内交通です。

あんなこと、こんなこと。ビル内交通の“もっと快適”を実現します。
三菱電機のビル事業

個性が集まって大きなエネルギー

サッシ・カーテンウォールの総合メーカー



私たちは、今、ひと昔前の科学技術の進歩を強調するだけの時代から
“テクノロジーとヒューマニズムの調和”をめざす新しい時代をつくろうとしています。

とくに人間の生活空間を創造する建築業界においては、
こうした先進性が強く要求されていますが、その中で、生活空間としてのアメニティ（快適さ）や、

建築物内外の両面にわたるデザイン・外観・色彩など
美的付加価値の重要性もますますそのウェートを高めています。

弊社は斬新で、確かな品質の製品を供給することを通して、
社会へ大きく貢献していきたいと考えています。



昭和サッシ

昭和鋼機株式会社

本社 ▶ 〒174 東京都板橋区前野町 6 丁目 1 番 10 号
☎ 東京 (03) 3969-1101 (代表)

所沢工場 ▶ 〒354 埼玉県入間郡三芳町大字上富 1163

明石工場 ▶ 〒673-01 明石市二見町南二見 21 番 3 号

昭和鋼機サービス株式会社 ▶ 〒174 東京都板橋区前野町 6 丁目 1 番 10 号
大阪支店・札幌営業所・仙台営業所・横浜営業所・名古屋営業所・九州営業所

清水裕二
田上健一
田鍋 稔
前田紀貞
丸橋 浩

IDにおいては、デザイナーの操作は常に明瞭な効果を持って現れる。その操作の痕跡をIDプロダクトの中に見出しながら、デザイナー達に許された操作の諸相と、現代のデザインを取り巻く環境を分析していきたい。今回は、工業製品の中でも極めて複雑な機能と評価軸を持つプロダクトとして自動車に焦点を当て、プロダクトの背景に成立している形式を考察する。

コア・スタッフ'96
岩下暢男
今井公太郎
アトリエ・ワン
曾我部昌史
山本想太郎



「量産」という生産の論理を視点を変えて捉えるならば、インダストリアル・デザイン(ID)によるプロダクトは、必ず多数の人に普及し、共有されるように作られねばならない。そのために

プロダクトの有効性は徹底的に検証され、最良解を導くために様々なデザイン手法が適用される。このように効果と操作が直結して現れる点がIDの特色であり、その現場ではモノづくりという行為の意味が常に根本的な次元で問われていると考えられる。

さて、家具にせよ、自動車にせよ、IDプロダクトはそれが何のためのものかを示す明快な機能と、それを達成するための要素の編成(コンフィグレーション)を持っている。単純な例としてフォークを挙げるならば、それは手に握られ、食べ物を突き刺すという機能を持っており、そのために柄の先には刃が必ず配置されることになっている。いかなるフォークであってもこの機能と編成は変わりなく、言ってみれば我々が食事に必要とするのは、フォークという形式なのである。

プロダクトが持つ形式を問題とするのは、多岐にわたるIDの領域の中でも、安定した形式を持つものと、不安

検討がなされ、自動車の原型がほぼ決定されることになる。そして1908年、T型フォードに始まる大量生産の時代を迎えると、ブレーキランプ、バックミラー、燃料計等のインターフェイスの開発が進み、1930年代初頭には、ワイパー、イグニッションキーというディテールの開発によって、自動車というプロダクトの基本的な形式はひとまず安定する。W.グロピウスによる〈アドラー・リムジン(1934)〉のデザインは、ボンネットやキャビン、ライトなどの要素がこの時代までにひととおり整理され、建築的な構成美が適用されるようになったことを示している。

さて、これらの基本的な要素が登場した後に、その編成に関する実験が延々と続くこととなる。すでにグロピウスと同時期に、B.フラーが〈ダイマキシオン・カー(1934)〉によって自動車の基本要素を単一のフォルムにインテグレートする試みを行っているのはその代表的な例であろう。1948年の〈シトロエン2CV〉(前田論文; p.174)においては自動車のさらなる大衆化に応じて、生産効率向上のためにプロダクトの構成材の再編がいち早く実行され、50年代には小型車のコンフィグレーションを巡る実験と、〈オースティン・ミニ〉による淘汰(清水論文; p.175)のように、様々に発生した車型(カータイプ)に対して、それぞれ最適な要素編成の手法が開発されてい

Theme: ID(インダストリアル・デザイン) その2「自動車」

海外建築情報リミックス

定な形式を持つものがあると考えられるからである。例えば近代デザイン運動の重要なプロダクトであった椅子を考えるならば、人を座らせるという機能と、そのために掲げられた座面という椅子の形式はまず変わることがない。この形式の安定性ゆえに、椅子に関するIDは素材や構造に関する操作を中心に展開したのである。

一方、〈液晶ビューカム〉がそれまでのビデオカメラの形式を大きく変えたように、電子製品の形式は一般的には安定していない。何よりもプロダクトとしての歴史が浅いことと、機能の編成の自由度が極めて高いことがその理由であるが、これはIDによる操作領域が形式そのものまでも含むことを示している。むしろ、形式が不安定なプロダクトにおいては、それを時代の要請に合わせて変形することこそIDの主要な役割であって、自動車や電子製品など、20世紀に新しく成立したプロダクトの黎明期には必ずIDによる形式の安定化が見られるのである。

では、自動車というIDプロダクトにおいては、どのように形式の安定化が図られてきたのか。後に5つの各論によってIDの諸相が分析されていくが、ここでは自動車という形式の成立過程を振り返りながら、各論を位置づけておく。

歴史上、最初の自動車は1886年、ダイムラーによる四輪ガソリン車である。この時点では自動車とはいえ、その内容はまだ馬車にエンジンを積んだものにすぎない。しかしその後の20年間で、空気入りタイヤ、ギアミッション、サスペンション、ハンドルなどの基本機能の編成の

く。人を乗せA地点からB地点へと移動するために、4つの車輪と内燃機関、そして操舵部分を持つという自動車の基本的な機能はいうまでもなく、それに付加して要求される諸機能に、実に細やかに対応する手法までも存在していることは「カスタマイズ」(田上論文; p.176)という現象からも見ることができる。

さて、ここまで自動車という形式が高度化・精緻化し、もはやひとつの文化として安定し始めたときに、IDの目標はどのようなレベルに設定されるだろうか。最後に紹介されるフィアットとメルセデスのIDはその方向性を対照的に示すであろう。まず、ハードのコンポーネント化とスタイリングという手法の分節の徹底と、形式が持つ文脈の安定性を十分に活かすことによって、エモーショナルな表現を実現しようとする〈フィアット・バルケッタ〉(丸橋論文; p.177)のIDが、現在どのような背景と社会性を持つかが検証される。そしてそれに対するのが、自動車の形式そのものをあくまでも革新しようとするメルセデス〈Aビジョン〉である(田鍋論文; p.178)。自動車成立の発端に名を残すダイムラー＝メルセデス・ベンツが、110年を経た今日、高度化した大文字の「自動車」をどのように革新しようとするのか。ここでは組織的な取り組みと、具体的な手法が考察される。

美しいものをつくるべきか。新しいものをつくるべきか。両社のIDは、モノをつくるという行為における、最も普遍的な問いを表現しているだけなのかもしれない。

太田浩史

今ここに、シトロエン・2CVとランボルギーニ・カウンタックという、その生産趣旨からメカニズム、フォルムに至るまであらゆる点で異なるように見えるふたつの車がある。

2CVは、その開発コンセプトである「こうもり傘に4つの車輪を付けた車」からもわかるように、当初は農民が基本的なユーザーとして想定され、その「牧歌機械的」外観同様、各所の仕様はストイックと呼ぶにふさわしいものであった。一方、コードナンバー「112」すなわちカウンタックは、「ミッドシップ・スーパースポーツをフェラーリに先駆けて開発すること」といった、極めて狭小な状況のもとで開発された、欲望としての速度機械（ランボルギーニ社はF1という利潤構造さえ長い間拒否していた）なのである。

しかし、今ここでは敢えてこうした両者の差異に隠れている同一性なるものに目を向けてみてはどうだろうか？ その同一性とは、この両者のフォルムデザインの基本が「金属板の平面的（曲げ加工しない）使用」であるという点であるということ、さらにはその面どうしの接点の折り目は、これらフォルムデザインの過程に発生した諸条件に関する「事件発生場所」であるという意味におけるものである。

ここでは、この「事件発生場所」を敢えて全く異なった種類のもの（2CVとカウンタック）から抽出比較してみたいと思う。

2CVはそのコスト削減からボディの金属板を可能な限り平板な板材のまま使用し、基本的には座席扉も

トランク扉もガラス窓もすべてこうした面材で構成してゆくなか、屋根から後部にかけて曲面が発生してしまう部分のみを柔らかい布（幌）で吸収してゆく方法を探っている。結果、この「面どうしの突き合わせ部の折り目」がこの車のフォルムを作り出す大きな要因となっている。

一方、カウンタックのフォルムは、1枚の紙を折り紙のように折り続けて行ったとき「山と谷」による折り目が発生するような方法で形作られており、これは2CVの場合と若干その発生因が異なるものの、その基本姿勢には共通するものがある。

詳細に言うと、2CVはその「仮設性」が強調される中で、扉（タイプAZやSAHARA）や屋根（荷物の搬入に便利な上、大きな荷物なんかは突き出して積みばよいのだ！）はもとより、後部座席さえも取り外し可能であり、このためピクニックの時、湿った芝生に直に座らなくて良いというオマケまでついていた。そして、本当にその気なら運転席の脇の上には空と風以外何もない風景が確保可能なのである。この「仮設性」を保証するもの、すなわち「ボディ組み立て時」の生産システムの痕跡（切り取り線）にして、「取り外し使用時」のプログラムの痕跡（切り取り線）こそが、すなわち折り目なのである。付け加えれば折り目とは、それを基に扉や屋根などがコンポーネントとして部分に分割可能になる「切り取り線」でもあり、そんな「事件発生のための穴」のようなものでもあるのだらう。2CVの2CVたる所以は、実はこの折り目にこそあるのではないだろうか？ かたや、カウンタックの場合、その「運動性」が最優先であって、装備されるメカニズムがあまりに複

雑でかつ極限状況のチューンになっているため、当然通常より遥かに多くのエア・インテーク（給気口）が必要とされる。フォルムはこれによって、通常ならば柔らかな流線形になるところを、ガンディーニはボディ面を平面的に幾重かに折り曲げてゆくこと（折り目）で冷却空気の流れ道を作り出そうとする。また、ボディの軽量化および操作性の結果できあがった「市販車中最悪」といわれる居住環境の中にあるのは、後方視界はゼロに近く、この対処法としてのベリスコープ型バックミラーはボディ面に専用の亀裂（スリット）を生じさせることさえ要求するのだ。こうした夥しい「面を切断、陥没させる要求」に応える度ごとに、カウンタックのボディはひとつひとつその折り目を増してゆくのである。

こうしてみると、2CVは「仮設性」「生産ライン」「プログラム」から、またカウンタックは主に「メカニズム」「運動性」から、というように一見全く異なる視点から発生してくるプロセスを、折り目というひとつの同じ「痕跡」で追跡することが可能なかもしれない。言い換えれば折り目とは、その生産過程や顧客の使用プログラムの中で発生する様々な「事件の発生場所」のことなのであり、この場所こそが全く異なる車のフォルムを共に決定している部分であるということが興味深い。

だから今ここで、敢えてこうした「諸条件があったから折り目が発生したのでなく、折り目があったから諸条件が発生したので」と言ってしまうとよりわかりやすい気もするのだが。

自動車とディテール処理

前田紀貞

シトロエン2CV——①

「ワールド・カー・ガイド4:シトロエン」ネコ・パブリッシング社

ランボルギーニ・カウンタック——②

「ワールド・カー・ガイド19:ランボルギーニ」ネコ・パブリッシング社



①



②

デザインは、作られるモノが道具として成立することが要求される以上、ある条件に対して解が一意に（あるいは非常に狭い範囲に）限定されてしまう領域を含んでいる。それを線形的領域と呼ぶならば、デザインとはこのような線形的領域と、多様な解のあり得る非線形的領域とが絡み合った行為である。デザイン作業全体におけるこういった線形的領域に対する、非線形的な領域の大きさを、ここでは冗長性と呼ぶことにする。職能で言えば、線形的領域を主に扱うのがエンジニアで、非線形的領域を扱うのがデザイナーということになろう。戦闘機などは冗長性の非常に小さいデザインであることは言うまでもない。自動車のデザインは、「道路を走る道具」とあるという条件から、線形的過程がデザイン作業の多くを占めることになるであろうし、大量生産にともなう加工技術の制約や生産コスト、道路交通法や排ガスなどの法的規制も冗長性を小さくする要因である。

一般的自動車メーカーのデザインプロセスは大きく分けて、「調査・研究段階」「要求仕様決定段階」「コンセプト立案段階」「コンフィグレーション決定段階」「造形段階」「承認段階」の6つからなっている。デザインの各段階で、デザイナーはコンセプトとそこから派生するイメージを言葉によって確認し、その言葉を形にしてゆくという作業を繰り返してゆくのであるが、コンセプトから導き出された要求仕様（車格、乗車定員、最大出力など）は技術的な制約によってコンフィグレーション（主要なレイアウト）をほぼ決定づけ、コンフィグレーションが決まると動かせる領域は非常に小さくなる*1。さらに、最も非線形的な作業領域である造形段階においても、コンセプ

トと形との対応は熟練デザイナーの場合、かなりの範囲で共有されているという（文献1）。すなわちコンセプト→形というデザイン・プロセス自体にも、ある程度線形的な（デザインの幅を狭める）要素を認めることができる。

このような冗長性の小ささは、コンセプトや技術に対するデザインの感度に関係してくる。なぜなら、コンセプトや技術は、線形的領域にダイレクトに影響を与えるからである。新たな価値を提案するコンセプトは、新たなコンフィグレーションを要求し、新素材の開発、加工技術の進歩は、それまで不可能であった造形やコンフィグレーションを可能にする。またそのことが、技術革新を促し、資源問題や安全性などの社会性へとデザインを連結させる結果にもなっていると思われる。こうしてみると、冗長性の小ささが逆に、線形的領域を問い直し、それを変化させる力になっていると言えよう。

そのことを最も先鋭的に表しているのが小型車である。最小のヴォリュームの中に走るための機構と最大限の居住空間を収める。最も厳しい（冗長性の小さい）はずの小型車のデザインは、しかし、最も自由な発想の実験室でもあった。1950～60年代の小型車は、あたかもカンブリア紀のバージェス・モンスターのごとき多様性を見せている（そしてやはり、そのほとんどは絶滅した）。オースチン・ミニはその淘汰を生き残った優れたデザインのひとつであるが、エンジンとタイヤを直結したかのようなコンフィグレーションは、「エンジンに乗っているようだ」と評される操縦性と相俟って、現在でも輝きを失っていない。

建築デザインの場合、構造決定、材料の選択、施工法などデザイナーのコントロールできる範囲は広く、自動車デザインに比べて非線形的領域は大きいと言える。しかしそれ故に、線形的領域を意識し、それを変えようとするデザインは生まれにくい。また、非線形的操作は、デザイナーの思考過程をトレースすることを難しくし、下手をすると建築家の設計意図を隠蔽してしまう。このような冗長性の大きさが、線形的領域の無批判な受け入れや、社会の動向に無関心なデザインの保守性を生む土壌になっているとは考えられないだろうか。デザインの冗長性という言い回しをしたのは、デザイナーの決定できる領域の大きさが、必ずしもデザインの創造性の幅に反映し、大きな自由を保証しているわけではなく、むしろ、意識的でない漫然としたデザインの存在を許容しているからである。

近代の建築家が飛行機や自動車に見た機能美とは冗長性の小ささであり、機能によって非線形的領域を小さくしようというのが近代建築の目論見であったとも言えよう。かつてのように、自動車に建築の似姿を求めることはもはやかなわないが、あらゆる価値観が相対化され、さらに冗長性を増した建築デザインのなかで、「冗長性を小さくする美学」は、近代的な倫理観をはらみつつも、これから有効な戦略であり続けるであろう。

*1：一般的に、造形段階に於いてエクステリア/インテリアデザイナーが動かすことの出来る部位は乗員の配置やキャビン周り程度であり、多くの部位の寸法はエンジン、駆動系、サスペンションなどの配置によって、詳細に決まってしまう。

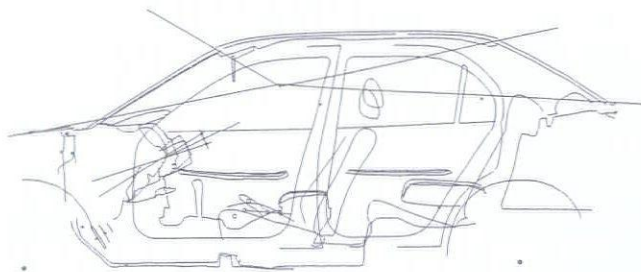
自動車とコンフィグレーション

清水裕二

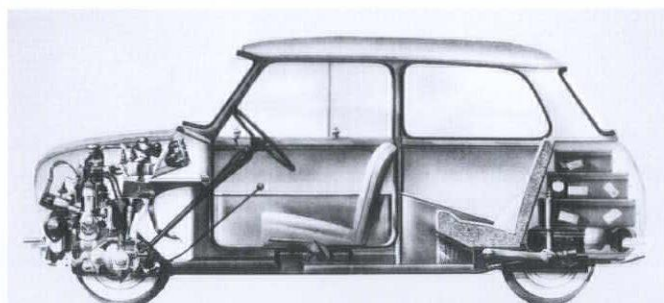
参考文献

- 1：『自動車デザインにおける視覚言語と統語法システムの開発研究』原田利宣著、千葉大学博士論文、1996
- 2：『KLEIN WAGEN』TASCHEN、1994

コンフィグレーション検討図。デザイナーの動かせる範囲——① Austin Mini, England, 1959. 革新的デザインがやがてスタンダードになる——② Zundapp Janus, Germany, 1957. 通り抜けできてもいいじゃないか——③ Unbania, Italy, 1966. 籠が載ってもいいし——④



①



②



③



④

自動車の世界においては、カスタマイズという概念がもはや特別なものではなく、それを支える思想と技術もすでにその立場を確立しているようである。

カスタマイズとは、ユーザーの製品の使用状況に環境を整えてゆくことであり、IDにおける製品意味論や製品計画論の中でも重要な概念として捉えられているようである。特にコンピュータ業界に至っては現象が顕著であり、もはやそれは社会化しているといっている。

考えてみると、移動販売車や放送宣伝車、救急車や消防車、清掃車や塵芥車などはカスタマイズの結果生まれたものであるし、カスタムカーと呼ばれる車（マニアの中で呼ばれているところのパンニング、ハンドメイドキャンピングカー、トラッキン、オーディオカー、チューニングカー、ストレリムジン、デコトラなど）を含んだ個人レベルの改造車も法と工学に基づいた安全性を確保すれば、公道を走る上では何等問題はない。

歴史的に見ても、フォードシステムによる大量生産方式が確立されるまでは、自動車の発展とはカスタマイズの繰り返しであったわけであるし、現在の自動車メーカーも、とりたてて改造車の氾濫は好ましくないなどとそれを防ぐ手段を講じているようには見えない。むしろ、メーカー純正のオプションパーツという付加価値を与えることによりカスタマイズを奨励しているし、ほとんどの自動車メーカーは独自にチューニングの専門分野を抱えている。カスタマイズはマーケットを想定する上での重要な要素であるし、自動車メーカーは量産車に対する個人の細やかな自由を奪う権利など持ち得ないとも言える。

ところが、個人レベルのカスタマイズが発達すればするほど嬉しくないのはデザイナー達で、完成された形態そのものに価値を創造し、それをデザインと呼ぶ彼らの立場にとってみれば、カスタマイズとは微小な個々の反証の実例を突き付けられているようなものであろう。

このユーザー、メーカー、デザイナー3者それぞれの微妙な立場の違いを周到に戦略化し、ルノーが最新作のコンセプトカー〈イニシアル〉として発表した。

第二次世界大戦後、ルノーは政府の方針でトラックやバスを中心とし、乗用車は小型車しか生産を許されていなかった。しかし、戦前の40CVなどの高級車の伝統の復活を企てるルノーは同じフランスの高級ブランドであるルイ・ヴィトンとの協同作業を通して、メーカー、デザイナー先導のカスタマイズという新しい形を提案したのである。

ルイ・ヴィトンという高級ブランドのもつイメージに威を借りる戦略と、一見見えるのだが、完成された試作車のデザインはルイ・ヴィトン・デザインの伝統的形態の持つ安心感とそれに底する斬新性、機能性、さまざまなフォルムへの対応力、素材感といったコンセプトを確実に踏襲している。それは戦前のルノーの伝統でもあったボンネットからバンパーへと滑らかに流れ落ちる面、全体のプレーンでシンプルな面構成、ファストバックのルーフラインや短いリアなどレトロな印象のプロポーションでありながら五角形をしたリア・ウィンドウに沿ってリア・ピラーを巻き込むという斬新なデザイン処理、荷物スペースは複雑なリンクで平行移動で持ち上がりリア

クセス可能としている技術的解決法などは枚挙に暇ない。特筆すべきはインテリアで、駐車時に機器類は艶消しのウッドパネルにより隠され、全体に目に優しい素材感に包まれている。この協同プロジェクトで具体的にルイ・ヴィトンが製作したものは磨き上げたアルミ地肌でフロスト処理を施し、牛皮のグリップとビーチウッドのストライプを加えた3タイプの〈イニシアル〉用のラゲッジしかないが、そのコンセプトは〈イニシアル〉に確実に反映されていると言ってよい。

ここまでメーカー、デザイナー先導のカスタマイズが進歩すると、今後ユーザーはいかにして自らのカスタマイズが可能となってくるのだろうか。〈イニシアル〉では、ある種完結したカスタマイズの方向性が差し示されているわけで、ユーザー自身が個人レベルでこの路線を逸脱していくことはかなり難儀な作業になっていくものと考えられる。言い換えるとデザイナーの勝利とも言えなくもない。

余談ではあるが、ルイ・ヴィトンはモノグラムシリーズ誕生100年を記念して内外の気鋭のデザイナー7人に、ポスト・モノグラムのデザインを依頼している。これが実に多様多彩でデザインも秀逸である。モノグラムはモードではないため、あえてパダクシャルにモードのデザイナーを起用したとはルイ・ヴィトンの弁である。

閉塞化した建築の世界においても、技術や論理を全て社会に公開し、他分野のカスタマイズを受け入れることが既成の制度を打ち破る突破口になるかもしれない。

自動車とカスタマイズ

田上健一

イニシアル——①
『AXIS58』AXIS
カスタムカー——②
『カスタムカー専科』香味一郎=著、芸文社

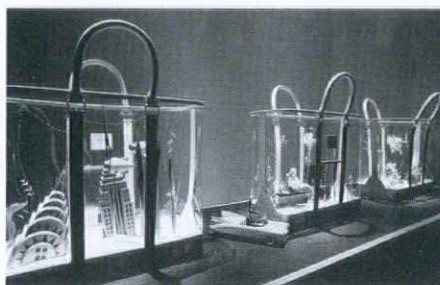
ルイ・ヴィトンモノグラム——③
『マリー・クレール』9605号、中央公論社
コンセプト・バッグ——④
『AXIS58』AXIS



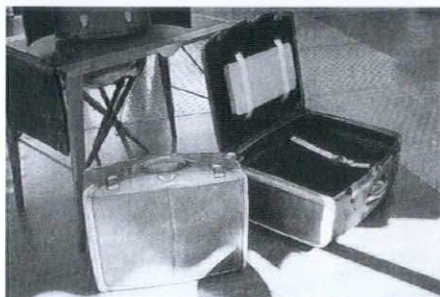
①



②



③



④

「カッコいい」という言葉。

「カッコいい」とは極めて相対的な判断です。それは一見すると独我論的な判断とみなしがちですが、その実、極めて文化に支えられた価値判断です。だからこそ、文化を介して共時的に、あるいは通時的に共有されるものでもあります。文化に依存した「カッコいい」というその判断は、文化におけるある種の距離感（例えば、カッコいいものとそれ以外のもののずれ）によって現出すると考えることができるでしょう。

文化と車が非常に親密な関係にあることは事実です。車のデザインそのものだけを語ることが困難なほど、車はたくさんのコノテーションをまわりつかせています。だから、文化に癒着したカーデザインにおいては、「カッコいい」という言葉だけで、ある程度はある種の価値判断が共有化されるのだと私は考えます。短絡的に裏を返せば、「カッコいい」という言葉がカーデザインと文化的社会的な文脈との距離を測っていると考えることもできるのではないのでしょうか。「NAVI」という雑誌をひっくり返して見れば、いかに文化(人生)の一部として車を捉えようとしているかが端的にわかります。カッコいい車がかっこいい生き方に直結されるというわけです。大袈裟なことを言えば、車のオーナーは車のデザインによって文化との距離を測り、文化(社会)に対して自己を分節させる。まあ、車のデザインがオーナーの人間性を表現するといった単純な図式は現代では成り立たないでしょうが、生活や趣向の一部を担うことは可能なほどそのデザイン(スタイリング)は、多様に差別化されているわけです。同一のシャーシでも複数の異なるデザインのボディがのっかっていたりと、それは、もうある種「チキチキマシン猛レース」の雑多な車の世界であるのも事実なわけです。だから、誤解を恐れず述べてしまえば、文

脈にさえいければ車のボディはどんなことも、つまりは、どんなデザイン(スタイリング)も可能なわけです。

ロラン・バルトはその著書『神話作用』の中で、シトロエンDSのなめらかなボディに対して次のような記述を行っています。「DSには、組み立ての新しい現象学の糸口がある。まるで溶接された要素の世界から併置された要素の世界へ移るかのようだ」。私には、これが今日のカーデザインの状況の予言のように思えてなりません。バルトが『神話作用』の中で行った、日常の雑多な事象を併置し相対化する構造主義的な作業が、今日のカーデザインの中にも見出せるからです。例えば、具体的にそれは「レトロ・フューチャー」といわれるスタイリングにおいて、直接的なカタチでもって見てとることができるでしょう。ただ、ここで私が指摘したいのは、バルトが言及したような車の部位の併置の関係ではなく、デザイン要素の自由な併置についてです。

レトロ・フューチャーのスタイリングは、過去の車のスタイリングを直接的といっているほどにあからさまに引用し、スタイリングを組み立てています。今回ここに取り上げるフィアット・バルケッタもフェラーリ166バルケッタをもとに作られた、レトロ・フューチャーのスタイリングの車のひとつです。ボディの中央に前から後ろへ走るアクセントライン(プレスライン)やフロントの造形など166バルケッタを彷彿とさせているでしょうし、ヘッドライトカバーやフェンダーのふくよかなライン、50年代のザガードを思わせるという華奢なレバーのドアハンドルなど、随所にスポーツカー黄金時代のディティールを採用しています。こうした過去の引用のほかにフィアット・バルケッタは、現代的な側面も当然のことながら持ち合わせています。スタイリング的にはキャビンがやや前方にあること、リアのオーバーハン

グがほとんどないこと。またフィアット・ブントのコンポーネンツを利用していること、エアコン、パワーウィンドウ、セントラルロック、運転席エアバック、ABSを装備し、手頃なサイズそして270万円というリーズナブルな価格。バルケッタは 대중車メーカーのフィアットが作る、現代的でカジュアルなオープンスポーツカーであるのです。このようにバルケッタには、過去の要素が現代の要素とまったく等価なものとして混在しています。そのレトロなスタイリングの引用を単にノスタルジックとしてのみ片付けてしまうのではなく、バルトの示唆したようなテキストの相対的な併置性にこそ注目すべきだと私は考えます。過去のスタイリングの引用とは、いわば本来そのスタイリングが持っていた文脈の解体です。先にスタイリングと文化との親密さについて述べたように、過去のスタイリングの要素と現代的な要素とがまったく等価に扱われることは、つまり併置された様々な要素が喚起する意味やテイストや文脈などの併置でもあるわけです。50年代のスポーツカーの雰囲気、イタリアが喚起するもの、現代的なカジュアルさ、などの文脈の併置されたスタイリングによって、消費者は様々な生活スタイルのヴァリエーションを欲望するのです。明らかにそれは、フェラーリ166バルケッタが喚起する意味作用とは異質のものでしょう。

いわばバルトの言葉をこちら側に思いつき引きつけて考えれば、文化へのスタイリングの親和作用によって、様々な文脈が継ぎ目なくなめらかに統合されているというわけです。そして、バルケッタの「カッコいい」スタイリングは、現代のクールなライフスタイルのスタイリングと二重写しの関係になっているのです。

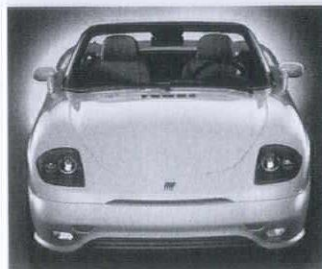
自動車とスタイリング

丸橋 浩

フェラーリ166バルケッタ——①
フィアット・バルケッタ——②
FIAT barchettaのカタログより



①



②

ここで紹介するのは、メルセデス・ベンツのAクラスです。以前から「ヴィジョンA」と称して開発の進行が伝えられていましたが、近々、メルセデスのニューカテゴリーとして発表され、市場を賑わすであろうと大変期待されている車です。実は筆者は個人的な趣味としてはメルセデスなんて嫌いだ！と思っています。やっぱり車には、わくわくする「何か」が欲しい。「何か」って何かっていうと、言葉では説明できないとんがった部分、アンバランス、魅力、デザイナーの創意、なわけです。ピニンファリーナのような独創的な優れたデザイナーは流れるような何とも言えない曲線を生み出します。一方、天才不在の大きな設計組織の場合、マーケティングに基づいてどちらかというと欠点排除主義的なやり方で、「売れるけれども面白くない」車ができてしまうのが普通です。メルセデスも巨大な設計組織で車を作っていますが、ちょっと違うのです。

Aクラスは、マジでマジメな車です。これには小型車というものが持つ欠点を解消する画期的なアイデアが盛り込まれています。

まず、ボディが小さくなってクラッシュゾーンがとれなくなった代わりに、正面からの衝突の場合にはエンジンとトランスミッションという重量物が鋼鉄製のフロアフレームの下に潜り込むことで、乗客が乗るキャビンを守りながら衝突のエネルギーを吸収する仕組みをとっています。側面や後方から他の車が衝突しても20cmほど持ち上げられたフロアフレームの下に潜り込んでキャビンに直接衝撃が

加わるのを回避します。またこのフロアフレームの下に駆動系や燃料タンク(電気自動車！の場合電池)などの重量物を収納することで、重心が下がり走行安定性も向上します。

試作車に乗った人の話によると、キャビンは高さも十分にあり、肘や肩という人間の一番出っ張った位置の車内幅が確保され、膝の前には拳が1.5個も入る余裕があるということです。後部座席空間もリアウィンドウをほぼ垂直に立てることで犠牲にしません。日本車などで、大衆車のくせにロー&ワイドのスタイリングを意識して居住空間は昔の宇宙船のよう、なんてのもありますが、それがいかに貧困な発想かと思知られます。

とにかく、この「上級車並みの安全性と居住性を備えた小型車」は恐ろしく複雑で同時には解決できないと思われる与条件(プログラム)を明快に解いていると言えるでしょう。「このくらいだからこんなもんだ」という社会通念までも覆してしまいかねない存在だという意味で衝撃的なデザインだ、と筆者は思うわけです。きっと、他のメーカーは戦中アメリカが日本の零戦を捕獲してやったように、この車を分解して研究するでしょう。しかし、この車が鉄や樹脂でどうやってできているのかを研究するよりも、メルセデスがどんな与条件を設定して、どんな手法で製品にしたのかを研究するべきでしょう。

車のデザインは、とかく使用者の立場に立って評価されがちですが(スタイリング、パワー、燃費等)、メルセデスは成熟した車メーカーとして社会的な視

点から与条件を設定しています。安全性の他にも例えばエコロジー。部品を分解しやすいように設計し、それぞれに素材を示すマークをつけたり、Cクラスのシートのクッション材にへちまの繊維を使用したりしています。また、STORMと呼ばれる高度道路交通システムを提案し、パーク&ライドを含めた最適な道路環境を支える情報システムをシュトゥットガルトで実験しています。

多分、優れたデザインとは斬新な形態それ自身ではなく、与条件(プログラム)と製品とのダイレクトな繋がりにあるのだと思います。常にデザインフローとは与条件の設定→解法の模索、機構の発明→素材の選定→製作→効果の評価→与条件の再設定という循環を繰り返す、オープンフィードバックシステムです。これは天才デザイナーであっても設計組織であっても変わらないのですが、前者が非言語的な思考の中で解決していることを、後者は言語的な広いコミュニケーションの上に築いていかなければならない(冒頭の「何か」は、この段階で取りこぼされます)ところに難しさがあります。メルセデスはちゃんとそれを知っていて、安全性や居住性などの車単体の与条件から社会的な車としての与条件まで、という複雑な命題をたてて、天才的な飛躍などではなく、膨大で着実な研究に基づいた明快な解法で製品に結びつけています。結果として、新たな社会的存在としての車の価値を創出していると言ってもいいでしょう。

自動車とプログラム

田鍋 稔

ヴィジョンA93—①

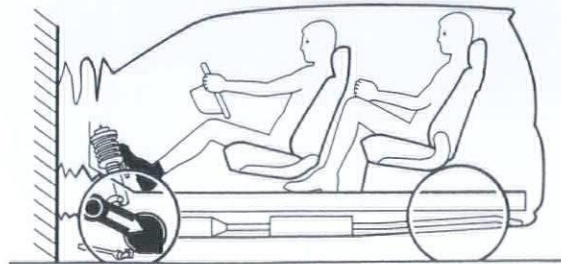
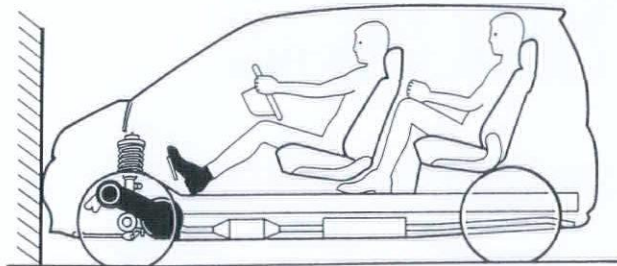
「Car Graphic 9411」、ニ玄社

高い安全性：考え得る限り最高の乗員保護を実現するため、前面衝突の際、エンジンおよびトランスミッションは、室内の下で下方にスライドするようになっている。——②

「メイド・バイ・メルセデス」和田充夫＝監修、松岡利昌＝著、ダイヤモンド社



①



②



土浦邸(第二)／写真：増田彰久

9607

特集1

再読・土浦亀城の建築

フランク・ロイド・ライトのもとで学び、日本のモダニズム建築を作り上げた土浦亀城。建築を木造でいかに白く、軽く、空間を明るく見せるかを追及した。またそのインテリアには、緻密なディテールと個性的なアイデア・工夫が詰まっている。本特集では当時のモダンな社会、生活・文化を通してつくられていった土浦亀城の自邸を含む戦前・戦後の建築作品を紹介し、昭和初期モダニズムにおける氏の建築の再評価を試みる。

[対談] 植田実×藤森照信

[論文] 西澤泰彦、土浦亀城、岸和郎、小川信子、谷川正巳、村松正恒、笹原貞彦、畑中康

[作品]

山県邸（1926）、大脇邸（1931）、谷井邸（1931）、土浦邸（1931）、土浦邸（第二）（1935）、徳田ビル（1931）、理研研究室（1938）、岩出邸（1937）

インテリア（居間、台所、階段、家具）

[土浦亀城と同時代建築家]

A・レーモンド×土浦／内田祥士、遠藤新×土浦／内田青蔵、吉田鉄郎×土浦／大川三雄、山口文象と土浦／河東義之、前川国男×土浦／松隈洋、谷口吉郎×土浦／藤岡洋保

[インタビュー]

河野通祐、加藤寛二、牧野良一、佐々木喬 インタビュアー：植田実、西澤泰彦

[ポケット・パークでの講演会録]

土浦亀城夫妻×藤森照信

特集2

スタジオ建築計画の集合住宅

スタジオ建築計画が手掛けた主な集合住宅を取りあげて、その設計思想を紹介する。特に工業化までもくろまれたプロトタイプとしての性格も強い、最新作 FH-HOYA II は、コンセプトから、代表的住戸タイプまで紹介。集合住宅に対する現代的な取り組み方の一例を見る。

[文] 元倉真琴、宇野求、矢代真己、今川憲英、高間三郎、井上洋司

[写真] 大野繁

SD

バックナンバー



9604

特集

大地と光の変様 オーストラリア建築1788-

イギリスの建築様式を出発点としつつも、新しい環境に適応させようとする建築家達の積極的な意志が見える。1788年流刑地として入植して以来のオーストラリア建築の変遷を追う。

1. オーストラリア植民の始まり
2. シドニーのコロニアル建築
3. タスマニアの教会建築
4. オーストラリアン・ハウス
5. メルボルンのヴィクトリアン建築
6. 都市住居テラスハウス
7. キャンベラの新首都計画
8. 現代建築の可能性

[文+写真]

東京都立大学建築学科 小林研究室

ネクストジェネレーション in New York スミス=ミラー+ホーキンソンと ジョエル・サンダース

与えられたプログラムに独自の思考を加えながら、プロジェクトに終わらず、エレガントな実作を生み出しつつある、ニューヨークの建築家の新作を紹介。

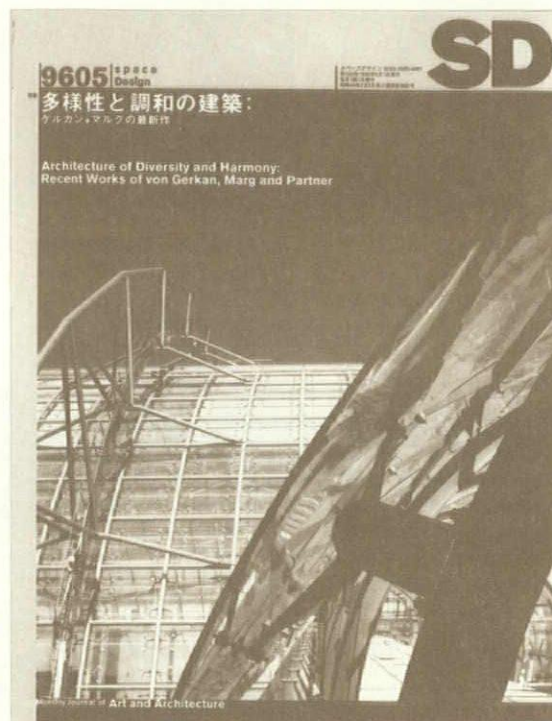
[文] 松畑 強

連載：apple tomology トムの時空形象学 5 文＝戸村 浩

連載：ヤマトホテル巡礼3. 文＝橋爪紳也

照明探偵団・連続実践レポート2 葛西玲子/LPA

定価＝1,950円／本体1,893円



9605

特集

多様性と調和の建築 ゲルカン+マルクの最新作

1978年の国際コンペ「バーレビ国立図書館」最優秀賞受賞を機に、その名が、世界に知られたゲルカン+マルク。その後も継続的にコンペプロジェクトをこなし、その勝率の高さは他に類がない。説得力のあるコンセプトと、設計プロセスの緻密さが、大規模建築を次々と実現してゆく。本特集では、彼らの'90年代の最新作・プロジェクトを紹介する。

[作品]

エルブショセー139、サラマンダー・ハウス、ドイチェ・レヴィジオン、チューリッヒ・ハウス、リュベック音楽・会議ホール、独日センター、ライブツィヒ・メッセ、ハンブルグ空港駐車場、ベルリン・レールター駅、シュトゥットガルト21・プロジェクト、他

[文]

マインハルト・フォン・ゲルカン、クラウス・ディーター・ヴァイス、山下昌彦

海と建築——鈴木了二の最新作

長年、素材と空間の関係を追求し設計を続けてきた鈴木了二の「物質試行」シリーズ最新作。

[作品] 物質試行37：佐木島プロジェクト、物質試行32：佐木島の住宅

[写真] 安斎重男

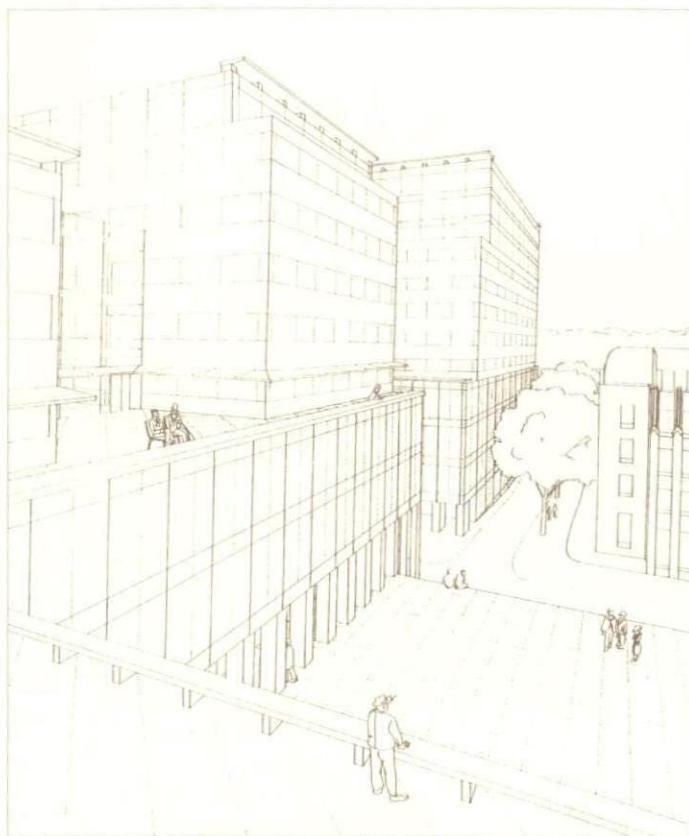
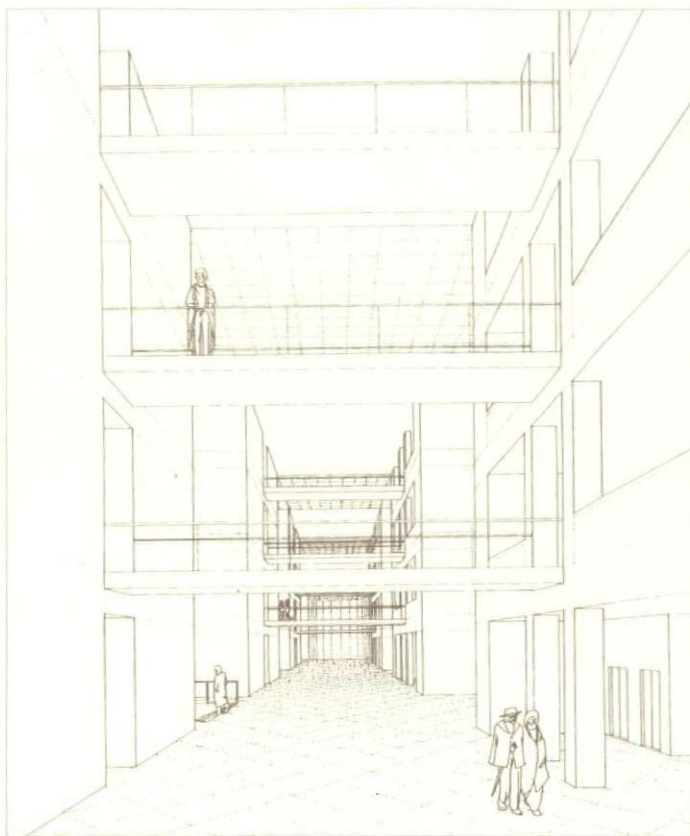
[文] 飯島洋一

連載：apple tomology トムの時空形象学 8 [文] 戸村 浩

連載：ヤマトホテル巡礼4 [文] ホテル文化研究会、竹山聖

照明探偵団：連続実践講座レポート3

定価＝1,950円／本体1,893円



SD別冊28 好評発売中

判形：A4判変形
総頁：176頁
定価：3900円

大学の空間

ヨーロッパとアメリカの大学23例と東京大学本郷キャンパス再開発

教育と研究の最高学府としての大学を取りまく環境は、大きく変わりつつある。それに対応した改革の必要性は高く、現実に様々な策が講じられている。キャンパスを構成する物理的な環境も例外ではない。本別冊では、東京大学本郷キャンパスの再生計画の一端を担っているグループが、次世代のキャンパスのあり方を探るべく、欧米の諸大学を実地に調査した記録をベースとして、様々な角度からキャンパスの発展のかたちをスタディしたものである。

それらは多くの問題を抱えながら再生を図ろうとしている日本のキャンパス計画だけでなく、より一般的に、既存街区の保存、再生、増設などについての多様な方法の実例としても興味深く、役立つものである。

論文：

香山壽夫（東京大学建築学科教授）、岸田省吾（同助教授）、他

実例：

フランスの最新プロジェクト——リヨン大学、ストラスブール大学、アミアン大学、他

中世都市にたつ大学——ハイデルベルク大学、ケンブリッジ大学、サラマンカ大学、他

アメリカのキャンパス——ハーバード大学、プリンストン大学、ワシントン州立大学、他

モダンキャンパス——サッセックス大学、イーストアングリア大学、ベルリン自由大学、他

東京大学本郷キャンパス——外構、食堂、工学部14号館、1号館、2・3号館、将来計画

'95年 刊行図書一覽

シリーズ

SDライブラリー⑪

デザイン・ドリームス 映画に見る近代建築

D.アルブレヒト著 萩 正勝訳 A5判・272頁 定価4,017円

SDライブラリー⑫

アダムの家 建築の原型とその展開

ジョセフ・リクワート著 黒石いづみ訳 A5判・296頁 定価4,120円

SDライブラリー⑬

圏外からの建築 映画・写真・鏡・身体

ダイアナ・アグレスト著 大島哲蔵訳 A5判・240頁 定価3,708円

SDライブラリー⑭

建築と非建築のはざままで

ロバート・ハービソン著 浜田邦裕訳 A5判・208頁 定価3,193円

ハイテック・コンストラクションI

ビルディング・エンベロプ 建物の外装のデザインと技術

アラン・J.ブルックス クリス・グレッグ共著 難波和彦、佐々木睦朗監訳

B5判・148頁 定価4,635円

ハイテック・コンストラクション3

スーパーシェツズ 大空間のデザインと構法

クリス・ウィルキンソン著 難波和彦、佐々木睦朗監訳 B5判・144頁 定価4,635円

[現代の建築家]

原 広司

SD編集部編 A4変判・174頁 定価4,429円

[インテリアデザイナーのための]

住宅設備設計の知識

石崎清士著 四六判・192頁 定価2,266円

[物語 ものの建築史]

門のはなし

山田幸一監修 佐藤 理著 四六判・128頁 定価1,339円

[すぐに役立つ]

建築基準法の知識 (新訂版)

建築基準法実務研究会編著 B6判・212頁 定価2,266円

建築

インテリア・デザインの美学

スタンリ・アバークロンビー著 戸川 智、紀子訳 A5判・192頁 定価2,781円

桂離宮 ブルーノ・タウトは証言する

宮元健次著 四六判・184頁 定価2,369円

中空スラブ設計要覧

松井源吾、O.R.S.事務所著 A5判・152頁 定価3,605円

建築語源考 技術はコトバなり

飯塚五郎蔵著 四六判・164頁 定価2,163円

都市と建築のパブリックスペース

ヘルツベルハーの建築講義録

ヘルマン・ヘルツベルハー著 森島清太著 B5判・272頁 定価6,901円

[新版] **もめごとなしに住宅を建てる法**

はじめて家をつくる人のために

島田良一、藤森正男共著 四六判・184頁 定価1,854円

超級アジア・モダン 同時代としてのアジア建築

村松 伸著 四六判・272頁 定価2,575円

今話題の建築技術を見る

近畿建築士会協議会編集 大阪府建築士会編集委員会技術小委員会執筆 四六判・194頁 定価2,060円

演劇のための空間

伊東正示、シアターワークショップ編 A4変判・178頁 定価5,871円

都市と建築の解剖学 形態分析によって(設計戦略)を読む

J・ペイカー著 富岡義人訳 B5判・296頁 定価5,974円

かたちに見る造形の構成 イメージ・ジェネレーターの展開

島田良一編著 B5判・146頁 定価3,502円

サントリーミュージアム天保山

安藤忠雄、三宅理一共著 A5判・80頁 定価1,950円

住み続けるための新まちづくり手法

佐藤 滋、新まちづくり研究会編著 A5判・256頁 定価3,296円

都市・景観

ランドスケープデザイン

野生のコスモロジーと共生する風景の創造

吉村元男著 A5判・176頁 定価2,884円

子どものための遊び環境

ロビン・ムーア他編著 吉田鐵也、中瀬勲共訳 A5判・300頁 定価4,532円

テクノスケープ 都市基盤の技術とデザイン

片木 篤著 四六判・224頁 定価2,987円

庭園の詩学

C.W.ムーア、W.J.ミッチェル、W.ターンプル・ジュニア共著 石岡 孝訳

A5判・304頁 定価4,841円

城下町の近代都市づくり

佐藤 滋著 A5判・232頁 定価4,326円

一般書・他

架空旅行記

池内 紀著 四六判・200頁 定価2,575円

生きている経済の知識

踏み迷う経済原則、ミラクル経済原理を論評

細野耕以知著 四六判・256頁 定価2,884円

ストップ ザ・ヒューマン・エラー 100 ある現場所長の覚書き

笠原秀樹著 B6判・144頁 定価1,545円

防止困難なミスはいかにしたら減少できるかを目標に、ヒューマンファクターの災害要因をあらゆる角度から、より身近かな事例を引用して、誰にでも幅広い分野に活用できるよう工夫して、とりまとめた100のお話。

庭の意味論

M.フランシス、R.T.ヘスターJr共編 佐々木葉二・吉田鐵也共訳
A5判・320頁 定価4,738円

ガーデンのデザインや使われ方、その価値づけをまとめた最初の試み。庭園の興味と共にアメリカ文化論として楽しめる内容。全6部26章から成る。I・信仰、II・力、III・秩序、IV・文化の表現、V・個人の表現、VI・癒し

広がるデザイン③ デザインの産業パフォーマンス

榮久庵憲司監修 黒田宏治+GK著
四六判・192頁 定価2,678円

デザインは産業社会の基盤部分に位置することを考え、地域というフィールドを視野に入れながら、次世代への地域産業戦略を展開する。

マスメディアとしての近代建築 アドルフ・ロースとル・コルビュジエ

ビアトリス・コロミーナ著 松畑 強訳
四六判・240頁 定価3,090円

ロースとコルビュジエの建築をメディアとの関連でとらえ、今までにない切り口で論じる。住宅の被写体化を拒絶するロースと、写真をなぞったスケッチを執拗に描くコルビュジエとの差とは？ 目次／アーカイブ・都市・写真・広告・美術館・室内・窓。

人にやさしい公園づくり バリアフリーからユニバーサルデザインへ

浅野房代・亀山 始・三宅洋介共著
A5判・196頁 定価2,781円

ユニバーサルデザインを目ざす著者が、海外取材を取り入れて、専門家から利用者まで梓を広げた大局的見地で、これからのハートフルパーク(福祉型公園)づくりを提唱。人にやさしいとは何か、オリジナル設計シートで詳述。

建築と断絶

ベルナール・チュミ著 山形浩生訳 四六判・256頁 定価2,987円

B.チュミが1975年から91年にかけて書いた空間・イベント・断絶の三部からなる建築論集。一見混沌として見える東京やニューヨークこそ、新しく意外な形態と機能の関係を生み出し続けるこれからの建築のあるべき姿と述べる。

【SDライブラリー】②①

空間を生きる

リカルド・ボフィール著 太田泰人訳 A5判・192頁 定価2,987円

バルセロナの現代建築家R.ボフィールが語る建築論。全体は権力、創造、建設の三部構成となっておりバルセロナ、パリ、ニューヨーク、モスクワと駆け巡る建築家の活動スタイルとその過程での様々な条件についての思索を通して建築理念を語る。

【SD選書223】

ディスプレイデザイン

魚成祥一郎監修 清家清序文 四六判・200頁 定価1,854円

現代生活のさまざまなシーンを彩るディスプレイデザイン。都市・建築・インテリア・グラフィックなど、あらゆるデザイン領域を横断・統合するスーパーデザインとしての「ディスプレイデザイン」の入門書！

始源のもどき ジャパネスキゼーション

磯崎 新著
A5判・336頁 定価3,914円

伊勢の式年遷宮に秘められた謎を説き明かすイセ論をはじめ、日本の建築文化の近代化の過程にくりかえし現われる和様化を論じる、グローヴァルな日本文化論！

造物主義論 デミウルゴモルフィスム

磯崎 新著
A5判・336頁 定価3,914円

『建築』とは何か？という根源的な問を自ずから投げかけ、ティマイオスからニーチェにいたるさまざまなテーマで織りなす『建築論』の一大ページェント。『建築』の現在を問い、未来を展望する磯崎新の話題作！！

人気急上昇

予約申込殺到!!

年間予約購読、郵送制

書店ではお求めになれません

月刊

ダルトンレポート

DALTON REPORT

「建設業のいま」を満載したニューリトルマガジン



9605号 目次

●特集●新たな工事履行保証制度がスタート

- わいどあぐる ●多様化—近頃の自動販売機はサービスも売ります／復古調—真空管アンプなど手作りの音に脚光
- 霞が関ホットライン ●土木工事標準歩掛り大幅改正／大型工事は一括発注／発注標準引上げ
- 列島を拓く ●10月までに事業推進策—中部新国際空港整備／山口県が発注単位を大型化
- 学会・協会・業界 ●インターネットで建材取引—98年度めどに建材産業協／一般入札に名乗り—東北の地場3社が経常JV結成
- ビッグ・プロジェクト進行中 ●豊子海峡架橋—3,000mスパンで基礎工水深100m／汐留区整1、2、3街区、仮換地指定を通知
- こんな方法考えました ●コスト4割減—一段ボール型枠で中空マットスラブ
- 新戦略・新戦術 ●工場長の事務処理軽減／ライン管理職削減—竹中工務店がグループ制導入
- こんなモノつくりました ●洗浄コスト4分の1—アルミ足場自動洗浄装置を開発／価格2分の1—廃棄物から溶接補助剤

▶ 今月の「拾出し」 ◀ 免震マンション建設急増

●用語・語録 ● 多国間投資協定

建設マンのための気楽に読めるユニークな建設情報誌です。

- 忙しいあなたに代って必要な情報を収集・整理してお届けします。
- これさえ読んでいれば高度情報化社会で遅れをとることはありません。

DALTON REPORT 定期購読申込書

□新規購読申込

SD

フリガナ
お名前

ご自宅 〒
住所

お勤め先

該当の
ものに
○印を

ご専門

建築

土木

機械

電気

事務

ほか

(職種)

ご担当

設計

施工

管理

営業

経理

ほか

購読期間(○印をつけてください)

□1年

□3年

購読のお申し込みは今すぐに!
大変割安な定期購読料金です。

ただいま定期購読のお申込みを受付けています。
申込書用紙をきりと、もれなくご記入のうえ、ハガキに
全面のり付け貼付し、下記までお送りください。
※お申込みは個人名でおねがいします。

購読申込書の送り先

〒107 東京都港区赤坂6-5-13

(株)鹿島出版会 情報システム事業部

ダルトンレポート読者係 ☎(03)5561-2553

- 定期購読料 1年購読(12冊) 4,900円(税込)
(送料共) 3年購読(36冊) 9,800円(税込)

※購読料金のお支払いは、ダルトンレポート本誌に添付の
郵便振替用紙でお近くの郵便局からお払込みください。



9502 Baroque Architecture in Sicily and Lecce: Features the distinctive Baroque style resulting from the mingling of Roman Baroque and the indigenous ancient Grecian and Hellenistic cultures. Introduces Palazzo Spadaro, etc. Photos: Ichiro Ono. Text: Hirohide Yaakeyama, Masanobu Hasegawa, Satoshi Okada. ¥1,950



9503 Multi-unit Housing Today: Introduce architects who have made many multi-unit housing recently and their works. Masahiko Araki: Living Alley, Takao Endo: Higashi-Osaka Yoshita Public Housing Complex, Hidetoshi Ohno: YKK Namerikawa Dormitory, Yuzuru Tominaga: Shinchi Housing-C, Yasumitsu Matsunaga: Project 951, Makoto Motokura: Seikousou. ¥1,950



9504 Scenes from the Technoscape: Focus some scenes or landscape constructed by industrial facilities, civil engineering structures, etc. Introduce Wind Firm, The Thames Barrier, The Arecibo Observatory, The Kurobe Dam, Shiobara Hydro-Electric Power Station, Kasai Sewage Processing Plant, Trans-Tokyo Bay Highway, Drilling Platform, Japan Microgravity Center, Circular Farm, etc. ¥3,000



9505 Mega Architecture: Recent Works of Paul Andreu: Introduces some of Andreu's many monumentalscale buildings, railway stations, sports stadiums, and other works. Feature on *The Creation of the Foreign Settlement in Kobe and Its Development*. ¥1,950



9506 The Potential for Using Computers in Architecture: Examines how architecture is being influenced by the use of computers. Architects: Neil Denari, Peter Eisenman, Keiichi Irie, Toyo Ito, Hani Rashid, ARX, Kengo Kuma, Makoto Sei Watanabe, etc.. **Mysterious Design Drawing Exhibition:** T.Ara, F.Enomoto, S.Hisada, N. Iijima, E. Sottsass, S.uchida, etc.. ¥1,950



9507 Takahiko Yanagisawa: Art Museum Space and Detail: Features five museums by Takahiko Yanagisawa, who won the competition for the Second National Theater in 1986. Museums introduced: Utsubo Kubota Memorial Museum; Museum of Contemporary Art, Tokyo; Kazumasa Nakagawa Art Museum, Manazuru; Kiriama City Museum of Art; etc.. ¥2,700



9508 Urban Public Spaces: Features small public facilities designed by architects. Architects: Atsushi Kitagawara, Naoko Hirakura, Shuichi Kitamura, Toyo Ito, Waro Kishi, Kazuko Fujie, Atelier Zo, Koichi Nagashima, Mitsuru Senda, etc. **Digital Urban Design: The New Language for Design Cities:** Introduces new methods by Yanagida Ishizuka & Associates. ¥1,950



9509 Kenzo Tange: Kenzo Tange Associates: Focus on UOB (United Overseas Bank) PlazaTange's last skyscraper, and on the Shinjuku Park Tower which transforms the Shinjuku skyline. Introduces Makuari Prince Hotel, Bay Square Yokosuka, Hiroshima Peace Center Complex, FCG (Fuji-Sankei Communications) Building, Gran Ecran (Place d'Italie), etc. ¥3,800



9510 Architecture of Response: Recent Works of Cesar Pelli: Introduces recent works by Pelli built around the world, especially in Asia: NTT Shinjuku Headquarters Building, Sea Hawk Hotel & Resort, Kuala Lumpur City Center, etc. **Tower Art in Tsutenkaku:** Introduces an art and architecture exhibition held at the Tsutenkaku Tower in Osaka. ¥1,950



9511 Itsuko Hasegawa: 1985-1995: Introduces 30 works by Hasegawa for 10 years. Works: Museum of Fruit, Yamanashi, Sumida Culture Factory, Ohshima-Machi Picture Book Museum, Footwork Computer Center, House in Kumamoto, Leaf House, Niigata-City Performing Arts Center, etc. Text: Peter Cook, etc. Conversation: Koji Taki and Itsuko Hasegawa ¥3,000



9512 SD Review 1995: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening committee. Participants: Toru Yoshida and Miki Okamoto, Ti-Nan Chi, Tom Heneghan and The Architecture Factory **Villa Romana:** introduce the villa and the gardens in Rome. **Transportation Design by Eiji Mito'oka:** Design of express train and ship ¥1,950



9601 The Architects' Record in the Pursuit of Urban Design: Introduces government's urban projects which are coordinated by architects in Japan: Kumamoto Artpolis by Arata Isozaki, Creative Town Okayama by Shin'ichi Ogawa, Nagasaki Urban Renaissance and Shiroishi Media Polis by Hideto Horiike. Text: Riichi Miyake, Naoyuki Kuniyoshi, etc. ¥2,800



9602 Italian Rationalism: The contemporary meaning of Italian Rationalism. Introduce six Italian architects: Franco Stella, Uberto Siola, Antonio Monestiroli, Arduino Cantafora, Marino Narpozzi, Nicola Di Battista. Works: House in Thiene, Hotel in Via S.Allende, Design for Spreeinsel, Polyptych of Ravenna, The New Cemetery in Fiesse D'Artico, etc.. ¥1,950



9603 Contemporary Asia Series 2: A Panorama of Architecture in Vietnam: Architecture and Vietnamese City: Hanoi, Hue, Hoi An, The Champa Ruins in South-Central Vietnam, Ho Chi Minh. Themes: Dwellings of Vietnam's Minority Peoples, Vietnam's Industrial Parks, Contemporary Architecture Today. Text: Y.Shigeeda, S.Nakazawa, S.Muramatsu, etc.. ¥2,500



9604 Transformation of Ground and Light: Australian Architecture 1788-: Shows how Australian architecture has changed since the arrival of first settlers in 1788. Texts and photos: Tokyo Metropolitan University, Kobayashi Lab. **Next Generation in New York: Smith-Miller + Howkinson and Joel Sanders:** Latest works by New York architects. ¥1,950



9605 Architecture of Diversity and Harmony: Recent Works of von Gerkan, Marg and Partner: They are known for the winning of competition many times. Introducing their '90's works including competition designs. Texts: Masahiko Yamashita, Klaus-Dieter Waiss **The Sea and Architecture: Suzuki Ryoji's Latest Work:** Sagishima Project 'Ring', House in Sagishima. ¥1,950



Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the field of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to **Space Design** and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:
Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

☐ Please enter my SUBSCRIPTION to
Space Design,
starting in _____, 1994

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of **SD**:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoei Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and Its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

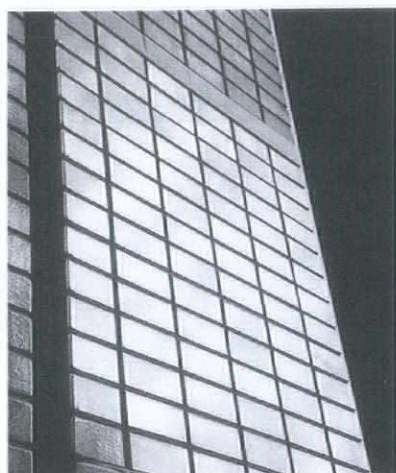
Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

●
コーティング材常温硬化型
シリコンコーティング材
シリーズ●
東芝シリコン株式会社

東芝シリコン(株)では、シリコンレジンを主成分としたコーティング材、常温硬化型シリコンコーティングシリーズを新発売した。車の排気ガスによる大気汚染や酸性雨など環境の悪化に伴い、建築外装部材や車両外装部材など屋外にさらされている部材の表面劣化が問題になっている。この表面劣化は部材の強度など物理的特性の低下を引き起こすだけでなく、劣化自体による美観の低下や汚れが付着した時のクリーニングの難しさなど、美観・メンテナンスに及ぼす影響も大きく、その対策が必要である。同製品は、基材に塗布すると防水層を形成して吸水・塩害・酸性雨などによる基材表面の劣化を防止する。また、埃など付着物の除去が容易になるイーザーメンテナンス効果、さらには美観の回復効果も期待できる。用途に合わせて、アルミパネル用、石材用(艶出し仕上げ・自然色仕上げ)、タイル用、ガラス用と5シリーズがある。

●
張床

インタータイル シガリロ

●
株式会社エービーシー商会

株式会社エービーシー商会では、アームストロング塩ビタイル、インタータイル シガリロを新発売した。同製品は、塩ビタイル構造に耐シガレット性能を加え、アミューズメント空間等に幅広く使用できるよう開発された。人気の高い石目調、木目調を備えている。

●
特長

- ①同社独自の製法により、火の点いたタバコのみ消しや投げ捨ててもコゲ跡のつきにくい構造の塩ビタイルである。
- ②塩ビ特有の適度な硬さなので快適な歩行感である。
- ③天然素材柄の再現性に優れるインタータイルの中で特に人気の高い石目調3柄8色、木目調1柄2色を揃えた。

●
規格

スクエアタイプ 450mm×450mm 厚さ3.0mm

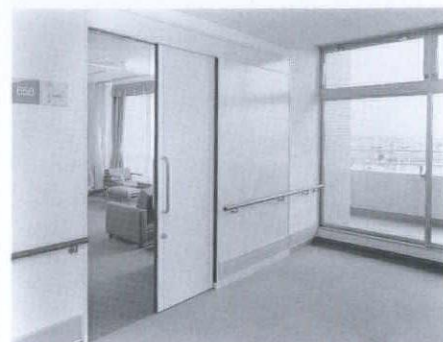
ブランクタイプ 900mm×75mm 厚さ3.0mm

●
価格(設計価格)

スクエアタイプ、ブランクタイプ共 7,900/㎡

●
引き戸

カームスライダー

●
文化シャッター株式会社

文化シャッター(株)では、自動閉鎖装置付き引き戸、カームスライダーの操作性を大幅に向上させ、さらに新タイプを追加し、新発売する。同製品は、機構部に定トルクバネ(ぜんまいバネ)を採用し、開放力(ドアを開ける力)が従来の2分の1以下(当社比)となり、操作性が大幅に向上した。価格面でも機構の簡略化により、平均16%(当社比)の引き下げを実現した。汎用タイプ、気密性の高いセミエアタイトタイプ、防火戸タイプ、間仕切り組込みタイプ、ステンレスタイプ、郵政発着口タイプに加え、新たにレントゲン室用のX線防護タイプ、木のぬくもりを生かした木製タイプの2種類を追加し、全8種類の用途別タイプを標準仕様とした。さらに、医療施設などを中心に需要が期待される抗菌仕様のパネル、枠、部品などを取り揃え、あらゆるニーズに対応できる。抗菌仕様は、滅菌性の強い銀イオンを成分とする無機質の安定した抗菌性塗料を使用し、永続性に優れている。また、床面にレールがない上吊り戸車方式のため、車椅子などがスムーズに通過でき、耐久性、静音性に優れ、病院、福祉・養護施設、学校等で広く採用されている。

●
価格

146,200円~(汎用タイプ、化粧鋼板、把手付)

東芝シリコン株式会社
東京都港区六本木6丁目2番31号
〒106 Tel 03-3479-3501

株式会社エービーシー商会 アームストロング事業部
東京都千代田区永田町2丁目12番14号
〒100 Tel 03-3507-7221

文化シャッター株式会社 広報室
東京都板橋区志村3丁目26番4号
〒174 Tel 03-3968-6604

●

床材

タピスセレクトCG

●

株式会社タジマ



㈱タジマでは、視覚障害者のための床材、タピスセレクトCGを新発売した。1994年9月に「高齢者、身体障害者などが円滑に利用できる特定建築物の建築促進に関する法律」(ハートビル法)が施行された。この法律では、一定規模以上の特定建築物には視覚障害者のための警告、誘導用の床材の敷設が必要とされている。また、近年カーペットタイルがオフィスをはじめ、様々な場所に使われるようになり、特定建築物にも広く使用されるようになった。同製品は、特定建築物の出入り口、廊下、階段(踊り場を含む)、エレベーター、ホール、トイレなどで視覚障害者を誘導、警告する。標準品基材となるのは、タピスセレクト(全36色)、タピスセレクトHY(全12色)、標外品基材は、タピスXL、タピスMC、タピスカスタム、プレーヌIIである。カーペットガイドタイルの色数は、誘導型、警告型ともに、黄色・茶・グレーと3種類である。凸部の配列については誘導型、警告型ともに変更可能である。

価格

40,000円/㎡(工事費別)

株式会社タジマ 営業本部

東京都千代田区岩本町3丁目11番13号

〒101 Tel 03-5821-7731

●

壁紙

土に還る壁紙

●

株式会社サンゲツ



㈱サンゲツでは、壁紙の新商品を収録した、新見本帳「'96-'98リザーブ1000」を発表し、同時に商品を発売した。

特長

- ①土に還る壁紙(6柄11点)は、ポテトが主素材で、土に埋めると地中のバクテリアに分解されて土になる。
- ②焼却しても塩素が発生せず、発煙ガスが少ないオレフィンタイプの壁紙(9柄17点)。さらに表面にフィルム加工を施し、汚れ防止の効果がある。
- ③アジアテイストに西洋の文化を融合させたインテリア、オリエンタルシックをトータルに提案した(写真タイプ)。アジアの素材やデザインパターンを、ナチュラルで柔らかい色調で表現した。(13柄39点)
- ④明かりを消すと、柄の部分が約20分間光る、蓄光顔料を使用した壁紙。(2柄2点)
- ⑤防火1級クロス。(45柄157点)
- ⑥汚れ防止クロスの点数が大幅に増えた。(31柄60点)
- ⑦その他、吸放湿性、帯電防止、消臭、発水性。
- ⑧従来なかった和風の空間にも合うトリムシリーズを開発した。(31柄40点、加えてトリムのみが14柄18点)

株式会社サンゲツ

名古屋市中西区幡下1丁目4番1号

〒451 Tel 052-564-3314

●

ダブルドラム振動ローラ

CAT® CB-224C
CAT® CB-434B
CAT® CB-534B

●

新キャタピラー三菱株式会社



新キャタピラー三菱㈱では、米国キャタピラー社が開発し、フランスのランティニ工場で生産しているダブルドラム振動ローラ、CAT® CB-224C(総重量2.5t)/CB-434B(総重量6.6t)/CB-534B(総重量9.7t)の3機種を輸入・新発売した。CBシリーズは、アスファルト舗装時の転圧作業をはじめ、路盤材や特殊材(カラー舗装用など)の転圧や、土木作業での転圧にも利用できる汎用性の高い製品である。

特長

- ①前輪・後輪・両輪に分けて振動を選択できる、3モード振動ドラム切り替え機構を標準装備。
- ②ドラムの振幅を低・中・高の3段階から選択できる。
- ③車両停止時や超低速時には振動を止める、自動起振装置を標準装備。
- ④ドラムへの合材の付着を防止する散水装置には、「連続」「間欠」の2モードを用意。
- ⑤操作系のレバー・スイッチをオペレータシート右側のコンソール上に集中配置。通常作業は右手だけで可能。また、操作力の軽い走行レバー1本で、走行の前後進と速度をコントロール。
- ⑥2系統ブレーキシステムや自動巻き取り式シートベルトを標準装備するなど、安全性も配慮している。

新キャタピラー三菱株式会社

東京都世田谷区用賀4丁目10番1号

〒158 Tel 03-5717-1121

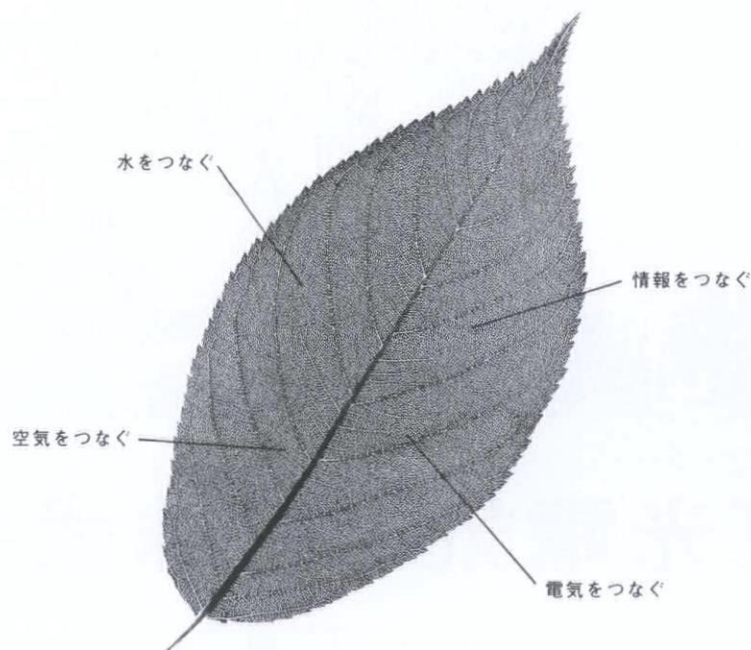
ビルの、工場の、街の、 すみずみに、つながろう。

私たちの仕事は、ビルに、工場に、
街に、生命を与える葉脈として、
そのすみずみにつながっています。
もっと、人が快適になる環境へ。

総合設備業の

リーディング・カンパニーとして、
先端の技術で、高度な未来を
提案し続けます。

あなたと快適をむすびます。



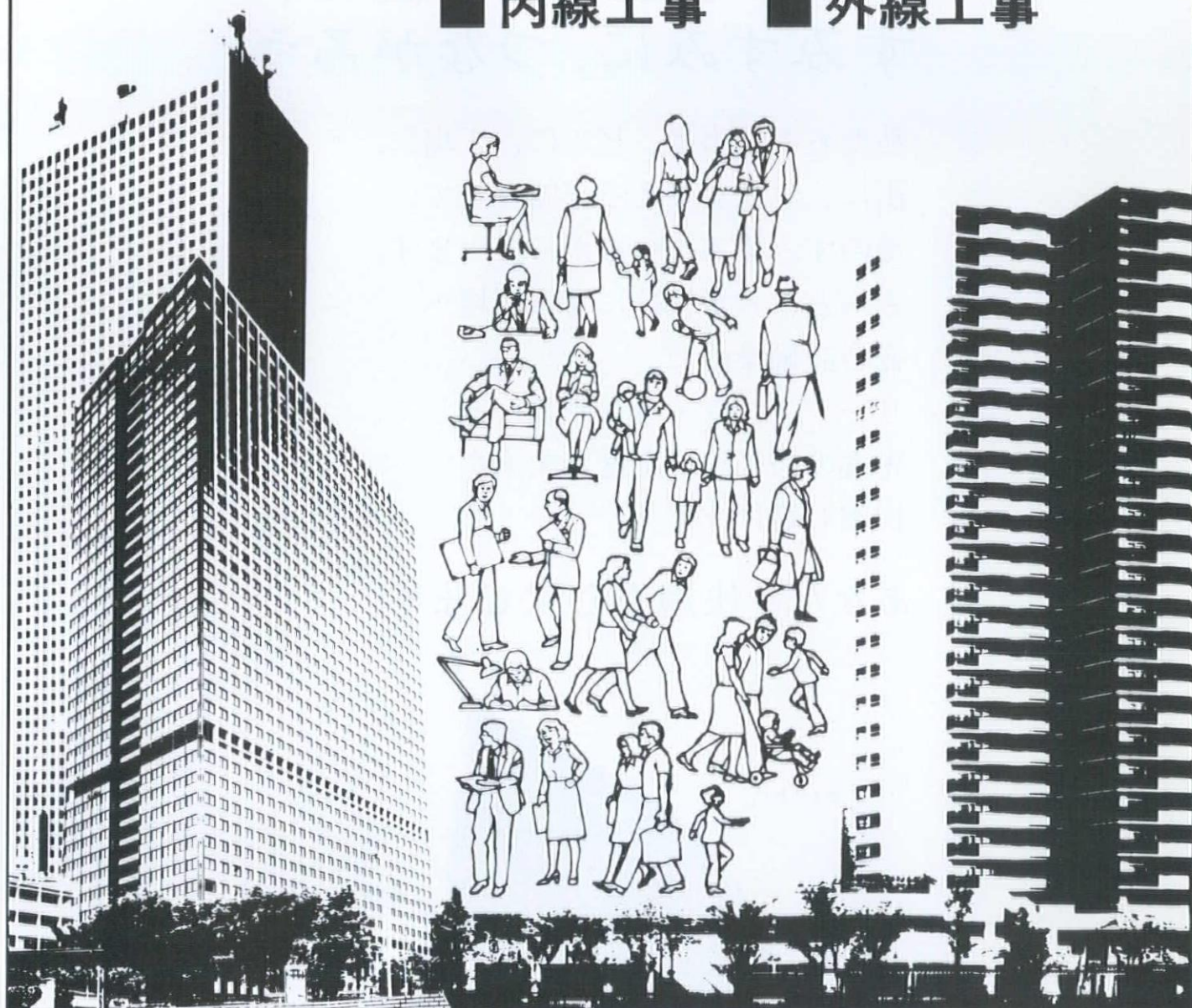
住友電設株式会社

大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 Tel 06 (537) 3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 Tel 03(3454)7311

営業種目：電気設備／空調・給排水・衛生設備／
プラント設備／情報通信設備／電力流通設備／その他

技術と伝統の…

■ 内線工事 ■ 外線工事



東光電気工事株式会社

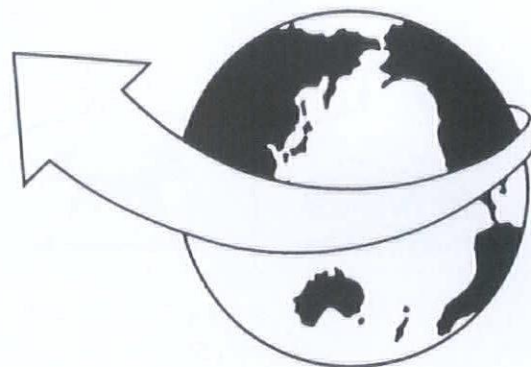
取締役社長 江 原 景

東京都千代田区西神田 1-4-5 〒101 電話/東京 3292-2111

支社所在地/札幌・仙台・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・福岡

未来に向って...

限りある資源
限りある空間の中で
より快適な環境づくりの
ために努力しています。



●営業品目

空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工



株式会社朝日工業社

本社・東京支社 〒105 東京都港区浜松町1-25-7 電話 03(3434)5 7 1 1
大 阪 支 社 〒532 大阪市淀川区加島1-58-59 電話 06(302)2 2 7 3
支 店 北海道／東北／北関東／横浜／名古屋／中国／九州



奥山化工業株式會社

本 社 東京都中央区銀座8-4-9 奥山ビル TEL 03(3571)2703 代 FAX 03(3571)0264
大阪事務所 TEL 06(391)1081-2 FAX 06(395)2109 名古屋出張所 TEL 052(811)3660
横浜営業所 TEL 045(320)4832 FAX 045(320)4765 厚木出張所 TEL 0462(21)1761 FAX 0462(23)1341
埼玉営業所 TEL 048(774)2845-6 茨城出張所 TEL 0292(28)0878 FAX 0292(28)2614

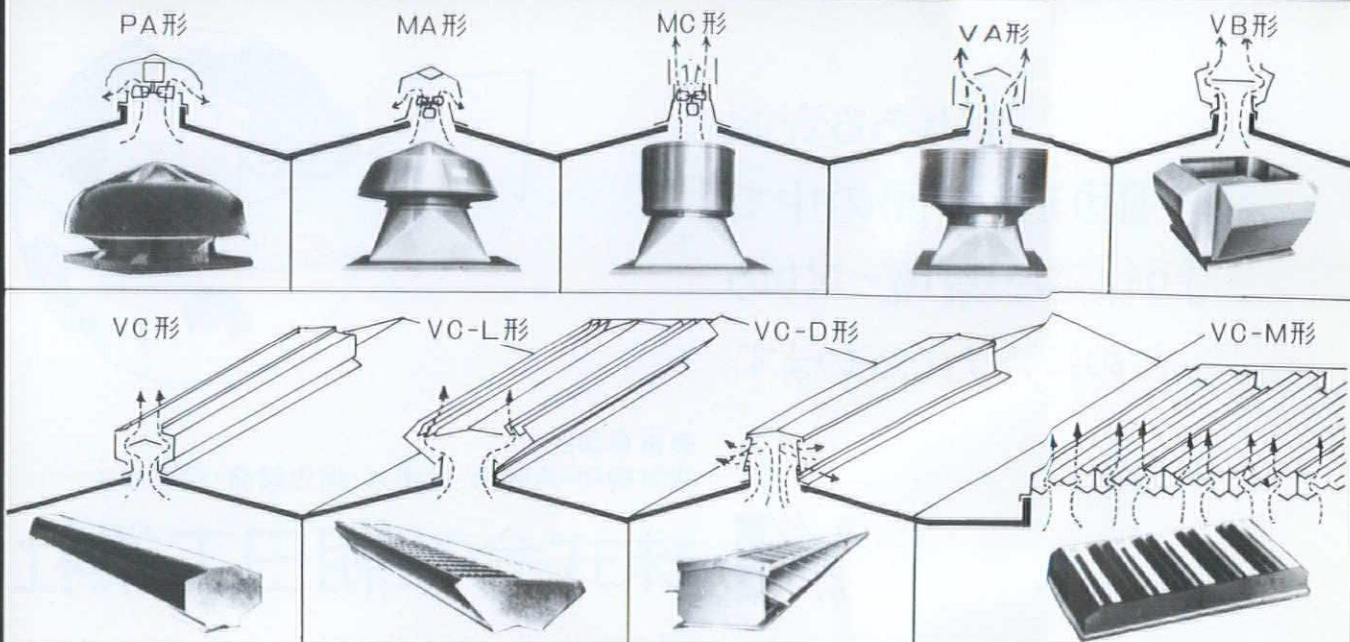
テトカッパー防水層

カッパー防水帯
コーパータイト・オクロン防水帯

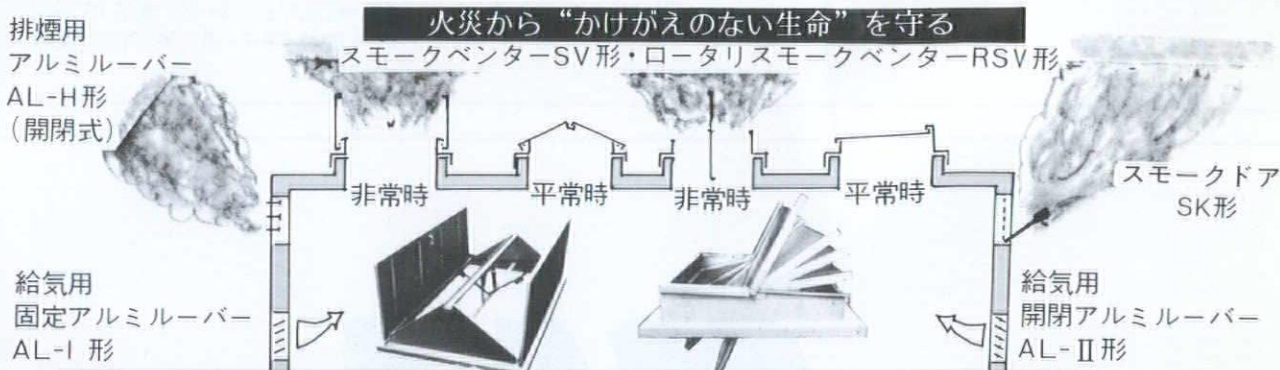
坂本商会は創業80年 換気・排煙・採光の専門メーカーです

“自然の風”を効率よく招く坂本式ルーフベンチレーター

強制換気・自然換気装置

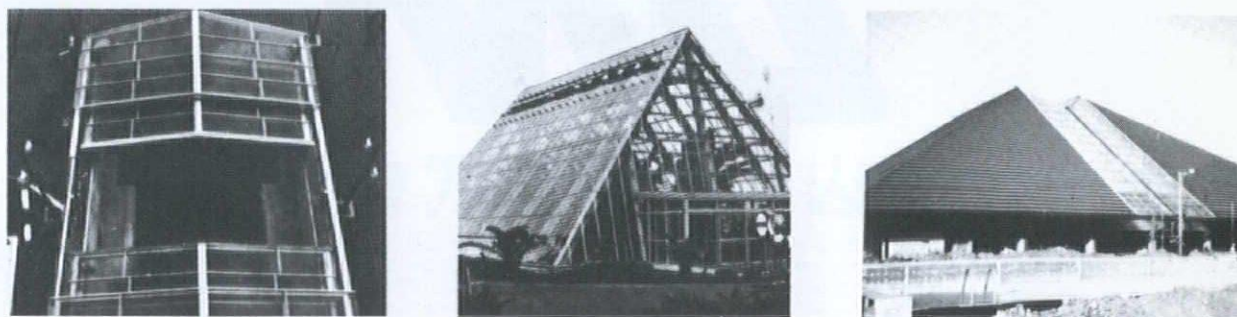


排煙・ルーバー装置



採光装置

“太陽の恩恵”を全身でウケとめる坂本式スカイライト



株式会社 坂 本 商 会

本 社 東京都中央区日本橋2-16-12(江戸ニビル) 〒103 電話 東京 (03)3271-5591(代)
 松戸工場 千葉県松戸市松飛台420番地 〒270 電話 松戸 (0473)87-6595(代)
 技術研究所 千葉県松戸市松飛台217番地 〒270 電話 松戸 (0473)87-3148
 施工部 東京都墨田区東向島2丁目15番11号 〒131 電話 東京 (03)3619-2221(代)

TOSHIBA

エレベーター・エレクトロニクス

E&Eの東芝

優しくされて、人は輝やく
人と環境のあたたかなふれあい。
ルミナスの美学が、ここにある。

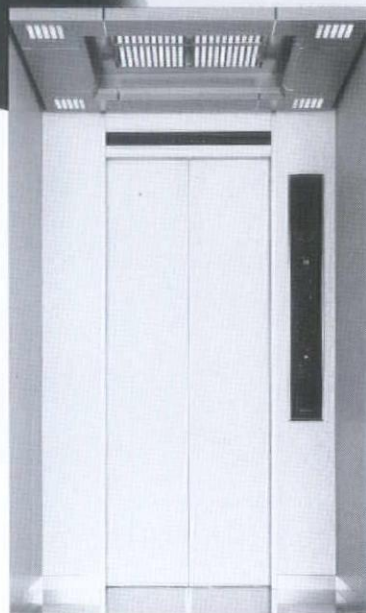
ルミナス・アメニティ。

- 人と環境の美しい調和をモチーフに設計された、ゆとり感覚あふれるニューデザイン。
- 快適な移動のために情報システムで制御された数々のインテリジェント機能を搭載。
- ヘリカルギヤを新採用し、大幅な省エネルギー化とランニングコストの低減化を実現。
- IGBTの採用と制御回路のデジタル化により、より静粛で滑らかな走行性能を発揮。

——人と環境のあたたかなふれあい——

——東芝ニューコンセプト標準形エレベーター——

エレメント ルミナス◆
Luminous



●お問い合わせは… 株式会社 **東芝** 昇降機事業部 本社 〒105-01 東京都港区芝浦1-1-1(東芝ビルディング) ☎(03)3457-4613

北海道支社(011)214-2451 東北支社(022)264-7640~1 東関東支社(043)299-1017 神奈川支社(045)664-8611 北陸支社(0762)24-2815 中部支社(052)564-8510~4
関西支社(06)440-2261~3 中国支社(082)246-3090~1 四国支社(0878)25-2440~2 九州支社(092)735-3056

広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命ください(五十音順)

●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1
新田ビル (3572) 3381
FAX (3572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8
笹屋ビル06 (362) 6515
FAX 06 (365) 6052

●建報社

東京——東京都文京区湯島2-30-8
(3818) 1961
FAX 03(3818)1968

大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9
昭栄ビル06 (231) 4548
FAX 06 (227) 0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10
ハヤシビル (3552) 8247代
FAX (3552) 8249

●中外

大阪——大阪市北区浪花町14-25
日本生命天六ビル06 (379) 1791

東京——東京都千代田区岩本町2-5-12
神田ポンピアンビル (3863) 6011代

名古屋——名古屋市中区錦2-2-13
名古屋センタービル052 (221) 7641代

ア	(株)朝日工業社	A 21
オ	大崎電気工業(株)	A 14
	奥山化工業(株)	A 21
カ	(株)関電工	A 3
	鹿島	A 4・A 5
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A 6
キ	(株)きんでん	A 12
サ	三機工業(株)	159
	(株)坂本商会	A 22
シ	新日軽(株)	表2
	昭和アステック(株)	169
	昭和銅機(株)	172
	新菱冷熱工業(株)	A 13
ス	住友電設(株)	A 19
タ	高砂熱学工業(株)	表3
	大興物産(株)	A 8
	大成温調(株)	A 15
ト	東陶機器(株)	A 1
	(株)トーエネック	A 15
	東洋熱工業(株)	165
	東光電気工事(株)	A 20
	(株)東芝	A 24
ニ	日本電気(株)	A 9
	日新工業(株)	A 10
	(株)西原衛生工業所	A 11
ノ	ノールインターナショナルジャパン	151
ヒ	(株)日立製作所	表4
	日立電線(株)	170
ホ	ホテルイースト21	A 7
マ	松下電器産業(株)	A 2
ミ	三菱電機(株)	171
ヤ	矢崎総業(株)	A 16
	(株)ヤナセ	162
	山田照明(株)	168